

創造と継承が交わる地平

—人々が紡ぐ小矢部—

地域社会の文化人類学的調査 29



2020

富山大学人文学部文化人類学研究室

はじめに

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979年の研究室創設以来、北陸の一地域で毎年調査実習（現在「文化人類学実習」1～4）を行い、得られた知見を報告書「地域社会の文化人類学的調査」にまとめてきました。本報告書はその第29巻になります。県西部に位置する小矢部市については、これまで一度も扱ったことがなく、今回初めてとりあげることができました。

2018年秋、当時二年生だった学生たちと話し合っ て調査地域を小矢部市と決め、2019年春より本格的に調査を進め、秋からその成果を執筆し、本報告書にまとめてきました。

このスケジュールは例年通りのものでしたが、途中、多少のドタバタもありました。例年夏に合宿形式で一週間ほど集中的に現地調査を行い、調査を実質的に完了させるのですが、今年度は7月になっても合宿先が未定のままでした。いくつか候補地があがっては消え、というのを繰り返し、最終的に了因寺集会所にきまったのは7月下旬でした。なんと夏合宿（今年度は8月3日から9日まで）の約一週間前でした。

夏合宿では連日の猛暑の中、学生たちは頑張っ て調査してくれました。ただ、調査テーマが絞り切れていない学生や調査テーマの変更を申し出てくる学生が例年より多く、合宿が終わった時には、秋からまたハラハラさせられるのではないかなという予感を持っていました。例年より人数が少ないせいか、全般的におとなしい印象なのも気がかりでした。

しかし、結果的にこれはまったくの杞憂に終わりました。学生たちは一人の落伍者も出さずことなく、全員着実にそして粘り強く執筆に励み、本報告書をまとめてくれました。一年前までレポート用紙数枚程度しか書いたことがなかった学生たちが自分の関心にしたがってテーマを立てて調査に臨み、各自まとまった長さの原稿を執筆してくれました。指導に際して教員は何度も学生の原稿に目を通し、不明瞭・不正確な文章などないか繰り返しチェックしてきました。1月に学生たちはお世話になった地元の方に原稿を見ていただき、間違いがないか確認していただきました。つたない点はまだ多々あると思いますが、寛大に見ただけだと幸甚です。なお、不十分な点については指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただければと思います。

本報告書は各章のタイトルはもちろん、報告書のタイトルや章立て、表紙など、いずれも学生たちが話し合っ て決めたものです。教員は議論を聞きながら意見を述べることはあっても、学生たちが判断して決定していきました。そうした意味で本報告書は学生たちの手作りのものといえます。彼らにとって学生時代のいい思い出になることはたしかでしょうが、願わくは小矢部市の方たちにとっても印象に残るものであればと思う次第です。

最後になりましたが、このたびの調査では小矢部市役所をはじめ、じつにたくさんの方々にお世話になりました。ここにそのお名前を記すことはいたしません。この報告書は皆様のご協力あってのものであることはまちがいありません。誠にありがとうございました。

2020年2月5日

富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野
藤本 武／野澤豊一

追伸

紙版のものは発行部数 300 部のみで、頒布先もごく限られていますが、近年の実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

目次

はじめに（藤本武／野澤豊一）	
地域の概要	1
第1部 文化資源の創造	
1. 小矢部に根付くメルヘン—建築から市の象徴へ—（吉田彩夏）	15
2. 小矢部に息づく武将・木曾義仲（福原悠平）	47
3. 小矢部ブランドの現在（小倉和裕）	64
第2部 人が輝ける居場所	
4. 小矢部市における障害者支援—障害者が働くということ—（林美奈）	81
5. 末友における農業の変遷と新たな女性の役割（高島加奈子）	112
第3部 地域と社会に貢献する活動	
6. 北蟹谷地区で活動する団体—伝承部会に焦点を当てて—（安達史弥）	130
7. 小神集落における地域行事の移り変わり（高社華）	149
8. 変化する民間伝承の語り—宮島で語られる民間伝承と現在の語り—（飯井清隆）	
	171

地域の概要

1. 小矢部の自然と地理・地形

小矢部市は、高岡市、砺波市、南砺市、石川県河北郡津幡町の4つの市町と隣接し、富山県の最西部に位置する町である。面積は134.07 km²で、東西13.88 km、南北17.65 kmのやや縦長の形状をしている(図1)。

富山県の地形は、東から南にかけて3000m級の山々が並ぶ立山連峰がそびえる。南県境では1000mを超える山が並び、それがだんだん低くなり丘陵性産地となって平野に臨んでいる。小矢部市を含む県西境は、300mを超えない丘陵性山地が石川県との境界をなしている。小矢部市は、富山県の中でも最も標高の低い丘陵性山地に位置している。



図1 小矢部市の位置(「地理院地図 電子国土 web」より作成)

小矢部市には 14 の地区があり、石動、南谷、埴生、松沢、正得、荒川、子撫、宮島、北蟹谷、若林、津沢、水島、藪波、東蟹谷地区で構成されている(図 2)。

市北部には子撫川を境に、その東側は稲葉山(347m)を最高点として 200m を越える山地が多く、その西側はほとんど 200m に満たない、東側に高く西側に低い丘陵性山地がある。北部丘陵性山地に属する宮島地域は、小矢部市でも特に自然を湛える地域で、子撫川ダム、一ノ滝、二ノ滝、稲葉山、桜町遺跡などの観光地が有名な景勝地である。市の中部、南部にもそれぞれ石動

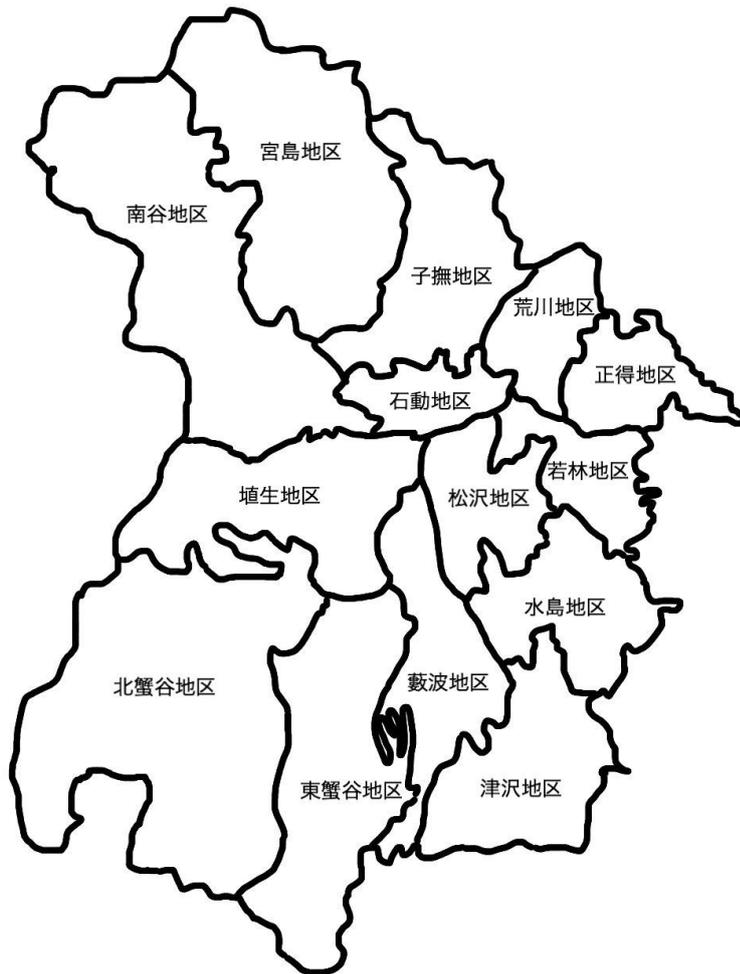


図 2 小矢部市の地区 (「小矢部市史 小矢部風土記編」より作成)

断層線北西の石動山地、医王山(939m)北側の蟹谷丘陵地域を有しており、小矢部市は丘陵性山地に西北を限られた地域だ。中部の山地には倶利伽羅県定公園や、不動尊へ続く桜並木、木曾義仲・源平合戦ゆかりの地があり、歴史を感じる場所だ。

市の西北部は標高 346m の稲葉山をはじめとした丘陵地帯となっており、東南部には砺波平野が広がり、散居村がみられる。市内には小矢部川、子撫川、渋江川の 3 本の川が貫流している。一級河川であり市内最大の小矢部川は南から北北東に向かって流れている。

2. 小矢部の気候

小矢部市の気候は、富山県内ではおだやかだ。これは、小矢部市が富山県内でも高い山がなく、丘陵性山地と平野で構成されているからである。日本海側気候で、降水日のピークが 2 月に来るように冬の降水量が多く、降水量で見ると 7 月が最も多い。

小矢部市の風は、山地の谷合で独特の風向を持っているが、石動では夏季に北東の風、秋から冬にかけては北西または西及び南西の風が多い。また、石動は富山県で最も風が少なく、弱い地域でもある。

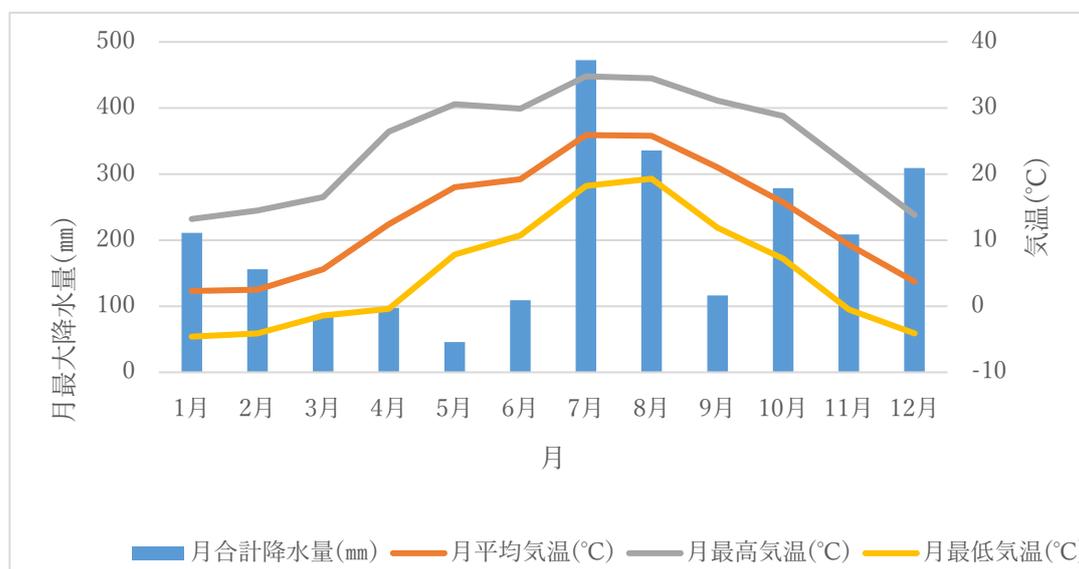


図3 小矢部市の気候（平成30年度小矢部市統計書から作成）

3. 小矢部の歴史

小矢部市域に人が住み始めたのは1万年以上の前のことである。桜町遺跡は12000年前の草創期から晩期まで縄文時代の全期間にわたる遺跡である。調査によって大量の加工材が発掘され、縄文時代にすでに高床建物が存在したことを示した。他にも当時の道具や植物の種子など、生活の痕跡が多く発見されている。発掘されたものは桜町JOMONパーク出土品展示室や埴生の小矢部ふるさと歴史館に展示されている。

市内には埴生地区を中心にいくつかの古墳が存在している。埴生護国八幡宮に近い若宮古墳、谷内古墳群など、砺波地域でも有数の古墳群である。

この地域と関わりが深い戦国時代の人物として木曾義仲が挙げられる。治承4（1180）年に以仁王の平家掃討の令旨に応じ、信濃国で挙兵した義仲は越後の横田川原での戦いを経て、北陸へと勢力を広げた。その後、寿永2（1183）年の5月11日に義仲軍と平維盛軍の間で倶利伽羅峠の戦いが勃発した。義仲はこの戦いで勝利したことで京都へと進軍し、やがて入京を果たし都から平家を追い出したといわれている。

市内ではこの戦いをもとにしたイベントが行われており義仲の人気の高い。倶利伽羅周辺の石碑や塚には関連する歴史が記されており、義仲が合戦の前に戦勝祈願をしたとされる埴生護国八幡宮の近くには義仲像が建てられている。埴生護国八幡宮では義仲の戦勝祈願を模して行われる宮巡りの神事が行われ、石動周辺では義仲軍が合戦の際に行ったと伝えられる火牛の計を基にしたレースが行われる源平火牛祭りが行われている。

今石動城主前田利秀は、加賀藩初代藩主前田利家の弟秀継の子で、佐々成政と対峙する加越国境の要塞であった、津幡(現石川県河北郡津幡町)・今石動(現小矢部市)・木舟(現高岡市福岡町)の諸城にいた。天平13(1585)年の大地震によって、木舟城は崩壊し、利秀は今石動に城下町を移転し、町立てに当たった。寛永14(1637)年に城端町を、同17年に氷見町も支配させたため、今石動と両町との往来が盛んになり、物資の交流が多くなるとともに、郡内の農村から納める年貢米の集散地として賑わった。また、参勤交代やお国替えの際には千数百人のものが宿泊するなど、北陸街道の重要な宿場町として大いに栄えた。また、農民の時間や労力を軽減すべく、小矢部川近くの津沢に御蔵という年貢米の集積所が建てられた。これによって、周辺に人家が建つようになり、津沢は栄えていった。

明治16(1883)年、越中が石川県から分離し、富山県が成立し、明治22(1889)年の市町村制の施行によって大規模な合併が行われた。これを機に、小矢部市域の2町13カ村の範囲で、子撫村・宮島村を北宮島村と称し、南谷村を南宮島村、水島村を北野尻村、正得村を糸岡村と称した。

大正から昭和にかけて、町村合併の動きがさらに活発になった。昭和28(1953)年、石動町が中心となって、南谷・埴生・松沢・正得・荒川・子撫・宮島村が合併し、新石動町が発足した。一方、津沢町でも合併の動きが活発となり、翌年、津沢・水島・藪波村が合併し、砺中町が新たに誕生した。石動町は、早くから市制移行を目指していたが、砺中町では反発の声が上がり、役場や県庁で反対運動を繰り広げた。そんな中、昭和37(1962)年、石動町と砺中町が合併し、県下9番目となる小矢部市が設置された。これを機に、津沢住民の運動は激しさを増し、住民同士に感情的なしこりを残すこととなった。

松本正雄市長(1976~86年在任)は、市の公共建築を新築する際に、西洋風の有名な建物を真似て建築し、これをメルヘン建築と命名した。最終的に35棟のメルヘン建築が建てられ、小矢部市は『メルヘンの街おやべ』と呼ばれるようになる。平成6(1994)年には、「クロスランドおやべ」が、平成27(2015)年には、「三井アウトレットパーク北陸小矢部」が完成し、県外から多くの人が訪れる。

表1 小矢部市の年表

年代	できごと
1183年	源平砺波山合戦が行われる
1585年	前田利家が白馬山頂に今石動城を築く 前田利秀が今石動城主となる
1660年	津沢町ができる
1883年	越中が石川県から分離し、富山県が成立
1889年	今石動を石動町と改称
1953年	石動町を中心とした合併により新石動町が誕生 津沢・水島・藪波の合併により砺中町が誕生
1962年	石動町と砺中町が合併し小矢部市が誕生
1988年	桜町遺跡から高床建物の建築材が出土
1994年	クロスランドおやべオープン

(「小矢部市史」と「ふるさとガイドおやべ」を参考に作成)

4. 小矢部の人口

平成 30（2018）年 12 月 31 日時点の小矢部市全体の人口は 30,143 人、世帯数は 10,442 世帯である（外国人住民を含む）。性別人口は男性 14,686 人、女性 15,457 人となっている。過去 26 年分（平成 5 年から平成 30 年）の小矢部市の人口推移（図 4）と平成 30（2018）年度 10 月末時点の年齢別人口（図 5）を以下に示した。

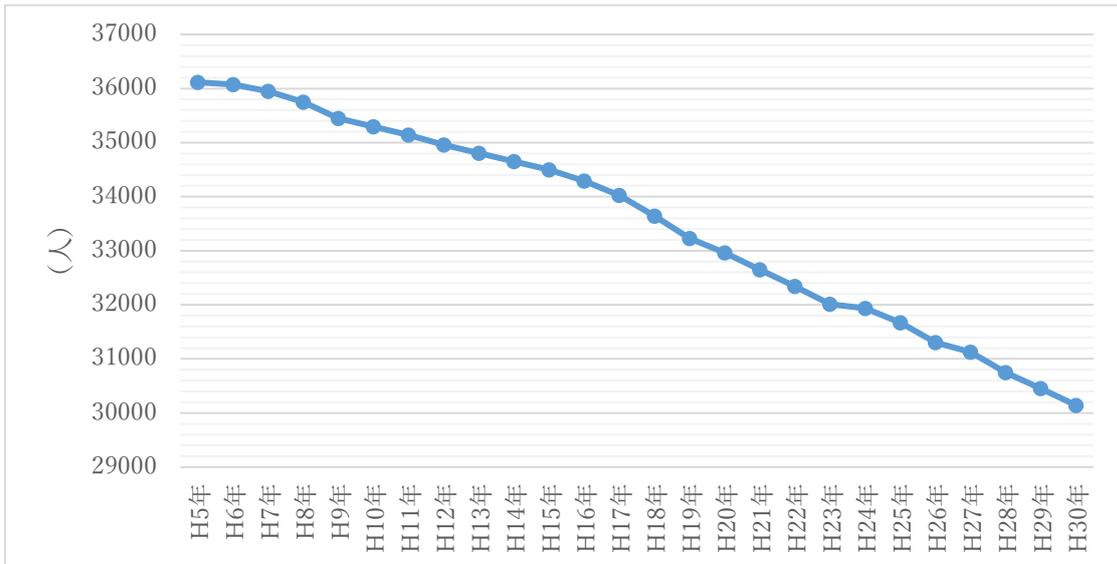


図 4 小矢部市の人口推移（平成 30 年度版小矢部市統計書より作成）

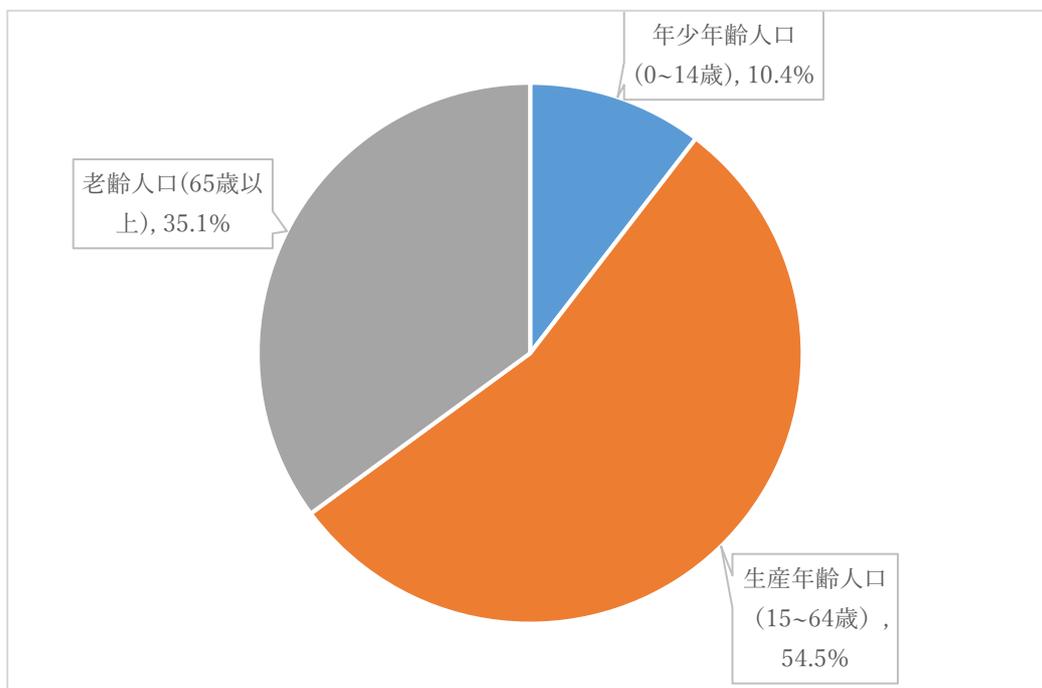


図 5 小矢部市の年齢別人口割合
（平成 30 年度 10 月末時点、平成 30 年度版小矢部市統計書より作成）

小矢部市の人口は毎年減少傾向にある。平成 17（2005）年頃を境に減少幅が大きくなっていることがグラフ（図 4）から窺える。小矢部市の平成期の人口のピークは平成元年の 36,774 人であるが、平成 30（2018）年までの 30 年間でおよそ 6,632 人減少している

また年齢別人口割合（図 5）より、平成 30（2018）年度時点では高齢人口（65 歳以上）が占める割合が 21%を越えている。これは WHO や国連が定める定義によると超高齢社会と位置づけられる数値である。

次に平成 13（2001）年から平成 30（2018）年にかけての小矢部市の住民の転入・転出者数をグラフ（図 6）に示す。

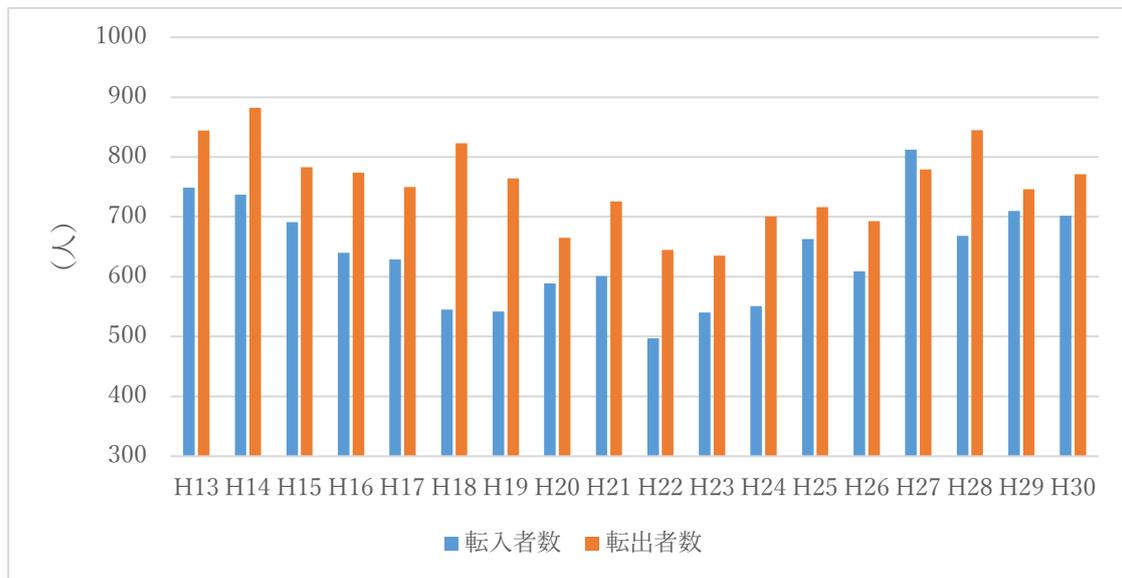


図 6 小矢部市の転入・転出者数（平成 30 年度版小矢部市統計書より作成）

過去 18 年間の小矢部市における転入・転出者数を見ると、小矢部市では平成 27（2015）年を除き転出者数が転入者数を上回っている。平成 30 年度版小矢部市統計書によれば主な転出先は県内の他都市、次いで石川県、関東地方だとされる。一方で県内の他都市からの転入を除けば関東地方からの転入者数が統計上最も多いとされる。

また特筆すべき点として平成 28（2016）年には落ち込みが見られたものの、平成 25（2013）年度以降では転出者数と転入者数の差が縮まってきていることが挙げられる。

5. 小矢部の産業

平成 27（2015）年の小矢部市の産業別就業人口の割合を示したのが図 7 である。第 2 次産業と第 3 次産業が全体の 95%を占めている。第 1 次産業の就業人口は 787 人、第 2 次産業は 5517 人、第 3 次産業は 9433 人となっている。第 3 次産業に従事する人が 6 割を占めており、その中でもサービス業に従事する人が最も多く 5156 人、続いて卸売・小売業・飲食店に従事する人が 2174 人である。

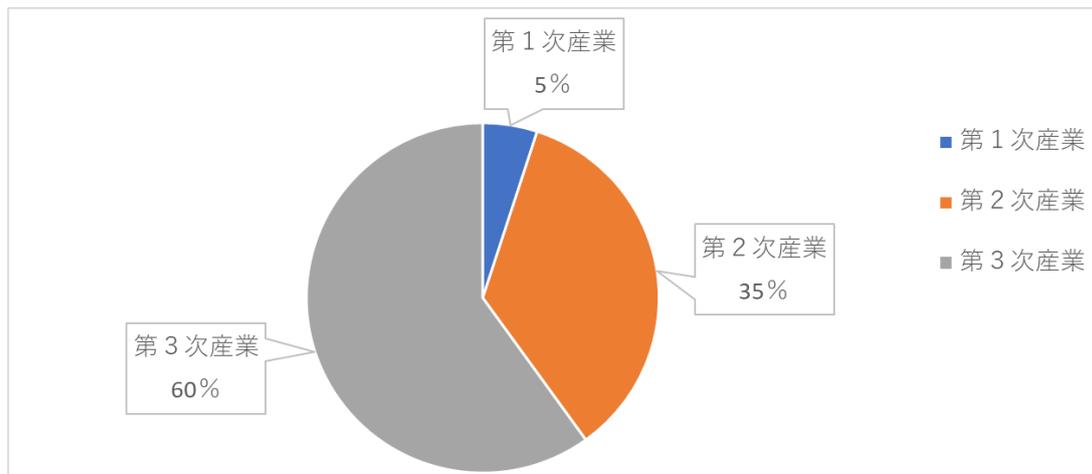


図7 平成27年度小矢部市産業別就業人口
(小矢部市ホームページ『平成30年度小矢部市統計書』をもとに作成)

その20年前の平成7(1995)年の小矢部市の産業別就業人口の割合を示したのが図8である。第1次産業の就業人口は1388人、第2次産業は9266人、第3次産業は9402人であった。平成27(2015)年までに、第1次産業と第2次産業の就業人口が減少し、第3次産業が増加していることがわかる。

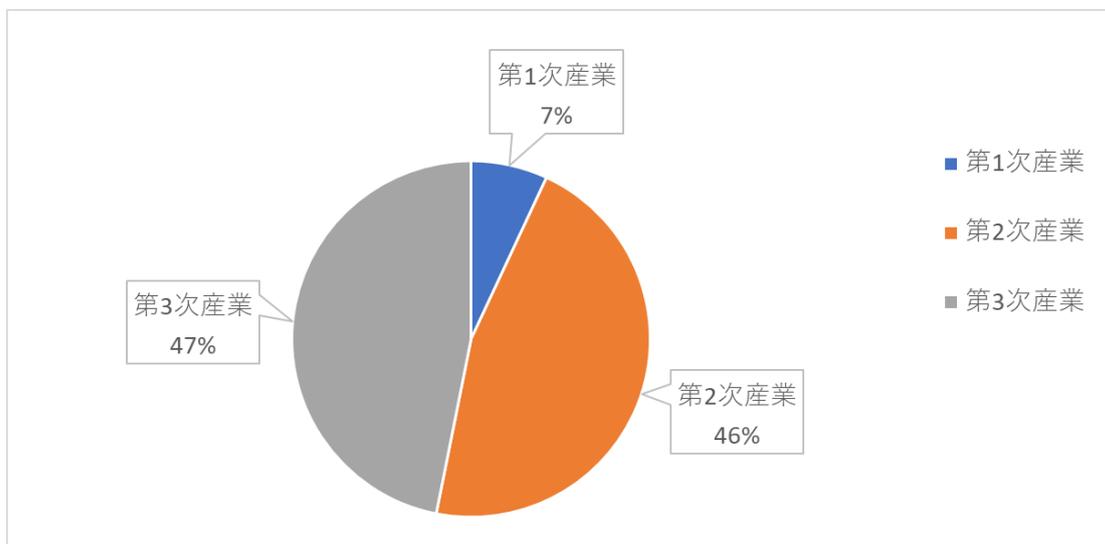


図8 平成7年小矢部市産業別就業人口(平成7年国勢調査をもとに作成)

副業的農家も含む農家戸数は平成27(2015)年には932戸で、平成7(1995)年の2780戸から著しく減少している。また小矢部市の主要農作物である稲の作付面積も、平成11(1999)年の2660ヘクタールから、平成28(2016)年の2350ヘクタールへと減少した。しかし、規制緩和による自主流通米の「小矢部メルヘン米」のブランド名がつけられたコシヒカリが大都市圏へ販売されるなどの取り組みも行われている。また「メルヘン肥料」をは

はじめとした有機質肥料の使用で良質米の生産を推進している。他の農作物としては、ブロッコリー、さといも、白ネギ、りんごなどの野菜や果樹も生産されている。

かつて小矢部市は工業がさかんであった。市制当初は、繊維工業やゴム製品、木材木製品、窯業、食料品等の工業が主流をなした。しかし零細企業が多いこと、工場が住宅地と混立しているなどの課題があったため、新規工場誘致と既存の企業育成が進められた。市の繊維産業の中心である株式会社ゴールドウインは、昭和 39（1964）年の東京オリンピックに同社製品が採用されたのを皮切りに、昭和 40 年代以降、各種国際大会等で採用されるなどその実績を伸ばし、昭和 52（1997）年には年間売上 100 億円を達成した。ゴールドウインのグループ会社である株式会社カンタベリーオブニュージーランドジャパンは、ラグビーワールドカップ 2019 において日本代表ジャージを開発するなど、世界から注目を集めている。小矢部市は昭和 57（1982）年には製造品出荷額が 1400 億円を超え、県内第 5 位の工業都市となった。そのうち繊維工業と輸送用機械が全体の 75% を占め、この頃の市の中心的な工業となっていた。その後出荷額は増減を繰り返したが、バブル崩壊後の不況下で、平成 10（1998）年には前年出荷額の約 70% の 1039 億円となった。平成 29（2017）年の出荷額は 740 億円で、繊維工業、輸送用機械、食料品が多くを占めている。

小矢部市の商業地域は、石動市街地中心部と石動駅南や、国道 8 号沿いに並ぶ荒川地区の商店集積地など石動市街地周辺部に分布する商店街、および津沢地区商店街などである。昭和 57（1982）年の調査によると、市民の約 75% が市内商店街を利用し、「食料品」や「日用品・雑貨・日用衣類」などは約 90% が市内商店街の利用であった。しかし昭和 60 年代に入ると商業力は年々低下し、平成には中大型店の進出が相次ぎ、市外への購買客の利用に拍車がかかった。そこで小矢部商工会では、地域活性化のために各種イベントの拡充、北陸新幹線建設と在来北陸線存続要請活動、国際交流の一環としての外国人研修生受け入れ事業などを推進してきた。津沢商工会では、「まちおこし事業」の特産品や、観光資源の開発、地域のコミュニティ施設を取り込んだ新しい商業集積構想、まちづくり計画策定事業を進めてきた。また、北陸エリア初の本格的アウトレットモールとして「三井アウトレットパーク北陸小矢部」が平成 27（2015）年 7 月に開業した。富山市と金沢市のほぼ中間地点にあり、北陸エリア全域からの道路アクセスに優れた立地となっている。全国の人気店に加え、観光需要にも対応し、北陸ならではの店舗も多数出店している。さらに平成 30（2018）年 11 月には、あいの風とやま鉄道石動駅新駅舎と、南北エリアを結ぶ南北自由通路の利用がスタートした。駅南エリアから駅に直接アクセスできるようになり、利便性が向上した。

6. 小矢部の祭りイベント

ここでは、小矢部市で行われている祭りやイベントをまとめる。小矢部市では表 2 に示すように様々な年中行事が行われている。

表2 小矢部市の主な年中行事¹

毎月 17 日	観音講
毎月 28 日	俱利迦羅不動寺縁日
1 月～3 月	報恩講
1 月 1 日	クロスランドハッピーニューイヤー花火
1 月 14 日	左義長
4 月上旬～中旬	お花見祭り
4 月上旬～中旬	つぎわ桜まつり
4 月 11 日	酒とり祭り
4 月 29 日	石動曳山祭り
4 月 28 日～5 月 5 日	八重桜祭り
5 月上旬	歴史国道イベント
5 月第 4 土・日曜	獅子舞祭り
6 月第 1 金・土曜	津沢夜高祭り
6 月中旬	花菖蒲祭り
7 月下旬	源平火牛まつり
8 月第 2 土曜	クロスランドサマーフェスティバル
8 月 15 日	津沢「川祭り」
8 月下旬の土・日曜	クロスランドヘリコプターフェスティバル
8 月 15 日	ちょんがれ祭り
9 月 3 日	願念坊踊り
9 月 10 日	源氏太鼓
9 月 15 日	宮めぐり神事
10 月 17 日	慈光院の火渡り
11 月上旬の土・日曜	農業祭

(「ふるさとガイドおやべ」より一部修正のうえ作成)

つぎわ桜まつりは毎年 4 月の第 2 日曜日に津沢の小矢部川河畔で行われる。ご当地グルメ「あんうどん²」などの屋台が出店し、ゲームコーナーやバルーンアート、小矢部市シンボルキャラクターのメルギューくん・メルモモちゃんとの記念撮影コーナーなどの多くの

¹ ふるさとガイドおやべ p23

² 津沢夜高あんどん祭(夜高祭り)の「あんどん」にちなみ、津沢の新名物として平成 23 年(2011)に地元の飲食店や食品会社の経営者などによって考案されたうどん。特産の鶏肉や卵が使われ、生姜がよく効いたあんが特徴。

<https://webun.jp/item/7120811>

イベントが開かれている。

酒とり祭りは4月11日に下後^{しもごせしんめいぐう}神明宮で行われる。ふんどし1本の25歳の厄男たちが先を争って神官の汲み出す神酒を柄杓で受け、参詣人や見物人に振る舞い、無病息災と五穀豊穰を祈願する。

石動曳山祭りは毎年4月29日に行われる（以前は23日～25日であっ



写真1 酒とり祭りの様子（藤本武提供）

た）。29日の午後に御旅屋（小矢部商工会館前）で行われる曳山出発式には11台の曳山が勢揃いする。午後からは町を練り廻り、掛け声、囃子をして多くの見物客で賑わう。夕方には、提灯に明かりが灯り、昼間とはまた一味違う花山車に変身する。



写真2 石動曳山祭りの様子（藤本武提供）

八重桜祭りは毎年4月28日から5月5日にかけて倶利伽羅峠で行われる。約6,000本の八重桜が咲き誇り、夜間は提灯300個が点灯され、満開の八重桜がライトアップされる。また、期間中、倶利伽羅不動寺境内で厄除けの念仏赤餅つきが行われ、古来より疫病の難から逃れられると言い伝えのあるつきたての念仏赤餅が参拝者に配られる。

歴史国道イベントは毎年、八重桜が咲き誇る季節に行われる。旧北陸道倶利伽羅峠をウォーキングするイベントだ。山頂では、加賀VS越中の大綱引き合戦が行われる。源平古戦場にて、源平合戦をモチーフに、長さ120m、太さ12cmの大綱を加賀・越中の参加者が引き合う綱引き合戦だ。道中は、観光ボランティアガイドによる街道沿線の歴史の説明が行われる。茶屋ではお茶・おだんごのサービスもある。

獅子舞祭りは毎年5月第4土・日曜日に行われる。また、日曜日には獅子舞大共演会も開催される（後述）。その他市内各地でも春から秋にかけて、祭礼行事として奉納されている。

6月第1金・土曜日には五穀豊穡を祈って津沢地区で夜高祭りが催される。まず法被を着た子どもたちの引く武者絵の行燈が次々と通り過ぎ、その後諸肌脱いだ若衆たちの担ぐ大行燈が「ヨイヤサ ヨイヤサ」の掛け声とともに街を練り歩く。夜高行燈は行燈に加えて竹細工で作られた山車や釣ものから組み立てられ、高さ7メートル、長さ12メートルにもなる。「喧嘩夜高行燈引き廻し」では掛け声に合わせてこの夜高行燈がぶつかり合って相手側の山車などを壊し、夜高祭りで最も盛り上がる瞬間となる。



写真3 津沢夜高祭りの様子（2年 早川勝大提供）

7月下旬には石動駅前・越前町商店街にて源平火牛まつりがある。木曾義仲が倶利伽羅峠での源平合戦において、火牛の計によって大勝をおさめたことに基づいて小矢部市商工会が昭和61（1986）年に源平パレードを行ったのがはじまりとなっている。平成2（1990）

年に発足したメルヘン市民委員が花菖蒲祭り・ミスコンテスト・源平パレードを「メルヘン祭り」と一本化し、源平パレードは源平火牛まつりと改められた。商品が用意される参加型のゲームなどに加えて、平成 11（1999）年からは火牛の計にちなみ、藁で作られた巨大な牛を引いてタイムを競う「火牛の計レース」が行われており、祭りのメインイベントとなって楽しまれている。小矢部市の歴史を取り上げた、小矢部市独特の祭りだ。

願念坊踊りは 9 月 3 日に小矢部市綾子の太田神社の秋例祭で奉納される。昭和 40（1965）年に小矢部市無形文化財に指定され、大正 4（1915）年から続くとされる保存会は昭和 59 年（1984）に富山県郷土芸能保存団体に指定された。黒染の法衣を見にまとい、棒に「願念坊」「天下泰平」「豊年万作」と書かれた行灯がついたダシを持ち、その後ろで同じ法衣を着た坊主達が尺八、三味線などの楽器に合わせて踊る。

埴生護国八幡宮では毎年 9 月 15 日午後に宮めぐりの神事が行われる。源平合戦に際し木曾義仲が戦勝詣をし、大勝のお礼参りをした様子に倣い江戸時代から続いているというこの神事は、武者装束を身にまとった氏子によって執り行われる。烏帽子に狩衣姿や武者姿の若者らが隊列を組み、拜殿外側の広縁を 7 周半廻る。武者たちが最後に弓や刀を掲げ「ウォーッ」と声をあげながら本殿に駆け込んでいく。

ここまで伝統的な行事や歴史的な祭りを紹介してきたが、それ以外にも小矢部市には様々なイベントがある。上にあげたつぎわ桜まつりや八重桜祭りだけでなく、城山公園³でも花見をすることができる。小矢部市のランドマークとなっているクロスランドおやべでは季節により花火やサマーフェスティバル、ライトアップなどが催され、11 月上旬には農業祭に新鮮な野菜や屋台が立ち並ぶ。このように小矢部市は様々な時期に各地で楽しむことができる。

7. 小矢部の獅子舞⁴

小矢部市の獅子舞は市内 84 カ所で保存、伝承されている。その内訳は石動 32 町・32 組の石動天神獅子舞連盟と 52 村・52 組の村部獅子方だ。前田利秀⁵が天正 17（1589）年に入城した際に領民たちが全町挙げて獅子舞を奉納し歓迎の舞を詣でたことが旧石動町の獅子舞の始まりとされている。そして石動獅子盆（石動天神獅子舞連盟）が始まった。これは 400 年ほど続いており、歴史ある貴重な民俗芸能だということが分かる。

³ 小矢部市城山町（小矢部市北部）に位置する。戦国時代から安土桃山時代にかけての武将・前田利秀^{まへだとしひで}の居城、今石動城の城跡が公園となっている。

⁴ 小矢部市獅子舞連合会 2020 年 1 月 9 日時点 www.oyabeshishi.com/gaiyou.html

⁵ 加賀藩初代前田利家の弟である秀継^{ちゅうけい}の嫡男。今石動四万石城主として在世 7 年し、今石動及び近郊のまちづくりに貢献した。

見て来て体験メルヘンおやべ 2020 年 1 月 19 日時点
<https://www.oyabe.info/archives/1698/>

小矢部の獅子舞の形態は「百足獅子」である。大きくて重い獅子頭、弓形の竹を張った長い胴幕(かや)⁶は百足のような形を模したものだ。胴幕の中へ頭・尾を含めて5~6人が入る。百足獅子は、全国の獅子舞の中でも特異な形態とされている。

舞の演目の名称や獅子あやしの所作、そしてその採り物⁷等から、「砺波獅子」もしくは「氷見獅子」の影響を受けたタイプに分類できる。「砺波獅子」は大きな胴幕に竹の輪を入れてさらに大きく見せ、棒や長刀を持ったかわいい踊り子を相手に、やや緩いリズムとともにゆさゆさと重厚に舞う。胴には竹ノ輪を入れず、手を挙げて張る。「氷見獅子」は笛のテンポは早く、天狗が棒やなぎなた術を持って獅子と戦い激しく勇壮に踊る。

400年もの昔に始まる、観音寺、天神祭に奉納する旧石動町の天神獅子(獅子舞盆・5月第4土日、32町32組)をはじめ、市内各地には江戸末期から明治中期にかけて急速に普及し芸能化されたバラエティに富んだ獅子舞が地区の春秋の祭礼に奉納され、継承されている(13地区52カ所)。

小矢部の獅子舞祭りは20余の各町内から獅子舞が繰り出し、勇壮華麗に舞い踊る。また、その獅子舞を一堂に集め、毎年5月の第4日曜日に小矢部市商工会館前で大共演会も行われる。この日は市内全域の獅子舞に参加を呼びかけ、十数組の獅子舞が披露される。各町内の迫力ある演技を楽しみに、県内外から多くの観光客が訪れている。石動市街地の獅子舞が奉納されている観音寺は、天正17(1589)年に前田利秀が「天満自在神」画像を預け、宝物として祀られている。5月第4土・日には、この「天満自在神」を公開して、天神祭が行われる。この時、子供獅子舞が奉納される(獅子舞盆)。各町内から32組の子供獅子舞が夜遅くまで繰り上げられる。



図9 第24回小矢部市獅子舞大競演会ポスター(小矢部市獅子舞連合会HPより)

⁶ 胴幕の染め模様は青地に赤と白の渦巻き模様、そして茶や赤のボタンを大胆にデザインされたものが多い。

⁷ 芸能で舞人が手に持つ物。剣、棒、手拭、采配、扇子、鎌、なぎなた、太刀、傘、花笠、たいまつなど多種多様である。

第1部
文化資源の創造

小矢部に根付く「メルヘン」―建築から市の象徴へ―

吉田 彩夏

はじめに

私は小矢部市で生まれ育った。出身保育所と中学校は共にメルヘン建築である。特異な外観を持つこれらの建築物が小矢部市特有のものであると気が付いたのは、小学校の総合学習の時間だった。それ以降、母校が一風変わった建築物であることがどことなく嬉しかった。

大学で文化人類学を専攻し、実習で小矢部市を見学した後の報告会で、他の学生から「田園風景に合わない」「違和感がある」との声を聞いた。自分にとっては幼い頃から親しんできたなじみ深いものでも、他所の出身の人からすれば異質なものであることを知った。この経験がメルヘン建築を調査するきっかけとなった。

調査は、小矢部市民の方々への聞き取り、文献、図書館での新聞記事データベース、雑誌、小矢部市ホームページを参考に行った。

本章では、第1章にメルヘン建築の概要、第2章にメルヘン建築の利用、第3章に小矢部市における「メルヘン」について記述する。

1. メルヘン建築

本節は、小矢部市産業建設部商工観光課、義仲・巴プロジェクト推進班の船見幸広さんと、おやべメルヘンガイド⁸会長の山崎康子さんからの話、および参考資料⁹をもとに記述する。

1-1. メルヘン建築の概要

⁸おやべメルヘンガイドについては 3-2 を参照

⁹ 松本正雄.“小矢部市のめざす都市像と公共施設のあり方について”.人と国土.財団法人国土計画協会,1984,p.75-77.

松本正雄.“公共施設の建築基本理念について”.建設月報.社団法人建設広報協議会,1985,p.141-145.

長沼岩根.“運命によって市長になった。一生涯政治やって哲学を残す。”.地方の神々 現代ニッポンの首長.株式会社ぎょうせい,1987,p.180-189.

小矢部市内には、国内外の有名な建築物を参考にして建てられた小中学校や公民館などの公共施設が点在している。これらは「メルヘン建築」と呼ばれ、小矢部市のシンボルとしての機能を果たすとともに市民に利用されている。市内には現在 34 のメルヘン建築が存在する¹⁰。これらは一級建築士の資格を持つ 4 代目小矢部市長の故松本正雄氏によって発案・基本設計がなされたものである。

松本氏は、「公共建築は社会及び公共に奉仕し公利を増進する、公共の目的に合致し公共の利用に最大限の効用を発揮するものでなければならない」（松本 1984）とした。また、公共建築物そのものに文化的価値を持たせ、地域のシンボルや誇りとなる周囲の自然環境と整合した施設を作り、文化的な地域づくりや市民の文化意識の高揚を図った。地域の人々に親しまれ夢や希望を与える建物を作りたい、通っている生徒が学校へ行きたいと思え卒業後も人に誇れる学校を建てたい、一級建築物を地域の人々に知ってもらいたいという松本氏の思いから、建築分野において最高水準を誇る建築物の長所を導入し、地域の特性も生かした公共建築物が建てられた。

建築に際し、合理性、計画性、効率性を第一とし、維持・管理の経費節約が心掛けられた。耐用年数を重視したつくりであるため、長期的にみると建築コストは低くなる。採光や通風性、美的感覚にも重点が置かれた。小中学校を新築するにあたり、建築の配置、耐久性などあらゆる側面を考慮して設計された。保育所の新築の際は、健康な幼児の保育に焦点を当て、採光や風向、降雪に配慮し、南向きになるように設計された。公民館の新築の際は、地域の個性を尊重し、公共の広場としての利用による地域活性化を図った。

以下は、おやべメルヘンガイド会長の山崎康子さんから伺った話である。「学校を建て替えるにあたって、松本氏は『門』を大切にした。メルヘン建築である中学校にはいずれも立派な門がある。新入生は、希望を抱きこの門に第一歩を踏み入れることだろう。卒業生であれば将来への大きな希望を胸に第一歩を踏み出すことであろう。しかし、当時は『いない、無駄なもの』という声があったとも聞く。しかし、松本市長は『古くから教えを乞うときはまず門を叩くという、門は人の心を引き締める大切な場所である』と自らの信念を貫いた」。このように、メルヘン建築は外観へのこだわりだけではなく、各施設の用途に合わせた様々な工夫や配慮がされていることがわかる。

メルヘン建築の考案には、教育を重視する松本氏の人柄や経歴が大きく関わっていると考えられる。松本氏は大正 6(1917)年に現在の小矢部市平桜に生まれた。小学生の頃から活動的で負けず嫌いな親思いの少年だったそうだ。中学生の頃は勉強熱心で向学心があり、父親の田んぼの手伝いをしながらも合間を縫って本を読んでいた。昭和 13(1938)年に第四高等学校を卒業した後、なかなか同意しなかった両親の許しを得て、東京帝国大学工学部へ進学した。その後は建設省に入って活躍し、昭和 42(1967)年には建設省北陸地方建設局長を務めるほどとなった。退職後の昭和 47(1972)年には小矢部市長に就任し、その後四選され

¹⁰ 現在取り壊し済みのメルヘン建築を含めると 36 か所ある（石動幼稚園、正得公民館）。

た。自身が勉強熱心だったこともあり、市長就任後も教育に力を注いだ。「勉強したい子どもに、良い本や参考書を」という気持ちから図書館費を増やし、度々図書館を訪れて学習する人々を見にきていた。昭和 61（1986）年に亡くなるまで信念を持って豊かな市を作ることに努めた¹¹。

メルヘン建築が建てられていく中で、批判の声は少なからずあった。市民からは「税金の無駄遣い」「市長の趣味でやっている」「（東京大学を参考にした蟹谷小学校を見て）東大はわしらに関係ない」との意見がみられた。一部マスコミからも、「田園風景にそぐわない」「建築費がかさむ」と批判されたが、松本氏はそれに負けずメルヘン建築を次々と建てていき、次第に世間から認められるようになっていった。批判の一方で、松本氏によって建てられた蟹谷小学校の生徒から感謝の手紙を受け取ったという話が、市内の小中学生に配布されている道徳資料『小矢部の先人の心に学ぶ』に記載されている。

現在は、維持費や建築費の関係でメルヘン建築の建設は打ち切られている。しかし松本氏が亡くなった後も、新築された石動小学校が三角形の屋根を持つ西洋風の外観をしていたり、公衆トイレに三角屋根のかわいらしいデザインが施されていたりと、メルヘン建築としての建設が終わった今でも「メルヘン」という概念が市民に親しまれていることが窺える。

1-2. メルヘン建築とされる施設

本項は、小矢部市の観光パンフレット、小矢部市民図書館蔵書『メルヘンの町おやべ〜メルヘン建築〜』『ふるさとガイドおやべ』、おやべメルヘンガイド会長である山崎康子さんの話を参考に記述する。まずメルヘン建築とされる施設を以下に完成年順に示す（表 1）。管理団体はすべて小矢部市の管轄である。

表 1 メルヘン建築とされている施設¹²

	施設名	完成年	建物の特徴、参考とした建物	管理団体
1	藪波保育所	S51.3	おとぎの国「メルヘン」をテーマとする。大小の円を組み合わせて「子どもの園」という雰囲気を出している。中央の塔は限りない可能性と憧れの象徴として建てられた。 (写真 1)	民生部こども課
2	松沢保育所	S52.3	中央に小さな三角屋根をかたどる。正面に丸みの	民生部こ

¹¹ 道徳教育推進委員会 “メルヘンのまち「小矢部」松本正雄”.小矢部の先人の心に学ぶ、小矢部市教育センター,2010,p.1-4,42-43

¹² 昭和 55(1980)年 3 月に建設された正得公民館は過去にメルヘン建築の施設だったが、現在は建て替えられて一般的でシンプルなつくりの公民館となっている。1-4-6 で詳細を記述。

			あるデザインを施し、ソフトさを表現している。 (写真2)	ども課
3	石動幼稚園 (H30.3 解体済)	S52.8	長野県松本市開智小学校を参考とする。赤レンガで外装された遊戯室には、幼児の芸術的創造性を養うことを意図しステンドグラスが施されていた。	民生部こども課
4	小矢部市医師会訪問看護ステーション	S53.1	ゴシック様式を伝える東京・築地の聖路加国際病院を参考とする。正面の吹き抜け部分にはステンドグラスが使用されており、鮮やかなガラス絵が描かれている。	医師会
5	岩尾滝くつろぎ交流館	S53.3	山間丘陵地を利用し、ビザンチン様式の東京・神田にあるニコライ堂を参考としている。屋上の丸い塔屋の鐘は夢の国の印象を与え、保育所から眺めるふるさとの景観は子どもたちの心に大きなゆとりと豊かな情操を育むことを目的とした。(写真3)	企画政策部企画政策課
6	城山配水池	S54.3	東京都水道局村山貯水塔を参考とする。	産業建設部上下水道課
7	蟹谷小学校 〃体育館	S54.7 S54.10	入り口のポーチは東京大学の図書館、正門は学習院女子短期大学、校舎と時計台は東京大学教養学部、体育館は一橋大学の兼松講堂を参考としている。時計台の針が6時と12時を指す時、正門の中心と時計の針が一直線になるよう設計されている。これには、子どもたちが目標に向かって一筋に学ぶようにとの願いが込められている。	教育委員会教育総務課
8	荒川保育所	S55.2	明治時代の洋風レンガ造り建物の原型で重要文化財である東京国立近代美術館工芸館を参考とする。旧荒川小学校跡地に建てられ、周囲の自然とベージュ色の園舎が気品を感じさせる。中央には「よろこびの塔」が設置され、子ども達の情操教育に役立っている。(写真5)	民生部こども課
9	宮島公民館 (農林漁業体験実習館)	S55.3	自然豊かな宮島峡に程近い場所に、中世ヨーロッパのゴシック風寺院建築を参考として建設された。尖塔、アーチ、バットレスによって、天への強い憧れを表現している。	教育委員会生涯学習文化課

10	稲葉山牧野 看視舎	S55.11	稲葉山の頂に位置する、北欧風の山小屋を思わせる看視舎。尖塔の先端には風見鶏が取り付けられており、神戸の北野異人館と笛吹き少年のイメージが組み合わされている。	稲葉山牧野（産業建設部農林課）
11	津沢小学校 〃体育館	S56.3	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館を参考とする。校舎は機能性を高めたH型に造られ、面積の有効活用のために廊下幅を広くとっている。（写真6）	教育委員会教育総務課
12	藪波公民館	S56.3	中世西洋建築の代表作であるゴシック建築を再現しており、正面はローマの洞門、左右の塔はイギリスのウエストミンスター寺院、中央部はイギリスのシェークスピア記念館を参考とする。旧藪波小学校跡地を再活用して建設された。	教育委員会生涯学習文化課
13	埴生保育所	S56.3	本体は明治神宮外苑の聖徳記念絵画館、塔屋は東京・銀座の服部時計店を参考とする。（写真7）	民生部子ども課
14	武道館	S56.6	レンガ色の外壁に、大アーチ型の窓を持つ。外観は慶応大学三田図書館、正面は東京大学工学部のポーチを参考とする。柱を一本も使わないワンフロア建築となっている。（写真8）	教育委員会スポーツ課
15	林間休養施設（恵林館）	S56.12	スイスのチロル地方の山小屋を参考に建築された。紅葉色の屋根と桜色の外壁が周囲の自然と調和している。	産業建設部農林課
16	水島保育所	S57.2	東京紀尾井町赤坂プリンスホテル旧館を参考とし、旧水島小学校跡地に建てられた。自然に調和し、左右対称の均整美を持つ。	民生部子ども課
17	北蟹谷公民館	S57.2	本体は明治時代の洋風建築である日本銀行本店、塔屋は三越デパート本店を参考として、旧北蟹谷小学校跡地に建てられた。	教育委員会生涯学習文化課
18	サイクリングターミナル	S57.3	赤レンガ造りの東京駅を参考とする（実物の1/5の大きさ）。左右対称の均整美を保つ。	企画政策部企画政策課
19	津沢こども園	S58.2	本体は旧霊南坂教会、正面入り口は迎賓館を参考としている。医王山などの山並みを背景に、小矢部川のほとりに建つ印象的なゴシック調建築である。（写真9）	社会福祉法人ちいさな花の福祉会
20	水島公民館	S58.2	本体は奈良国立博物館、塔屋は旧大阪市庁舎、チ	教育委員

			<p>ヤペル風の窓・内装は三菱銀行本店を参考とする。旧水島小学校跡地に建てられ、水島保育所に隣接している。周囲の自然に調和した風格と均整美を持つ近代的建築物となっている。</p>	<p>会生涯学習文化課</p>
21	蟹谷配水池	S58.3	<p>バロック風様式の東京多摩川の取水塔を参考に建てられた。周囲の自然からレンガ色をしたドーム型の屋根が浮かび上がる。小矢部運動公園に隣接する。</p>	<p>産業建設部上下水道課</p>
22	北蟹谷保育所	S59.2	<p>東京工科大学（現在の東京大学工学部）、中央部は大浦天主堂を参考とする。（写真 10）</p>	<p>民生部子ども課</p>
23	大谷中学校 体育館	S59.3 S59.11	<p>本体の塔屋は東京大学安田講堂、正面は東京大学教養学部、塔の先はイギリスのクライストチャーチ寮、体育館は大阪の中央公会堂、内部は国立劇場、南正門はベルサイユ宮殿の門、東門は瑞鳳門、西門は清峰門、北門は凱旋門、野外音楽堂は日比谷野外音楽堂、教育記念塔はアルバート記念塔、クラブハウスのドームはフィレンツェの大聖堂を参考とする。教育記念塔は小矢部市名誉市民である大谷勇氏から寄贈されたもので、建学の精神が土台壁面に刻まれている。北門は別名北辰門という。北辰とは北極星のことで周りには多くの星が集まっているという。学校に例えて言えば生徒が学を志し、身を鍛えるため集い、やがて立派な人となりこの門から出ていく。それを願って北辰門と名付けられた¹³。</p>	<p>教育委員会教育総務課</p>
24	石動中学校	S59.3	<p>本体はレマン湖のほとりに建つ“castle of spirit”（心の城）と呼ばれるスイスの中世の城、時計台はビッグベン、ピロティは東京大学法学部、南正門はバッキンガム宮殿の門、東門は日比谷公園の霞門を参考とする。西門はケンブリッジ大学の尖塔にハーバード大学の唐草模様を組み合わせており、北門はベルサイユ宮殿と迎賓館の旧離宮を組み合わせている。城山の自然に高さ 42m のレンガ色の時計台が調和している。この時計台は生徒た</p>	<p>教育委員会教育総務課</p>

¹³ 小矢部市立大谷中学校.“10年のあゆみ”

			ちの夢や希望の象徴として建てられ、彼らの限らない可能性を表している。ピロティに設置されている天台の像は時計塔の真下に位置している。この像は灯を掲げる天使の像とも呼ばれており、学びの灯を掲げて若人の行く手を照らしているとされている。	
25	松沢公民館	S59.3	本体はアメリカのボストン公会堂、塔屋はロンドンのセントポール寺院を参考として建てられた。前後左右が対象で均整がとれており、2階にはアーチ型のバルコニーが設置されている。(写真12)	教育委員会生涯学習文化課
26	特別養護老人ホーム清楽園	S59.5	国内唯一の純洋式木造ホテルである軽井沢の旧三笠ホテルを参考とする。高台に位置し、砺波平野を一望できる。	社会福祉法人清楽会
27	埴生高区配水池	S59.6	バロック風建築様式を参考に建設された。(写真13)	産業建設部上下水道課
28	小矢部消防団藪波分団	S59.12	サイレン塔兼ホース乾燥室はスイスのチロル地方の山小屋を参考に建てられた。	消防団
29	荒川公民館	S60.2	本体はイギリスのバッキンガム宮殿、塔屋はフランスのノートルダム寺院を参考とし、旧荒川小学校跡地に建設された。近代的な色彩で、均整の取れたつくりになっている。(写真14)	教育委員会生涯学習文化課
30	知的障害者更生施設 溪明園	S60.3	オーストリアのシェーンブルン宮殿、採光は三菱銀行本店を参考とする。(写真15)	社会福祉法人溪明会
31	小矢部市教育センター(旧岩尾滝小学校)	S61.3	中央は札幌時計台、校舎は金沢旧制第四高等学校と北海道大学理学部、玄関は東京大学工学部のアーチ、西門は京都国立博物館を参考とする。子どもたちの夢を託すため、時計塔が設けられた。(写真16)	教育委員会教育総務課
32	東蟹谷保育所	S61.3	本体は金沢旧制第四高等学校、玄関・塔屋は東京大学安田講堂、中央上部は西ドイツのハイデンベルグの古城の塔を参考とする。旧東蟹谷小学校跡地に、周囲の自然との調和と均整美を求めながら建設された。子どもたちの心に残るよう、正面の	民生部子ども課

			屋根中央部に限りない可能性と憧れの象徴として塔が建てられた。(写真 17)	
33	埴生公民館	S62.3	加賀藩旧前田邸、東京都近代文学博物館を参考に建てられた。周囲の自然との調和が重視されている。(写真 18)	教育委員会生涯学習文化課
34	蟹谷中学校 蟹谷中学校 体育館	H1.3 H1.11	中央の尖塔はイギリスのオックスフォード大学、校舎中央はフランスのベルサイユ宮殿、校舎両サイドは迎賓館を参考とした。(写真 19)	教育委員会教育総務課
35	正得駐在所	H4.4	メルヘンの街の景観に調和した白い建物をイメージして建てられた。	警察(富山県警)



図1 メルヘン建築の所在地 (番号は表1に対応)

図1から、メルヘン建築は市内全域に広く分布していることが分かる。平地・山間部を問わず、様々な場所に建設されている。

メルヘン建築は、保育所・幼稚園がもっとも多く9つ、次いで公民館が7つ、小中学校が5つある。メルヘン建築でない施設も合わせると、保育所・幼稚園は13、公民館は15、小・中学校は9、看護・介護施設は約62施設ある。小矢部市内の公共施設に占めるメルヘン建築の割合は、カテゴリ別にみると保育所・幼稚園は約7割、小・中学校は約5.5割、公民館は約4.5割と、ほぼ半分がメルヘン建築であることが分かる。他方、看護・介護施設の割合は1割にも満たない。比較的規模の大きい施設がメルヘン建築となっているのかもしれない。配水池はおそらくメルヘン建築である3施設のみであると考えられる。



写真1 藪波保育所



写真2 松沢保育所



写真3 岩尾滝くつろぎ交流館

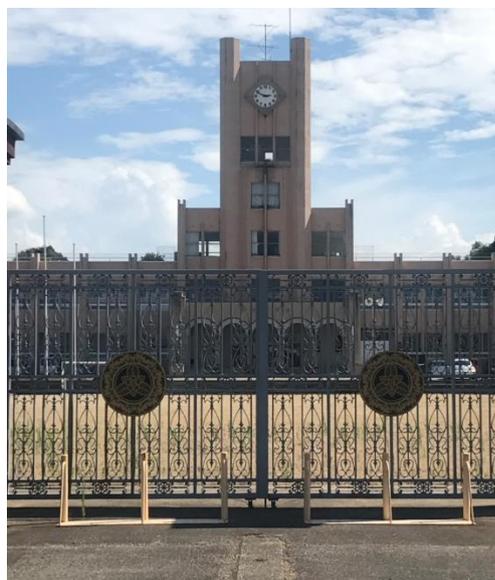


写真4 蟹谷小学校



写真5 荒川保育所



写真6 津沢小学校



写真7 埴生保育所



写真8 武道館



写真9 津沢こども園



写真10 北蟹谷保育所



写真11 大谷中学校



写真12 松沢公民館



写真 13 埴生高区配水池



写真 14 荒川公民館



写真 15 知的障害者更生施設 溪明園



写真 16 小矢部市教育センター



写真 17 東蟹谷保育所



写真 18 埴生公民館



写真 19 蟹谷中学校

1-3. 「メルヘン建築」という名称

「メルヘン建築」という名称は、松本氏によってつけられたものではなく、建てられた当初はメルヘン建築と呼ばれてはいなかった。調査の中で話を伺った人々は「いつのまにかメルヘン建築と呼ばれるようになった」と話していたが、それが具体的にいつから、誰によるものなのかについて調査した。

1-3-1. 「メルヘン建築」という言葉ができる以前

昭和 53(1978)年 3 月 29 日の北日本新聞の記事¹⁴で、岩尾滝保育所（現岩尾滝くつろぎ交流館）の完成が報道されている。本文には「山間部に姿を現したユニークな保育園舎」とある。これ以前に、現在メルヘン建築とされている公共建築物が 4 つ建てられているが、その完成の際は変わった外観をしている、などの報道はされていなかった。その要因として、初期のメルヘン建築は比較的外観がシンプルであり、他地域の一般的な保育園舎とあまり違いが見られなかったことが考えられる。

昭和 56(1981)年 3 月 13 日の北日本新聞の藪波公民館を報道する記事¹⁵には、「今度は英国調建物」というタイトルが付けられている。同様に、昭和 57(1982)年 3 月 19 日の北蟹谷公民館、サイクリングターミナルを報道する記事¹⁶も「今度は“東京駅”“日銀”」と題され、小矢部市を「異色建築シリーズで知られている」と紹介している。両記事のタイトルにつけられている「今度は」という言い回しに加え、昭和 58(1983)年 2 月 18 日の津沢保育所の完成を報道する記事¹⁷の「またも名物お目見え」というタイトルから、この時期から小矢部＝一風変わった建築物というイメージがメディアに浸透したことが窺える。しかし、「メルヘン」や「メルヘン建築」という言葉はどこにも使用されていない。

1-3-2. 小矢部＝メルヘンというイメージ

昭和 56(1981)年 6 月に発行された『週刊読売』¹⁸に、現在メルヘン建築と呼ばれている公共建築物がグラビアとして複数紹介されている。「おらっちゃんの町にはメルヘンがある」というタイトルがつけられているが、記事本文中に「メルヘン建築」という言葉はやはり見られない。「メルヘン」という言葉は、藪波保育所のテーマがおとぎの国の「メルヘン」であるという点で一度表記されているのみで、それ以外にはなかった。また、現在人々がメルヘン建築と呼んでいる公共建築物のことを、「小矢部市アイデア建物」という名称で取り扱っていた。これと同様に、昭和 59(1984)年 2 月 21 日の北陸中日新聞の記事¹⁹では、現在でい

¹⁴ あす岩尾滝保育所の完成式.北日本新聞.1978-03-29.朝刊.p13

¹⁵ 今度は英国調建築物.北日本新聞.1981-03-13.朝刊.p12

¹⁶ 今度は“東京駅”“日銀”.北日本新聞.1982-03-19.朝刊.p21

¹⁷ またも名物お目見え 小矢部 迎賓館風の津沢保育所.北日本新聞.1983-02-18..朝刊.p15

¹⁸ 著者不明.“おらっちゃんの町にはメルヘンがある”.週刊読売.読売新聞社,1962,p.3-5,11-13

¹⁹ 小矢部市.“生きる喜びと潤いのあるまちづくり”.故松本正雄小矢部市長を偲んで.小矢部

うメルヘン建築を「名建築シリーズ」という言葉で表現している。

昭和 59(1984)年 11 月 26 日の北日本新聞で、大谷中学校完成の記事²⁰が掲載されている。本文には「最近の小矢部市の“メルヘンの街”の集大成ともいべきこれら建築群は」との記載があり、小矢部＝メルヘンの街というイメージが確立していることが窺える。この記事のタイトルには「有名建築物を集大成」とある。同様に、昭和 59(1984)年 3 月 2 日の北日本新聞の記事²¹では石動中学校の完成が報道されており、そのタイトルにも「有名建築組み合わせ」という表現が使用されている。両記事の「有名建築」という言葉は、小矢部市の松本正雄氏による公共建築物群を総称する「メルヘン建築」という言葉が生まれていれば、使われなかったのではないか。したがって、この時点ではまだ「メルヘン建築」という言葉は生まれていないと考える。

次に確認できたのは昭和 60(1985)年 9 月に発行された『建設月報』²²で、この記事は松本正雄氏によって書かれている。本文には「ロマンとメルヘンの世界が展開されている」とある。加えて「このユニークな公共施設は、マスコミ等情報機関によって全国に紹介され、『メルヘンの街おやべ』と呼ばれ、各地から視察にご来市いただいている」との記述もあり、マスコミによる小矢部＝メルヘンのイメージが市長である松本氏からも認められたことが窺える。

1-3-3. 「メルヘン建築」という言葉の出現

昭和 60(1985)年 9 月 4 日、北日本新聞による記事²³で初めて「メルヘン建築」という言葉が確認された。記事タイトルは「雨漏り問題で質疑 メルヘン建築第一号・正得公民館」である。ここでいうメルヘン建築第一号とは、公民館の中で最初にメルヘン建築として建てられたことを意味している。続いて、北日本新聞の昭和 60(1985)年 12 月 9 日²⁴、昭和 61(1986)年 3 月 20 日²⁵の記事で「メルヘン建築」という表記が見られた。その後も続々と「メルヘン建築」という言葉が使われて、次第に定着していったことが読み取れる。

昭和 61(1986)年 10 月 21 日の朝日新聞で、松本氏の訃報を掲載している。この記事には「東西の名建築に似せたユニークな公共施設を 37 棟建設し、『メルヘン市長』として有名」との記述がある。この時点でまだ「メルヘン建築」という言葉が使われておらず、各メディアによって「メルヘン建築」という言葉をいつから使用したかにばらつきがある可能性があ

市,1986,p24 “北蟹谷にすごい保育所”.北陸中日新聞.1984-02-21

²⁰ 散居村にメルヘンの校舎 有名建築物を集大成.北日本新聞.1984.11.26.朝刊.p13

²¹ 有名建築組み合わせ 統合石動中が完成.北日本新聞.1984,03.02.朝刊.p19

²² 松本正雄.“公共施設の建築基本理念について”.建設月報.社団法人建設広報協議会,1985,p.141-145

²³ 雨漏り問題で質疑 メルヘン建築第一号・正得公民館.北日本新聞.1985-09-04.朝刊.p13

²⁴ 年賀スタンプできる.北日本新聞.1985-12-09.朝刊.p15

²⁵ ふるさとを撮る 砺波で写真展.北日本新聞,1986-03-20.朝刊.p21

ることと、松本氏が一部では「メルヘン市長」と呼ばれていたことがわかった。

「メルヘン建築」という言葉が確認できた記事の中で一番古いものが昭和 60(1985)年 9 月であることと、昭和 59(1984)年の記事を検索しても「メルヘン建築」という言葉が出てこないことから、「メルヘン建築」という言葉は昭和 60(1985)年 9 月ごろに誕生したものと考えられる。

1-3-4. 報道から読み取れること

メルヘン建築の名称を調べていく中で、メルヘン建築がメディアによって報道される際に「コピー建築」と呼ばれたり「〇〇をモデルに・模倣して」というような表記がされたりすることが多い印象を受けた。これについて、松本氏は「現在に残る名建築の構造力学上の特性を参考にしたのが小矢部市の公共建築物であり、コピー・モデルと言われるのは不愉快だ」と述べている²⁶。

メルヘン建築が完成した際の北日本新聞による報道に、時期によって違いが見られた。1-3-1 で述べたように、メルヘン建築が建ち始めた初期(藪波保育所～訪問看護ステーション)の報道では、施設の外観に着目した報道は特にされていない。昭和 53(1978)年 3 月に完成した岩尾滝保育所(現岩尾滝くつろぎ交流館)以降の施設は、松本氏が参考とした有名建築物の紹介とともに施設の完成を報道し、必ず施設の写真が掲載されていた。しかし、昭和 59(1984)年 5 月の特別養護老人ホーム清楽園の完成以降、文章のみの報道や、そもそも報道されないことが増えた。このことから、メルヘン建築が世間から最も注目されていた時期は、昭和 53(1978)年から 59(1984)年までの 6 年間であると考えられる。

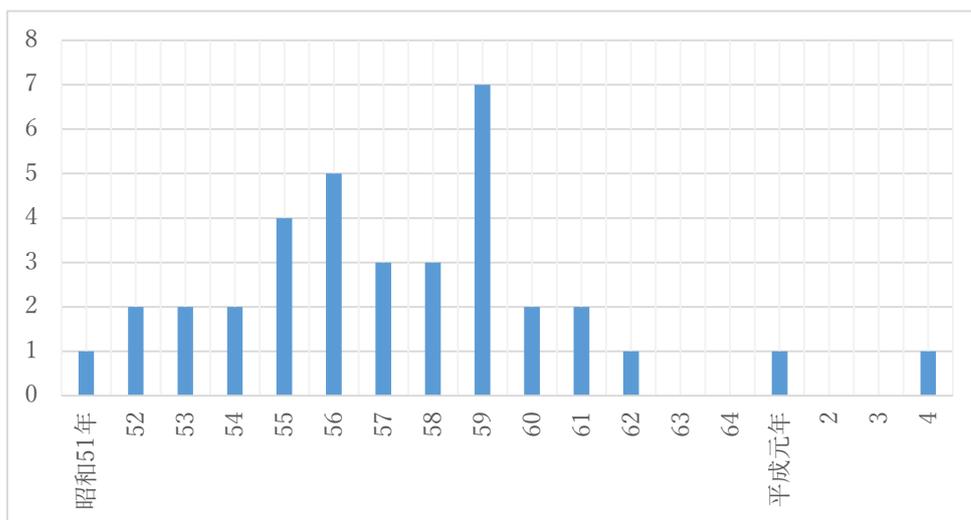


図2 年別で見たメルヘン建築の建設数

²⁶ 長沼岩根.“運命によって市長になった。一生涯政治やって哲学を残す。”.地方の神々現代ニッポンの首長.株式会社ぎょうせい,1987,p.180-189

図2は、メルヘン建築が建てられた数を年別に表したものである。ピークは昭和59(1984)年で、その後急激に建設数が落ち込む。これには昭和61(1986)年10月に松本氏が急逝したことが影響していると思われる。しかし、松本氏が亡くなる1年前の昭和60(1985)年の時点ですでにメルヘン建築の建設数は減少しており、生前からメルヘン建築の縮小はある程度方向付けされていたのかもしれない。松本氏の後任であった大家啓一元市長は、既存のメルヘン建築は観光資源としての活用を目指す、新しいメルヘン建築の建設は今後行わないことを宣言した。そのため、松本氏が亡くなった後は構想途中の施設を除き、メルヘン建築が建てられることは無かった。メルヘン建築に世間の注目が集まっていたと考えられる昭和53(1978)年から59(1984)年までは、建設数でもピークの期間であることが読み取れる。

「メルヘン建築」という言葉の出現時期と関連させてこのグラフを見ると、言葉の出現した昭和60(1985)年には、メルヘン建築の建設ピーク時期が過ぎていることが分かる。建設ピーク時に報道をしやすいように言葉をつくったというわけではなく、落ち着いたころによろやく「メルヘン建築」という言葉が誕生したのは興味深い点である。

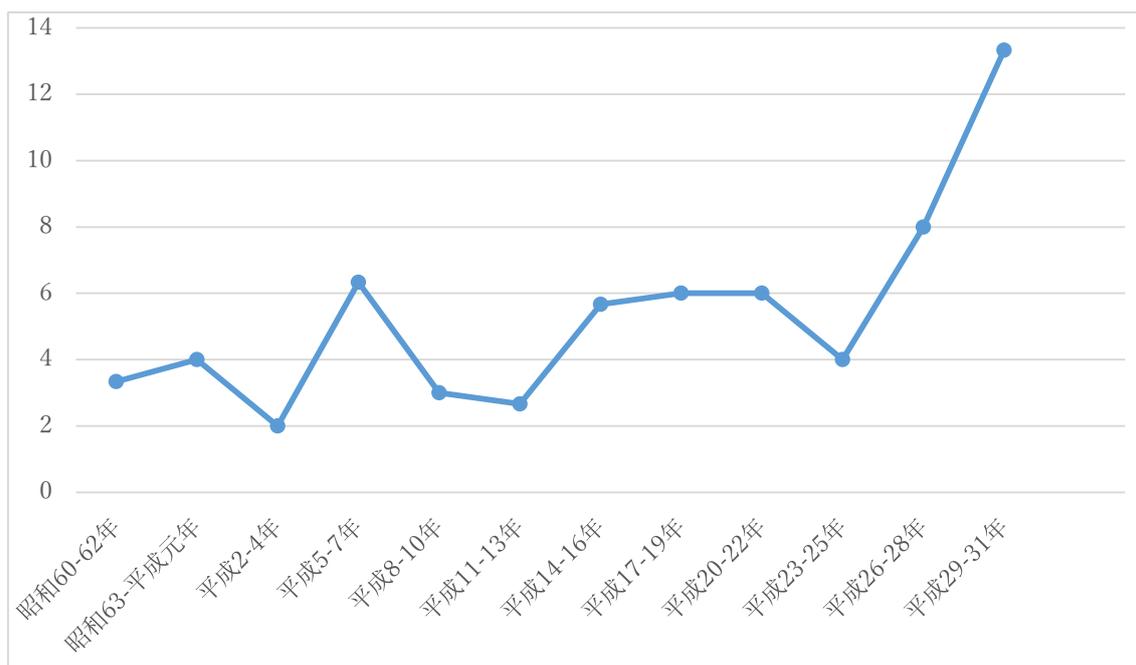


図3 北日本新聞において確認できた「メルヘン建築」という語句を含んだ3年ごとの平均記事数の推移

図3は、北日本新聞において「メルヘン建築」という語句が使われた記事の数を3年ごとに平均して示している。「メルヘン建築」という語句が初めて使われた昭和60(1985)年から現在に至るまで、報道数にも波があることが読み取れる。

昭和62(1987)年から平成元年にかけては、メルヘン建築を見学する観光ツアーを報じる

記事が比較的多く見られた。市民の方々から伺った話によると、当初はメルヘン建築を目的とした観光客もいたらしく、メルヘン建築がまだ完成して間もない頃は観光ツアーなどがさかんだったのかもしれない。

平成 5-7(1993-1995)年の記事数が前後と比べて多い理由として、「クロスランドおやべ」²⁷がオープンした年であることが考えられる。施設内の展望台から小矢部市が一望できるという説明のところで、「メルヘン建築」という語句が使用される傾向にあった。ある記事²⁸では、メルヘン建築は小矢部市の顔ではあるが、観光客によってお金が落とされるような場所ではなく観光面でのメリットは少ないことが報じられており、比較的早い段階でメルヘン建築の観光資源的な役割は見切られていたようだ。

次に、平成 15-16(2003-2004)年に注目したい。この 2 年は、メルヘン建築の老朽化・修繕工事を問題視する記事や、小矢部市で開催された大規模な地域振興イベント²⁹に関する記事、平成 15(2003)年に宅地造成によって「メルヘンランドスケープ」³⁰が誕生したことを報じる記事など、小矢部市にまつわる話題が多かったことから、「メルヘン建築」という語句を使った記事が増加したと推察される。メルヘンランドスケープの誕生から、この頃から小矢部＝メルヘンというイメージを作ったメルヘン建築が老朽化する一方で、メルヘンというイメージを受け継ぐ物事が登場していたことが窺える。

平成 20(2008)年 3 月には、メルヘン建築である岩尾滝保育所と岩尾滝小学校が閉校し、小矢部市教育センターが移転した。また、同年 7 月に東海北陸自動車道が全線開通したことで市が観光振興に力を入れていた。これらの要因が、記事数が依然として多いことに影響していると考えられる。

近年では、平成 28(2016)年から 30(2018)年にかけての記事数の増加が著しい。平成 28(2018)年には、小矢部市と石川県津幡町の観光関係者で結成された「おやべ・つばた観光戦略会議」による小矢部市内の観光地のポスターの制作・展示が行われた。ポスターは水彩で描かれた看板風のもので、メルヘン建築を含む計 30 枚が作られた³¹。

平成 29(2017)、30(2018)年も同様に、観光推進政策や地域振興イベントなどが多く開催された。平成 30(2018)年には石動駅が新舎となり、利便性が向上した。興味深い点は、メ

²⁷ 平成 6(2004)年 5 月 1 日に開館した。当施設は、小矢部市において高速道路が十字交差するため、「クロスランドおやべ」と名付けられ、自治省（現総務省）から「地域間交流事業」の指定を受けて設置された。

参考：https://www.japantowers.jp/crossland_tower/（令和元年 11 月 19 日閲覧）

²⁸ 「クロスランドおやべ」を文化経済の交流拠点に.北日本新聞.1991.07.15.朝刊,p5

²⁹ 平成 16(2004)年 5 月 4, 5 日にクロスランドおやべで地域の魅力を再発見するイベント「ど〜んと小矢部」が開催された。

³⁰ メルヘンランドスケープについては 3-2 を参照

³¹ 小矢部の名所 看板風に.北日本新聞,2016-1-24,朝刊,p24.

メルヘン建築の見学を含んだ市内を巡るツアーがいくつか開催されていた点だ。そのツアーは44人が参加しており、約一週間後にも同様のツアーが開かれた³²。メルヘン建築が再び注目を浴びているのかもしれない。

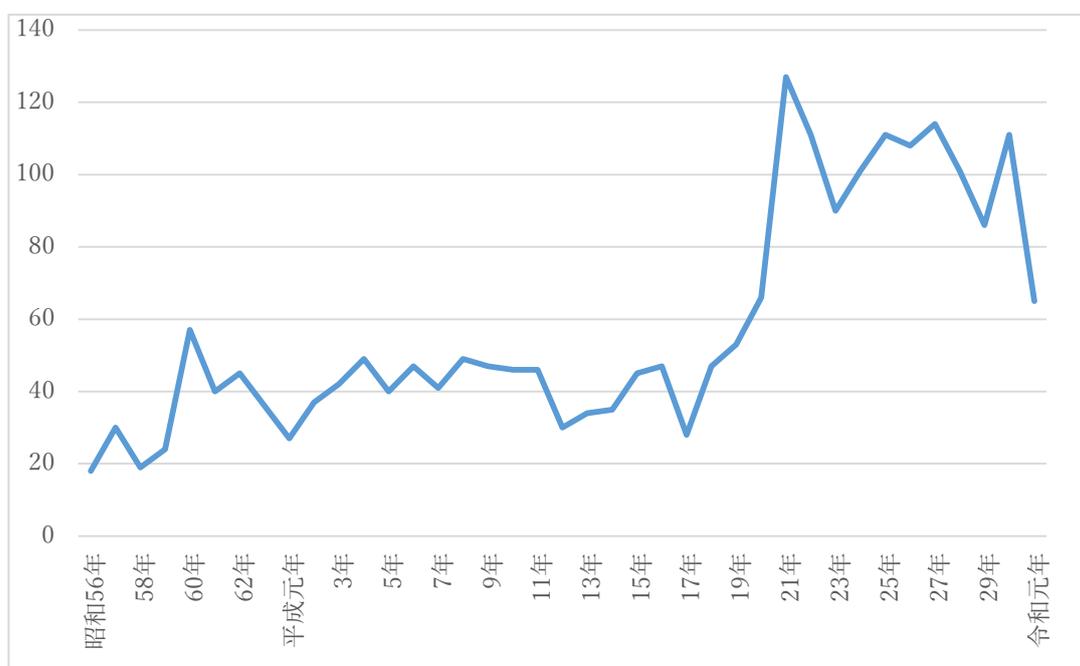


図4 北日本新聞における「メルヘン」と「小矢部」の両方の語句を含んだ記事数の推移

図4は、北日本新聞で「メルヘン」と「小矢部」の両方の語句を使用している記事数の推移を表している。はじめて「メルヘン」という語句を使用したメルヘン建築に関する記事が確認できた昭和56(1981)年から、令和元年(2019年)11月30日までの記事を数えた。図を見ると、全体的に右肩上がり、平成21(2009)年に記事数が急増していることがわかる。したがって、小矢部＝メルヘンというイメージが持たれる傾向が近年さらに高まっていることが考えられる。

平成12(2000)年と平成30(2018)年で記事の内容を比較した。平成12(2000)年の記事は、メルヘン建築の他に「メルヘン青少年武道大会」や「ミスメルヘン」「メルヘン合唱団」等、名称に「メルヘン」をつけた団体やイベントが記事で多数紹介されていた。メルヘン建築についての記事と、それ以外の「メルヘン」に関する団体等の記事の割合はおおよそ半々だった。

平成30(2018)年の記事は、前年に発表された「新メルヘン」³³に関する記事や、「おやべ

³² 小矢部の魅力体感 市内巡るバスツアー.北日本新聞,2018-11-27,朝刊,p19.

³³ 新メルヘンについては3-1を参照

メルヘンパーティー」³⁴等の地域イベントの記事が多く見られた。メルヘン建築に関する記事も見られたが、その数はかなり少ない印象であった。

「メルヘン」と「小矢部」の両方の語句を使用した記事の数は増加傾向にあるが、そのうちのメルヘン建築についての記事はそれほど多くない。平成 30(2018)年の「メルヘン」と「小矢部」の語句を含む記事は 111 件だが、メルヘン建築についての記事は 20 件である。また、その中でもメルヘン建築を主題としていない記事が数件あることから、近年の記事はメルヘン建築を報じるというよりも、メルヘンの街として小矢部を取り上げている傾向にあると考えられる。

「メルヘン建築」という名称についての紙媒体メディアによる調査を通し、「メルヘン建築」という名称はメルヘン建築が建設されているピークの時期を過ぎたころにメディアによって誕生したことがわかった。図 3 から、その定着は松本氏が亡くなりメルヘン建築の新しい建設もほぼされなくなった時期だと考えられる。また全体的な傾向として、近年「メルヘン建築」という言葉が使用される記事が増加していることも興味深い。メルヘン建築は、小矢部市を紹介する際に欠かせない要素となっている。そのため、小矢部市について書かれた記事に「メルヘン建築」という言葉が伴うのではないかと推測される。加えて、図 4 から小矢部とメルヘンを結び付けた記事が増加していることが窺える。したがって、近年小矢部市が注目される機会が増加傾向にあると推測される。

小矢部市民ではなくメディアによって考えられたイメージ及び名称が、今となっては市にとって不可欠である看板のようなものになり、市内外の人々に親しまれている様子は、比較的珍しい事例ではないかと思われる。

1-4. メルヘン建築に対する市民の意識

本項は、石動駅前商店街で市民の方に伺った話を参考に記述する。

1-4-1. 特徴のある外観

メルヘン建築についてどう思うかという問いかけに対し、60 代の女性は「特徴的な外観で、他の市にないものだから良いと思う」と答えた。同様のことを、話を伺った人々のほとんどが語っており、メルヘン建築が小矢部市民にとっても市を代表する特色となっていることが窺える。その中でも、実際にメルヘン建築である学校に通っていた 20 代の男性は「他の学校との差別化を図ることができ、母校についての話が友人との話題にあがる」と話していた。母校がメルヘン建築である 40 代の女性も「自分の母校はこんなに綺麗だという誇りのようなものを持っていた」と語っていた。おやべメルヘンガイド会長である山崎康子さんの息子さんも、「自分の子どもに『パパの卒業した学校はこんなにすごい』と誇ることができる」と話していたらしく、お子さんも「こんな学校見たことがない、羨ましい」と話して

³⁴ おやべメルヘンパーティーについては 3-2 を参照

いたそうだ。

このように、実際にメルヘン建築である学校に生徒として通っていた人々のメルヘン建築に対する意識は、通っていない人に比べて特別であることが考えられる。「通った生徒が母校を誇れる」という、メルヘン建築を考案した松本正雄氏が望んだことが今も受け継がれている。

1-4-2. 老朽化問題

老朽化に関する意見も多かった。60代の女性は「老朽化が進み、くたびれているイメージがある」と話し、50代の女性は「遠目で見ると綺麗だが、近くで見ると大分古びてきているのが分かる」と話していた。確かに、メルヘン建築を見に足を運んだ際、遠目にみるとパッと目を引く外観で立派な建物だという印象を受けたが、建物が目前に迫ると塗装が剥がれている部分や汚れが目立つものが少なからずあった。外壁を再塗装した松沢公民館は古びているという印象は受けなかった。メルヘン建築を美しいまま保つにはそれなりの費用がかかる。実際、維持費の問題でメルヘン建築の存続は懸念されている。メルヘン建築の存続に対して、70代の女性は「メルヘン建築がなくなったら小矢部には何も残らないから存続してほしい」と話しており、同様のことを40代の女性も話していた。「小矢部には何も残らない」という発言から、小矢部のシンボルはメルヘン建築しかないと考えている人もいることが窺える。メルヘン建築ができたことにより「小矢部＝メルヘンの街」というイメージが完成した。小矢部のイメージの基盤となったメルヘン建築がなくなることは、小矢部市のアイデンティティが失われることと一緒だと感じ、このような考えに至ったのだと推察される。

一方で、話を伺った若い世代の人々はメルヘン建築の存続に関して割と淡泊である印象を受けた。20代の男性は「壊してほしいくないという市民はいなさそう」と語り、10代の女性は「小矢部市に何も無いのだから、メルヘン建築があったところで大して変わらない」と話していた。年齢層によって、存続に対しての意識はばらつきが見られるのかもしれない。

1-4-3. 慣れと愛着

メルヘン建築に対する意識が年を重ねるごとに変わったという方もいた。50代の女性は「最初は異物感があったが長年住んでいると馴染んできて、そこにあるのが当たり前だと感じるようになった」と話し、40代の女性は「若い頃は他の建築物を模したという偽物感からメルヘン建築が恥ずかしかったが、今は他の市にない特徴的な点が誇らしい」と話していた。メルヘン建築が建てられた当時があった、一部からの批判を経て次第に市民に認められていった一つの理由として、市民のメルヘン建築があることへの慣れや受容が挙げられると考えられる。慣れが次第に愛着へと変わり、現在多くの市民に親しまれる小矢部市の特徴の一つとなっていると感じられる。

1-4-4. 文化意識の高揚

小矢部市産業建設部商工観光課の船見幸広さんは、絵画教室に通っている市民から「メルヘンな雰囲気を持つメルヘン建築で作業をすることで、作品も普段と変わってくる」という話を聞いたことがあるそうだ。松本氏がメルヘン建築を建てた理由の一つが、市民の文化意識の高揚である。この方の作品に少なからず良い影響を与えることとなったメルヘン建築は、本来の効果を発揮したといえるのではないだろうか。小矢部市内の公民館では絵画教室やスポーツ活動など、文化的な体験活動を行っている。メルヘン建築である公民館が人々の芸術面や成長過程に良い影響を及ぼすのであれば、今後も是非存続させてほしいものである。

1-4-5. ミスマッチな景観

市民の方々の話はどれも印象に残るものであったが、とりわけ興味深かったのは観音寺と石動中学校の景観についてである。近隣で働いている50代の女性は、「観音寺の五重塔の後ろに石動中学校の時計台が見えることに違和感がある」と話していた。実際に見てみると、確かに西洋風の時計台と和風の五重塔がミスマッチであると感じた(写真20)。獅子舞祭³⁵の際はこの観音寺で獅子舞が奉納されるため、3つの要素が同時に視界に入り、さらにちぐはぐな印象を受けるとその方は話していた。メルヘン建築が建ち始めたときに「田園風景にそぐわない」という批判を受けていたことよりもこの異文化的でちぐはぐな事例のほうが問題であるかもしれない。この二つの建物は、両者とも単体で見れば素晴らしいものであるのに、近接した位置に建っていることで違和感を覚える景観となっている。



写真20 石動中学校の時計台と観音寺の五重塔



³⁵ 毎年5月第4土・日曜に石動で開催される。市内各地でも春から秋にかけて祭礼行事として奉納されている。

参考：<https://www.oyabe.info/archives/tour/shishi/> (令和元年11月26日閲覧)

その一方で、一緒に視界に入ってくることでプラスの作用をしていると感じる事例

写真 21 松沢保育所とクロスランドタワー

もあった。これは、松沢保育所とクロスランドタワー³⁶が同時に写りこんだ写真である（写真 21）。メルヘン建築と同様に、クロスランドタワーは小矢部市内のシンボリック的存在となっている建築物である。この二つの建物は両者とも近代的でユニークなつくりをしているため、観音寺の五重塔の事例とは反対に、近辺の雰囲気メルヘンで現代的なものにしていると感じられる。

1-4-6. 近隣住民の要望による建て替え

メルヘン建築に対して好印象を持つ市民がいる一方で、問題意識を持っている市民もいる。正得公民館は、道明 119 番地に所在する施設である。現在は一般的でシンプルな外観をしているが、元々はメルヘン建築として昭和 55(1980)年 3 月に東京都日比谷公会堂を参考に建てられた公民館であった。雨漏りがひどい点や、エレベーターがなく 3 階の研修室を利用する高齢者にとって不便である点など不評があり、平成 12(2000)年に地域住民が平屋への建て替えを要望した。そして、平成 14(2002)年 3 月に現在の建物が完成した。当時の館長は「メルヘンより使いやすさでしょう。もともと、地元から頼んだわけでもないし」と話していたという³⁷。

この建て替えの事例から、外観が特徴的なものより、実用的で利用しやすいものを求める市民が一定数いることが窺える。特に公民館を利用する頻度が高い高齢者に配慮するとなれば、外観の装飾より建物内部の設備の充実が求められると考えられる。

1-4-7. 津沢地区におけるメルヘン建築

メルヘン建築である公民館の指導員をしている女性は、外観の装飾部によって建物内部の面積が小さくなり、管理室や館内の部屋が狭くなり使い勝手が悪いと話していた。目立つ外装よりも、シンプルで機能性が高いものを求めているとのことだった。彼女は津沢地区出身で、昭和 50(1975)年代に嫁いできてから公民館の指導員を始めたそうだ。今の仕事をやるまでは、メルヘン建築について特に意識したことは無かったという。この理由として、津沢地区にはメルヘン建築があまりないことを挙げていた。津沢地区にあるメルヘン建築は、津沢小学校と津沢こども園である。1-1 の図 1 からわかるように、メルヘン建築は市内全域に分布しており、津沢地区にあるメルヘン建築が著しく少ないという訳ではない。かなり西洋風の外観をしている津沢こども園（写真 9）に対し、津沢小学校（写真 6）は非常にシ

³⁶ クロスランドおやべ（小矢部市鷲島 10 番地）内に建てられている。高さは 118m で、地上 100m に展望フロアが設置されている。平成 6 年 5 月 1 日に開館した。

参考：https://www.japantowers.jp/crossland_tower/（令和元年 11 月 19 日閲覧）

³⁷ 雨漏り問題で質疑 メルヘン建築第一号・正得公民館.北日本新聞.1985-09-04.朝刊.p13

ンプルなつくりをしており、一見メルヘン建築には見えない。これに関して津沢地区の方に話を聞いたところ、小学校を建設する際に地域住民が市長に意見をしたのではないかとのことだった。意見の内容については、外装より実用性を重視してほしいというものだったと話していた。

加えて、市内にある4つの中学校のうち津沢中学校だけがメルヘン建築ではない一般的な校舎の形をしていることにも注目したい。津沢中学校は平成元年の8月に完成しており、これはメルヘン建築である蟹谷中学校の完成の5か月後である。大規模な建設工事のさなかである昭和61(1986)年10月に亡くなった松本正雄氏は、メルヘン建築である蟹谷中学校の発案・基本設計に関与していたと考えられる。推測ではあるが、完成時期にあまり差のない津沢中学校がメルヘン建築ではない理由の一つとして、津沢小学校を建設した際の地域住民の意見を尊重したことが挙げられるのではないだろうか。

指導員の女性がメルヘン建築を特に意識してこなかったもう一つの理由として、津沢夜高あんどん祭³⁸が関与していると考えられる。津沢夜高あんどん祭は、毎年6月の第一金、土曜に開催される、小矢部市の祭事である。地域住民たちは年明けからこの祭の準備に取り掛かる。人々は幼い頃から祭に携わり、小学生は太鼓を披露し、中学生になると行燈につながるができる。このように、津沢夜高あんどん祭は人々が重点を置いている地元の文化であるといえる。そのため、メルヘン建築は津沢夜高あんどん祭によって霞んでしまっているのではないか。

しかし、他にも小矢部市には津沢夜高あんどん祭に匹敵する石動曳山祭³⁹やおやべの獅子舞祭などの規模の大きな祭がある。この点を考慮すると、津沢地区におけるメルヘン建築への関心が薄いことの要因は、祭に限ったことではないと推察される。ただ、津沢夜高あんどん祭が他の祭と比べて準備に相当の時間がかけられており、住民の意識が強く、津沢地区全域を挙げて取り組まれる祭であることも要因の一つではないかと考えられる。

2. メルヘン建築の利用

本節では、メルヘン建築である施設がどのように利用されているのかについて、具体的に

³⁸ 向かい合った2つの行燈が人々の掛け声とともに激しくぶつかり合う。相手側の山車、吊りものを壊す「ぶつかり合い」は迫力があり、祭のメインとなっている。行燈の製作は全て共同手作業で行われており、そのサイズは高さ7m、長さ12m余りである。

参考：<http://www.oyabe.info/pamphlet/tsuzawayotaka.pdf>（令和元年11月24日閲覧）

³⁹ 石動愛宕神社の春季例祭。石動で毎年4月29日に行われる。11本の花山車が囃子にのって街を練り歩く。江戸時代中期から続く、伝統ある祭りである。

参考：<https://www.info-toyama.com/event/20097/>（令和元年11月26日閲覧）

記述する。

2-1. 各施設の利用

メルヘン建築である各施設は、地域住民によって利用されている。保育所や小中学校などは教育機関として市内の児童・生徒に使用されている。関係者以外の立ち入りは禁止されており、文化祭など学校主催以外の行事で使用されることは無い。看護・介護施設も同様に、主に入所者及び関係者による使用に限られている。

メルヘン建築に3つ含まれている配水池は、送られてきた浄水を一時的に貯留し、需要量に応じて流出制御を行う役割を果たしている。標高の高い場所にあり、自然の落差を利用して家庭に給水する。この施設は、人々によって利用されるというよりは人々の生活を支えているものである。実際、埴生高区配水池へ足を運んだところ、周辺は柵が設置されており一般人は入れないような作りとなっていた。

公民館は、地域住民に向けた各文化教室や公民館まつりの際に利用されている。メルヘン建築の中でも、公民館は地域により密着している施設という印象である。

その他、武道館やサイクリングターミナルなど、各用途に合わせて使用されている施設がほとんどである中、小矢部市教育センターは他の施設とは一風変わった利用がされており、その利用者は地域住民のほか、他地域、県外の人々までにわたる。以下、それについて詳しく述べる。

2-2. 小矢部市教育センターの事例

ここでは、利用方法が他の施設と比べて特殊である小矢部市教育センターについて詳しく述べる。以下は、小矢部市教育センターの職員の方の話をもとに記す。

2-2-1. 旧岩尾滝小学校

小矢部市教育センターは、元は岩尾滝小学校として利用されていた。戦後に児童数が150人を超えたこともあったが、その後児童数の減少により平成20年3月に閉校となった。現在の校舎が建てられたのは昭和61(1986)年で、事業費は約3億3300万円だった。

維持費の問題や老朽化の影響でメルヘン建築の存続が危ぶまれている一方で、岩尾滝小学校は解体せず小矢部市教育センターとして再利用されることとなった⁴⁰。その理由として、新校舎の完成から閉校まで約20年しか経過しておらず解体するには早いことや、補助金返済の問題が挙げられる。

また、地域住民からの建物の存続を求める声もあったそうだ。閉校の際の朝日新聞の記事

⁴⁰ 小矢部市教育センターは昭和41(1966)年11月1日に発足した。当初は旧西礪波郡地方事務所に設置されていたが、その後小矢部市総合会館1階、旧簡易裁判所へと移転し、平成20(2008)年9月1日に閉校後の旧岩尾滝小学校へと移転して現在に至る。

には、校舎の建設の際に地域代表として計画に参加した方(男性、当時 79 歳)の「寒さにも負けない元気な子供が育つように、立派な校舎を望みました。生涯忘れることができない校舎です」という声や、過去の卒業生(当時 70 歳)の「変わった校舎だからこそ、地区の象徴として母校を超えた思いがある。今後も残してほしい」という声が掲載されている。最後の卒業生となった児童も、「時計台が好き。この学校は誇りです」「こんな立派な学校を卒業できてうれしい」と語っている⁴¹。

2-2-2. 小矢部市教育センターの利用

施設内は事務室とその隣の部屋のみが教育センターであり、それ以外の小学校時代の教室などはイベントの際に貸し出すことはあるが、教育センターで利用することは無いようだ。イベントは小矢部市や NPO 団体によるもので、教育センターは関与していないとのことだ。

施設の利用は多岐にわたる。利用者の多くは岩尾滝地域の人々や団体によるもので、時々法人団体や市による利用がされている。地域住民による利用として、地区の運動会、サッカースポーツ少年団の夏合宿、グラウンドゴルフ、ボーイスカウトのキャンプ、NPO 法人「山の店」による農産物の販売が挙げられる。NPO 法人「山の店」は、南谷地区の荒間地域にある直売所で農産物の販売をしている団体である。年に 2 回、春の感謝祭と秋の収穫祭を教育センターで開催しており、大規模な販売会や餅つきを行っている。その際、他地域からの参加者もみられるようだ。施設利用以外にも、湊明園へのパイプ椅子貸し出しを行っており、地域に密着した施設といえる。

地域外の人々による利用には、小矢部市による婚活イベントや、NPO 法人「石動まっちゃプロジェクト」によるイベント(図 5)の際のコスプレイヤーによる撮影地としての利用が挙げられる。婚活イベントではメルヘン建築を利用したお化け屋敷型婚活が平成 30(2018)年 8 月に行われた。

地域、地域外の人々による教育センターの用途を比較すると、地域の人々からは公民館のように利用されているのに対し、地域外の人々からはメルヘン建築という特性を活かして



図 5 「石動まっちゃプロジェクト」によるイベントのパンフレット

⁴¹ 借別メルヘン小、今月で廃校 最後の卒業式で 3 人集立ち 小矢部・岩尾滝小/富山県、朝日新聞.2008-03-20,朝刊,p.29

利用されていることが窺える。

2-3. メルヘン建築の特性を活かしたイベント利用

メルヘン建築の特徴的な外観を活かしたイベントとして、「街かどコスプレイヤー&痛車コレクション」が開催されている。本イベントでは石動駅や駅前商店街、メルヘン建築である小矢部市教育センター等でのコスプレ及び撮影を楽しむことができる。小矢部市教育センターはイベントのメインステージが設置されている商店街から離れているため、シャトルバスが運行されている。イベント参加者はそのバスを利用して撮影場所まで移動している。その他にも痛車⁴²の展示やステージイベントなどが行われている。

リピーターを増やすため、第6回までは年2回（両日1日のみ）の開催だったが、認知度が徐々に上がってきたことから、直近の第7回開催（令和元年6月15、16日）から年に1回（2日間）の開催に変更した。現在の参加者は300名を超えており、県内だけでなく隣県や関東圏からの参加者も見られるようだ。

このイベントで初めて小矢部市教育センターが使われたのは第2回開催時（平成28(2016)年10月30日）で、それ以来引き続き利用されている。音楽室や放送室など、学校特有の空間でコスプレ撮影ができることが最大の特徴であり、実際に使われていた学校施設をコスプレイベントに貸し出す事例は全国的にみても珍しい。

運営はNPO法人「石動まっちゃんプロジェクト」による。石動まっちゃんプロジェクトは石動駅前商店街及び小矢部市内の活性化を目的として平成28(2016)年に設立された民間団体である。所属メンバーは、市内の飲食店、食肉加工者、農産物生産者、看板サインデザイン制作業者、運送業者等、市内自営業者や一般市民で構成されている。主に、小矢部市の特徴を生かした街づくり、駅前商店街の空き店舗活用及び新しい起業者との仲介、小矢部市の特産品の企画及び販売などの活動をしている団体である。

このイベントは、コスプレという若者文化と小矢部市の特徴であるメルヘン建築を結びつけることで、県内外の人々に小矢部市の魅力を伝える重要な役割を果たしていると考えられる。開催を重ねるごとに知名度も上昇しており、参加者も若い世代が多いことから、小矢部市の魅力を発信していく絶好の場であるように感じられる。



写真 22 小矢部市教育センター
で撮影された写真（©街イベ）

⁴² アニメや漫画、ゲームなどのキャラクターを車体にデザインした車。

2-4. NPO 法人「石動まっちゃプロジェクト」理事長 田悟謙三さんの話

「街かどコスプレイヤー&痛車コレクション」は、あるコスプレイヤーの方の話が開催のきっかけとなった。彼女は「小矢部は来ただけで楽しい。コスプレをして、閉鎖された空間で写真を撮ることはあっても、街中で写真を撮れる場所はない。小矢部は街中で写真を撮ることができる」と話していたそうだ。このやりとりから、田悟さんはメルヘン建築で写真を撮ってもらうことを思いつき、第2回開催の撮影地に小矢部市教育センターを含めたとのことだ。開催当日は予想の2倍の参加者が押し寄せ、田悟さんはお寺や使わない学校・街並みは、ある人々にとっては大きな魅力であることを認識し、現在コスプレイベントを毎年開催しているそうだ。

石動まっちゃプロジェクトにとってのメルヘン建築の意義について尋ねた。石動まっちゃプロジェクトでは、メルヘン建築を小矢部市のひとつの看板としてみなしている。当団体にとってメルヘンとは物ではなくイメージのようなもので、そこから人々の夢を具現化する手伝いをしたいという考えにつながったらしい。また、若い人の夢を応援する、街を活性化するという目的も、当団体のメルヘンというイメージに含まれているそうだ。

人々は何かしらの看板を見てその地にやってくる。砺波市=チューリップ、高岡市=鋳物というように、小矢部市といえばメルヘンのイメージが強いと思われる。実際にメルヘン建築はメディアに取り上げられることもしばしばあり、看板(=メルヘン建築)を見て来てくれた人々にどうやって楽しんでもらうかが大切だそうだ。メルヘン建築自体はお金が落とされる直接的な観光資源ではないが、これに付随する形で様々なものを取り込んでいく必要がある。「街かどコスプレイヤー&痛車コレクション」もメルヘン建築があるから成り立っているとのことだ。



写真 23 コスプレ姿でイベントを楽しむ人々 (©街イベ)

3. 多様な「メルヘン」のかたち

本節では、メルヘン建築以外の「メルヘン」の要素を取り入れた物事について記述する。

3-1. 新メルヘンについて

メルヘン建築は、老朽化・維持費の問題によって存続が厳しい状況にある。令和元年8月

現在で、メルヘン建築である 5 つの保育所、1 つの公民館の解体・売却⁴³が予定されている。荒川保育所・公民館の解体後は、隣接する高齢者健康交流センターを増築して新しい公民館とする。現公民館の跡地は駐車場として利用される予定である⁴⁴。これらの事例から、今後ますます小矢部市からメルヘン建築が減少していくことが見込まれる。

このような状況の中、「新メルヘン」という定義が平成 29 (2017) 年 3 月に発表された。この定義は現在、小矢部市のまちづくり等の事業に反映されている。新メルヘンは、「子どもから大人までが喜ぶような、わくわくするような明るく、かわいい街」と定義づけられている。メルヘン建築が建物としてメルヘンを表現しているのに対して、新メルヘンでは市民の心の中にあるメルヘンを重要視している。

新メルヘンを掲げた主な活動として、平成 29(2017)、30(2018)年におやべメルヘンパーティー⁴⁵が開催された。小矢部市の観光パンフレットやポスター等は、インスタ映え⁴⁶するおしゃれで可愛い雰囲気を持つものに刷新された。加えて、街並みのメルヘン化を行った。その内容として、石動駅南北自由通路の外観をレンガ調に施工して通路内にガス灯をイメージした洋風照明を設置したこと、歩道に蓄光ライトを埋め込んで夜間に光るよう施工したこと、フラワータワーを設置し、おしゃれでかわいい街並みを演出したこと、リニューアルした商業施設の外観をおしゃれな雰囲気に施工したことが挙げられる。

小矢部市における「メルヘン」というイメージの象徴であったメルヘン建築が徐々に衰退しても、なお「メルヘン」のイメージを小矢部市に残そうと様々な活動をしている様子から、「メルヘン」は小矢部市に強く根付いたイメージであることが窺える。

3-2. 小矢部市にある「メルヘン」

メルヘン建築以外にも、小矢部市には名称に「メルヘン」がついた特産品や団体が複数存在する。以下にそれを示す(表 2)。

表 2 名称に「メルヘン」が含まれる小矢部市の特産品、団体、イベント等

区分	名称	内容
団体	おやべメルヘンガイド	観光案内サービス。利用者の希望に合わせて市内全域の案内が可能。
	めるへん劇団	年に 1 回公演を行う。小学生から 50 代までの幅広い世代の人々による総勢 50 名の劇団である。

⁴³ 荒川保育所、松沢保育所、藪波保育所、北蟹谷保育所、東蟹谷保育所、荒川公民館。

⁴⁴ 公民館と保育所解体 荒川地区新公民館整備へ。北日本新聞.2019-06-26.朝刊.p21

⁴⁵ 3-2 表 2 を参照。

⁴⁶ 若者に多く利用されている写真共有 SNS である Instagram 上において、人々から評価、支持を多く得られること。

キャラクター	メルギューくん、メルモモちゃん	小矢部市のシンボルキャラクター。俱利伽羅合戦の際に木曾義仲が用いた「火牛の計」の火牛をモチーフとする。
施設等	道の駅メルヘンおやべ	フードコート、足湯、ドッグラン、地域農産物売場等がある道の駅。フードコートの名称はメルヘン田舎。
	MELL・BILL(める・びる)	石動駅前商工会ビルの愛称。カフェ、多世代交流サロン、シェアオフィスなどが設置されている。
	メルヘン工房	水耕栽培のバラ農園。花束だけでなく、バラ染めの商品なども取り扱う。フラワーアレンジメント等の教室も行っている。
	菓子工房メルヘン	社会福祉法人溪明会による。焼き菓子やパンを製造、販売している。
	メルヘンランドスケープ	埴生地区にある住宅地。地名となっている。
イベント	メルヘンおやべ源平火牛まつり	源平俱利伽羅合戦の際に用いられた「火牛の計」作戦にちなんだ、藁でできた牛を引いてタイムを競うレースを行うイベント。
	おやべメルヘンパーティー	アニメやコスプレをテーマとしたイベント（平成29年）及び、キャラクターを活用したイベント（平成30年）。
特産品等	稲葉メルヘン牛	小矢部市北部に位置する稲葉山牧野で生産されている黒毛和牛。
	メルヘンポーク	富山県内の銘柄豚「とやまポーク」 ⁴⁷ の1つ。
	メルヘン米	有機物入りの「メルヘン肥料」で栽培された米に与えられる商号で、一等米コシヒカリが厳選されている。
	小矢部メルヘンかるた	小矢部市の歴史や祭り、特産物などを盛り込んだ、市内の子どもたちによって考案されたかるた。

これらの中で最も歴史が古いのはメルヘンおやべ源平火牛まつりである。昭和61(1986)年に商工祭のイベントとして行われた源平パレードが始まりとされている。平成2(1990)年にメルヘン市民委員会が発足し、花菖蒲祭り・ミスコンテスト・源平パレードを「メルヘン祭り」として一本化した。そして、源平パレードを源平火牛まつりと位置付けることになった。

この「メルヘン祭り」の生まれた時期は、ちょうど松本正雄氏によるメルヘン建築の建設

⁴⁷ 黒部名水ポーク、立山ポーク、滝寺マーブルポーク、城端ふるさとポーク、メルヘンポーク（小矢部市）、たかはたポーク（砺波市）、おわらくリーンポーク（富山市八尾）、むぎやポーク（南砺市）、地養豚（〃）の総称。

が終わりを迎えた時期である。新しいメルヘン建築をつくる代わりに、市のイベントや特産品へと「メルヘン」がこの頃を境に移行していったことが考えられる。

メルヘンランドスケープは、平成 13(2001)年にメルヘン建築を由来として名付けられた。カタカナの地名は全国的にみてもかなり珍しい⁴⁸。

メルギューくん、メルモモちゃんは公募で名前が決定した。「メル」はメルヘンからきており、メルギュー君のお腹にはメルヘン建築のモチーフがデザインされている。

本来、メルヘン (Märchen) はドイツ語であり、日本語に訳すと童話、おとぎ話、作り話という意味である。表 2 で示した特産品・団体の中には、「メルヘン」という単語の本来の意味を持たせるために、その名称を付けたとは考えにくいものもある。例えば、稲葉メルヘン牛やメルヘンポークなどの特産品は、童話・おとぎ話とは結び付きにくい。これらの特産品の名称に含まれている「メルヘン」は、「小矢部のもの」という意味を持っているのではないだろうか。

加えて、表 2 の特産品・団体等に共通する点は「小矢部のもの」ということのみである。多種多様な物事の名称に使われている「メルヘン」だが、ここにおいては本来の意味である「童話、おとぎ話、作り話」ではなく、「小矢部のもの」という意味合いで使われている可能性が高いと考える。

これらの事例から、小矢部市において近年使用される「メルヘン」は語句の持つ本来の意味を超えて、小矢部市のものであることを示す一つの記号のような役割を果たしていることが窺えた。

4. まとめ・考察

4-1. まとめ

昭和 51(1976)年 3 月に建てられた藪波保育所をはじめとして、故松本正雄元市長は世界の有名建築を参考にした公共建築物を小矢部市内に次々と建てた。これが現在の「メルヘン建築」であり、「メルヘンの街おやべ」のきっかけとなったのだが、当初から「メルヘン」というイメージを掲げていた訳ではなかった。

松本氏によって建てられた公共建築物は、メディアによって度々取り上げられた。昭和 57(1982)-59(1984)年頃は、「異色建築」「名建築シリーズ」などと呼ばれた。昭和 59(1984)年になると、小矢部市が「メルヘンの街」と評されるようになり、小矢部市＝メルヘンというイメージができた。そして昭和 60(1985)年に「メルヘン建築」という言葉が誕生し、現在に至るまで市内外に浸透してきた。

昭和 61(1986)年に松本氏が亡くなり、大家啓一氏が新市長に就任した。大家氏は新しい

⁴⁸ その名も「メルヘンランド」 カタカナ地名誕生へ.北日本新聞.2003-09-06.朝刊.p32

メルヘン建築は今後作らないとしたが、既存のメルヘン建築を観光資源として活用する方向性を示した。

メルヘン建築の建設が終了し、「メルヘン」を名称に含むイベントや特産品、民間施設等が登場し始めた。メルヘン建築が老朽化し維持が懸念される中で、市民の心の中のメルヘンに注目した「新メルヘン」という新たな概念も誕生した。

小矢部市＝メルヘンというイメージのきっかけとなったメルヘン建築そのものは衰退し始めているが、建築物に代わる新しいメルヘンの形が小矢部に次々と生まれている。今後も小矢部市において、「メルヘン」は長く親しまれていくだろう。

4-2. 考察

小矢部は今日メルヘンの街として知られるが、メルヘンというイメージが出来てきた経緯に対しての理解に、人々の意識の間でズレが生じているのではないか。例えば、松本正雄元市長は最初からメルヘンをイメージしたのではなく、メディアから後付けされる形でメルヘンというイメージができたのだが、それを知っている人々はあまりいないように感じられる。市外の人々は特にその傾向にあると思われる。

1-4-5 で、メルヘン建築の時計塔とお寺の五重塔が mismatch だという事例を紹介した。メルヘン建築という名称から、メルヘンチックであり西洋風なイメージを抱きがちだが、もしメルヘン建築という名称が付けられず、「名建築シリーズ」「有名建築組み合わせ」などと呼ばれていたらどうだろうか。もしかしたら、何の違和感も抱かず「名建築同士が並んで立派だ」という感想だったかもしれない。それだけ、人々にメルヘンというイメージが日常生活レベルで浸透しているということだろう。

メルヘン建築に関する先行研究において、全体的に見た集客力は大きくないメルヘン建築が観光資源として話題に上る理由の一つは、メルヘン建築の建設が日本のテーマパークブームと重なったためだと考えている(有馬 2009)。テーマパークの建物は装飾が凝っている非日常的なものが多い。メルヘン建築も同様の特徴を持っており、かつ市内全域に点在しているため、小矢部市全体がテーマパーク的であり、人々に観光資源として認識されたと考える。

メルヘン建築が建てられた当初に一部から出た批判について、先行研究では「次第にメルヘン建築が観光者に訪問されるようになり、その使用者である住民はメルヘン建築への評価を高めていったとみられる」(有馬 2009)としている。確かに、見た目への批判をしていた人々にとっては、批判対象であった見た目という要素が人々から珍しがられ、観光しにやってくる姿を見て、メルヘン建築に対する評価を改めたと思われる。しかし、金銭的な面や使いやすきの面で批判をしていた人々にとって、世間からの注目は必ずしもメルヘン建築に対する評価を改める要素にはならなかったかもしれない。ただ、メディア等による報道や観光客が訪れることは、メルヘン建築に対する批判が減少する一因となっていると思われる。

メルヘン建築は直接的な観光資源ではないが、メルヘン建築があることによってイベントが行われたり、観光客が訪れたりしている。また、メルヘン建築からできた小矢部＝メルヘンのイメージは定着し、メルヘン〇〇といった商品や団体、イベントなども多数展開されている。小矢部において「メルヘン」という語句は、本来の意味ではなく小矢部を表すものになっているように思われる。「メルヘン」という要素は小矢部市にとって、徐々に形成されてきた欠かせないアイデンティティの1つとなっていると考えられる。

おわりに

小矢部市は、メルヘン建築から始まった「メルヘンの街」である。その名の通り、現在の小矢部市において、「メルヘン」は小矢部市を表すのに必要不可欠な要素となっている。批判を受けたこともあったが、約35年間「メルヘン」が受け継がれるに至ったのは、市民によって親しまれてきたからだろう。現在、メルヘン建築自体は衰退しているが、新しい形で「メルヘン」を残し、作っていかうとする動きからは、小矢部市で「メルヘン」という概念が強く根付いていると推定できる。

小矢部市における「メルヘン」のきっかけとなったメルヘン建築が老朽化により姿を消していることは、非常に残念である。しかし、少子化に伴い保育所・学校は減少傾向にあり、維持費の問題からもすべてのメルヘン建築を今後も残していくことは難しいだろう。ただ、一市民として意見を述べるならば、幼い頃から親しみを持っていた各施設や、目を引く外観が特徴で自慢だった母校がなくなるのは寂しいというのが正直なところである。

初対面の方に出身を聞かれ小矢部だと答えると、かなりの高確率で「ああ、メルヘンね」と言われた経験がある。「小矢部市＝メルヘン」というイメージは市内だけにとどまらず、かなり周知されていると思われる。完成当初のメルヘン建築は、小矢部市をよそに宣伝するという効果も発揮していたのかもしれない。

今回の調査で、改めて地元の魅力を振り返ることができた。正直なところ、調査前は「小矢部市に何があるのだろう」と思っていた。だが調査を進めるうちに、身近すぎてそれが魅力であると気づけなかったものが山のようにあった。おやべメルヘンガイドの山崎さんが「小矢部市には何もないという人がいるけれど、こんなに魅力があるところはなかなかない」と話していたのを聞き、魅力はたくさんあるけれど、身近にありすぎて魅力だと気づいていない私のような人が小矢部には多いのではないかと感じた。小矢部市は観光面において大きな可能性を持っている。今後、「メルヘンの街おやべ」の魅力がもっと多くの人々に広がっていくことを心より願っている。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいたすべての皆様にお礼申し上げます。突然の訪問やお声がけをしたにもかかわらず、私の質問にとっても丁寧に答えてくださり、感謝の思いで一杯です。お忙しい中、お時間を割いて私の調査にご協力いただきまして、誠にありがとうございます。今後も小矢部市がますますご発展されますことを、心よりお祈り申し上げます。

参考ウェブサイト

『メルヘンおやべ源平火牛まつり』

<http://kagyu.oyabe.info/> (令和元年12月6日閲覧)

『メルヘンランドスケープ』

<http://www.marchen-ls.jp/town.html> (令和元年12月6日閲覧)

『手作りパンと焼き菓子の店 菓子工房メルヘン』

<https://www.keimeikai.jp/maerchen/> (令和元年12月9日閲覧)

『メルキューくん・メルモモちゃんの紹介』

<http://www.city.oyabe.toyama.jp/shiseijyouhou/gaiyo/1458354908672.html> (令和元年12月6日閲覧)

『めるへん劇団とは』

<http://yop.daa.jp/gekidan/gekidan01.htm> (令和元年12月9日閲覧)

『小矢部のバラ農園 メルヘン工房』

<https://marchenstudio.jp/> (令和元年12月6日閲覧)

『道の駅メルヘンおやべ』

<http://meruhen-oyabe.com/> (令和元年12月9日閲覧)

『小矢部ブランド 稲葉メルヘン牛』

<http://www.city.oyabe.toyama.jp/oyabe.brand/item/item-beef.php> (令和元年12月9日閲覧)

『富山の食材 とやまポーク』

<https://shoku-toyama.jp/product/10256/> (令和元年12月9日閲覧)

『小矢部ブランド メルヘン米』

www.city.oyabe.toyama.jp/oyabe.brand/item/item-marchen.php

(令和元年12月9日閲覧)

『おやべメルヘンかるたの販売について』

<http://www.city.oyabe.toyama.jp/soshiki/kyouikuiinkai/shougaigakusyubunka/hanbai/meruhenkaruta.html> (令和元年12月6日閲覧)

小矢部に息づく武将・木曾義仲

福原 悠平

はじめに

本章では小矢部市に由来する武将である木曾義仲と彼にまつわる故事を由来とした行事について記述する。報告書のテーマを決めるにあたり、筆者は当初小矢部市で行われている「メルヘンおやべ源平火牛まつり」という祭りに興味を持ち調査を始めた。調査を進める中で、祭りのモチーフとなった「火牛の計」や木曾義仲という武将は小矢部市の観光を支える柱の一つであると感じた。しかし一方で、観光としてだけでなく、地域の人々に親しまれる義仲像も見えてきた。そのため本章ではその双方について述べることにする。

本文を全6節構成とし第1節から第2節では木曾義仲や彼にまつわる故事について記述する。第3節から第4節では義仲に関わりの深い史跡や寺院について、第5節から第6節では小矢部市で行われている義仲に関わる行事や取り組みについてそれぞれ述べることにする。なお本文にて記述される場所等は図1に示す。



図1 本文内で記述する主な場所（国土地理院地図より作成）

1. 木曾義仲の生涯

この節では木曾義仲の生涯について時系列順に沿って述べる⁴⁹。

⁴⁹参考資料 東京書籍株式会社『平家物語大辞典』平成22（2010）年。

1-1. 誕生～木曾の地での生活

木曾義仲は久寿元年(1154)年、現在の埼玉県嵐山町付近で生まれたとされる。父親は源義賢、母親は小枝御前であった。木曾(次郎)義仲という名前は元服した後に名乗った名であり、幼名は駒王丸と名付けられた。

生誕の翌年、源氏同士の内紛により、父義賢が暗殺された。実行犯とされる源義平は義仲の甥にあたる人物であった。当時、源氏内ではこのような内部闘争が多かったとされる。母と共に逃げ延びた駒王丸は中原兼遠⁵⁰の庇護下に入る。

兼遠の元に預けられた駒王丸は、兼遠の子供である樋口次郎兼光、今井四朗兼平らと共に木曾の地で過ごす。13歳の時に京都の石清水八幡宮にて元服し、木曾義仲と名乗り始める。

1-2. 義仲の挙兵～上洛

治承4(1180)年、後白河院⁵¹の第2子である以仁王^{もちひとおう}が平家討伐を掲げて挙兵する。源氏一門に平家討伐の令旨を伝達させたが、自らは平家軍に討ち取られる。令旨をうけた義仲は兵を挙げる治承4(1180)年11月または治承5(1181)年1月。

また、源頼朝と敵対していた源行家^{ゆきいえ}⁵²を庇護下においたことから、義仲は頼朝と対立する。頼朝と武力衝突直前の状況下に置かれたが、嫡子である義高を頼朝の娘の婿として差し出すことで衝突を回避する。

同じ頃、北陸諸国で活発化する反平家勢力を抑えるために平維盛^{これもり}⁵³が軍を率いて都を発つ。維盛軍と義仲軍は現在の富山県と石川県の県境に位置する砺波山で衝突する(砺波山、俱利伽羅峠の戦い)。この戦いについては第2節で記述する。

俱利伽羅峠の戦いで兵を多く失い都へ退却した平家軍に対し、義仲軍は追撃を行う。義仲軍の侵攻から逃れるため平家は都を離れ、後白河院は比叡山延暦寺に身を隠すことになる。義仲は比叡山延暦寺に書状を送ることで延暦寺を味方につけ、後白河院を伴う形で都に入る。

1-3. 入京後の義仲

平家が去った後の都では治安維持のための兵力が不足し、略奪が横行するなど著しく治安が悪化していた。義仲は後白河院によって都の守護と平家の追討を命じられた。当初は「朝日将軍」とも呼ばれ、都の治安回復を期待されていたが、治安を取り締まる立場であるはずの配下の武士たちによる略奪が目立ち始めるなど、次第にその立場を悪化させていった。各地の勢力による混成軍だったことや飢饉(養和の大飢饉)による食糧不足もあいまって統制がとれるような状況では無く、貴族たちから要請された暴徒の取り締まりにも対応できなくなっていた。当時を記した日記である『玉葉』^{ぎよくよう}⁵⁴には当時の状況の壮絶さが語られてい

⁵⁰現在の長野県木曾郡及び、岐阜県中津川市の一部を拠点としていた豪族。

⁵¹崇徳天皇(第75代天皇)の弟。

⁵²義仲の叔父にあたる人物。

⁵³平清盛の嫡孫。

⁵⁴平安時代の公家九条兼実の日記。平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて執筆。

る。

また皇位継承問題に際し、義仲は以仁王の息子で、自らが擁した北陸宮を皇位につかせるべきだと朝廷に申し立てた。武士の身分でありながら皇位継承問題に口出ししたとして貴族や皇族の反感を買い、義仲自身の朝廷での立場を悪化させた。この一件で後白河院との対立が深まる。

朝廷との対立の悪化を危惧した義仲は苦境を打開するため平家追討へと向かう。追討に向かった義仲軍は現在の岡山県倉敷市周辺で平家軍と交戦するが(水島の戦い)、義仲軍は敗北する。また後白河院と頼朝が手を組んだと知った義仲は都へと引き返す。

帰京した義仲は後白河院に対し、頼朝と結託したことを抗議した。義仲は頼朝追討の宣旨を出すことを求めたが後白河院はこれを拒否する。頼朝軍が都に近づく中、後白河院は義仲との武力衝突を見据え自らの御所である法往寺に兵を集めた。これに対し義仲軍は法往寺の焼き討ちを執行し、後白河院を捕らえる。

この一件で義仲は後白河院を幽閉、公家の官職を解き、所領も没収した。さらには後白河院と敵対していた公家・藤原基房⁵⁵と手を結び、基房の息子である藤原師家^{もろいえ}を摂政に据えた傀儡政権を樹立する。

1-4. 義仲の最期

寿永3年(1184)年、都に迫る頼朝の軍勢に対し、義仲側には十分に戦えるだけの兵力は残されておらず、西国の平氏と東国の頼朝に挟まれる形となった義仲は平氏との和睦を画策するが失敗する。孤立を深める義仲は自軍を官軍と位置づけるため後白河院に自らを征東大將軍に任命させる。

都に攻め入った頼朝軍から逃げ延びるため、義仲軍は本拠地である北陸に向かうが、現在の滋賀県大津市付近で頼朝軍の追撃を受ける。義仲は今井兼平と共に戦い討ち死にすることを決意するが、兼平は義仲に対し敵兵に打ち取られるよりは自害したほうが名誉だとし、自らがその時間を稼ぐとした。しかし兼平の様子を振り返った義仲は馬が地に脚を取られた際に額に矢を受け絶命する。義仲が討ち取られたことを知った兼平は自ら刀を口にくわえ馬上より飛び降りて自害したとされる。

1-5. 人物評価

木曾義仲は平家との戦いで兵力差を覆した勝利を収めるなど戦の技術には長けていた。一方で都に入ってから義仲は『平家物語』の「猫間」に描かれるように田舎者としての振る舞いや状況をわきまえない稚拙さのため都の人々には野蛮であると蔑まれていたとされる。彼自身の政治的能力の欠如や政治的駆け引きの稚拙さ、また彼を支える臣下の中にそういった能力に長けた文官がいなかったことが彼の都入りからの低迷を方向づけた。また逆賊として最期を迎えたことも後世の義仲の印象を悪化させた。しかし明治以降は素朴な人間性や今井兼平らとの主従の絆があいまって悲劇的英雄として注目された。

⁵⁵ 平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての公卿。

2. 倶利伽羅峠の戦いについて

この節では倶利伽羅峠の戦いについて記述する⁵⁶。

2-1. 倶利伽羅峠の戦い

木曾義仲にまつわる故事の中で最も取り上げられることが多いのが倶利伽羅峠の戦いである。この戦いは寿永2(1183)年5月11日(6月2日という説もある)、現在の富山県小矢部市付近で平維盛軍と義仲軍が衝突した戦である。主な戦場と



図2 倶利伽羅峠の戦い主戦場 (国土地理院地図より作成)

なったのは現在の富山県と石川県の県境に位置する砺波山、倶利伽羅峠である(図2参照)。

この戦いに至るまでの経緯は以下の通りだとされる。寿永2(1183)年4月、北陸で活発化する反平家勢力、義仲軍を鎮圧するために平維盛が出兵する。維盛軍は一時、反平家勢力の勢いに押され後退するが、再度侵攻し現在の福井県南越前町付近で交戦する(火打ち城の戦い)。反平家勢力は籠城戦を仕掛けるが平泉寺長吏斉明⁵⁷が平家側に内通したため守りが崩され城は陥落する。維盛軍は現在の富山県付近へ進軍し、部隊を大手⁵⁸万余騎と搦手⁵⁹万余騎の二手に分け進軍した。これを聞いた義仲軍は5万余騎を率いて出兵する。そのうち1万余騎を源行家に託し、搦手を牽制し、自らは4万余騎を率いて砺波山の北方に陣を構えた。また今井兼平率いる別働隊を維盛軍が陣取った砺波山山中、倶利伽羅峠付近に配した。義仲は日中は小競り合いを繰り返し、その間に別働隊を平家軍の背後に忍ばせた。翌日の未明、別働隊が平家軍を奇襲するのに合わせ本隊も攻撃を仕掛け、逃げ惑う平家軍を谷底(地獄谷と呼ばれている)に突き落としたことで勝利を取めたとされる。またこのときの戦いで平家軍は有力な武将を多く失ったため以後の源平合戦の趨勢を決定づけたともされる。

『平家物語』によると平維盛率いる軍約7万に対し義仲軍約4万という兵力差があった

⁵⁶ 参考資料 『平家物語大辞典』。

⁵⁷ 平泉寺の最高権利者。元々は平家側勢力であった人物

⁵⁸ 敵部隊を正面から攻める部隊のこと。

⁵⁹ 敵部隊の背後、側面から攻める部隊のこと。

とされる。一方で同時代の文献である『玉葉』には維盛軍約3万、義仲軍約5千との記述が残されている。このため両陣営の正確な兵の数については明らかではないが、兵力には大きな差があったと思われる。

また『平家物語』には「深き谷一つを平家の勢 7 万余騎でぞうめたりける」との記述が残されているがこれは誇張された描写とされる。このように倶利伽羅峠の戦いを記した歴史書には誇張表現と思われる描写が多く、戦の実態は十分に解明されていない部分もある。

2-2. 「火牛の計」について

倶利伽羅峠の戦いにおいて義仲が奇襲の際に用いたとされる策が「火牛の計」である。『源平盛衰記』⁶⁰に記述が残されているこの火牛の計は、今井兼平率いる別働隊が奇襲を仕掛けると同時に、角に松明を括り付けた牛を平家軍が陣を敷いていた場所になだれ込ませた、というものである。同書によればその数は400～500頭にまでなげるとされる。



図3 倶利伽羅合戦図屏風（池田九華作）

源平合戦の中でも有名な一幕だが、この火牛の計について同時代を記した『平家物語』や『玉葉』には義仲がこのような策略を用いて平家軍を追い詰めたという記述は残されていない。また火牛の計についての記述が成された『源平盛衰記』は、読み物としての側面が強く、文献としての価値は平家物語に及ばないとされる。『源平盛衰記』には創作された逸話も複数存在するとされ、義仲が行ったとされる火牛の計についてもそうした創作の1つである可能性が高い。

またこの火牛の計とよく似た戦術を用いた武将が中国にいたとされる。中国の歴史書『史記』には紀元前3世紀前半頃の燕の武将・田単が用いた戦術が火牛の計と記録されている。『史記』によれば田単は敵対していた燕との戦いにおいて角に剣を尻尾に松明を括り付けた牛を敵軍に突撃させる戦法を用いたとされる。木曾義仲が行った火牛の計との共通点が多く見られることから、倶利伽羅峠の戦いで語られる火牛の計は田単が行った火牛の計をモチーフとした創作の可能性が高い。この火牛の計は江戸時代の画家、池田九華によって描かれている(図3)。

⁶⁰ 編者不明。応保年間(1161年～)から寿永年間(～1183年)頃の源平の様子を記した。軍記物語。

3. 小矢部市に残る源平合戦の名残

この節では小矢部市にある義仲や源平合戦に関わるいくつかの史跡について記述する⁶¹。

3-1. 巴塚・葵塚

巴、葵両名はともに義仲に仕えた女武将であるとされる。巴は『平家物語』では義仲の侍女として、『源平盛衰記』では幼少期の義仲を引き取った中原兼遠の娘であり義仲とは幼少期を共に過ごした女性として描かれている。『平家物語』では義仲の最後の戦である粟津の戦いに付き添ったとされている。義仲亡きあとは尼となり自分が死んだ後葵塚(写真 2)の近くに吊ってほしいと言い残し 91 歳で没したとされる。



写真1 巴塚



写真2 葵塚

葵という女性に関しては詳しい記述が残されておらず詳細について分からないことの多い人物である。弓術に秀で義仲と共に倶利伽羅峠の戦いを戦ったとされるが、この戦いにおいて戦死したとされている。この 2 人の描かれ方には当時の芸能者としての性質が見られるとする見解もある。

この二人を吊って建てられたものが巴・葵塚(写真 1、写真 2)である。小矢部市石坂地内に現存する二つの碑は雑木林を少し分け入った場所に建てられており、また石碑の周りは木製の柵で区切られ小矢部市によって建てられた立て札が設置されている。二つの石碑は隣り合って建っているわけではなく互いに少し離れた位置に建てられている。

また巴御前と生前親交のあった石黒氏(越中国砺波郡を拠点としていた一族)により巴御前が亡くなった際に建てられたとする巴葵寺の跡地を示す標柱が近くに存在する。この寺は現在焼失し廃寺のため現存せず、残されている記述も不確かなため詳細の把握は困難であると思われる。

⁶¹ 参考資料『平家物語大辞典』

3-2. 源平供養塔(写真3)

小矢部市植生^{ほにゅう}地内にある源平供養塔は倶利伽羅合戦で犠牲になった人々を源平問わず弔うため昭和49(1974)年に市と地元の有志の人々によって建てられた石塔である。合戦があったとされる翌日の5月12日には毎年追悼法要が小矢部市によって執り行われている。また昭和58(1983)年には源平合戦から800年の節目にあたるとして高野山金剛峯寺から管長(宗派の行政を取り仕切る主権者)を招いた大規模な慰霊法要が執り行われている。



写真3 源平供養塔

3-3. 猿ヶ馬場(平家本陣跡、写真4)

前述の源平供養塔の近くには倶利伽羅峠の戦いで平維盛率いる軍隊が本陣を敷いたとされる場所が史跡として残されている。この場で配下の武将たちを招集し作戦会議を行っていたとされる。当時軍議の際に机代わりに用いられたとされる大きな平たい石(軍議石)が残されており、平家側の本陣がこの場所に敷かれていたことの根拠の一つとされる。



写真4 平家本陣跡

3-4. 歴史国道いにしえ街道・源平ライン

上記の3つを含め倶利伽羅峠周辺には多くの史跡が点在している。これらの多くは源平合戦に縁を持つものだが、その他にもいくつかの茶屋跡が残されている。これはこの地が富山県小矢部市と石川県津幡町の間位置し、旧北陸道として加賀藩の参勤交代などに利用されていたためと考えられる。これらの特性を踏まえ、現在旧北陸道は歴史上重要な幹線道路とされ、歴史的・文化的価値を有している道路として国土交通省が定める「歴史国道」に認定されている⁶²。また文化庁が定める歴史の道百選にも選ばれている⁶³。点在する史跡を結び「歴史国道いにしえ街道」や「源平ライン」として整備し、ドライブコースやハイキングコースとして活用している。

⁶² 平成7年(1995)年6月認定 小矢部市桜町から石川県津幡町までの約12.8km区間。

⁶³ 平成8年(1996)11月認定。

4. 埴生護国八幡宮について

この節では木曾義仲に縁の深い埴生護国八幡宮について記述する⁶⁴。

4-1. 概説

埴生護国八幡宮は現在の富山県小矢部市埴生地区に位置する。この一帯は開けた土地だが、社殿は周辺の土地より少し高い台地上の広場（標高約 59m）に建てられ、二万坪の境内を有している。主神は八幡大神⁶⁵で、この八幡宮に縁の深い木曾義仲や前田利常⁶⁶も併せて祀られる。33年に一度、同じく埴生地区内にある若宮山医王院と合同で式年祭（御開帳）が行われる。

本殿（写真 5）、釣殿、幣拝殿の三棟は国の重要文化財⁶⁷に指定されている。また平成 10(1998)年の式年祭に合わせて新たに改築された現在の宝物殿には、木曾義仲の祈願書をはじめとする古文書 45 点が所蔵されており県指定の文化財となっている⁶⁸。

境内には昭和 58（1983）年に倶利伽羅峠の戦いから 800 年の節目として建立された巨大な義仲像が建てられる（写真 6）。人々の寄付によって建立された像であり、騎馬像としても全国有数のものであると言われている。また手水鉢に注いでいる清水は「鳩清水」（後述）の滝から得ている水であり、後述する義仲の祈願にまつわるものであるとされる。



写真 5 埴生護国八幡宮の本殿



写真 6 源義仲像

⁶⁴ 参考資料 埴生護国八幡宮社務所『埴生護国八幡宮略記』平成 10(1998)年

⁶⁵ 応神天皇(第十五代天皇)と一体であり、産業・文化・学問の神など幅広い神格をもつとされる。また源氏が八幡宮を氏神として祀って以来戦いの神としての側面も有する。

⁶⁶ 安土桃山時代末期から江戸初期にかけての武将。加賀藩第二代藩主。

⁶⁷ 昭和 25(1950)年文化財保護法の施行に伴い指定。

⁶⁸ 昭和 45(1970)年指定。

4-2. 歴史

宮縁起によると埴生護国八幡宮は奈良時代の養老2(718)年に現在の大分県にある宇佐八幡宮の御分霊を譲り受けたことに起源をもつとされる。また同じく奈良時代には当時越中の国守であった大伴家持が宝祚無窮⁶⁹、国家静寧を祈願し奉幣を行った。平安時代には俱利伽羅峠の戦いの際、義仲が埴生護国八幡宮に戦勝を祈願し著しい靈験があったとされる。その様子については次項で述べる。

戦国時代には当時の支配階級であった武田信玄や佐々成政⁷⁰といった武将が埴生護国八幡宮に篤い信仰を寄せており、社領や社殿の寄進がなされた。また僧兵といった武力を保持しており現在の埴生地区一帯に有力な武家集団を形成していたと考えられる。江戸時代に入ると埴生護国八幡宮は加賀藩前田家の祈願社となり、徳川将軍家、前田家の病氣平癒祈願、安産祈祷等が行われた。慶長5(1600)年には前田利長により本殿が寄進され、正保3(1646)年には拜殿、幣殿、釣殿の改築が前田家によってなされる。また慶長年間に凶作が続いたため前田利長が埴生護国八幡宮に豊作を祈願したところ靈験著しく、その頃から社名に「護国」がつけられるようになったとされる。

大正13(1924)年には埴生護国八幡宮の社殿全体が国宝に指定され、昭和5(1930)年と昭和6(1931)年にかけて社殿全体の解体、大修理が行われた。これに併せ宝物殿や社務所が設置され、御手洗や防火に用いるために鳩清水の滝から水が引かれた。昭和50(1975)年には鳥居や参道に関わる工事が完了し現在の埴生護国八幡宮の外観が形成された。

4-3. 木曾義仲の戦勝祈願

埴生護国八幡宮には俱利伽羅峠の戦いの際に義仲が奉じたとされる文書が「木曾願書」として残されている。これは義仲が平家軍との戦の前に八幡宮に赴き戦勝祈願を行ったことに由来する古文書である。『平家物語』によれば、埴生に陣を敷いた義仲は社殿を見つけ、地元の人に案内させ尋ねると八幡宮である、と答えたため手書き⁷¹であった大夫房覚明⁷²に命じて戦勝祈願の願書を書かせたとされる。また鎬矢と共に願書を八幡宮に納めたところ、3羽の鳩⁷³が現れ源氏の白旗の上を舞った、と『平家物語』には記されている。また俱利伽羅峠への進軍の途中、義仲軍を水源まで導いたという伝説も残される。この水源が鳩清水の滝とされており、現在の八幡宮の境内にはこの滝を水源とする清水が御手洗鉢に注いでいる。

現在この願書と矢、覚明が記した大般若経を埴生護国八幡宮が所有している。義仲の願書

⁶⁹ 「宝祚」とは天皇の位、「無窮」は永遠、の意。

⁷⁰ 戦国時代から安土桃山時代にかけての武将・大名。

⁷¹ 筆に長け文書を書く役目に当てられていた人。

⁷² 生没年不詳。儒家の家の出身。清盛を「武士の塵芥」と批判したため平家から追われていたところ、義仲に拾われたとされている。

⁷³ 鳩は八幡の神使とされており、吉兆を示すとされている。

は県指定古文書に指定されている。

上記の戦勝祈願の様子を後世に伝えるための行事が「宮巡の神事」として現在に至るまで行われている。詳細は次の節で記述する。

5. 宮巡の神事

この節では埴生護国八幡宮で行われる宮巡の神事について記述する。

5-1. 宮巡の神事について

「宮巡の神事」とは埴生護国八幡宮の秋季例祭で行われる特殊神事のことであり、小矢部市の無形民俗文化財⁷⁴及び、富山県の「とやまの祭り百選」⁷⁵に指定されている。例年秋季例祭は9月に行われており以前は9月15日と日付が決まっていたが、行事の進行に多くの人手が必要であることから、近年は人が集まれるようにと9月10日以降の日曜日に行われるようになった(令和元(2019)年は9月15日)。埴生八幡宮の宮司・埴生雅章氏によると、由来について一般的に言われているのは寿永2(1183)年、倶利伽羅峠の戦いの前に木曾義仲が埴生護国八幡宮で戦勝祈願を行い平家軍に勝利した霊験にあやかったものであり、また同戦を偲び同時に地域の繁栄を祈る神事、とされる。一方他の説として、以前別の場所にあった埴生護国八幡宮を現在の場所に移動させる際、埴生護国八幡宮に収められていた宝物等を人々が列を為しながら運んだという言い伝えをもとにした神事である、という話もあるようだった。しかしこの説に関しては不確かな点が多くまたこの話をしていた方がすでに亡くなっていることから、詳細を調べることは難しいと思われる。

またこの宮巡の神事に関しての文献は少なく、記されている情報も限られているため、正確な起源について把握することは困難だが、埴生氏の話によれば江戸時代から伝わる神事である、とのことであった。

5-2. 神事の様子

筆者は令和元(2019)年9月15日(日曜日)に行われた秋季例祭及び宮巡の神事を見学した。秋季例祭は当日の午後2時から始まり、例祭式が行われた後、午後2時半ごろから「浦



写真7 浦安の舞の様子

⁷⁴ 昭和52(1977)年指定。

⁷⁵ 「富山の文化財百選」事業の一環。富山県教育委員会選定。平成18(2006)年指定。

安の舞」⁷⁶が奉納された(写真 7)。この「浦安の舞」は埴生護国八幡宮の秋季例祭では地元の女子児童 6 人によって演じられていた。そのためこの際用いられた装束は年少者用に製作された略装束であると思われる。また音楽はその場で実際に演奏されている訳ではなく音源 (CD に録音された音楽をラジカセで再生している) が用いられているようであった。その後神輿の奉納を挟み再び浦安の舞が演じられ、午後 3 時半より宮巡の神事が執り行われた。

宮巡の神事は男たちが隊列を組み社殿の縁側を練り歩いたあと社殿に駆け込むという神事である。先頭で隊列を率いるのは埴生護国八幡宮の氏子から選出された長老 2 人である。埴生氏によるとこの 2 人の長老は 65~70 歳前後の元気な人、かつ埴生護国八幡宮と関わりのある人(行事への積極的な参加など)が選ばれるとの事だった。この選出に八幡宮側は少し関与するが、基本は氏子の中で話し合っで決められると話された。長老の後続には小学生の男子児童が十数名(令和元年度は 10 人)、その後ろに武者の甲冑姿の青年が 5 名続き隊列を構成していた。この隊列に参加していた児童は地元の石動小学校に通う生徒であるらしく、甲冑姿の青年は地元の青年団から選ばれて参加するとの事だった。この長老、青年、児童という隊列の構成には、祖父、親、子供の 3 世代を模すことで一族の繁栄やその延長線上にある地域の永続的な発展という願いが込められているとのことであった。

長老の 2 人は烏帽子と格衣^{かくえ}を身に纏い、先頭に立つ 1 人が柄の長い御幣を持ち、もう 1 人が通常の御幣を携えている。先頭が持つ御幣の先端付近には黒地に赤丸模様が描かれた板が取り付けられていた。これは義仲を象徴するものとされている。続く児童たちは上半身に白色、下半身に紺色の袴を身につけており、手にした木箱には埴生護国八幡宮所蔵の古文書が封入されているとのことだった。最後尾に位置する 5 人の青年団は武者の甲冑と兜を身につけ腰には刀を差し、手には柄の長い刀を持っている。埴生氏の話によると彼らが身につけている甲冑と兜は、以前は埴生護国八幡宮の宝物庫に所蔵されていたものが神事に用いられていたが何回も使用するなかで次第に破損が目立つようになり、平成 24 (2012) 年に小矢部市から補助金を得て甲冑を新調したそうである。一方、兜は補修が可能であったため地元の有志の人々による手直しが行われ、現在(令和元(2019)年)に至るまで使い続けられている、と話していた。

隊列を組んだ男たちは埴生護国八幡宮の社殿の左側(撮影者側から見て)に待機する(写真 8)。埴生護国八幡宮の拝殿の中でほら貝が吹かれ、太鼓や笛による演奏が始まると隊列はゆっくりと歩き出し始める(写真 9)。このとき隊列のリズムをとる役目を担うのは最後尾に並ぶ武者姿の青年たちだった。彼らが手に持った鉾^{ほこ}や弓で社殿の縁側を一回叩くたび、それに合わせ隊列が一步前に進むという具合であった(リズムの主体は鉾で叩く音だと思われる)。隊列は進み待機していた左端から拝殿の前を通り右端に到達したところで U ターンし、来た道を引き返すように再度進み始めた。当初筆者は社殿の周りを縁側に沿って歩き、元の場所に戻ってきたところで一周と数えるイメージを持っていたが、実際には社殿の縁側をコ

⁷⁶ 巫女神楽の 1 つ。昭和 15(1945)年に成立。

の字型に左端から右端まで歩いたらそこで一周と数え、右端から左端へと戻ってきたらまたそこで一周と数える、というものだった。隊列はその後、青年団の5人がとるリズムに合わせてながら20分ほどかけてゆっくりとこの行程を繰り返す、7周半したところで一度歩みを止めた。長老2人と男子児童10人が拝殿の中に揃った後、叩くペースを上げた太鼓に合わせてるように武者姿の青年たちが腰に携えた刀を抜き、声を上げながら拝殿の中に駆け込む様子が見られた(写真10)。



写真8 隊列の待機の様子



写真9 隊列の進行の様子



写真10 武者姿の青年が駆け込む様子

5-3. 神事について

宮巡りの神事について埴生氏に伺ったところ、この神事の運営や実行には地元の多くの人々が関わっており、それぞれの役割分担は地域の人々が中心になって進めていると話された。隊列に参加し神事を執り行う人、その際音楽を演奏する人、また隊列の状態(今何周目なのか、隊列が乱れていないか等)を確認する人、全体の進行状況を確認する人など裏方も含め地元の人々の参加によって成り立っている神事であるとの事であった。また音楽の演奏は地元の人々で事前に練習が何回も行われるようだが、隊列の行進などのリハーサルは行われないとのことだった。隊列に初めて参加する子供がいる場合は事前に多少レクチャーが行われるそうだが、それ以外は本番当日まで行われないと話された。またこれらの行事に若い人々を取り込んでゆくことが神事の存続には欠かせないとのことだった。

5-4. 観光としての側面

筆者がこの宮巡りの神事に関する情報を初めて目にしたのは小矢部市が発行する観光案内のパンフレットであった。ただ実際に現地に赴いてみて、確かに多くの人々がいたが、彼らの

多くは観光客では必ずしもないように思われた。埴生護国八幡宮の秋季例祭では浦安の舞や宮巡の神事で地元の子供たちの参加が欠かせないものとなっている。現地を訪れている人は彼ら彼女らの保護者、親族と思われる方々の姿が多いように感じられた。

一方で埴生氏によるとケーブルテレビや北日本新聞など地元メディアの取材は来ているようであった。また前年はNHKが取材に来ていたとも話していた。実際、機材を用いて神事の様子を撮影している報道関係者の姿も見られた。

観光としての側面について伺ったところ、宮巡の神事を見に来る方は宮巡の神事や浦安の舞に参加する子供たちの親御さんが多くそれは前から変わらない、と話していた。また義仲だけでなく歴史に興味関心がある人(年配の方、特に女性が多)や県外から団体の観光客(この神事自体を目的としているわけではない)も見に来ることがあるとのことだった。

6. 義仲に関する取り組み

この節では小矢部市で行われている木曾義仲に関する取り組みについて記述する。

6-1. メルヘンおやべ源平火牛まつり

メルヘンおやべ源平火牛まつりの「火牛」とは木曾義仲が倶利伽羅峠の戦いにおいて平家軍を追い詰めたとされる火牛の計(第2節を参照)に由来する。同様に名称の「メルヘン」とは祭りが行われる小矢部市が銘打つ「メルヘンの街おやべ」という観光戦略に由来するものである。

平成8(1996)年木曾義仲の故事をモチーフとした「源平火牛まつり」が始まる。平成11(1999)年には祭りのイベント性を高めるために「火牛の計レース」(後述)が企画された。平成25(2013)年には小矢部市をより広くPRするため「源平火牛まつり」から「メルヘンおやべ源平火牛まつり」へと改称され現在の形に至る。伝統的な祭りとは異なり、観光的な要素が強い祭りである。

筆者は祭りが行われた令和元(2019)年7月27日土曜日に現地である小矢部市を訪れた。しかし当日は台風6号の接近による悪天候に見舞われたため、安全を考慮しメインイベントである火牛の計レースは行われなかった。それでも地元の有志の方々によって行われている観光ガイドによるツアーに参加させていただき、話を伺うことができた。

メルヘンおやべ源平火牛まつりは越前町商店街付近⁷⁷(図15)で行われる。開催日時は毎年7月の最終土曜日(令和1(2019)年は7月27日)とされている。祭り当日には商店街に面

⁷⁷ どじょうのかば焼きを提供するまごま蒲鉾店や和洋菓子を扱う五郎丸屋といった店が立ち並ぶ。

する道路に出店が立ち並び、商店街の交差点付近に設置されるイベントステージではキッズダンスや市民団体によるフラダンスの発表など多彩な演目が催される事になっていた。

またメインイベントとなる「火牛の計レース」は義仲が用いたとされる火牛の計をモチーフにしたイベントで、わらで作られた牛(写真 11)を曳き、そのタイムを競うというものである。レースには大人の部(高校生以上)と子供の部(小学1～3年生の低学年の部と小学4～6年生の高学年の部に分かれ)があり、それぞれの部で用いられるわら製の牛の重量が異なっている。大人の部ではその重量は700kg、子供の部はその約半分ほどであるそうだ。またわら製の牛の表面はわらで覆われているが、骨組みには鉄が用いられており、製作には多額の費用がかかるため、数年に一度補修を行うことで維持・管理しているそうである。

また大人の部と子供の部でそれぞれ2台ずつ用意されるわら製の牛の胴体には赤と白の帯が巻かれている。これは赤が平氏、白が源氏を表しているとの事であったが、チームに分かれてタイムを競うものではなく、あくまで源平合戦に由来するイベントであるから分けている、ということであった。

火牛の計レースの会場となるのは越前町商店街(県道32号)である。大人の部と子供の部(低学年の部)では4人一組で、子供の部(高学年の部)では3人一組で台車に乗せたわら製の牛を押す形でコースとなる越前町通りを走ることになっている。参加者は子供の部では市内や県内からの参加者がほとんどを占め、主にスポーツ少年団の参加が多いとのことだった。一方、大人の部では県外からの参加者も数チームあるらしく、神奈川県から参加しているチームが前年まで4連覇している、との話を聞いた。令和元年度は大人の部24チーム、子供の部30チームが参加する予定であった。またレース運営に現地の中高生がスタッフとして携わっているのを現地で見た。

また火牛の計レースが行われるにあたり安全祈願祭が埴生護国八幡宮で執り行われるそうである。この祈願祭はレースの関係者が集まり行われるが、レースでの引き手は参加せず、あくまで運営に関わる人が参加する。安全祈願祭は当日の昼頃行われ、その後レースの準備



図4 越前町商店街(黒線部分)



写真11 火牛の計レースで用いられる
わら製の牛

(設営など)が始まるが、準備には手間がかかるらしく、当日の昼からレースが行われる夕方にかけては多くの人々が動くときれる。

現地を訪れてみて感じたことは、雨天にもかかわらず老若男女幅広い世代の人が集まり、賑わいを見せていたことである。また火牛の計レースを見に来た、という県外からきたアメリカ人男性とも遭遇し、知名度はそれなりにあると思われる。当日は雨天だったが例年通りならばもっと多くの人々が越前町商店街付近に集まり賑わっている、との話を観光ガイドの方々から聞くことができたため、地元で受け入れられている祭りであると感じた。

6-2. 大河ドラマ誘致活動

大河ドラマ誘致活動に関しては小矢部市の観光振興課の船見幸広氏から話を伺った。

小矢部市は義仲が全国に名乗りを上げた倶利伽羅峠の戦いが行われた地であることから義仲を取り上げた大河ドラマ誘致活動に力を入れている。もともとは平成 19(2007)年に当時の長野県知事と富山県知事との間で両県の交流促進を目指す活動に端を発し、両県に深く関わりのある武将である義仲を交流の目玉とし、義仲を前面に押し出した活動として義仲の生涯を描いた大河ドラマの誘致活動を始めた、とのことだった。本格的な誘致活動は平成 23(2011)年に始まり、令和元(2019)年現在、富山県と長野県だけでなく、石川県や埼玉県、滋賀県、神奈川県、6 県 35 市町村 41 自治体で「義仲・巴」広域連携推進会議が組織され、連携して誘致活動に取り組んでいる。

大河ドラマ誘致にあたり平成 21(2009)年に富山県・長野県が作成した資料をみせてもらった。資料には義仲の幼少期から木曾の地での生活、挙兵から倶利伽羅峠の戦いを経て、都での朝廷や頼朝との確執から栗原の戦いでの最期といった主なストーリー構成の他、ストーリー構成に沿った全 50 回分のタイトルや各話あらすじの原案も試案として示されていた。同年、この資料を携え東京渋谷の NHK 放送センターに直接売り込んだ際には、当時の NHK のドラマ番組部長であった山本氏から「ドラマ化できるか研究している 1 つの題材」、「視聴者に受け入れられるかという観点で研究を進めている。長い目で見て欲しい」という反応を得たらしい。

小矢部市での聞き取り調査を行った結果、義仲は主に中高年を中心に受け入れられており、大河ドラマ誘致に関しても好意的な意見が見られた。誘致活動の一環として平成 23(2011)年から始められた署名活動については市内だけでなく名古屋や大阪といった都市に赴き署名活動が行われ、令和元年末までに約 26 万人の署名が集まったとされる。この数値は令和 2(2020)年から新たに放送が始まる大河ドラマ「麒麟がくる」と同じ値である(約 26 万人、京都府大山崎町観光サイト参照)。

大河ドラマを要望する声も多い一方で、大河ドラマの候補は各地から集まっているため、現時点ですぐに実現するのは難しいのではないかと、という意見も見られた。また歴史的に見て義仲の活躍した時期は短いため、実際にドラマ化するにあたって内容が薄くならないかということ懸念する声も聞かれた。

また船見氏によると、若年層にも関心を持ってもらおうと義仲を題材にしたアニメーションやイラストの制作を試みたことが以前あったが、予算の都合上、アニメーションの制作は断念され、イラストとオーディオドラマの制作⁷⁸に留まったとのことだった。

6-3. マスコットキャラクター

小矢部市には「メルギューくん」と「メルモモちゃん」というシンボルキャラクターが存在する。これらの活動についても船見氏に話を聞いた。メルギューくんとメルモモちゃんは木曾義仲が行ったとされる火牛の計と小矢部市の観光戦略の一つであるメルヘンをモチーフにしたキャラクターであるとのことだった。公式プロフィールによればメルギューくんが生まれたのは火牛の計レースが始まった平成 11(1999)年であり、メルモモちゃん生まれたのは倶利伽羅源平の郷殖生口⁷⁹がオープンした平成 14(2002)年とされる。一方で平成 21(2009)年に「小矢部市のシンボルキャラクター及びキャッチフレーズの使用に関する要綱」が定められたことから、本格的に活用が始まったのは平成 21(2009)年ごろだと思われる。

またこれらは平成 27(2015)年に行われた「ゆるキャラグランプリ」にて全国約 1,700 体のキャラクターの内、5 位にランクインした。その後、平成 28(2016)年と平成 29(2017)年に 2 年連続でフランスのパリで行われたジャパンエキスポに参加した。その際には小矢部三大祭である「石動曳山祭」、「おやべの獅子舞祭」、「津沢夜高あんどん祭」の様子を映像で紹介したり実際の祭りで使われる法被や拍子木の展示・体験を通して小矢部市の伝統文化、行事の魅力を海外に発信してきた、と話された。

7. まとめと考察

本章では前節まで主として小矢部市における木曾義仲の在り方について記述してきた。今回の調査は故事の観光利用をテーマとし、小矢部市の観光戦略の中で義仲にまつわる故事がどのような役割を果たしているのかを当初調査の目的としていた。小矢部市の観光振興課の方への聞き取り調査の中で分かったことは、義仲を主軸とした大河ドラマの誘致活動が行われていることや義仲が行ったとされる計略が市のマスコットキャラクターのモチーフとなっていることから窺えるように、外に向けた観光面において義仲や彼にまつわる故事が果たしている役割は大きいということである。小矢部市内に点在する史跡を繋ぎ、ハイキングコースやドライブコースとして整備した歴史国道もその一端を担っている。また小矢部市のもう一つの観光戦略の柱である「メルヘン」との組み合わせがメルヘンおやべ

⁷⁸ 平成 23(2011)年制作。

⁷⁹ 殖生護国八幡宮と隣接する施設。倶利伽羅峠や木曾義仲の案内所兼休憩所。

源平火牛まつりやマスコットキャラクターであるメルギューくん、メルモモちゃんに見られた。聞き取り調査を行った結果、メルヘンとの兼ね合いの中で義仲に関わる故事も観光の目玉として重視している印象を受けた。

一方、調査を進める中で、埴生護国八幡宮での宮巡の神事のように、観光としての側面ばかりでない義仲に関わる行事の存在を知った。この神事は義仲の戦勝祈願の様子を現在に伝えるものとして地元の人々が中心になって行っており、観光面が重視されているわけではない。筆者は宮巡の神事が行われる当日現地を訪れたが、訪れている人々の中で観光目的と思われる人は少なく、大半は地元の人々であった。それでも神事は活気をもって行われているように思われた。このように観光としてではなく地元の交流の一環として義仲にまつわる行事が取り入れられている事例があることも調査の中で見えてきた。

また調査を始める時点から想像していたことではあったが、義仲に対する興味関心の度合いには世代によって差があるようであった。若い世代の人々よりは中高年の人々の方が義仲に対する興味関心が高いように思われた。若い世代の人々にも興味をもってもらおうとイラストやオーディオドラマの制作が行われているが浸透しているかという点については疑問が残る。主観ではあるがメルギューくんやメルモモちゃんのようなマスコットキャラクターの方が若い世代の人々にも親しまれやすいのではないかと感じる。

義仲の故事に基づいた観光戦略を対象に調査を始めたが、調査を進める中で観光面だけでなく地元の人々に親しまれる義仲像が見えてきた。また宮巡の神事では地元の人々同士の交流が、メルヘンおやべ源平火牛まつりでは地元の人々と観光に来た人々との交流が見られた。この章で記述した義仲にまつわる行事はその一つ一つが人々の交流の機会となっていることは確かである。今後も幅広い世代、地域の人々の交流の場として継続し発展していくことが望まれる。

謝辞

今回、このような形で調査報告書をまとめ上げることができたのは偏^{ひとえ}に調査に協力していただいた皆様のおかげです。特に埴生護国八幡宮の埴生雅章氏、小矢部市観光振興課の船見幸広氏、小矢部市観光案内所の皆さんにはお世話になりました。慣れない聞き取り調査で申し訳ありませんが皆様のご厚意により無事調査を終えることができました。この場を借りまして再度お礼申し上げます。本当にありがとうございました。

小矢部ブランドの現在

小倉 和裕

はじめに

小矢部ブランドについてはじめに知ったのは稲葉メルヘン牛の存在を知ったときだった。石動駅近くのカフェを訪れたとき、小矢部市には稲葉メルヘン牛、メルヘンポーク、おやべ火ね鶏というブランド肉があり、牛豚鶏 3 種の生産がされているのは珍しいのではということを知り、興味を持った。中でも稲葉メルヘン牛は「小矢部ブランド」に認定されたばかりでイベントも行われたと知り、メルヘン牛についての調査を開始した。後に小矢部ブランド自体がどういうものかを調べ、併せて気になったブランド品についても調査をして本章をまとめるに至った。

以下では調査した小矢部ブランド 3 品目についてと、課題について述べる。

1. 小矢部ブランドの概要

1-1. 小矢部ブランドとは

小矢部市では、地域活性化や人口増加、まちづくりといった課題に取り組むため、様々な施策や方針を示した行政運営の最上位計画として、10 年単位で実施される総合計画を打ち出している。平成 21(2009)年から始まった第 6 次総合計画にて積極的に対応すべき問題に対し「重点プロジェクト」を設定している。重点プロジェクトの 1 つである「地域産業活性化プロジェクト」では、小矢部ブランド認定制度として「小矢部ブランドトライアル制度」が創設され、ここで小矢部ブランドの確立が謳われている。小矢部市の名産品、特産品などをブランドとして認定し、小矢部市の PR や地域活性につなげるのが狙いだ。施策の内容としてはインターネットを使った情報発信、道の駅を活用した PR や販売促進などが挙げられている。平成 22 (2010) 年に初めて「メルヘン米」「小矢部の米 (my) たまご」「バラの切り花」「ニシンの糞漬け」「みのわツイン瓦」が小矢部ブランドに認定されて以来、計 17 の地域産品が小矢部ブランドとなっている。

1-2. 小矢部ブランド認定基準

小矢部ブランド認定の際には以下の観点で審査される (表 1)。審査のポイントは「基本的な視点」「小矢部らしさに関する視点」「品質の維持・向上に関する視点」「地域産品等の特長・個性に関する視点」「認定後の広報活動に関する視点」と大きく 5 つに分かれている。

表1 小矢部ブランド認定基準

観点	詳細
基本的な視点（総合性）	<ul style="list-style-type: none"> 小矢部ブランド認定品は、消費者が産地である小矢部市を連想することができる地域産品等であり、かつ、その販売促進活動を通じて小矢部市の知名度の向上につながる地域産品などである。
小矢部らしさに関する視点（関連性）	<ul style="list-style-type: none"> 小矢部市の土壌や水などの自然環境から生まれたもの。 小矢部市で生まれた素材や資材などを活用しているもの。 小矢部市で培われた伝統技術や調理法が活用されているもの。 小矢部市の歴史、文化などに根差したストーリー性があるもの。
品質の維持・向上に関する視点（継続性・信頼性）	<ul style="list-style-type: none"> 継続して生産又は製造されている実績がある。 法令遵守、品質管理の面など消費者の信頼性を確保する取組がある。 品質の高さを保証する客観的な事実（受賞歴等）がある。
地域産品等の特長・個性に関する視点（優位性）	<ul style="list-style-type: none"> 他の類似産品等と比較して特長（価値）や機能の面で優位性がある。 特徴のあるデザインやネーミング等により、他の類似産品等と差別化する工夫が認められる。 知的財産権の取得によって保護が図られている。
認定後の広報活動に関する視点（広報計画）	<ul style="list-style-type: none"> 消費者に対して広報宣伝活動を行い、小矢部市のイメージ向上につながる取組または計画がある。 話題性のある事業を展開し、小矢部市に関する情報発信に寄与する取組又は計画がある。

（「小矢部ブランドホームページ⁸⁰」より作成）

1-3. 小矢部ブランド認定品

平成 30(2018)年度時点で小矢部ブランドに認定されている 17 産品を、認定年度順に示す（表 2）。

⁸⁰ 小矢部ブランドホームページ <http://www.city.oyabe.toyama.jp/oyabe.brand/>

表2 小矢部ブランド認定品

認定年度 (平成)	名称	認定事業者	概要
22	メルヘン米	いなば農業協同組合	小矢部市が「メルヘンのまち」と呼ばれることにちなみ、有機物入りの「メルヘン肥料」で栽培された米。
22	小矢部の米 (my) たまご	有限会社津沢養鶏	白身の甘さと黄身の粘りが特徴。「とれたて小矢部たまご」「とこたまα」「αプラスたまご」という商品名で販売される。
22	バラの切り花	ローズエンドウ	足湯やドライフラワーのほか、道の駅メルヘンおやべでは足湯にも利用される。
22	ニシンの糍漬け	田悟農産	伝統食であるニシンのぬか漬けに糍を加えることで風味が増し減塩に成功。自家製の糍、米ぬか、唐辛子でじっくりと熟成される。
22	みのわツイン瓦	みのわ窯業株式会社	県内産の粘土から作られ、耐圧性・断熱性に優れる北陸に適した瓦。
23	縄文のさといも	いなば里芋生産組合	化学肥料や農薬を抑え堆肥などを活かした土で生産される里芋。商品名は縄文時代の遺跡「桜町遺跡」をイメージ。
25	松永うの花農園の りんご	農事組合法人 松永うの花農園	「ふじ」を中心に「津軽」「紅玉」などを販売。直売店では100%ジュースやジャムなどが並ぶ。
25	宮島峡産赤かぶ漬 け	宮島峡産赤かぶ 生産組合	無農薬で栽培され、加工にも着色料などを使わない安心の赤かぶ漬け。やや甘めの味付けで酒のつまみだけでなく子供も食べやすい。
25	富山県で採れた美 味しい蜂蜜	有川花蜂園	レンゲ、アカシア、サクラなどから作られる様々な蜂蜜で、それぞれ違った香りや味が楽しめる。
25	おやべホワイトラ ーメン	小矢部市商工会 青年部	白い豚骨スープに肉味噌のほか小矢部の食材が使われたラーメン。市内飲食店だけでなく地域のイベント出店などもされる。

25	おやべ火ね鶏	株式会社 白川産業	肉質改善された親鳥の肉で、こりこりと歯応えのある食感が特徴。ウインナーなどの加工品が販売されている。
26	アイリスファームの特別栽培米	農事組合法人金屋本江アイリスファーム	環境にやさしい「エコファーマー」による、農薬と化学肥料を6割減らし有機肥料で栽培した特別栽培米。
27	源平さくら塩	株式会社ハートケア	八重桜の花びらを富山湾の海洋深層水の塩で漬け、乾燥させ粉末にしたもの。花びらの選別や加工などはすべて手作業で行われる。
28	完熟鶏糞堆肥「ぐるるパワー」	合同会社ぐるる富山	鶏から出る糞を土壌の微生物に分解させ完熟発行された、田畑になじみやすく臭いも少ない堆肥。
30	小矢部産ハトムギ	いなばハトムギ生産組合	生産量、作付面積ともに日本一となった小矢部産ハトムギ。定番のはとむぎ茶やシリアル、スキンケアオイルなどの商品が販売されている。
30	小矢部産ヤーコン	いなばヤーコン倶楽部	生だけでなく煮物や漬物など様々な食べ方ができるヤーコン。ドレッシングやヤーコン茶などの商品開発がされている。
30	稲葉メルヘン牛	稲葉メルヘン牛流通推進協議会	小矢部市北部の稲葉山牧野で繁殖・肥育の一貫生産がされている黒毛和牛。良質な脂身と濃厚な赤みが特徴。

(「小矢部ブランドホームページ」より作成)

2. おやべ火ね鶏

本節の記述は、おやべ火ね鶏の小矢部ブランド認定事業者である株式会社白川産業の荒井千尋さんからいただいた資料をもとにしている。

2-1. おやべ火ね鶏とは

一般的に親鳥は産卵開始 1 年半ころから毎日産卵をしなくなってくる。こういった親鳥は「廃鶏」と呼ばれ、ドッグフードや加工食品にすり身で使用される。福井の「純けい」や九州の「種鶏」のように、親鳥を食肉として食べる文化はあるものの、市場に出回る廃鶏はごく一部だ。おやべ火ね鶏は、この親鳥にハーブエキスを配合した飼料を与えて肉質改善さ

れた親鳥で、親鳥のもも肉を指す「ヒネドリ」に倶利伽羅峠の戦での「火牛の計」をかけたネーミングとなっている。写真1、写真2（筆者撮影）は株式会社白川産業から販売されている火ね鶏商品である。



写真1 コリッとチキン プレーン



写真2 ビールの鶏

2-2. ブランド化までの経緯

2000年代中頃に各地でご当地グルメや地域おこしブームが起こった。富山県内で供給量の多い肉牛、豚、鶏卵用鶏の中からご当地グルメができないかと考えられた。そのなかで富山県内で約8割のシェアを誇る鶏卵から、養鶏の町としての小矢部市の特徴を生かし、親鳥で何かできないかと思案された。

親鳥は食用の若鶏より長く飼育するため、脂肪が黄色みがかかり、身は赤く弾力が強くなる。硬い肉質は現代では好まれにくく、また肉の水分量の少なさからジューシーさがでないため、一般的な鶏料理には不向きとされた。しかし、親鳥の硬い食感を「コリコリ新食感」と謳うことでプラスのイメージに変え、「硬いけどうまい」というテーマでの商品開発がなされた。

平成22(2010)年12月に小矢部市産親鳥特産化について協議され、平成23(2011)年5月には市内精肉店や養鶏業者、飲食店経営者などを中心に「おやべ火ね鶏協議会」が発足された。親鳥をパティに使用したハンバーガーを研究・レシピ化し市内ご当地グルメ研究開発事業に応募するも、後の「おやべホワイトラーメン」に敗れ、ご当地グルメとはならなかった。同年7月に市内で行われる「源平火牛祭り」で「火ね鶏バーガー」と「親鶏炭火焼き」を販売したところ、サブメニューであった炭火焼きが好評となり、手軽さからメニュー化できな

いかと思案される。平成 24(2012)年 12 月に「おやべ火ね鶏協議会」は「おやべ火ね鶏コリコリ隊」に改名し、一般の会社員なども集まり火ね鶏を広めるべくボランティア活動を開始する。小矢部市内の飲食店へ精肉のサンプルの提供、火ね鶏を使ったレシピの考案、試食会などが行われた。これによって飲食店は新メニュー開発の場を得られ、おやべ火ね鶏を食べられるお店としてコリコリ隊が SNS で紹介することで、火ね鶏だけでなく飲食店の宣伝にもつながったという。

平成 24(2012)年には市内 3 社ある養鶏業者のうち、ブランド卵の生産に力を入れている「有限会社床鍋養鶏」と親鳥のブランド化を進めた。親鳥に与える飼料にシナモンやオレガノといったハーブエキスを配合することで、肉の臭みがとれ肉質が改善されたほか、鳥に虫がつきにくくなり健康が保たれやすくなるという副次的な利点もあった。こうして平成 25 年に小矢部ブランド認定を果たし、平成 30 (2018) 年からは小矢部市のふるさと納税の返礼品としても名を連ねた。

2-3. ブランド化を受けて

おやべ火ね鶏が小矢部ブランドに認定されて数年経つが、認定後の様子についてうかがった。

前項でも触れたが、平成 30 (2018) 年におやべ火ね鶏は小矢部市のふるさと納税商品のひとつとなった。メルヘン米やハトムギ茶などの小矢部ブランドや、小矢部の特産品のひとつともいえるハーブを使ったハーブティーといった商品とともに並ぶようになった。ブランド化された親鳥はなかなかないということもあり、県外からの注文は増えているようだ。また、おやべ火ね鶏の認定事業者である株式会社白川産業が展開する「肉の白川」の店頭や、源平火牛祭りに出店した際の販売量も大幅に伸びていることから、徐々におやべ火ね鶏が浸透してきていることが実感できるという。

しかし、おやべ火ね鶏がブランド化されたことで親鳥自体のイメージアップにつながったり、おやべ火ね鶏が格段に認知されるようになったりしたわけではないようだ。おやべ火ね鶏の開発にあたって連携した市内の養鶏業者「有限会社床鍋養鶏」では、全ての鶏に与える飼料にハーブエキスを配合するようになった。また、養鶏場からでる鶏糞は市内の米農家に提供され肥料として活用されるといったように、地域の農産物や畜産物のつながりが深まったことが感じられるようだ。地産地消を目指し地元の産品を取り扱おうとする飲食店も増加し、市内では 13 店舗、ほか県内では 3 店舗でおやべ火ね鶏が食べられるようになっているという。

ただ、おやべ火ね鶏は硬めの食感が売りのため、高齢者が多い小矢部市において家庭での料理にはなかなか向かないという。より若い世代からの支持を集めることを目標に、今後は学校給食で子供が食べられる機会を増やしていくことが考えられている。おやべ火ね鶏コリコリ隊では、おやべ火ね鶏が「B 級グルメとして地域に根付いた食材になる」ことを目指している。小矢部市内はもちろん県内でも認知度が向上し、家庭でおやべ火ね鶏が食べられ

ようになることが期待されている。各市町村でブランド品が次々と生まれているなかで、消費者がブランドの価値や意義を実感できないと購入やリピートには至らないため、小矢部ブランド自身をもっと育ち、広く認知されるようになる必要があるとしている。

3. 稲葉メルヘン牛

3-1. 稲葉メルヘン牛とは

稲葉メルヘン牛は、小矢部市北部の稲葉山にある稲葉山牧野で生産されている黒毛和牛だ。牛の生産は繁殖を行った後、肉牛となる仔牛を別の肥育地に移して育てるのが一般的だが、稲葉山牧野ではこの繁殖・肥育を一貫して場内で行っている。繁殖・肥育の一貫生産によって、仔牛の移送の際にかかるストレスがなくなり柔らかく良質な肉質となる。この和牛のうち、歩留等級⁸¹A、B、肉質等級⁸²3 等級以上のものが稲葉メルヘン牛と認定される。稲葉メルヘン牛は平成 22(2010)年に商標登録を受け、平成 30 (2018) 年に小矢部ブランドとして認定された。

3-2. 稲葉山牧野

稲葉山牧野の推移や仕事内容について、現稲葉山牧野場長の林一樹さんからお話を伺った。稲葉山牧野は、県西部の畜産振興のため未利用の稲葉山山頂から山腹にかけてを牧場として整備し、昭和 42(1967)年に創業された。もともとは農家から仔牛を預かって代わりに育てて仔牛が成長したら農家に返すといった役割があった。しかし農家の数が減少していき、それに伴って牛を預かることも減っていった。そこで乳牛の飼育と並行して肉牛も飼育されるようになった。当初は仔牛を購入して育てることもあったが、次第に飼育頭数が増えていき、現在の一貫生産の体制となっていった。また、現在でも市外から乳牛を預かっており、10 頭程度が飼育されている。

稲葉山牧野では朝夕 2 回の給餌、牛舎の衛生管理、種付け、牧草づくりなどを行っている。冬季などの牧草が採れない期間のために、牧場内で育て刈り取った牧草を圧縮して保存するなど、牛に与えるエサも独自に作っている。そのほか、牛の体調管理や倒れて起き上が

⁸¹ 公益社団法人日本食肉格付協会の定める牛肉の格付けの 1 つ。内臓や骨などを取り除いた「枝肉」の重量によって A～C の 3 段階のランク付けがされる。既定の計算式によって歩留基準値 72 以上のものが等級 A（部分肉歩留が標準より良い）、69 以上 72 未満のものが等級 B（部分肉歩留が標準のもの）、69 未満のものが等級 C（部分肉歩留が標準より劣るもの）とされる。

⁸² 公益社団法人日本食肉格付協会の定める牛肉の格付けの 1 つ。「脂肪交雑」「肉の色沢」「肉の締まりとキメ」「脂肪の色沢と質」の 4 つの項目に従い、5～1 の 5 段階に区分される。

れなくなった牛がないかの見回りなども仕事だそうだ。牛は自力で起き上がれなくなってそのまま死亡してしまうことがあるため、この見回りは重要だという。

牧場内では15頭程度ずつ牛を放牧しており、一般の来場者でも放牧されている牛を見学することができる。放牧されるのは母牛が主で、良い血統の母牛を稲葉山の斜面で放牧することで足腰の強く健康な母体を作る。仔牛は牛舎で飼育され、筋肉をつけすぎず柔らかい肉質の肉牛となる。繁殖は人工授精によって計画的に行われ、どれだけ繁殖をするか、年間でどれだけ牛を出荷するか管理されている。

平成10(1998)年には「稲葉山ふれあい動物広場」が稲葉山山頂付近に開設された。4月から11月末までの間開園しており(月曜定休日)、ヤギやリスなどの動物たちと戯れたりエサやりすることができる。また平成30(2018)年には稲葉山山頂に「稲葉山山頂カフェレストラン」がオープンした。ここでは、稲葉メルヘン牛を使用した1日限定10食の粗挽きハンバーグ(写真3)をはじめとして、さまざまなメニューが食べられる。こちらは4月から11月末までの土・日・祝日の10時から17時まで営業しており、ランチを楽しんだり休憩スポットとして利用できる。



写真3 ハンバーグ定食(筆者撮影)

3-3. 稲葉メルヘン牛フェア

稲葉メルヘン牛のブランド化をうけ、稲葉メルヘン牛流通推進協議会が主体となり、稲葉メルヘン牛フェアが開催された。フェアは平成31(2019)年3月1日~17日に行われ、市内の飲食店・精肉店の計10店舗が参加し、期間中飲食店では稲葉メルヘン牛を使用したメニューが提供された。

令和元年(2019年)10月4日～11月4日には、第2回目のフェアが行われた。第2回のフェアは第1回より倍近い期間の開催となった。図1⁸³は第2回フェアの際のポスターである。第1回に引き続き赤ワイン煮込みやしゃぶしゃぶが食べられる店舗に加え、ライスバーガーやステーキセットなどのメルヘン牛を使ったオリジナルメニューを食べられる店舗が新たに5店舗増えた(急遽参加することになった店舗があるためポスターには飲食店は12店舗のみ)。これにより第2回フェアは飲食店13店、精肉店2店の計15店舗で稲葉メルヘン牛が提供された。

3-4. 今後の課題

林さんは、稲葉メルヘン牛フェアを通して消費者や参加店舗などからの意見を聞き、課題が見つかったという。

まず第1回フェアに関しての聞き取りである。課題の1つ目として、価格の高さがある。出荷頭数が限られていること、高品質のブランド牛であることから、ある程度は値が張ってしまい消費者があまり手を伸ばせないのではないかという問題がどうしてもあるようだ。実際に、稲葉メルヘン牛フェアに訪れた人の中からももう少し安ければという声があったそうだ。反対に、ブランド牛は高い肉だからこそイベントという機会を食べに来てくれるのではないかという意見も聞かれた。価格の高さは単にデメリットではなく、ブランドとしての特別感や高級感という付加価値にもつながっているようだ。

2つめに、市内にはどうしても出回らない部位があるということが挙げられた。加工された牛肉のうち、皮や内臓を取り除いた「枝肉」や、さらに部位ごとに分けられた「部分肉」が稲葉メルヘン牛として市内で食べられる。しかし内臓のような希少な部位は東京などに売られていってしまうため、市内に出回ることはないという。また、卸しの段階で他の肉と混ぜられてしまうために稲葉メルヘン牛として流通することはないのだ。生産者である牧場は牛肉としてメルヘン牛を売りますが、その後どのように売れるかは卸売業者次第になり牧場としては取り扱いに関わることはできなくなってしまうため、解決できない点のようだ。また、同様の理由で「〇〇の部位」を「〇〇の量」で売れないかという要望も牧場では



図1 稲葉メルヘン牛フェアのポスター

⁸³ <https://www.facebook.com/inabameruhengyuryutusuishin/>

応えることができない。

次に、第2回フェアに関する課題である。第2回フェアは第1回に比べやや反響が鈍かったという。林さんはこのことについて、時期として消費税率の引き上げ後であったこと、年末年始の繁忙期を控えていることで飲食店の閑散期となる10月の開催だったことで客足が伸びなかったことを挙げた。第1回、第2回とフェアに協賛した店舗はほとんどが同じオリジナルメニューを提供していたこと、広報活動を前回と同じ方法としたために消費者の興味をなかなか引けなかったことも、あまり関心が得られなかった原因とした。

フェアではメルヘン牛を実際に食べて「柔らかくておいしい」という声が届いているという。フェアの実施をきっかけにフェア終了後も稲葉メルヘン牛を継続して提供している店舗もあることから、稲葉メルヘン牛が地元へ根付いてきていることが実感できるそうだ。さらなる普及に向けて、今後はPRの方法やメニューの工夫、もっと低価格で提供することなどが課題となっているという。

3-5. ブランド化以降の取り組み

小矢部ブランドが平成21(2009)年から第6次総合計画の施策として認定が始まったのは第1節でも述べたが、平成31(2019)年からの第7次総合計画では、引き続き小矢部ブランドの認定件数増加や小矢部ブランドの認知向上が目標とされている。そのほかに稲葉山牧野の経営安定化を図るための施策も挙げられている。

林さんによれば、現在稲葉山牧野は収入と比べて人件費を含めた支出が上回っており、赤字の状態だという。稲葉メルヘン牛は年間80頭の出荷を目標としているが、収支の観点からは赤字脱却のためには年間110頭の出荷が必要とされている。年々出荷頭数は増加の傾向にあるが、平成29(2017)年の稲葉メルヘン牛の出荷頭数は76頭となっている。出荷頭数を伸ばすには牧場内での和牛の収容頭数を増やすことが必要だが、現在の稲葉山牧野は繁殖牛と肥育牛を合わせて約290頭と、施設で収容できる限界で運営している。

稲葉メルヘン牛の出荷頭数を増やすには収容頭数を増加させることが必要になるが、牛舎の増設には多額の費用が掛かるため、現在は困難だという。稲葉山牧野は山間部にあるため使用可能な土地は限られており、各施設は牧場内に点在している。施設をより効率的な配置にすることができれば経営改善につながるが、施設の再配置も多額の費用が掛かるため、こちらも改善は困難だそうだ。

稲葉山牧野ではこれに対し、飼料の量やバランス、肥育牛にストレスをかけないような飼育環境の保持といった管理を徹底している。これによって枝肉重量を増やし、肉質の格付けが向上することで牛1頭当たりのセリ値が高くなり、牧場の収入が増加することが予想されている。

稲葉山牧野では、支出削減の取り組みとしてエサ代の節減が行われている。自家牧草地から牧草を収穫し、牛に与える飼料としている。肥料の散布、牧草地の入念な手入れによって牧草の収穫量増加を図っている。また、一般農家の圃場からも稲わらを収穫し、こちらも飼

料として使用している。牧場から出る牛糞は堆肥として一般農家の圃場で利用され、地域の農家と耕畜連携がされている。

4. 小矢部産ハトムギ⁸⁴

本節は、いなば農業協同組合（JA いなば）の田邊伸雄さん、上川進さんからの聞き取りと、いただいた資料を参考に記述する。

4-1. 小矢部市でのハトムギの歴史

小矢部市では平成 19(2007)年にハトムギの栽培が始まった。米の生産調整によって米の作付面積が制限されたため、余ってしまう農作地で転作作物として栽培され始めた。JA いなばでは小矢部の湿地帯でもできる農産物はないかと当初は大豆が作られたが、大豆には連作障害が発生しやすく、長年に渡り栽培され続けてきた土地では安定した収穫量が見込めなくなってきた。そこで、当時既にハトムギの栽培が始まっていた氷見市からの提案を受け、生産者 3 名、作付面積 0.7ha で試験栽培がスタートする。小矢部市でのハトムギの収穫量は多く、全国の他の畑と比べると収穫量は 2 倍以上となった。小矢部市の土壌にハトムギが適していると判断され、次年度からは生産者も作付面積も大幅に拡大され本格的なハトムギ生産に取り組むことになる。平成 20(2008)年 3 月には、ハトムギを新たな土地利用作物として振興するために「いなばハトムギ生産組合」が設立された。

全国ハトムギ生産技術協議会の調べでは、小矢部市のハトムギ生産は平成 28(2016)年に生産者 28 名、作付面積 218ha に達し、生産量および作付面積が全国 1 位となった。生産量は平成 25(2013)年から 6 年連続で、作付面積も 2 年連続で日本一となっている。平成 30(2018)年時点で生産者は 33 名、作付面積は 316.5ha まで増えた。ハトムギ生産量国内 1 位の富山県だが、その約 8 割が JA いなばによって生産されている。このように小矢部市ではハトムギがよく収穫できることを受け、特産品化することが決定し、平成 30(2018)年に小矢部ブランドに認定された。現在では生産したハトムギの加工、流通・販売を市内で連携して行っている。

⁸⁴ イネ科の穀物。米に混ぜて食べたり、はとむぎ茶に利用される。漢方においては外皮を取り除いた種子がヨクイニンと呼ばれ、生薬として使われる。日本での主な産地は青森県中泊町、岩手県奥州市衣川地区・花巻市、福岡県久留米市三潴町、栃木県鹿沼市・小山市、富山県氷見市・小矢部市、広島県三原市大和町などである。

4-2. ハトムギ商品

JA いなばから販売されている、小矢部産ハトムギを使用した商品を紹介する（表3）。写真4～7は筆者撮影の商品の写真である。

表3 はとむぎ商品

商品名	説明
はとむぎ茶	古くからハトムギの用法の一つとして親しまれてきたはとむぎ茶で、富山県の海洋深層水も使用されている。ペットボトルやティーバッグで販売されており、道の駅やスーパー、インターネットなどで小矢部市に限らず最も広く販売されているハトムギ商品。
はとむぎ精白粒	ハトムギの玄穀（外殻）、薄皮、渋皮を取り除いたもの。米と一緒に炊いたりスープやサラダに入れて食べられる。小矢部産ハトムギが使われる商品の中ではインターネットでの販売量が最も伸びている商品。
はとむぎシリアル	外皮を取り除いたハトムギを焙煎して作った風味豊かなオリジナルスナック。そのまま食べるのはもちろんサラダやお茶漬けなどに入れて食べられる。
cleabale（スキンケアオイル）	世界で初めての、ハトムギのヌカ油をそのまま使用したスキンケアオイル。ふわっとしたフレッシュローズの香り。美容効果だけでなく、抗菌化作用にも優れており紫外線などの刺激に対するバリア機能も期待される。

（JA いなばより「とやまのはとむぎ」を参考に作成）



写真4 はとむぎ茶



写真5 はとむぎ精白粒



写真6 はとむぎシリアル



写真7 cleabale

4-3. 商品開発などにおける悩み

もともと、ハトムギ製品は現在でも代表的なはとむぎ茶くらいしかなかったそうだが、現在でははとむぎ茶だけでなくシリアルや化粧水といった商品が販売されるようになっていく。そこで、ハトムギを使った新たな商品を生み出すにあたっての問題や悩みを田邊さんと上川さんにうかがった。

ハトムギは外殻を取り除いてシリアルとして加工されたり、渋皮（内皮）まで取り除いて精白粒としたりするが、捨てることなく、外殻や渋皮もさまざまなものに利用できるのだという。実際にJAいなばではハトムギの渋皮を麺に練りこんだ「はと麦うどん」を販売している。しかし、どんなものでも作れる反面どういったものを作るかは難しい。小矢部産ハトムギは生産が始まってまで10年ほどしか経っておらず、まだまだ小矢部産ハトムギを認知してもらわないといけないという。まずハトムギというものをもっと知ってもらい、そしてハトムギの産地として小矢部市を知ってもらうにあたり、なにかひとつヒットの火付け役となる商品が生まれないといけないという。ハトムギを広めるためのきっかけとなる商品が必要だが、同時にそういった商品が世に認められるために、ハトムギをもっと認知してもらいたいというのが現状なようだ。

また、さまざまな商品を作れる可能性があるからといって、なんでも作って売ればいいというわけではもちろんない。開発したものが形になっても、実際に販売するまではどれだけ売れるのか、どれだけ反響があるのかわからない。商品を作ったものの売れ残ってしまうのは避けなければいけない。上川さんによれば、「たとえば地ビールを作るとすると普通のビールより価格は高くなる。多くの方は飲み慣れた低価格なものを求める傾向が強く（高い地ビールは）売れなくなってしまう」そうだ。新商品が生まれても作りすぎてしまっ

ないため、こういったリスクを背負ったうえでどういったものを作るのか、そしてどれだけ売り出しているかがとても難しいのだという。ハトムギは健康・美容効果が期待されており、JA いなばでも化粧品を開発したそう。しかし、JA いなば内では女性から「化粧品はいつも使っているものもいい」「化粧水にハトムギが使われているのは抵抗がある」という意見が実際にあり、化粧品のような各人にこだわりが強いような商品は打ち出しにくいのだという。

JA いなばでは、ハトムギの品質を高めるために特殊なカメラを使った色彩選別を取り入れているそう。農作物は大きさや重さによる選別をするものが多いが、ハトムギの全粒に色彩選別を行うことで白く成熟していないものをはじき出し、見た目にも均一でより高い品質のものを販売している。色彩選別はまだあまり普及していない選別方法で、どこでも行われているものではないという。そのため色彩選別を取り入れた小矢部産ハトムギの品質の高さは、国内の他の産地や海外産のハトムギと比べて長所となっているそう。しかし、色彩選別がさらに普及してハトムギ全体の質が高まると相対的に小矢部産ハトムギの長所が薄れてしまうことが懸念されているようだ。

5. まとめ

ここまで3品の小矢部ブランドについて、ブランド化までの経緯や現在の取り組みを紹介してきた。それぞれの製品について、ブランド化をうけての変化やこれからの課題についてもうかがった。

いずれの製品についても共通してあげられた課題は、各製品の認知度の向上だった。本章で取り上げた小矢部産ハトムギ、稲葉メルヘン牛はブランド認定を受けたのが平成30(2018)年とまだ間もない状態だ。「ハトムギをもっと多くの人に知ってほしい」「いろんな人にメルヘン牛を食べてほしい」ということが聞かれた。おやべ火ね鶏に関して、「地域の食卓に並ぶように」と、まずは小矢部の人たちに認められ、地域に浸透しなければいけないというのが今後の課題のようだった。

ハトムギや火ね鶏は商品開発でよりたくさんの人に受け入れられるものを作ろうとしている。小矢部産ハトムギを使った商品は本章で紹介したものにとどまらずうどんやコーヒーも販売されており、聞き取りの際にはハンドクリームなどの開発案もあるとのことであった。はとむぎ茶のような定番の商品はもちろん、シリアルなどはインターネット販売においてすでに伸びがみられている。おやべ火ね鶏もふるさと納税の返礼品に加えられたことで県外からも注文が届くようになり、店頭などでの販売量も増加している。稲葉メルヘン牛は認定後すでに2回のイベント(稲葉メルヘン牛フェア)が行われ、イベント終了後もメルヘン牛を継続して取り扱うようになった飲食店が増えたことでこちらも地域への浸透が感じられるそう。

また、白川産業の荒井さんからは「小矢部ブランド自身が育つ」必要があるとの意見も聞かれた。それぞれの小矢部ブランドが商品開発やイベントの実施で地域に根付くことを目指しているが、そのためにはまず小矢部ブランド自体が広く認められ、消費者がブランドとしての価値を認めなければいけないという。小矢部ブランドがさらに盛り上がっていくために、産地としての小矢部市がどんなところか、小矢部ブランドとはどういったものなのかということを知ってもらうことで、地域での消費や外部への認知につながるのではないだろうか。当面の課題として認知拡大があげられてはいるものの、聞き取りをした限りいずれの産品も市内農家や事業者との連携がうまれるなど着実に地域に広まり、存在感を強めつつあると感じた。

ここからさらに小矢部ブランドとして広めていくには、いかに外部へと小矢部市を発信していくかが重要ではないかと思う。ハトムギはわずか10年足らずで国内トップの産地となった実績がある。火ね鶏、メルヘン牛はメルヘンポーク⁸⁵と合わせて富山県内で牛豚鶏の3品を生産しているのは小矢部市のみという特徴がある。各地にブランド品や特産品はたくさんあるなか、こういった小矢部市だけの特徴を併せたPRができればいいのではないだろうか。稲葉メルヘン牛は認知拡大を狙った地域イベントとして実際にフェアが行われたが、これにならってハトムギ商品を一挙に体験できる場が生まれたり、メルヘン牛に限らず小矢部産の牛豚鶏3品を楽しめる食のイベントが行われたりするといいのではないかと感じた。

また、イベント開催を提案するにあたって、広報面でも改善できるところがあるのではないかと感じる。1-2でも示したように小矢部ブランドに認定されるには、事業者は広報力も必要となる。インターネット販売やふるさと納税の返礼品としては県外への発信源となり実際に需要や売り上げは伸びているそうだが、小矢部ブランドそのものを広めるには各事業者ではなく市の協力が必要ではないだろうか。各産品を知ってもらうことは小矢部ブランドを知ってもらうきっかけとなり、小矢部ブランドを知ってもらうことは各産品を知ってもらうことにつながる。現在の小矢部ブランドでは、前者の「小矢部ブランドを知ってもらう」という面がやや弱いように感じるというのが率直な筆者の感想だった。県外出身者の筆者は小矢部市での調査をするまで小矢部市について知っていることはなく、富山市内で暮らしていたものの小矢部市や小矢部ブランドについて耳にする機会はなかった。まずは県内という規模、ひいては県外への発信も目指した活動を小矢部ブランド全体や市の発信力を借りることで実現できれば、地域のつながりをより一層深めることにもつながるのではないだろうか。

⁸⁵ 富山県内で生産される「黒部名水ポーク」「タテヤマポーク」「マーブルポーク」「城端ふるさとポーク」「メルヘンポーク」「たかはたポーク」「おわらクリーンポーク」「むぎやポーク」「地養豚」の9つの銘柄豚肉。

謝辞

調査にあたってお話を聞かせていただいたり資料を提供していただいたりとたくさんの方のご協力に感謝いたします。稲葉山牧野・林一樹様、株式会社白川産業・荒井千尋様、JA いなば・田邊伸雄様、上川進様、小矢部市役所・長谷川貴大様、そのほか突然の訪問であったにもかかわらず聞き取りに応じてくださった方々、本当にありがとうございました。

参考ウェブサイト

- ・小矢部の地域特産品小矢部ブランド

<http://www.city.oyabe.toyama.jp/oyabe.brand/item/item-marchen.php>

- ・第6次小矢部市総合計画について

<http://www.city.oyabe.toyama.jp/shiseijyouhou/shisaku/sougoukeikaku/dai6ji/1458354933634.html>

- ・牛枝肉取引規格

<http://www.jmga.or.jp/standard/beef/>

- ・ハトムギ

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ハトムギ>

- ・JA いなばの特産品

<http://www.ja-inaba.or.jp/food/products.php>

第2部

人が輝ける居場所

小矢部市における障害者支援—障害者が働くということ—

林 美奈

はじめに

本章では小矢部市における障害者支援、特に働く障害者とそれを支える人々に着目して調べたことを記述する。

このテーマを選んだのは、障害者施設の利用者たちが描いたアート作品の展示を見たことがきっかけだ。今まで障害者が身近にいなかったこともあり、そのような活動をしていることに驚くと同時に、障害者についてもっと知りたいと思った。それから社会福祉法人手をつなぐとなみ野や斉藤商店といった、障害者を支援する組織や企業が小矢部市にあることを知り、障害者がどのように働き、それをどのように支えているのかということに興味を持って調査を始めた。

調査は主に利用者と一緒に作業をさせて頂きながら、利用者や職員にインタビューを行った。第1節で手をつなぐとなみ野について、第2節で福祉作業所あけぼの第一・第二について、第3節で斉藤商店について述べていき、第4節でまとめと考察をする。

1. 社会福祉法人手をつなぐとなみ野について

手をつなぐとなみ野は、全国手をつなぐ育成会連合会を母体とする団体である。手をつなぐとなみ野を紹介する前に、以下ではまず全国手をつなぐ育成会連合会と、その下にある富山県手をつなぐ育成会について説明する。

1-1. 全国手をつなぐ育成会連合会⁸⁶

全国手をつなぐ育成会連合会は知的障害者⁸⁷

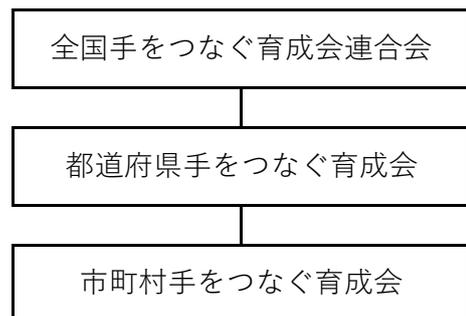


図1 育成会の構成

⁸⁶ 全国手をつなぐ育成会連合会「育成会連合会について」〈<http://zen-iku.jp/aboutus>〉(令和元年(2019年)10月30日閲覧)

⁸⁷ 知的障害の定義には様々なものがあるが、広義の発達障害の一つとしてとらえられる。日本では当時の厚生省の「平成7年度精神薄弱者(児)基礎調査結果の概要」の中の「知的機能の障害が発達期(おおむね18歳まで)にあらわれ、日常生活に支障が生じるた

の権利擁護と政策提言を行うため、全国の 55 の団体がそれぞれ役割を担い相互につながりを持って活動していくことを目的として発足した。

昭和 27(1952)年に、知的障害児を持つ 3 人の母親が障害のある子の幸せを願って、教育・福祉・就労などの整備充実を求めて、仲間の親・関係者・市民に呼びかけたことをきっかけに、精神薄弱児育成会(別名：手をつなぐ親の会)が設立された。平成 7(1995)年には「精神薄弱者」という言葉が法律名から除かれたため、「社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会」として様々な活動を進めてきた。さらに障害者福祉の運動を進める団体としてふさわしい組織となるため、平成 26(2014)年に法人としての事業を停止し、あらためて全国の育成会の連合体である「全国手をつなぐ育成会連合会」を結成した。

1-2. 富山県手をつなぐ育成会⁸⁸

富山県では、知的障害のある人とその家族、そして支援者により昭和 32(1958)年に会が結成された。「障害児(者)⁸⁹の権利擁護団体」として、障害のある人もない人も、誰もが地域で支えあい、自分らしく安心して生きることができる「共生社会」の実現を目指し、活動している。

育成会のこれまでの活動としては、障害のあるわが子の幸せを願い、今では当たり前にある学校や施設、作業所などを団体として要望したり、設立したりしてきた(表 1)。

表 1 富山県手をつなぐ育成会の歩み

年	富山県での歩み	年	砺波地域での歩み
昭和 32 年	富山県手をつなぐ育成会設立		
	県立黒部学園創立(児童施設)		
昭和 37 年	県立新生園創立(成人施設)		

め、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」という定義がある。

⁸⁸ 一般社団法人富山県手をつなぐ育成会「育成会とは？」

〈<http://toyamaikusei.jp/publics/index/2/>〉(令和元年(2019年)10月30日閲覧)

⁸⁹ 国際連合の障害者の権利宣言によると、『障害者とは、先天的か否かにかかわらず、身体的又は精神的能力の不全のために、通常の個人又は社会生活に必要なことを確保することが自分自身では完全に又は部分的にできない人のことを意味する』と定義されている。日本の法律上の定義は、各法律によって少しずつ異なっているが、障害者基本法第 2 条(平成 16(2004)年改正)によると、「この法律において『障害者』とは、身体障害、知的障害又は精神障害(発達障害を含む)その他の心身の機能の障害がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう」としている。

昭和40年	県立高岡養護学校創立	昭和40年	県立砺波学園創立（児童施設）
昭和41年	社会福祉法人セーナー苑開設		
昭和47年	氷見市野の草作業所開設		
		昭和48年	小矢部市手をつなぐ育成会設立
		昭和49年	砺波広域圏わらび学園創立（福野町）
昭和53年	県立しらとり養護学校創立		
		昭和54年	小矢部市あけぼの第一作業所開設
昭和56年	社会福祉法人むつみ園（入善、朝日、宇奈月）		
		昭和57年	県立となみ養護学校創立
		昭和58年	小矢部市を除く11市町村に育成会設立
		昭和60年	社会福祉法人溪明園設立（本館）
			福岡町福祉作業所かごめ苑開設
		昭和61年	砺波市福祉作業所油田開設
昭和62年	社会福祉法人あざみ園開設（富山市）		社会福祉法人溪明園体育館建設
		昭和63年	福光町福祉作業所フレンドハウス開設
		昭和64年	社会福祉法人溪明園重度棟建設
平成4年	社会福祉法人四ツ葉園開設（新川地区）		
平成5年	社会福祉法人かたかご園開設（高岡市）		小矢部市あけぼの第二作業所開設
平成7年	社会福祉法人いみず園開設（新湊市）		
平成10年	社会福祉法人こもれ灯の里（氷見市）		
		平成12年	庄川福祉作業所開設
		平成13年	社会福祉法人花椿設立
		平成14年	福野町作業所メイプル開設
		平成15年	社会福祉法人手をつなぐとなみ野設立

		平成 17 年	城端福祉作業所エルハート開設
		平成 18 年	砺波市福祉作業所南天桐開設
			砺波地域の 8 作業所を手をつなぐとなみ野に糾合する
		平成 19 年	となみ地域成年後見福祉会設立
			砺波地域障害者地域生活支援会議設立

(富山県手をつなぐ育成会の資料を基にして作成)

1-3. 手をつなぐとなみ野の概要

社会福祉法人手をつなぐとなみ野は本部を小矢部市に置き、事業所を小矢部市、砺波市、南砺市に構え、主に学校卒業後の障害者の働く場としての福祉作業所を経営、さらに共同生活援助⁹⁰などの施設も運営する法人である。

利用者の人格と人間としての尊厳を守り、地域社会で自立した生活を営むことができるように支援することを目的とし、『共に生き、共に働き、共に暮らす』という理念を掲げる。仕事を通して働く喜びを育み、生き抜く力を培うこと、広く社会の人々との触れ合いを大切にし、障害者への理解と啓発を図ること、高齢者・障害者がふれあい、いたわりあい、支えあう住まいの場を提供することを方針に、利用者の意志を尊重しながら、多様な福祉サービスを総合的に提供できるよう創意工夫し支援している。

平成 15(2003)年以前は、砺波地域の各市町村の育成会が作業所を設立・運営していた。運営されていたのは、小矢部市のあけぼの第一・あけぼの第二作業所、砺波市福祉作業所、福光町福祉作業所、福岡町かごめ苑である。無認可だったため行政からの援助はなく、障害児の親が運営しており、職員も障害児の親がほとんどであった。

平成 15(2003)年 4 月に社会福祉法人手をつなぐとなみ野が発足し、あけぼの第一作業所以外の 4 つの作業所が法人の経営となった。これは当初 4 つの施設にしか補助金が出なかったためである。小矢部市には 2 つの作業所があり、あけぼの第二のほうが人数も仕事量も多かったため優先的に法人の運営となった。この時期から障害児の親だけでなく、一般募集で採用される職員も増えてきた。その後、庄川町福祉作業所、福野町福祉作業所、城端町福祉作業所と、砺波市に南天桐という作業所が新しく誕生した。こうして砺波地域の作業所として、法人経営の作業所 4 カ所と各市町村育成会運営の作業所 5 カ所が設置されることとなった。

⁹⁰ 障害者自立支援法に規定される訓練等給付の一つでグループホームともいう。地域において共同生活を営んでいる障害者の共同住居において、主に夜間、相談や日常生活上の援助を行うもの。

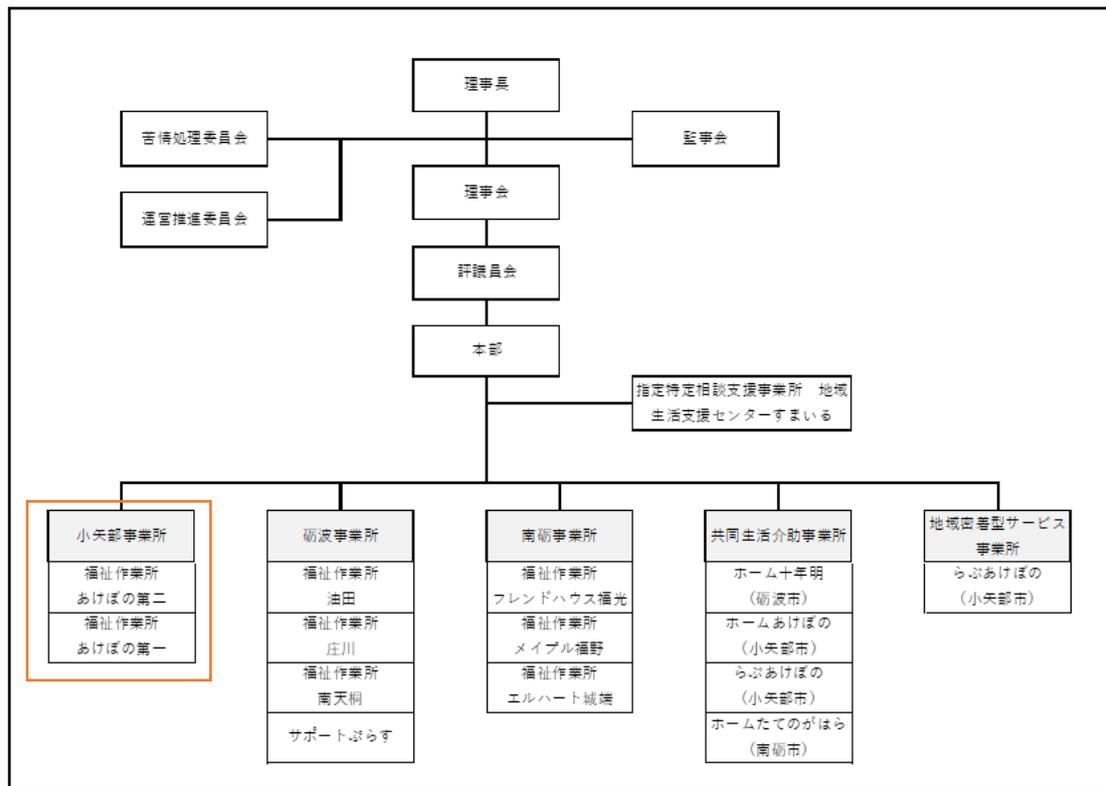


図2 手をつなぐとなみ野組織図(令和元(2019)年現在)

障害者自立支援法⁹¹施行後の平成 18(2006)年 10 月に手をつなぐとなみ野は福祉サービス事業所となり、これまでに設置されたあけぼの第一も含むすべての作業所が法人に組み込まれた。平成 23(2011)年には新規事業として生活介護⁹²事業所のサポートぷらす、共同生活援助事業所のホーム十年明・ホームあけぼのを始めた。さらに平成 24(2012)年に 1 階が認知症対応型共同生活介護⁹³事業所、2 階が共同生活援助事業所となるらぶあけぼの、指定特

⁹¹ 平成 17(2005)年に制定され、「障害者及び障害児が自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう」にすることが目的である。障害者の福祉サービスを一元化し、保護から自立に向けた支援を目指した。しかし制度開始当初から、応益負担の導入や発達障害が含まれなかったことなど問題点も多く指摘され、利用者負担の軽減など法改正を繰り返し行い、平成 24(2012)年に障害者自立支援法を改正し、難病患者等も対象とする「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律(障害者総合支援法)」(改称)が成立した。

⁹² 障害者自立支援法に基づく介護給付の一つで、常時介護を要する障害者に対し、主に昼間、障害者支援施設において入浴、排せつ、食事の介護、創作活動、生産活動の機会の提供を行うもの。

⁹³ 介護保険制度における地域密着型サービスの一つ。この事業は、「要介護者であって認

定相談事業所の地域生活支援センター⁹⁴すまいるが設立され、平成 28(2016)年には南砺市に共同生活援助事業所のホームたてのがはらが新しく設置されるなど、福祉作業所以外の施設の運営にも力を入れている。

1-4. 穴田清さんの話

穴田清さんは現在 90 歳で、以前は小矢部市育成会の会長、県育成会の理事などを務められ、手をつなぐとなみ野の理事長を設立当初から担われていた方だ。手をつなぐとなみ野の理事長は 2 年前に引退し、現在は特別顧問である。呉西地区、特に砺波地域の障害者福祉の発展に中心となって携わってこられた。

1-4-1. あげぼの第一作業所をつくるまでの経緯

穴田さんは元々小学校の教師を勤めておられた。昭和 33 (1958) 年に特殊学級⁹⁵が県内に 5 カ所ほどできて、昭和 35(1960)年には穴田さんが石動小学校の特殊学級の担任になったそうだ。穴田さんは身内に障害者はいなかったものの、当時から障害児教育に熱心だった。しかし、その翌年に生まれた子どもがダウン症⁹⁶と診断された。障害児教育に関わっていたものの、まさか自分の子どもが障害を持って生まれてくるとは思わなかったとおっしゃっていた。また当時は、ダウン症の人は短命と言われ、20 歳くらいまでしか生きられないと専門書でも書かれていたそうだ。

子どもが 5 歳になった頃、黒部市にある福祉型障害児入所施設である黒部学園に親元から離れて入所させることにした。当時の黒部学園園長の村上長保さんの「障害を持った子どもを隠して幸せなのか？何で障害を隠すのか？親が頑張らなければいけない」という話を聞いて、わが子の幸せを願い活動を始めた。

穴田さんは他の障害者の子を持つ親と「呉西地区でも障害者の施設をつくりたい」と話し

知症であるものについて、その共同生活を営むべき住居において、入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の世話及び機能訓練を行う」とされている。グループホームともいう。

⁹⁴ 地域の障害者福祉に関する様々な問題について、障害者本人、保護者、支援者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行い、相談者と関係機関との連絡調整など総合的な支援を行う。

⁹⁵ 普通学校の中に障害児の学級が併設されているところがあり、一学級 12 人程度の少人数制で、児童、生徒の状況に応じた教育課程が編成できるように配慮されたクラス。

⁹⁶ 21 番目の染色体が 3 本ある (21 トリソミー) 染色体異常であり、罹病率は新生児 1000 人に 1 人。40 歳以上の母親からの出生では約 1% に発症する。特異な顔貌 (つり上がった目じり・眉、低い鼻筋、よく舌を出している、など)、多発奇形 (心奇形、消化器奇形など)、発育・発達遅滞が特徴である。

ていたそうで、昭和 54(1979)年に小矢部市に障害者の親の会を作ろうと人を集めた。呉東地区では障害者の活動が活発だったが、呉西地区では障害者を隠そうとする気風が強かった。「このままでは親も子どもも惨めな思いをしてしまう。何とかしなければ」という思いがあったそうだ。最初は5、6人からスタートしたが、小矢部市の連合婦人会がフリーマーケットなどで得た140万円を寄付してくれた。これは婦人会が穴田さんの活動の話を聞いて、その思いに賛同してくれたからだそうだ。

最初は津沢に施設を作ろうとしたが、地域の人に反対されたため、津沢の公民館の使われていなかった2階部分を作業所として使うようになった。障害者を10人ほど集めて、部品の組み立てなどの仕事をしていた。この時、利用者の世話や指導は障害者の親が担っていた。これが、あけぼの第一作業所の始まりであった。昭和 54(1979)年当時、呉西地区では氷見市の野の草作業所の次にできた福祉作業所であった。

1-4-2. 障害者支援に携わってきて

穴田さんは教師を60歳の定年まで勤めておられた。そのため、教師の仕事をしながら活動を進めなければならず苦勞したそうだ。また、活動を始めた当時は障害者の親は子どもを隠したがったため、活動に賛同していても各市町村の育成会会長になることを嫌がる人が多かった。役職に就くということは、自分の子どもが障害者だと表明することだからだ。役場に陳情書を提出するために人を集めようとしても、なかなか集まらず大変だったとおっしゃっていた。しかし、「誰かがやらなければならない。自分がやらなければ誰もやらない、今やらなくていつやるのだ」という思いで活動を進めたそうだ。段々、親たちの意識も上がってきて、それぞれの市町村に作業所が開設されるようになった。

だが、今の若い世代の障害者の親たちは、穴田さんたちが大変苦勞して施設をつくったという経緯を知らない人が多い。保護者のなかには自分の子ども中心、自分の都合だけを考える人や、施設に任せておけば良いと考える人もいる。保護者と施設がお互いに譲り合う心を持たなければならない。元々、砺波地域の作業所や施設は親が中心となってつくったものなのだから、親も頑張っていかなければならない。そうしなければ子どもたちを守れないとおっしゃっていた。

また、障害者が働くことについてどのように思うかを聞いた。仕事をすると楽しいという気持ちや、役に立つ仕事をする、人から感謝され、認められること、喜びを得られることは生きがいにつながると言っておられた。障害者がどんな仕事ができるのか、それぞれに合った仕事を見つけることも職員の仕事であるということもおっしゃっていた。

1-4-3. 障害者の親として

子どもがダウン症だとわかった時どのように思ったのか尋ねた。穴田さんは、50年ほど前は障害のある子どもを隠す親が多く、世間の風潮は「障害があることは恥ずかしい」というようなものだったので、自分も恥ずかしい、情けないと思っていた。子どもが生まれる前

は特殊学級の担任をやっていたが、まさか自分の子どもは障害を持って生まれないだろうと思っていた。子どもが幼い時は、自分の子どもが障害児であることは言わなかったそうだ。

しかし子どもが黒部学園に入った時に、村上さんの「障害を持っていても一人の人間として接しなければ子どもがかわいそうだ」という話を聞いて、子どもに「生まれてよかった」と思わせてあげたいと思うようになった。自分の子どもの幸せを願う時に、自身の子どもの以外の障害を持つ子どもたちも幸せになれなければ、自分の子どもも社会に受け入れてもらえないだろうという思いがあって活動を始めたとおっしゃっていた。子どもを隠している間は周りの人も見て見ぬふりをしていたが、隠さなくなってから近所の人に声をかけられるようになったそうだ。

穴田さんの「この子がおって、私の今日がある」という言葉が特に印象に残っている。障害者の子どもを持ち、福祉活動に携わったことで改めて人の情けや感謝の心が身に染みて感じる事ができたとおっしゃっていた。

1-4-4. 50年前と現在で変化したこと

50年前から障害者に関わってきて、現在までかなり変化してきたことを感じるそうだ。昔は親が子どもを隠していたし、周りの人も見て見ぬふりをしていた。また穴田さんは、子どもを葬式に連れて行った時に、自分の兄弟に「障害のある子を連れてくるなんて」「障害児を人前に出すなんて恥ずかしい」などと陰で言われたこともあるそうだ。家族や親戚に障害者がいると、嫁に行けなくなるというふうに思う人もいた。現在では障害者に対する理解がかなり深まってきたが、それでもまだまだ十分ではないと感じる。親にも隠したがる人はまだまだいて、むしろ社会の方の理解が進んでいるように思うと話してくださった。

1-4-5. 今後の課題と展望

昔は障害者は長生きしないと言われていて、親が子どもを看取ることも多かった。しかし現在は施設で健康管理をしたり、利用者に運動や仕事をさせたりするようになって、障害者も長生きするようになった。そこで今問題になるのは、親が亡くなった後に障害者をどうするのか、ということだ。親が高齢になったときのことを考えて、お金を残すなどの対応をしていかなければならない。親の意識改革が必要だとおっしゃっていた。

手をつなぐとなみ野は、令和2(2020)年度に2階が知的障害者のグループホーム、1階が富山型デイサービス⁹⁷の事業所を建設する予定である。また令和元年時点で手をつなぐとな

⁹⁷ 年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが一緒に身近な地域でデイサービスを受けられる場所のこと。富山県から全国に発信した新しい形の福祉サービスである。平成5年に民間デイサービス事業所「このゆびと一まれ」が創業されたことにより誕生した。小規模ゆえに家庭的な雰囲気の中、利用者が自然に過ごせることや、個々の状態に合わせたきめ細かい介護が受けられること、利用者を限定しないため、お年寄りが小さな子どもを見守った

み野は、小矢部市に本部を置く社会福祉法人溪明会⁹⁸と連携した活動を行っている。職員の研修を行ったり、イベントを共同で運営したりするなど、相互に協力している。詳しい活動内容については後述する。穴田さん個人としては、将来的には溪明会と手をつなぐとなみ野が一体となって障害者を守っていけるようになればよいと考えているようだ。

障害者が幸せに暮らせる社会ということは、当然健常者が幸せに暮らせる社会である。誰もが安心して暮らせる社会ができることを願っていると話してくださった。

2. 福祉作業所あけぼの第一・あけぼの第二の調査

2-1. 概要

あけぼの第一は小矢部市鷺島、あけぼの第二は同石動町に作業所を構える就労継続支援 B 型⁹⁹の施設である。その沿革は以下である(表 2)。

り、障害のある方がスタッフの手伝いをすることもある。現在はそれぞれの事業所が地域に根ざした利用者本位のサービスの提供を目指し、個性ある事業所運営に取り組んでいる。

⁹⁸ 小矢部市、砺波市、南砺市の砺波地域に事務所を開設している社会福祉法人。昭和 59 年に設立認可された。「誰もが一人の人間として尊厳に満ち、社会の一員として、その人らしく、豊かで実りの多い人生を送れるよう支援する」という基本理念の下、活動を行う。障害者の施設入所支援から日中の活動支援、相談支援事業等に至る様々な福祉サービスを展開し、施設入所利用者だけでなく、在宅障害者の生活も多方面にわたって支えている。小矢部市には障害者支援施設(主に夜間の支援を行う施設入所支援や、日中の支援をする生活介護などで利用者の日常生活を一体的に支援する)の溪明園からまつ・溪明園あすなろ、多機能型事業所(障害者の働く場所を提供する就労継続支援 B 型のサービスや、在宅の障害者がメリハリのある生活ができるように支援する生活介護などを行う)の溪明園めるへん、グループホームのホームやつわ・あやこがある。

⁹⁹ 平成 17 年に制定された障害者自立支援法制度における自立支援給付の一つ。就労を希望する障害者につき、生産活動その他の活動機会を通じて、就労のために必要な知識や能力の向上をはかる訓練等を供与する。訓練等給付(障害者自立支援法制度に基づく自立支援給付の一つでサービス費が支給される制度)に分類され、A 型と B 型に分かれる。B 型は、通常の事業所に雇用されることが困難な障害者のうち、雇用契約に基づく就労が困難である者に対して行う就労の機会の提供及び生産活動の機会の提供、その他就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練等の支援を行う障害者自立支援法制度の給付対象サービス。A 型は、通常の事業所に雇用されることが困難な障害者のうち、雇用契約等に基づく就労が可能となる者につき雇用契約を結ぶという点で B 型と異なる。

表2 あけぼの第一・第二の沿革

年月	沿革
昭和 54 年 6 月	あけぼの第一 開設
平成 5 年 6 月	あけぼの第二 開設
平成 15 年 4 月	社会福祉法人手をつなぐとなみ野 設立
平成 18 年 7 月	あけぼの第一が津沢より現在地へ移転
平成 18 年 10 月	障害福祉サービス事業 就労継続支援 B 型開始

(社会福祉法人手をつなぐとなみ野資料より作成)

あけぼの第一は 40 年前に津沢で開設され、10 年ほど前に現在地に移転してきたものである。あけぼの第二は約 20 年前に現在地に開設された。その間の平成 15(2003)年に社会福祉法人として手をつなぐとなみ野が設立された。

2-1-1. 利用者と職員

あけぼの第一は、令和元(2019年)年8月時点で10名の利用者がおり、年齢は24～55歳までである。精神障害¹⁰⁰が1名、知的障害が2名、自閉症¹⁰¹が2名、ダウン症が3名、知的障害と精神障害が1名、知的障害と肢体不自由¹⁰²が1名で、常勤職員は3名、非常勤職員は1名である。

あけぼの第二は、令和元(2019)年8月時点で20名の利用者がおり、年齢は26～68歳までである。知的障害が17名、精神障害が2名、身体障害が1名で、常勤職員は5名、非常勤職員は3名である。

2-1-2. 就労支援¹⁰³事業

受託・業務委託作業として、部品組み立て(あけぼの第一)、衣類・靴下の値札付け仕上げ

¹⁰⁰ 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第5条では、精神障害者を「統合失調症、精神作用物質による急性中毒又はその依存症、知的障害、精神病質その他の精神疾患を有する者をいう」と定義している。

¹⁰¹ 発達障害者支援法に定められる発達障害の一つ。社会性の獲得やコミュニケーションの障害をその特徴とする。一つのことや動作にこだわりをもって執着する、他者とうまく関われない、場面に沿った適切な言動をとれないことなどがみられることが多い。知的障害が随伴するときもあればしないときもある。

¹⁰² 四肢や体幹、あるいはその双方の欠損や変形、運動機能障害のことをいう。

¹⁰³ 失業者、不安定な仕事に就いている労働者などに、働く権利を保障して、働く者の尊厳を守りながら、安定的な就労ができるように支援することである。社会福祉の分野では、障害者雇用や生活保護の対象者に対する領域のなかに、就労支援制度が体系化されている。

加工(あけぼの第二)、タオル畳み(あけぼの第一・第二)を行う。これらの作業は、砺波地域の企業からの業務委託である。また施設外での就労として、小矢部土木事務所清掃(あけぼの第二)、石動駅清掃(あけぼの第一・第二)がある。さらに、あけぼの第二では昆布もち、豆菓子等の製造と販売も行っている。これらの作業の詳細な内容は調査結果の中で説明する。

もう一つ、施設外での就労として石動駅内喫茶室のルリアンでの接客も行われている。ここは平成30(2018)年に石動駅が新しくなった際に2階の待合室の奥に設置された。ここではコーヒーと、あけぼの第二で作られた昆布もちや、溪明会で作られたパンやクッキーが販売されている。運営は溪明会と共同で行い、隔週で午前があけぼの第二、午後は溪明会というように分担して接客等行っている。あけぼの第二は職員と利用者が1人ずつ入り、溪明会は利用者1人とシルバー人材派遣センターの職員が1人入る。駅は老若男女問わず利用するし、普段交流のない人たちと関わるができる。そのため利用者はルリアンでの接客が楽しいようで、皆行きたがるようだ。私が利用した時は、注文を聞いたり会計をするのは職員がやっていたが、コーヒーを出すのは利用者が行っていた。店内には、あけぼの第一・第二と溪明会の利用者が絵画教室で描いたアール・ブリュット¹⁰⁴・臨床美術¹⁰⁵作品も展示されていて、季節によっていろいろな作品を入れ替えて飾っている。絵画教室については調査結果の中で説明する。

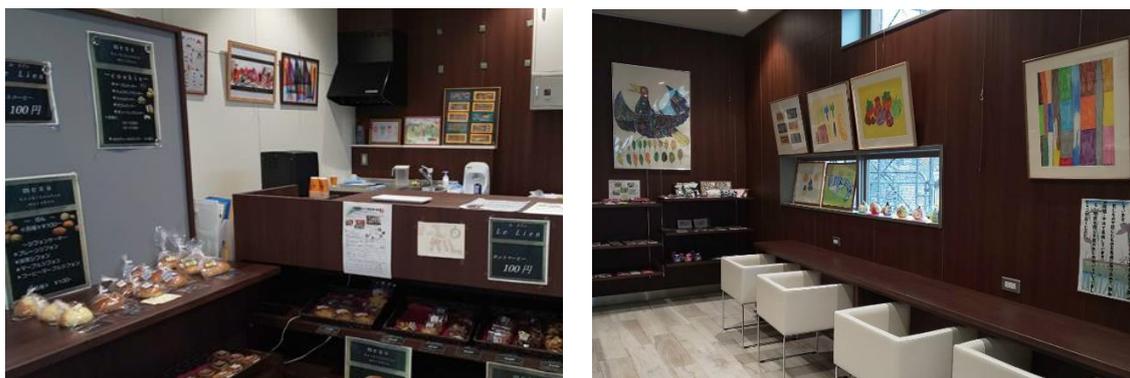


写真1、2 ルリアン店内の様子

他にはリサイクル作業としてあけぼの第一、第二それぞれでアルミ缶・古紙回収を行っている。アルミ缶は近隣家庭からの持ち込みによるものと、小矢部市内のコンビニから定期的に回収を行うものがあり、利用者が洗ってつぶし、缶の中にタバコの吸い殻等ゴミが入って

¹⁰⁴ 「加工されていない、生(なま・き)のままの芸術」と意味する。フランスの美術家ジャン・デュビュッフェが提唱したもの。美術の専門的な教育を受けていない人が、伝統や流行などに左右されずに自信の内側から湧き上がる衝動のまま表現した芸術のことを指す。

¹⁰⁵ 絵やオブジェなどの作品を楽しみながら作ることによって脳を活性化させ、高齢者の介護予防や認知症の予防・症状改善、働く人のストレス緩和、子どもの感性教育などに効果が期待できる芸術療法(アートセラピー)のひとつ。

いれば取り除く。また、スチール缶や瓶などが混ざっていることもあるので、それも分別する。回収したアルミ缶は石川県の北陸リサイクルセンターへ持って行くことで、わずかながらも利益の出る作業となっている。古紙回収も主に近隣家庭からの持ち込みで、集まったものは小矢部市リサイクルセンターへ持って行く。あけぼの第二では古紙が大量に集まるようになったため、南砺市のリサイクル業者に頼んで回収してもらっている。地域の人は「あけぼのさんで回収しているなら」とアルミ缶や古紙を持ってきてくれるそうだ。この回収は曜日など決まっておらず、回収場所も鍵がかかっていないため、誰でもいつでも自由に持ち込みができるようになっている。

2-2. 調査結果

5日間、作業所にて利用者と職員とともに作業をしたり、インタビューをさせて頂いたりした(表3)。

表3 調査日程と調査内容

日にち	訪問施設	調査内容
8月6日	あけぼの第一	タオル畳みなどの作業、利用者へのインタビュー、絵画教室の見学
10月4日	あけぼの第一	タオル畳みなどの作業、お楽しみ会の見学、職員へのインタビュー
10月7日	あけぼの第二	靴下値札付け仕上げ加工などの作業、職員へのインタビュー
10月18日	あけぼの第二	靴下値札付け仕上げ加工などの作業、配達などの外回りの同行、石動駅の清掃
11月25日	あけぼの第二	昆布もちの製造、配達の見学

2-2-1. あけぼの第一の調査(8月6日)

この日は9時から作業所へ行き、作業の様子を見学するとともにタオル畳みの作業も一緒にさせて頂いた。タオル畳みについては10月7日の調査の中で詳しく説明する

作業日は土日祝日を除く月～金曜日で、作業時間は9時～15時半までである。1日のスケジュールは左である(表4)。月に何回か作業を早く切り上げて、絵画教室など利用者が楽しめるイベント等を行う日もある。あけぼの第一の利用者は、通院のため休む人もいるがそれ以外の理由で休む人は全くいないとのことだ。

表4 1日の流れ

9時～	朝礼、体操
9時10分～	作業
10時30分～	休憩
10時45分～	作業
12時～	昼食、休憩
13時～	作業
15時30分～	清掃、帰りの会
16時～	退所

2-2-1-1. 利用者へのインタビュー

○さん(43歳,女性,精神障害)は6年前からこの作業所で働いており、それ以前は別の企業で働いていた。仕事で大変なことや楽しいことは何か尋ねると、工具の組み立てが楽しく、大変なことは特にないと話してくださった。Yさん(55歳,男性,知的障害)は、15歳から段ボール製造の会社で働いていて、この作業所には10年ほど前から通っている。みんなと仲良くいろんな仕事ができるから仕事は楽しく、作業は全部好きだとおっしゃっていた。Nさん(24歳,男性,ダウン症)は5年前からこの作業所で働いている。段ボールを病院から回収する作業や、アルミ缶を回収する作業、部品の組み立てが楽しく、駅の掃除は大変だと話してくださった。また新しいことに挑戦したいとおっしゃっていた。Hさん(35歳,男性,知的障害)は17年前から、Wさん(37歳,男性,知的障害・肢体不自由)は10年前からこの作業所で働いている。2人とも部品の組み立てが楽しく、作業で難しいことや大変なことはないと話してくださった。

話を聞いて、ほとんどの方が作業所での仕事を楽しいと感じており、難しいことや大変なことはないとおっしゃっていた。

2-2-1-2. 絵画教室の見学

臨床美術士の前田昌子さんがボランティアとして来て絵画教室が行われた。今回描かれたのは、自由に描くアール・ブリュット作品である。絵画教室は1ヶ月に一回、作業が終わった後に行うそうだ。通常であれば15時半まで作業を行うが、この日は絵画教室のため作業は14時までであった。

画用紙や絵の具、クレヨン、マジックペンなどを用意して、夏をテーマに自由に絵を描いた。すぐに描き始める人もいれば、なかなか描き始められない人もいたが、前田さんに声をかけられると絵を描き始める様子が見られた(写真3)。



写真3 絵画教室の様子

Mさん(32歳,男性,ダウン症)は、マジックペンでハートを繰り返し描いて、一番に描き終わっていた。Yさんは定規などを使ってきっちりと描き、Wさんは波をマジックペンで表現していた。Tさん(27歳,男性,自閉症)はクレヨンで画用紙全体を塗りつぶして色を重ねて海を表現して、一番早く描き始めていた。Kさんは絵の具を使って鳥を描いていた。とても丁寧に塗っていて、集中しているようだった。作業の時には声を出したりしていたので、絵を描く姿と印象が違ふと感じた。Sさん(48歳,女性,知的・精神障害)は、最初は何を描こうか戸惑っている感じだったが、前田さんに声をかけられると切ったスイカの形を繰り返し描いていた。Oさんは色鉛筆で野菜やスイカ、メロンなどを描いていた。何回か前田さんのところに絵を持って行ってアドバイスをもらっていた。Nさんは最初は似顔絵を描いていたが、途中でやめてジンベエザメを描いていた。以前、作業所のみんなで水族館に行ってジンベエザメを見たということや、楽しかったということをお話してくれた。Aさん(35歳,女性,ダウン症)はクーピーペンシルで夏祭りの様子を丁寧に描いていて、前田さんを何回か呼んでアドバイスをもらっている様子が見られた。Aさんは食べ物を描くのが得意だと前田さんがおっしゃっていた。Hさんはマジックペンと絵の具を使って抽象画のようなものを描いていた。

ここでは描くのを嫌がったりするような人はおらず、皆集中して取り組んでいた。他の施設だと、何を描けばいいのかわからず手が止まってしまう人もいそうだ。

2-2-2. あげぼの第一の調査(10月4日)

2-2-2-1. 作業の様子

作業はタオル畳みと部品の組み立てが同じ部屋で並行して行われる。クリーニング業者からタオルが運ばれてくると、タオル畳みの作業が開始される。タオル畳みの担当以外の利用者は、別の机で部品の組み立てを行う。タオル畳みが終わると、その作業をしていた利用者は部品の組み立て作業に加わる。



写真4 タオル畳みの様子

タオル畳みはバスタオル、フェイスタオル、バスマット、おしぼりの4種類をカゴに仕分けしてから畳み、決まった枚数でまとめる作業だ(写真4)。9時過ぎに、市内のクリーニン

グ業者でクリーニングされたタオルが大きなケースにまとめて運ばれてくる。そのタオルをYさんとMさんで仕分けして、Aさん、Sさん、Tさんが畳み、職員が畳んだタオルを数えて、決まった数ごとにビニール紐で縛っていた。Mさんは仕分けの際、カゴに投げ入れるようにしていた。他の日常的な動作でも乱暴に見えることがあり、初めて会う人は驚くかもしれない。一方でAさん、Sさん、Tさんはタオルをゆっくり丁寧に畳んでいた。

またタオルを自動で畳む機械があり、それも同時に使っていた。HさんがYさんにタオルを手渡し、Yさんが機械にタオルを一枚一枚入れていく作業をしていた。Yさんの作業のスピードはかなり早かった。Hさんは弱視のため、衣類を畳む作業ができなかったそうだが、少しでもタオル畳みの作業に関わることができて、職員から「初めてタオルの作業ができたね」と声をかけられていた。一方、Yさんはまだ作業が終わっていないのに、自分で機械を止めてしまって職員に注意されていた。

部品の組み立ては富山県内の企業からの委託で行い、部品はドアサッシの鍵の部分やドアの下のタイヤ部分などである(写真5)。また壁紙を貼る際に使う糊のチューブのキャ



写真5 部品の組み立ての様子

ップをはめる作業や、商品の包装に値段やサイズの書かれたシールを貼る作業もある。ライン作業ではなく個人の作業であるため、利用者は一人で黙々と作業をしている様子だった。最初のうちは作業に慣れていないため、職員と一緒に作業をするそうだが、慣れてくると職員は利用者のサポートをしたり、作業の最終チェックをする程度で、作業は利用者がメインで行っている。

2-2-2-2. 作業全体の様子

利用者は作業が終わると「終わりました」と言って、職員の指示を待つ姿が見られた。「～してね」と言われると動けるが、言われるまで身体が固まってしまうこともあった。利用者全体に声をかけられて反応できなくても「〇〇さん、～しようね」などと名前も呼んで声をかけられると「はい」と大きな声で返事をして次の作業に移っていた。また、他の人が作業をしているのにMさんが1人で休んでいる場面もあったが、職員が「みんなと一緒にやろう」と声かけを何度もすると作業に戻って行った。時々話したり、大きな声を出したりする姿も見られたが、ほとんど集中して作業を行っている様子だった。

作業所ではラジオや音楽が流れていて、Aさんが歌を口ずさんでいた。作業所のメンバーでカラオケに行ったこともあり、他の利用者も歌を歌うのが好きだそう。静かだと作業中にAさんが寝てしまうことがあるので、それを予防する目的もあるそう。

2-2-2-3. 作業時間外の様子

お昼ご飯は、利用者で机を囲んで食べていた。少し会話も見られたが、ほとんど黙々と食事をしていた。食べ終わるとテレビを見たり、座って休憩するなど思い思いに過ごしていた。

この日は14時まで作業をし、その後、月に一度のお楽しみ会を15時まで行った。誕生日を迎える人がいる月は誕生会を行うそう。この日はカードの絵合わせ(神経衰弱)をした。利用者は職員にアドバイスをもらいながら行っていた。同じ絵柄のカードを当てると嬉しそうにしている、表情や身振りなどから喜んでいる様子が伝わってきた(写真6、7)。



写真6、7 絵合わせの様子

2-2-2-4. 職員へのインタビュー

作業はそれぞれの人に合った仕事をしており、誰が何をやるのかはだいたい決まっている。また自閉症の人は同じ作業を集中して続けられる人が多いそう。

Yさんは自分から動いているように見えたと言うと、そういう人ほど支援をするのが難しい面もあるという話をされて意外に感じた。特に会話ができる人は「はい、はい」と言って理解したように見えても、中途半端な理解の時があるそう。プライドが高い人もいるので、自尊心を傷つけないような声かけをするように気をつけている。一方で指示通りに作業してくれる人は安心して任せられるとおっしゃっていた。Yさんは作業ができて「終わった」と言わなかったり、自分で判断してしまうこともあるが、細かく目配りしてスムーズに作業が進むように心がけている。

声をかけるときは名前を呼ぶようにしており、否定する言葉は使わないようにしているとおっしゃっていた。例えば、作業のスピードを「遅い」と言ってしまうと、本人は一生懸命やっていて遅いつもりはないのに、否定的な言い方をするとやる気をなくしてしまうかもしれない。そういうときは「あと20分だけ頑張ってみよう」などの言い方をしたり、休

憩を挟んだりするなどの工夫をするそうだ。

他の施設で働いていた職員は、他の作業所と比べてもあけぼの第一の利用者は比較的静かで黙々と作業をしていると話してくれた。他ではもっと騒がしかったりするそうだ。

支援する上で難しいと感じることについて尋ねると、利用者の本当にやりたいこと、伝えたいことをきちんと理解してあげることが一番難しいとおっしゃっていた。ちゃんと利用者の思いに応えられれば利用者も喜んでくれるため、気持ちを決めつけないようにすることが大事だと話されていた。また意思疎通ができることが重要で、利用者が楽しんでくれることがベストだとおっしゃっていた。QOL (Quality of life: 人生の質、生活の質、生命の質という意味で、全ての人の人生の質を高め、豊かに生きること)を大事にしており、利用者の人生の質を高めることができるか、そのための支援ができるかを気をつけているとおっしゃっていた。

他の職員は、自分には子供がいるが、子供を叱るのと同じようにならないように気をつけていると話されていて、特に言葉遣いや態度を注意しているそうだ。利用者を一人の大人として扱うことを大事にしており、さらには感情的にならないようにしているとおっしゃっていた。

最後に、支援する上でのやりがいについて尋ねると、普通の人には味わえない、貴重な経験ができることだとおっしゃっていた。障害者を持つ親の大変さがわかるし、その親からの話も聞くことができる。また、利用者は皆純粋で素直なので、接していると心が洗われるような気持ちになるとも話されていた。

2-2-3. あけぼの第二の調査(10月7日)

2-2-3-1. 作業等の様子

タイムスケジュールはあけぼの第一と同様で、9時の朝礼で全員が集まると、今日は誰が何の作業をするのかを確認する。作業の分担は、靴下値札付け仕上げ加工、石動駅の清掃、アルミ缶の作業などいくつかがあり、職員が利用者のその日の様子や状態を見て割り振っていた。

この日、私が手伝わせて頂いたのは靴下の値札付け加工仕上げの作業である(写真8)。これはライン作業で、机を1列に並べて、靴下を袋に入れる人、封をする人、シールを貼る人など、利用者それぞれに合わせて作業を分担して行っていた。作業中は黙々とやる人、話しながらやる人、歩き回ったり座ったりして作業をしない人など様々であった。作業をしない人がいても、他の利用者は何も言わなかった。職員も強く言ったり、無理にやらせようとしたりせず、あけぼの第一よりも職員の声かけが少ないように感じた。また、大声を上げたりする人はいなかったが、職員に何度も話しかけたり、作業しながら利用者同士で話し続ける姿が見られた。全員ではないが、第一よりも利用者が積極的に職員に話しかけているように見えた。

お昼休憩の時はあけぼの第一のように全員で集まって食べるのではなく、自分の好きな

場所で食べるようであった。お昼ご飯を食べた後はそれぞれ思い思いに過ごしていた。

午後の作業が終わると掃除、片付けをして、帰りの会を行う。明日の予定の確認をしたり、連絡帳を渡したりして、最後は職員とともに玄関の外まで利用者を見送った。

連絡帳はあけぼの第二だけでなく、あけぼの第一や他の作業所でも行っているもので、保護者が家での様子を作業所に伝え、職員が作業所での様子を保護者に伝えるものである。その日の様子や、よかった点、こんなふうにしてほしいという要望、利用者の体調、その他連絡事項などをやり取りする。家庭と作業所のパイプのようなもので、職員にとっては支援する上での材料にもなる。利用者本人が職員に伝えたいことやその日にあったことを書く人もいるそうだ。利用者は朝に提出して、職員が帰りまでにコメントなどを書いて渡している。



写真8 靴下値札付け仕上げ加工の様子

2-2-3-2. 職員へのインタビュー

作業所は働く場所というよりも、学校を卒業した後の居場所であり、働くことは社会参加の意味もあると話されていた。

作業を何もしない人にあまり声かけしないのはなぜか聞くと、何度も強く言うことはせずに職員側は待つということを意識的に行っているとおっしゃっていた。

支援する上で難しいこと、大変なこと、やりがい等について尋ねた。毎日何かが起こり、利用者は毎日変化があると話されていた。一方、親との喧嘩等、家庭のことを引きずってくる人の対応は大変だそうだが、利用者の心の居場所となるように、話を聞きながら落ち着くように配慮している。家や他のところで何かあっても作業所に来ればホッとするような場所を目指しているそうだ。

調子の悪そうな人がいたら気分転換も兼ねて外回りの作業に行かせる。帰ってくると調子が戻る人が多いそうだ。これは外に出て景色を見たり、職員とたくさん話したり、職員とマンツーマンで接してもらえるので特別感があるからではないかとおっしゃっていた。

話すことでストレスを発散しているのではないかとのことだ。利用者は身近な人間関係に悩むことが多く、他の人も自分と同じように考えていると思っているし、狭い世界で生活しているので、それがストレスに繋がっているのではないかと話されていた。そのため、作業所ではいろいろな体験ができるようにしている。また保護者との関係も難しく、保護者と施設との情報交換が大事であるとおっしゃっていた。作業所で起こったことは良いことも悪いことも伝えるし、家庭で起こったことも伝えてほしいと思っているそうだ。

やりがいは、みんなが楽しそうにできて笑っていることで、何事もなく1日が終わるのが一番だと話されていた。笑顔が一番の癒やしであるとおっしゃっていた。

2-2-4. あげぼの第二の調査(10月18日)

2-2-4-1. 作業の様子

今回は、主に自主製品の昆布もち製造の見学、昆布もち配達の同行、石動駅の清掃に参加させて頂いた。自主製品とは、企業からの下請けであるタオル畳みや靴下の加工作業などと違い、作業所で独自に製造、販売している商品で、あげぼの第二では昆布もちと豆菓子を作っている。あげぼの第二以外の作業所や他の施設でも同じような取り組みは行われており、手作りの雑貨やパンやクッキーなどを作って販売するところが多いそうだ。

昆布もちの製造は、小矢部市内で餅を作る店が少なくなってきたこともあり、小矢部道の駅から「となみ野さんで作ってくれないか」という要望があったのが始まりであった。しかし、最初はすぐに引き受けることはしなかったそうだ。これは主に3つの理由がある。1つ目は餅の製造には時間がかかり、職員に大きな負担がかかるということ、2つ目は道の駅で商品として売るには一定の品質を保たなければならないが、その品質管理が難しかったということ、そして3つ目は道の駅では土日祝日が客も多いためその期間に多く売りたいが、作業所ではその期間が休みであるということだ。これらの課題があったためすぐには引き受けなかったが、話をもち込まれた時から職員が餅の柔らかさを安定して保てるようにするなど試行錯誤して研究し、道の駅には金曜日に多めに納品するなどの工夫をして、小矢部道の駅で販売されることとなった。その後、福光、砺波の道の駅にも販売するようになったそうだ。今後の課題としては、昆布もちの製造に関わる職員は早い時間に出勤しなければならないため、一部の職員に負担がかかる点で、職員全員が餅の製造ができるようになればいいが、現状ではまだ難しいとのことだ。

昆布もちの製造は、靴下の加工仕上げなどの作業をする部屋の奥に作業場があり、職員は7時過ぎから、利用者は9時前頃から作業を行う。製造の様子を見学した際は、利用者は餅に

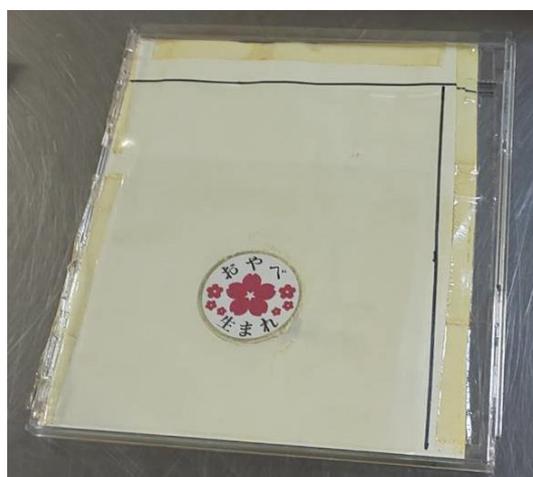


写真9 CD ケースを利用した道具

昆布をまぶしたり、一つ一つビニールの袋に包装したものにシールを貼ったりしていた。シール貼りを一緒にさせて頂いたが、利用者は慣れた手つきで作業をしていた。職員に話を聞くと、作業をするときは利用者が作業をやりやすいよう、わかりやすいように手作りの道具を使用するなどの工夫をしているそうだ。例えば写真 9 は、昆布もちの包装に貼るシールをどこに貼ればよいかわかるように、CD のケースを使って手作りした道具だ。また写真 10 は、昆布もちを入れるかごだが、かごを重ねた時に餅がつぶれないようにネジを取り付けたそうだ。道具で補助ができれば利用者のできることも増えるし、どんな作業もできるようになるとおっしゃっていた。



写真 10 餅を入れるかご

9時半頃、昆布もちを小矢部道の駅に配達する車に同乗させて頂いた。通常、1台の車に職員と利用者の2人で組んで配達に出かける。小矢部市内だけでなく、福光、砺波の道の駅にも配達をするそうだ。

職員に利用者の普段の仕事の様子を聞くと、利用者は何回か作業をするうちに自分の仕事をわかるようになり、職員が何も言わなくてもやってくれるようになるとおっしゃっていた。実際、車が道の駅に着くと、利用者は指示をされなくても昆布もちの入ったケースを店の方まで運ぶ様子が見られた。加

えて支援する際に気をつけていることも聞いた。利用者の中にはこだわりが強過ぎる人もいて、特定の利用者を嫌い、同じ作業ができないこともあるそうだ。そういう時は利用者同士を離して、別の作業を行うようにさせるなどの工夫をしている。また、最初のうちはわからなくても、慣れてくると段々と利用者の表情や話し方でその日の調子などがわかるようになるとおっしゃっていた。さらに、利用者が物や人を叩いたりするなどのことが起こってからでは遅いため、そうならないような配慮も必要であると話して下さった。

配達から戻った後、石動駅の清掃に参加した。駅の清掃は、平成 30 (2018) 年に石動駅が新しくなってから行うようになったそうだ。今回はあけぼの第一から職員が 1 人、利用者が 2 人、あけぼの第二から利用者が 1 人来て、清掃を行った。廊下、待合室、階段、トイレの清掃、駅のロータリーのゴミ拾いを 1 時間半ほど行った。この石動駅の清掃と富山県高岡土木センター小矢部土木事務所の清掃は溪明会と隔週で交代して行うそうだ。作業の様子を見ると、職員の指示は「次は待合室をやろう」などといったもので、他の細かい指示は特にされず、利用者は自分から清掃を行っていた。職員も作業に慣れてくると、指示をしなくても自分でやるようになったとおっしゃっていた。清掃で大変なのは、待合室以外は冷暖房などはなく、外での作業もあるため、夏は暑く、冬は寒いことであると話して下さった。

また、前回の調査に引き続き、靴下値札付け仕上げ加工の作業にも参加させて頂いたが、その間にある利用者が作業中に声を荒げる場面が見られた。職員に聞くと、その利用者は朝からたまっていたイライラを我慢できずに爆発させてしまったそうだ。他の利用者に当たっていたが、職員が声をかけて落ち着かせていた。その後、昼休憩の間に職員にいらだちの原因などについて話をしていたようだった。午後からは靴下の作業ではなく、石動駅内喫茶室のルリアンの接客に行っていた。これは、10月7日の調査で職員に話を聞いた際、「調子の悪そうな人がいたら外回りの作業に行かせる」とおっしゃっていたが、その一例である。このようなことはよくあるようで、職員は焦ることなく落ち着いて対応しているように見えた。

2-2-5. あげぼの第二の調査（11月25日）

今回は昆布もちの製造の様子などを見せて頂きながら、職員に話を聞いた。

昆布もちの製造は5年ほど前から行っており、作り方は餅を販売していたお店などから教えてもらったわけではなく、職員が試行錯誤して作り方を考えたそうだ。

次に作業の流れについて紹介する。利用者が来る前に、職員はもち米を蒸すなどの準備をしておき、8時半頃に利用者が来て作業が開始される。職員が餅を決まった重さに量り、利用者が餅に昆布をまぶして型に入れる。その後、袋詰め作業に入る。餅を1つずつビニールの袋に入れて封をし、賞味期限などのシールを貼る(写真11、12)。これらの作業を職員と利用者で一緒に行っていた。利用者は特に指示がなくても自分で動いて作業をしていて、作業をせずにぼーっとしているようなことはなかった。時々話しながら作業することもあるが、てきぱきと作業していて、9時過ぎの配達時間に間に合うようにできていた。職員に聞くと、利用者は自分のやるべき仕事が終わっているとおっしゃっていた。身につくまでに多少の時間はかかるが、覚えたらできるようになるとのことだ。また、興味のある仕事は率先してやりたがるという話も聞いた。



写真11、12 作業の様子

配達は、小矢部道の駅には月～金曜日、砺波道の駅には月、水、金曜日、福光道の駅には月、火、木、金曜日に行くが決まっている。1日に製造する数は多い日だと120～130個で、

150 個作る日もあるそうだ。道の駅には石川県から来て買っていくお客さんもいるらしく、人気の商品であることがうかがえる。

配達を終えて戻ってくると、片付けや洗い物などをして翌日の準備をする。もち米を研いだり、餅にまぶす昆布の準備をしたり（写真 13）、袋にシールを貼ったりする（写真 14）など、翌朝の作業がスムーズに進むように工夫していた。



写真 13、14 作業の様子

また、今回は見学していないが、あけぼの第二では昆布もち（写真 15）以外に豆菓子（写真 16）の製造と販売も行っていて、利用者は豆菓子を袋に詰める作業などをするそうだ。この豆菓子は、昆布もちの製造を始める以前から作っている。昆布もちの作業に関わる利用者は



写真 15 昆布もち



写真 16 豆菓子

決まっていて、作り始めた時から作業をしている。そのため、職員も利用者に作業を任せているように見えた。

2-3. 尾崎順子さんの話

尾崎順子さんは、穴田清さんから手をつなぐとなみ野の理事長を引き継いだ方だ。主に作業所全体についての話を伺った。

2-3-1. あげぼの第一とあげぼの第二作業所の違い

まず、あげぼの第一と第二の 2 つの施設を調査して疑問に感じた点などについて伺った話を紹介する。私が実際に利用者と一緒に作業をする中で戸惑ったのは、施設の雰囲気と支援のやり方に違いがあるように感じたところだ。第一は作業中は静かで落ち着いた雰囲気があった。また、利用者は 2 回目の調査時は笑顔で話してくれたりしたが、最初のうちは私に話しかけてくることは少なく、インタビューの際も緊張しているように見えた。第二は作業中も賑やかで、すべての人ではないが 1 回目の調査時から私に積極的に話しかけてくれた。また、第一よりも職員の声かけが少ないように感じた。このように同じ法人で、同じ就労継続支援 B 型の作業所なのに違いがあるのはなぜだろうと疑問に思った。

その点を尾崎さんに尋ねると、それぞれの施設に個性があり、それぞれのやり方で支援をしているということをお話してくださった。これはあげぼの第一、第二に限らず、砺波市や南砺市の施設にも言えることである。第一は、設立当初の障害児の親が始めた時の雰囲気がそのまま残っており、第二は作業量自体も多いため、職員は作業が終わったら利用者の話を聞くというようなやり方をしているようだ。それぞれの施設に個性があり、それぞれのやり方で支援をしているとのことだ。日々の仕事は施設によって異なるし、支援の方法に正解があるわけでもない。さらには利用者の特性もそれぞれ違うため、声かけをして受け入れる人もいれば、拒否して作業に取り組めない人もいるため、利用者に合わせて支援をしているようだ。第二でも利用者を放っているわけではなく、どうすれば利用者にとって良いのかを職員が考えている。利用者に合わせて支援の方法というのは難しいが、最も大切にしなければならないことだとおっしゃっていた。

2-3-2. 障害の種別に関係なく働くこと

また、障害の種別に関係なく同じ作業所で働くことについて伺うと、平成 18 年に障害者自立支援法が施行され、3 障害者（知的障害者、精神障害者、身体障害者¹⁰⁶）を受け入れる

¹⁰⁶ 身体機能に何らかの障害を有する者の総称。身体障害者福祉法では、①視覚障害、②聴覚又は平衡機能の障害、③音声機能、言語機能又は咀嚼機能の障害、④肢体不自由、⑤心臓、腎臓、呼吸器、ぼうこう、直腸、小腸又はヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能障害で、永続し、かつ、日常生活が著しい制限を受ける程度であると認められる 18 歳以

ようになったそうで、これは富山県だけでなく全国的な流れである。しかし、手をつなぐと
なみ野では施設がバリアフリーではないため、車椅子の方の受け入れは現時点では難しい
とのことだった。

2-3-3. 法人になる前後での変化

さらに法人になる前と後で変わったことはあるか聞いた。全体的なことに関しては 3 つ
挙げてくださった。1つ目は経営が安定するようになったこと、2つ目は職員がそれまでは
保護者だったのが一般募集での採用者が増え、その中に専門性のある職員も採用するこ
とができるようになったこと、3つ目は社会的認知がされるようになり、地域社会から受け入
れられるようになったことだそう。社会的認知については、新しい事業を興す際によりス
ムーズに行うことができたり、障害者福祉団体の会合や行事に法人として参加するときに、
行動や発言に重さを持って受け取ってもらえるようになったりしたとおっしゃっていた。
あけぼの第一、第二に関しては、法人化以前は利用者は 19 名が定員だったが、施設の規模
などに応じた定員として第一は 10 名、第二は 20 名とすることになったのが変化だと話さ
れていた。

2-3-4. 障害者が働くということ

次に障害者が働くということに関する話について紹介する。尾崎さんは、「仕事がある、
働くことは良いこと」というお話をしてくださった。障害者にとっても自分が認められる、
評価される、感謝されること、また、給料を得るといのは嬉しいことであり、働くことで
本人の力(技術的な面、社会人としての力)が伸びるとおっしゃっていた。この話を聞いて、
障害者も健常者も感じることは変わらないのだと思った。さらに、利用者のやる気を出させ
ることは職員の仕事の一つであると話されていた。

また、グループホームのベットシーツを替える作業をしていた利用者が、その後一般の介
護施設に就職したという話も聞いた。その他にもスーパーのストックヤード、流通センター、
清掃などの企業に就職した人もいるそう。小矢部市では最近 6 名ほどの例があるそうで
「きちんと教えればきちんとやれる」とおっしゃっていた。作業所は社会に出る前の練習が
できるような場所であると感じた。

2-3-5. 障害者の親として

最後にご自身の話も伺った。尾崎さんには知的障害を持った息子さんがおられるが、昔は
20 歳までで知的障害者の成長は止まると言われていた。しかし、ゆっくりでも着実に成長
していることを親として実感するそうで、以前はパニックを起こすと机をひっくり返すよ
うなことがあったが、それが段々となくなるようになり、さらには最初は言葉を全く話さな
かったのに、単語だけでも話すようになったそう。「お母さん」と呼んでくれたことがす

上の者であって、都道府県知事から身体障害者手帳の交付を受けた者をいう。

ごく嬉しいとおっしゃっていた。「息子はこんなこともできる」という発見が喜びであり、表に現れていなくても、中に秘めているものがあると話されていた。

3. 齊藤商店の調査

齊藤商店は、小矢部市平田に工場を構え、豆腐、がんもどき、油揚げ、巾着などの商品の製造・販売を行う。従業員は知的障害者が6名、精神障害者が1名、職員が4名、アルバイト1名で、従業員の大半を障害者が占めている。障害者の年齢は25～50歳までである。創業は平成3(1991)年8月で、設立当初は有限会社齊藤商店(本社高岡市)の小矢部工場での知的障害の長男の働く場所としてスタートした。障害者雇用開発協会からの助成を受けて、工場の増築や障害者の受け入れを増やした後、平成23(2011)年に就労継続支援A型の事業所、そして平成31(2019)年4月からは就労継続支援B型として経営している。



写真17 豆腐の製造の様子

3-1. 障害者を雇用すると豆腐店を経営するまでの経緯¹⁰⁷

社長の齋藤寛明さんは昭和22(1947)年に高岡市で生まれ、大学卒業後は東京の会社に就職し、結婚の翌年に長男の勇旗さんが生まれた。勇旗さんは身体の成長は早かったものの、一旦泣き出すとなかなか泣き止まず、苦勞した。初めての子供だったため、こんなものなんだろうと思っていたが、1歳を過ぎても言葉が出てこないなどのことから不安になった。勇旗さんが2歳の時、一度病院で診てもらおうと脳の障害だろうとの診断を受けた。医師から「ご両親がこれだと思うものを見つけて、一貫性をもって子どもにあたられてください」という言葉をもらった。

翌年、勇旗さんは自閉症児を受け入れて教育訓練をしている幼稚園に通園することとなり、その3年後には幼稚園の普通クラスへ配属してもらい、普通児と同じように行事などに参加した。しかし昭和57(1982)年、勇旗さんが5歳の時に赤信号で飛び出し車にはねられるという事故があり、たいした怪我はなかったものの、寛明さんはこのままでは仕事も家庭もだめになると考えた。この頃、第3子を身ごもったことを知るが、奥さんの明美さんは

¹⁰⁷ 『ぞ・ぼんぢわーく第18集 齋藤寛明氏講述録「いのちの温もりにふれてみて」』(平成14年)

障害を持たずに生まれてくる保証はないと不安に思っていた。寛明さんは考えた結果、会社をやめて勇旗さんの面倒を見るから子どもを産んでほしいと明美さんに頼んだ。

その後、寛明さんは勇旗さんの教育自立訓練の生活に入った。1日のスケジュールを立て、生活するために自分ですべきこと（挨拶、着替え、掃除、洗濯など）を一つ一つ増やしていった。また読み書き、計算など、小学校2年生程度までやらせた。勇旗さんは時に泣き、暴れたが、やらなければならないんだと思うようになるまで対決し、できるようになるまで続けた。

勇旗さんは小学生の頃から、寛明さんの実家の高岡市にある豆腐工場で、洗い物やパック詰め作業の手伝いをするようになった。機械を使うことが上手で、作業のスピードも速かった。その頃に寛明さんは「勇旗の働ける工場をもっと広いところに作ろう」と思った。勇旗さんが中学校2年生の時に、小矢部市に念願の工場を建てることできた。

その後、平成11(1999)年から主に地域教育関係で、障害者の理解活動として親子で講演会活動を行うようになり、平成17(2005)年に自立活動「勇気の会」を立ち上げて、休日の活動(野菜作り、料理教室)を始める。そして平成20(2008)年から工場で働く仲間と共に、各自の成長と将来の夢を語る講演会活動をスタートさせた。

3-2. 齋藤寛明さんへのインタビュー

まず作業について伺った。1日のスケジュールは右である(表5)。従業員は作業場に5人、配達1人、夕方から洗い場に1人というように作業分担はほぼ決まっているようだ。また、賃金は3～8万円人で金額に差はあるが、これ以上賃金を上げると障害者年金がもらえなくなってしまうためこの金額なのだそうだ。また就労継続支援A型からB型に変えたのは、A型の手続きが大変で福祉事業の収入も少なくなってしまうためだそうだ。さらにB型に変えてから労働時間の規制がなくなり、以前より長い時間働いてもらえるようになったとのことだ。また、製造に使う機械を使わず手作業にしたそうで、そのようにしたのは機械がやっていた分の仕事をできる人が1人増えるからだとおっしゃっていた。

福祉作業所との共通点や相違点について話を伺った。寛明さんは、障害者にとって自分の仕事場がある、居場所があることが大事とお

表5 1日の流れ

8時～	早く来る人は掃除
9時～	作業 午前中に製造は終了
午後～	作業 片付け、商品の詰め、配達の準備、掃除、翌日の製造の準備



写真18 巾着作り

しゃっていて、これはあけぼの第一、第二と共通する点だと感じた。

一方、必ずしも利益が最優先ではない福祉作業所と、利益を出さなければならない企業という点が、2つの違いにつながっていると感じた。まず、福祉作業所は利用者の数に対して職員数が少ないため 1 人になかなか手がかけられない。また、利用者が増えれば施設側はお金がもらえるため、ある種利用者は「お客さん」のような面がある。しかし齊藤商店は企業であるため、障害者も役に立ってもらわないと困ってしまう。長い時間をかけてでも手をかけてその人の特性を活かせるようにすると話して下さった。指導する上では、何かミスなどがあると厳しく叱ることもあるそうだが、その中で自分の仕事が1つ1つできるようになっていくとおっしゃっていた。寛明さんは経営者として、障害者の個性を生かして仕事をつくってあげなければならないと話して下さった。能力や特性がわかるまで 5 年、10 年という長い時間がかかることがあっても、手をかけてあげなければ育たない、手をかけていいところを伸ばすのだとおっしゃっていた。このようなやり方は人数が少ないからこそできることだと感じた。

従業員の中にはあけぼの第一からあけぼの第二へ移動し、現在は齊藤商店で働いているという方もいらっした。寛明さんは、作業所が合う人もいれば、企業で働くのが合う人もいて、どちらを選択するのかは家庭の方針にもよると話していた。

次に障害者を雇用する上で難しいと感じることはあるか尋ねたところ、難しいということとはあまり考えたことがないとおっしゃっていた。できるようになるまで諦めないで繰り返し教え続けると、時間はかかってもできなかったことができるようになる。それは本人にとっても周りにとっても嬉しいことで、大変、困難というよりも面白いことだと感じているそうだ。また、障害者を雇用する上でよかったと感じることは、たくさんの人に会えること、たくさんの人に喜んでもらえることであるとおっしゃっていた。

最後に、障害者を雇用することに関して地域の人から否定的な反応はなかったのかと聞



写真 19 耕運機での作業

いた。引っ越してきた時に勇旗さんが障害を持っていることを隠さずに紹介すると、地域の方は障害を隠さないことに感動して歓迎してくれたそうだ。地域の人たちは工場でみんなが一生懸命仕事をしているのを知っているし、困ったことがあれば助けてくれる。地域に受け入れられていると感じると話されていた。また、いろんな人と交流することが大事だということも話されていて、地域の中での交流が盛んだそうだ。地域の身体障害者のイベントに参加したり、工場で味噌造り体験を企画してそこへ地域の方が参加したり、中学生ががんもどき作り体験に来たりと様々だ。溪明会で行われるイベントや寺の報恩講などで製品の販売を行うこともあり、従業員も参加して接客をしたり、

計算をしたり、チラシを配ったりなど、それぞれの特性に合わせて販売する。イベント等での販売は年に10回ほど行うそうだ。さらに、工場の近くに畑もあり、そこでじゃがいも、玉ねぎ、大根などの野菜の栽培も行っている(写真19)。収穫した野菜は前述のイベント等で販売したり、皆でカレーなどの料理を作って食べたりもするそうだ。

3-3. 齋藤明美さんへのインタビュー

長男の勇旗さんが生まれた時のことについて話を伺った。

明美さんは、勇旗さんが1歳くらいの時に「この子は何かおかしいのでは」と気づいたそうだ。しかし脳の障害だと診断されてからも、周りに障害を隠す気持ちはなかったとおっしゃっていて、意外に感じた。勇旗さんが小学生の頃まで埼玉県在所沢に暮らしていたが、福祉面が充実していて、親も障害を隠さない人が多かったそうだ。その後小矢部に引っ越して来たが、こちらでは障害児の親が申し訳なさそうにしていた。中学校はとらみ養護学校だったが、入学する時に学校から「親戚の許可は取りましたか」と聞かれて本当に驚いたと話してくれた。障害者を取り巻く環境は、同じ年代でも県によって違いがあるのだと驚いた。しかし、成人式の際、勇旗さんが同級生から声をかけられているのを見て、同級生たちに受け入れられていたのだなと感じたそうだ。勇旗さんにとっても、学校の記憶は楽しい思い出が多いようだ。

また、寛明さんの活動について行くのは大変だが、普通の人にはできないようなことをやっているのだから尊敬しているとおっしゃっていた。

3-4. 従業員へのインタビュー



写真20 配達の準備

堀田さん(33歳、男性)は15年前から働いていて、以前はあけぼの第二作業所に通っていたそうだ。担当は主に配達や出荷準備で、砺波地域のスーパーマーケットなどに車で商品を配達している。配達は入社して3年目くらいから行くようになったそうで、その1年前に車の免許を取った。免許を取るのは苦労したそうだが、今では1人で配達を請け負う。最初の頃は仕事は「嫌だった」そうだが、今では「普通」のことだと話してくれた。私が話を聞いた時は出荷準備をしており、商品に賞味期限のシールを貼ったり、配達する商品の数を数えるなどしていた。伝票を書いたり、販売をすることもあった。私がこの調査を通じて話を伺った中で、一番スムーズに聞き取りができたように感じた。

室崎さん(52歳、男性)は15年前から働いてお

り、あけぼの第一作業所からあけぼの第二、そして斉藤商店で就労することになったそうだ。豆腐の製造を担当している。午前中は寛明さんと一緒に作業をする姿が見られた。作業は大変だと話してくださった。話しかけるとにこにこ笑顔で答える姿が印象的だった。

片瀬さん（42歳、女性）は23年前から斉藤商店で働いている。以前は別の工場で働いていたそうだ。がんもどきや巾着を作る作業をしている。大変なことは特になく、作業は楽しいとおっしゃっていた。また、イベントなどでの販売も楽しいそうで、「また行きたい」と話してくれた。質問にハキハキと答えてくださった。

4. まとめと考察

以上の調査で手をつなぐとなみ野と斎藤商店でどのように障害者が働き、それを周りかどのような思いで支援しているのかを見てきた。

福祉作業所と斉藤商店の共通点は、3節でも触れたが障害者にとっての居場所になっているということだ。支援学校卒業後の居場所として、あるいは自立した生活を営むために、社会と繋がっていくために、福祉作業所や斎藤商店のような企業があるのだと思う。しかし働く場所がその人にとって居場所の1つになるというのは、障害者に限った話ではないのかもしれない。生活するためのお金を得るために、自立するために、また社会参加するために働くというのは、障害者でも健常者でも変わらない。しかし、すべて同じというわけでもないだろう。働く場所が居場所になるのは、働くということの側面の一つに過ぎない。一般の企業にとって重要なのは、むしろいかに効率的に利益を上げられるかどうかだ。それゆえ仕事に追われる人や、利益だけを求めることに空しさを感じる人もいるだろう。また、新卒社員の入社3年以内の離職率の高さが問題となってから久しいし、働き方改革という言葉もよく聞くようになった。仕事上でのハラスメント、長時間労働、正社員と非正社員の待遇差など、労働に関する問題は様々にある。私たちは改めて「働く」ことについて深く考えるべきだろう。

今回障害者と一緒に作業をしたり、働く姿を見たりして一番に感じたのは、障害者も健常者も根底の部分は変わらないということだ。確かに身体の機能やできることに違いはある。しかし、社会に参加できることや、給料を得られること、人の役に立てることなどに喜びを感じるのは同じだと思う。また、わずかな時間ではあったが利用者らと交流する中で、障害者というのは一つの個性なのだと感じた。同じグループの中に様々な性格や考えの人がいるのと同じことだと思う。私はこれまで障害者との関わりはほとんどなく、障害者に対してネガティブなイメージを持っていた。しかし利用者との会話をすることで笑顔を見せてくれたり、自分から話してくれたりするようになって、私自身が会話を楽しめるようになった。もちろんコミュニケーションが上手く取れないこともあったが、貴重な経験ができたと感じる。漠然としたイメージで判断するのではなく、実際に知ること、関わることで理解へと繋がった

と思う。障害を差別するのでも特別視するのでもなく、自分とは違う個性を持った人がいるのだ、というように考えることができれば、共生社会の実現に一步近づけるのかもしれない。

また、これも 3 節で述べたが利益が優先となるかどうか企業が福祉作業所の違いに繋がっているとわかった。労働時間は齊藤商店のほうが長く、賃金も比較的高かった。さらに障害者も従業員であるため、企業側としては役に立ってもらわなければならない。そのため指導も厳しく行われてきたようであった。それに比べると、福祉作業所は独特な場所だと思う。業務委託作業が多く、もらえる賃金もわずかなものだ。私も一緒に作業をしたが、淡々となすものも多く、やりがいは得づらいように感じた。しかし、障害のある人にとって福祉作業所はなくてはならないものだと思う。理事長の尾崎さんは、これからは業務委託作業だけでなく、あけぼの第二で作られているような昆布もちなどの自主製品の販売に力を入れていきたいとおっしゃっていた。それらの作業がメインになればやりがいも感じやすくなるかもしれないし、利用者がより主体的に作業に参加することが可能になるかもしれない。

手をつなぐとなみ野も齊藤商店も、障害者の親によって子どもたちの幸せを願ってつくられた。あけぼの第一を皮切りに砺波地域に障害者施設の充実を図った穴田清さん、障害を持つ息子が働く場所として豆腐店を始めた齋藤寛明さんの活動は、それぞれのやり方に違いはあるが、小矢部市や砺波地域に障害者の居場所をつくる先駆けとなった。お話を伺った際は、お二人の支援にかける熱い思いに圧倒された。人生をかけて取り組まれた活動により、小矢部市の障害者支援が広まっていったのだとわかった。最初はわが子が幸せになるように、という思いから始まった活動だが、今では多くの障害者とその家族を幸せにする手助けとなっている。さらに手をつなぐとなみ野で働く職員は障害者の親だけでなく、一般募集による採用者も増え、話を聞いた職員の中には身内に障害者がいないという方もいらっしやう。利用者それぞれに合わせた支援は難しいという話もお聞きし、私自身も利用者と接する際にはその難しさを体験したが、利用者に対する職員の姿は真摯なものであると感じた。

また手をつなぐとなみ野も齊藤商店も、地域との交流が盛んに行われ、地域の方の障害者理解も徐々に進んでいると思われる。調査結果では触れなかったが、今回、調査の一環で 8



写真 21 夏祭りの様子

月 2 日に行われた「あけぼの & めるへん夏祭り」にボランティアとして参加した (写真 21)。これは令和元 (2018) 年で 8 回目となるイベントで、手をつなぐとなみ野と溪明会が主催となって運営している。会場はあけぼの第二の駐車場を使い、ステージと飲食スペースが設置され、焼きそばやかき氷などの屋台が並んだ。誰でも参

加できるイベントで、特に親子連れや年配の方が多く見られた。職員に聞くと、地元の方が多いが、たまたま通りかかった人が来てくれることもあるそうだ。尾崎さんは、利用者にどんな人がいるのか、障害者とはどういう人なのか、ということを知ってもらいきっかけになっているとおっしゃっていた。斉藤商店では、地域のゴミ捨て場の鍵当番を息子の勇旗さんが担当しているそうで、朝早くに開けて掃除もされているため、地元の方から感謝されるようになったという話を聞いた。寛明さんは、勇旗さんが地域に溶け込んでいると感じているそうだ。これらのエピソードは一例ではあるが、障害者が地域に受け入れられ、良好な関係を築いていると感じた。

小矢部市における障害者支援がさらに発展し、地域住民の理解や支援の輪が進むこと、そして今後も障害者が生き生きと働き続けることができるように願っている。

謝辞

今回の調査にあたって、ご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げます。

お忙しいにもかかわらず度重なる訪問にも快く応じていただいた、福祉作業所あけぼの第一・あけぼの第二の皆様、手をつなぐとなみ野理事長の尾崎順子様、前理事長の穴田清様、斉藤商店の皆様。手をつなぐとなみ野および斉藤商店をご紹介、ご案内いただいた前田昌子様。皆様のご厚意で今回の調査を無事終えることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

福祉教育カレッジ編『イラストでみる介護福祉用語事典（第5版）』,医学評論社（平成24年）

中央法規出版編集部編『四訂 社会福祉用語辞典』,荘村多加志（平成19年）

参考ウェブサイト

「全国手をつなぐ育成会連合会」〈<http://zen-iku.jp/aboutus>〉（令和元年10月30日閲覧）

「一般社団法人富山県手をつなぐ育成会」〈<http://toyamaikusei.jp/publics/index/2/>〉（令和元年10月30日閲覧）

「社会福祉法人手をつなぐとなみ野」〈<http://www.tonamino.or.jp/>〉（令和元年11月5日閲覧）

「社会福祉法人溪明会」〈<https://www.keimeikai.jp/>〉（令和元年12月22日閲覧）

「ボードレス・アートミュージアム NO-MA」〈www.no-ma.jp〉（令和2年1月14日閲覧）

「特定非営利活動法人日本臨床美術協会」〈www.arttherapy.gr.jp/〉（令和2年1月14日閲覧）

「とやまの地域共生」〈www.toyama-kyosei.jp/〉（令和2年1月24日閲覧）

末友における農業の変遷と新たな女性の役割

高島加奈子

はじめに

私が初めて末友を訪れた時、のどかな田園風景が広がっており、どこか懐かしさを覚えた。道の途中には、史跡の看板がいくつか見られ、古い歴史がある地域だと感じた。そこで、たまたま末友営農組合前代表の松本英俊さんにお会いした。同組合に設置されている加工部についてお話を伺い、女性による地域づくりが行われていることを知った。各地で機械化が進み、女性の出番が無くなっている中、女性の新たな居場所が創出され、地域の発展につながっているという動きに深く関心を持った。それと同時に、機械化が進む以前、末友ではどのような農業が行われていたのかについても興味を持った。

この報告では、末友に住む方からの聞き取りをもとに、末友のかつての農業と、現在行われている農業について記述し、どのように農業が変遷してきたのかを検討する。次に、組合員の方への聞き取りや実際の作業の様子をもとに、末友営農組合加工部について記述し、農村における女性の新たな役割について考察する。

1. 末友集落の概要

末友の概要については、『小矢部市北蟹谷地区史抄』（大谷昭三、2015年）及び『ふるさとのこころ 第5集 おやべのかおり』（小矢部市商工観光課、1979年）を参考にして記述する。

1-1. 調査地「末友」について

現在、北蟹谷地区は^{かんだ}棚田・末友・白谷・内山・^{はちぶせ}八伏・蟹谷五郎丸・八講田・北一・松尾・松永の10の集落で構成されている（図1）。なお、明治の頃には「今寺村」が末友と白谷の間にあったが、現在は末友となっている。また、新田開拓をその地名に残す「末沢新」と「川開新」はその殆どが白谷となっている。小矢部市の南西部に位置し、東は東蟹谷地区、西は石川県津幡町、南は南砺市福光町、北は埴生地区と隣接している。集落の中央を東西に国道359号が末友・五郎丸・内山集落地内を通過して、金沢市へと通じる主要幹線道路として貫通している。また、東部を南から北に県道砂子谷埴生線が白谷集落を通り、末友集落地内で国道359号と交差し、北一・棚田・松尾・松永集落地内を経て埴生地区へと通じる幹線道路となっている。また、北陸自動車道が地区の南部を東西に貫通しており、交通の要所となっている。地区内を流れる主な河川は、白谷・末友・北一・棚田へ

と北流する渋江川を本流とし、内山・五郎丸・北一へと北流し、棚田集落地内で渋江川に注ぐ五郎丸川がある。蟹谷の名称については、県境にため池があり、そこに大蟹の怪物がいたとの伝承が由来とされている。国道 359 号が渡る五郎丸川には、蟹の死骸が掛かっていたとされる「蟹掛橋」があり、八伏の集落名は、大蟹の甲羅に大人が 8 人伏せることができたという伝承に由来するとされている。また、当集落のため池は「蟹池」と呼ばれ、大蟹の棲んでいた池だったとされるなど、蟹にまつわる伝説が数多く残っている。



図 1 北蟹谷地区における末友 (国土地理院地図より作成)

末友集落は地区の南西部に位置し、渋江川によってもたらされた扇状地にある。この集落の中央を県道、南部に北陸自動車道が通っており、交通の要所となっている。また、北蟹谷公民館、保育所、郵便局、コミュニティ広場などの公共施設があり、この地区において中核を成す集落である。集落内を流れる渋江川はしばしば氾濫するやっかいな暴れ川として知られており、人々を悩ませてきた。川幅の拡張や橋の架け直し、流れを改良するための工事が何回も行われてきた。史跡・文化財として勝興寺の鐘桜跡と第八代実玄、第9代顕栄の墓所「火灯山」がある。

勝興寺は文明 3(1471)年に本願寺 8 世蓮如上人が、北陸不況の中で蟹谷庄土山(旧福光町土山)に建立した「土山御坊」が始まりである。明応 3(1493)年に便の良い高木場へ移るも、永正 16(1519)年に越中国守護畠山勢の兵火で焼失し、同年、安養寺(現末友)に転じ、安養寺御坊と称した。平城の構えと備え寺内 3 千軒、寺領 8 万石といわれ、越中一向衆の最大拠点となっていたが、天正 9 (1581) 年に住職頭幸が石山合戦¹⁰⁸に出陣中、木舟城¹⁰⁹主石黒左近道之に焼き払われた。現在はかつての寺院跡のほとんどが水田になっている。

県道砂子谷埴生線と国道 359 号線の交差する辺りにかつて商店街が形成されており、現在も残っている「松商店」や「橋本豆腐店」の他、魚屋、塩屋、居酒屋、散髪屋など多くの店があった。戦後は活気に溢れており、「末友銀座」とも呼ばれていたと言う。商店街は「どんべ」と呼ばれており、勝興寺の土塀があったことが由来とされる。また、渋江川に架かる橋は「上御亭橋」と呼ばれており、「御亭」とは住職が建てた遊び見物の建物のことを指す。このことから、橋の周辺に勝興寺の住職が御亭を建て、川遊びの様子を見物していたと推測されている。このように、集落の至るところに勝興寺の名残が見られ、末友の成り立ちに関わっていると考えられる。

1-1-1. 人口・生業

末友集落の世帯数は、『小矢部市北蟹谷地区史抄』によると、昭和 37 (1962) 年には 100 軒あり、平成 12 (2000) 年には 107 軒あった。末友の村史を作っておられる野沢敏夫さんに現在の世帯数をお聞きしたところ、96 軒あるそうで、世帯数に大きな変化は見られない。しかし、若者の市街地への流出が激しく、高齢化が顕著となっている。生業は農林業を中心に、副業として、養蚕や藁加工の生産をしていた。山間丘陵地であるため、土地を開拓し、用水を引いて米作りをするのに、大変苦勞した。昭和 40~50 年にかけて、土地改良が進んだことにより、農業形態は大きく変化していった。冬場は仕事が無かったため、日雇いで市内の土木会社に働きに出る人が多かったと言う。また、納屋で藁打ちや縄ないを行い、俵やわらじ、草履、むしろなどの藁製品を作り、僅かながらの現金収入を得ていた。

1-1-2. 行事・芸能活動

末友に古くから残る伝統行事として、獅子舞がある。氏神・末友八幡宮の春と秋の祭礼に神社境内で舞い、奉納した後、隣接の西教寺でも舞う。令和元 (2019) 年は、4 月 20 日と 9 月 15 日に行われた。獅子舞の際には、「末友獅子方若連中」の名で舞う。獅子舞の道具は「獅子宿」が保管し、獅子は獅子宿で舞ってから八幡宮に向かう。獅子宿に帰ってきて、再び舞い、舞い納めとなる。獅子宿は主に蔵のある家が数年毎に持ち回りで担当している。獅子舞の種類は、「百足獅子」で獅子頭を含め、蚊帳の中に 8 人が入る。演目は「道中」「にら

¹⁰⁸ 織田信長と摂津国石山本願寺派に拠る本願寺第 11 世頭如との間で元亀 1 (1570) 年から天正 8 (1580) 年までの 11 年間にわたって続けられた合戦。(ブリタニカ国際大百科事典)

¹⁰⁹ 富山県高岡市福岡町にあった城。同県指定史跡。(日本の城がわかる事典)

み」「サンビツ」「イ」「ロ」「ハ」など16種類あり、2時間余りの時間をかけて舞う。十年ごとの記念年度は2頭の獅子頭を使い奉納する。令和元（2019）年で120周年を迎え、記念の舞いの他に餅まきなどが行われた。地元の方によると、末友には昔、大きい蔵を持っている「オヤッサマ」と呼ばれる地主が10軒ほどあり、昭和55（1980）年頃までは、「オヤッサマ」の家系の子どもが獅子舞の頭を振るのが伝統だった。昭和60（1985）年頃に、青年団員全員が分担して、いずれかの演目の獅子頭を振るよう改められ、今に至っている。また、男子が踊り子を務めるのが伝統だったが、少子化により女子も踊り子を務めるようになった。

現在、「めるへん劇団」として活動している小矢部の市民劇団の創設には、末友の若者がその中心的役割を果たした。末友では、大正の初期に勝興寺の山号「雲竜山」に因み、「雲龍団」と称した劇団を結成し、素人芝居を行っていた。戦後になってからは、「かんだヤング楽団」を略した「KY楽団」が生まれ、各地を巡回しながら演奏活動を行った。昭和55（1980）年には当時の青年団により、秋祭りの余興として村芝居を演じる「末友劇団」が旗を揚げ、「桃太郎」や「孫悟空」、「水戸黄門」などテレビで馴染み深い時代劇などを演じ、人気を博した。平成3（1991）、八幡宮に玉垣設置工事が行われ、その完成が10月となったことから、秋祭りも10月となり、夜に野外で行う余興は中止となり、そのまま末友劇団は途絶えた。しかし、奇しくも同年に設立された「めるへん劇団」において、世代を超えて芸能文化を楽しむ「末友気質」が今も続いている。



写真1 獅子舞50周年の記念写真
(写真提供:野沢敏夫様)

2. かつての農業

ここでは、農業における機械化が進展する以前、末友で行われていた稲作を中心とした農業について記述する。現在、末友集落の村史を作っておられる、野沢敏夫さんに伺ったお話を参考にして記述する。

2-1. 田起こし

田起こしは春先にかけて行われる作業である。田んぼに水を張る前に、荒起こしと呼ばれる作業を行う。馬や牛に犁を引かせて直線状に耕していき、男性は犁の後ろを持ってかじ取りとなる。深く耕すほど養分のたくさん混ざったいい土になるという。荒起こしの次に代掻きという作業を行う。荒起こしだけでは、土の塊が大きくて固いため、田んぼに水を入れてならし、馬鋤を牛や馬に引かせて、もう一度土を細かくして柔らかくする。また、田んぼ全体を平らにしないと、水が全体に行き渡らないため、柄振りを使って高いところから低いところに土を持っていく。この柄振りは、末友では「イブリ」と言われていた。イブリである程度表面が平らになると、仕上げ作業として木の棒を引っ張ってならした。一連の作業が終わると、畔に泥を塗る作業が行われる。

2-2. 苗作り

苗作りは、そのために用意した田、「苗代田」で行われた。「水苗代」は他の田より先に代掻きした苗代田に水を張り、種籾を直撒きしていた。種籾は予め消毒液の入ったぬるま湯に漬けておいてから使用した。寒いと苗の育ちが悪いため、ある程度温かくなるのを待ち、4月中旬頃に種籾を撒いていた。昭和30（1955）年頃には保温折衷苗代が導入され、代掻きした田に畑の畝のように土を高く盛り上げた揚床を作り、そこに播種し、覆土した後に焼き籾殻をかけ、その上に油紙を被せた。これによって、苗代の温度が2、3度上がり、苗の成長を早め、また良い苗がとれた。

2-3. 田植え

5月半ばになると、田植えが始まる。田植えの前日や当日の早朝に、15センチほどの長さに揃った苗を苗代から抜き取り、根に付いた泥を水洗いして、直径5cmの束にして藁で縛っておく。田植えには田植え定規が使われた。この定規とは、長さが2〜3メートルの六角柱で、田んぼに転がして等間隔の跡をつける道具である。定規を転がす作業は男性が行っており、定規の跡に沿って女性が田植えをしていた。女性は、竹で編んだ苗かごを腰につけて、そこから苗の束を取り出し、藁を解き、2〜3本ずつ指で挟んで植える。田植えは女性が一年のうちで、最も活躍する時だった。

その反面、一日中腰を曲げて作業をするため、かなりの重労働であった。朝5時頃から始まり、暗くなって手元が見えなくなるまで田植えをしていた。家族だけでなく、親戚や近所の人を集めた



写真2 田植え定規
(本来は紙がついていない)

「イイ」(結)によって総出で行われた。農村が共同体社会で成り立っていたことの象徴的な姿の一つであった。身重の女性も田植えに駆り出されていた。赤ん坊のいる女性は、赤ん坊を抱いて乳をやりながら田植えをしていたそうで、ご飯を食べる暇などないほど忙しかったという。また、小学校に通う子どもたちは、「五月休み」という一週間ほどの休みがあり、田植えを手伝っていた。一日中続く重労働で唯一の楽しみであったのが、10時と3時の「一服」だったようだ。「一服」では、ポン菓子をごちそうとしてよく食べていた。米に圧力をかけて熱をかけると、破裂するときの音から、末友では「ポカン」や「ドカン」と呼ばれており、親しまれたお菓子だった。

6月10日が田植え終わりの目安とされており、末友では「やすんごと」や「田植え盆」と呼ばれていた。この日のために、酢飯の上に酢でしめた鯖を乗せて、山椒やショウガの葉も添えて、山から取ってきた笹で包んだ笹寿司が作られた。6月は新しい笹で、葉が柔らかいため、笹寿司は季節の食べ物として親しまれてきた。もっぱら笹寿司が作られていたが、笹もちを作る家もあった。そして、親せきや近所の人々と笹寿司を食べながら、田植えの苦労を労い合い、疲れた体を休めた。

2-4. 草取り

草取りもまた女性の仕事とされていた。草取りの時期は、田植えが終わる6月初めから7月中旬にかけて行われた。除草剤がない時代であったため、八反取りという手押し式の除草機を使っていた。歯車が付いており、回すと土が掘り起こされ、草が押し込まれる仕組みである。新しく生えてきた雑草や八反取りだけでは取り切れなかった雑草は、鎌で草取りを行っていた。夏の炎天下の太陽が照り付ける中で、水田の照り返しを受けながら、腰を曲げたままの長時間の草取りは田植えに匹敵するほどの重労働であったという。稲が顔にすれて痒くなったり、目を突くこともあったため、顔に網をかけて草取りをしていたようだ。一番草、二番草と言って、全部で3回草取りを行っていた。

2-5. 稲刈り

9月になると稲刈りが始まる。稲刈りも田植えと同様、「イイ」で協力して行われた。子どもは秋休みという1週間ほどの休暇があり、家の稲刈りを手伝うなどしていた。鎌で稲を刈り取り、稲を8株1束を藁で縛っておく。それをいくつもの同心円を描くように並べて日干しした後、「ハサ」にかけて乾燥させる。「ハサ」とは、刈り取った稲を天日干しするため、木材で柱を作り、横木を何本か掛けて作られたものである。ハサ作りは、家の主である男性が中心となり、女性はその補助に当たり、男女共同で行われていた。ハサ作りの手順として、まず支柱となる3~4メートルの太い丸太4、5本を、穴を掘った地面に3メートル間隔で垂直に立てていく。女性は横木となる竹の棒を男性に渡す補助に当たり、4、5段作る。稲の管理が行い易いようハサは家に近い田んぼの一角で作られた。冬になると、ハサをばらして、翌年また新しいハサを作る。ハサだけでなく、「かためによう」もよく使われ

た。「かためによう」とは、天日干しした稲を穂先を中心に向け、円形状に並べ、それを数段重ねて高さ 1.5m まで積み上げて作られるもので、その一番上には藁で作った円錐状の簡易な屋根を被せて雨除けとした。「かためによう」は夕方に稲を集めて作り、翌朝には解体される。稲は再び天日干しされ、乾燥しきるまでそれを繰り返した。

稲刈りが終わった後、田んぼに肥やしとして、ニシンの魚肥や乾燥した鶏糞、細かく切った藁、藁を燃やしてできた灰を撒いていた。牛馬の糞は臭いがきつく、撒くことはほとんどなかった。毎年すべての田んぼに撒くのではなく、その年、収穫が悪かった田んぼにだけ肥やしを撒いていた。

2-6. 脱穀

稲が乾燥してくると、ハサから下ろし、稲を縛った後に脱穀を行う。脱穀は、乾燥させた稲の穂先から籾を落とす作業で、足踏み脱穀機を使っていた。脱穀した籾が乾燥不十分な場合は、籾だけを再び天日干しし乾燥させていた。藁は冬場の藁加工や家畜のエサ、肥やしなど様々な用途に用いられるため、大切に保管していた。

2-7. 籾摺り

籾摺りは籾から籾殻を除去して玄米にする作業である。籾摺りには発動機を動力にした籾摺り機を使っており、1ha 以上の水田を持っている家では、それぞれ持っていた。籾殻は田んぼの肥やしとして、そのまま撒いたり、燃やしたものを撒いていた。また、籾殻にサツマイモなど食べ物を入れておくと、腐りにくいため、保存の上でも重宝されていた。籾摺り機にかけた後は、^{びんせん} 選別機という選別機にかけて、粒の大きさによって米を選別していく。粒が小さい米は「イリゴ」と言い、これは鶏のエサになるため、鶏を飼っている家に安く売ったり、商人に売ることもあった。粒の大きい一番米はカマスや俵に入れて農協に出荷していた。カマスや俵は冬仕事で作ったもので、各家で上手い下手が分かれたそうだ。1俵の重さは 60kg あり、これをいくつも運ぶのが重くて大変だったという。

2-8. 家畜

末友では、馬や牛を持っている家が何軒かあった。馬や牛がない家は、農繁期に限り一週間ほどそれらの家から借りていた。世話は家族みんなで協力してやっていたが、馬を扱う作業は父親が中心だった。餌をやるのは母親の仕事で、藁を細かく切ったものをやっていたそうだ。藁は「かためによう」と同じ方法で積んだ「藁によう」で保存し、晩秋から早春にかけて集落の至る所に見られた。藁は牛や馬の冬季の食糧として貴重であったが、縄や草履、むしろ、



写真3 当時の馬小屋(野沢様宅で撮影)

かますなどの藁製品の原材料や土壁の中にすき込むなど、多用途に使われ、農民にとって無くてはならないものだった。馬や牛を養っている家では、子どものように馬や牛を可愛がっており、名前もつけていたそう。ヤギを飼っている家もあり、ヤギの乳を搾って飲んでいった。昭和 30（1955）年以降は耕運機が導入されたことにより、牛や馬を囲う家はなくなったという。

2-9. その他の作物

米以外には、大麦や小麦、ソバ、サツマイモなどを作っていた。米の消費を少しでも少なくするために、米の中に麦やサツマイモ、豆を入れて腹持ちをよくしていたそう。学校のお弁当には米の中にサツマイモを入れてあるか、先生にチェックされており、入っていないと贅沢だとして怒られたという。また、米の代用食として、小麦や 2 番米を臼で挽き、こねて団子にして食べることもよくあった。美味しくなかったが、腹を満たすため我慢して食べていた。ソバは町の製粉所に持っていきソバ粉にしてから、熱いお湯をかけて「蕎麦がき」にして食べるのが一般的だった。米が一番のごちそうであったが、量が十分ではなかったため、お腹一杯食べることは減多になかったそう。

3. 現在の農業

農業従事者¹¹⁰の高齢化や後継者不足の問題から、昭和 62（1987）年に任意組合として末友営農組合が設立された。現在、集落内のおよそ 92%の農地の耕作を行っており、そのほか様々な事業を展開するなど、活発に活動している。長年にわたる地域農業への貢献により、富山県農村文化賞や富山県産業功労賞を受賞するなど、富山県を代表する農業組合法人として知られる。

この節では、末友営農組合の構成や作業内容、組合員の語りなどを記述していく。

3-1. 末友営農組合について

まず、集落営農組織について説明する。農林水産省によると、集落営農は「集落を単位として、農業生産過程の全部又は一部について共同で取り組む組織」と定義している¹¹¹。

¹¹⁰ 調査期日前 1 年間に自営農業に従事した者。

¹¹¹ 集落営農について：農林水産省

http://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/n_seido/seido_syuuraku.html

集落営農の形態には、(1) 集落で農機を共同所有し、集落ぐるみの計画に基づいて共同利用する、(2) 集落内の農地全体を一つの農場とみなして営農を一括管理・運営する、(3) 集落ぐるみで意欲ある農業者に農作業を委託し、農地の集積を進めている、(4) 特産品や転作作

以下では、末友営農組合について記述する。

3-1-1. 設立の経緯

末友集落の水田は、標高 50m～90m にあり、特に山際の田の法面の勾配は 1/75 以上と急傾斜にあることもあり、畦畔法面が大きいことから管理に苦勞する条件下にある。時代が進むうちに、農業従事者の高齢化や若者の農業離れなどの問題が深刻となり、水田の維持管理が困難になっていた。そんな中、昭和 40～50 年頃にかけて、末友では土地改良が進み、水田の面積が大きくなり、大型機械を入れやすくなった。それをきっかけにして、共同で集落内の水田を管理しようという話が持ち上がり、営農組合設立へと動き出した。当初は意見がまとまらないこともあり、設立までに苦勞を要したようだ。そして、昭和 62 (1987) 年に末友営農組合が設立され、平成 11 (1999) 年に法人化された。

3-1-2. 構成

結成当初は、集落内の農家 80 軒のうち 60 軒が出資して加入していた。現在は、集落内の農家 70 軒とそれ以外の地域で耕作を依頼する 4 軒を含めた 74 軒が営農組合に加入している。農業専従者は 4 人おり、基本的にはこの 4 人が中心となって農作業に当たっている。専従者の 1 人は 30 歳になったばかりで、若者の存在はとても大きいという。

3-1-3. 栽培品種と作付面積

集落内の耕作地は 84ha あり、そのうち 77ha の土地の耕作を末友営農組合が行っている。主な栽培品種は、五百万石酒米、コシヒカリ、新大正もちの 3 種類の水稲だ。水稲の作付面積は 52ha で、収穫量は平均 10a につき 8 俵ほどで 480 kg になるようだ。末友集落は土壤が粘土質で水が冷たいことから、栄養豊富で美味しいお米が収穫できることで知られている。そのほか生産調整で転作を行っており、大麦、大豆、ハト麦を栽培している。毎年の米価変動により大きな打撃を受け、50a 程度の小さな面積で試行錯誤しながら集落の土壤に適合すべく野菜を生産していたが、平成 23 (2011) 年から生産面積を増やした。現在はおよそ 2ha で、ハクサイ、キャベツ、タマネギ、ニンニク、カブ、大根、ニンジン、ブロッコリー、盆花など多岐にわたって野菜・作物の栽培を行っている。

物作付地の団地化など集落内の土地利用調整を行っている、などがある。集落営農は個々の農家には負担の重い農作業を、農機の共同利用や作業共同化で効率化できる利点がある。また、認定農業者、農業生産法人、オペレーター組織など意欲ある専業農業者が農業生産の担い手となることで、耕作放棄地の拡大を防ぎ、高齢者、女性、兼業農家の作業を楽にする利点もある。さらに、規模拡大の障害となっていた個々の農家の農地点在問題を解消し、農地面積集積による規模拡大効果を期待できる。

3-1-4. 当番と年間スケジュール

基本は農業専従者が作業に当たるが、春と秋の農繁期には、各家の農家から若い人に当番制で、主に休日に手伝いに来てもらっている。人手を確保することはもちろんだが、若い人の農業離れに対する強い危機感も関わっている。若い人たちの中には、石動など市街地のアパートに住んでいる人が少なくなく、時折しか実家に戻ってこないため、「せめて集落に住んでいる若い人たちには、集落の田んぼをみんなで守るということを自覚してほしい」と組合代表の吉田さんは言う。また、農業専従者に若い人がいることで、手伝いに来た若い人たちとの意思疎通がしやすく、作業もはかどり、地域でのつながりもできるそうだ。

一年間のスケジュールは以下である（表1）。

表1 一年間の作業スケジュール（組合員の方への聞き取りより作成）

4月	土壌改良資材の散布、育苗、荒起こし、代掻き
5月	田植え
6月	田んぼの溝堀り、ハト麦・大豆の土寄せ、大麦の収穫
7月	あぜ草刈り、農薬散布
8月	田んぼの水干し
9月	早稲品種・コシヒカリの稲刈り、乾燥、粃摺り、出荷
10月	大麦の播種作業、ハト麦・大豆の収穫
12～3月	機械の分解整備

3-2. 組合員の語り

昔と比べて大きく変化したことについて聞くと、機械化の進展が真っ先に挙げられた。昭和30年代は馬に犁や馬鋤を引かせて田んぼを耕していた。その後、耕運機や小さなトラクターが導入されたことで負担は減ったが、それでも多くの時間と労力を費やしていたという。現在は、機械が大型化し、機能がたくさんついていて、昔とは比べものにならないほど効率的に作業できるようになったそうだ。また、昔はすべて手作業での水田仕事であったため、どんな作業も水田の中を歩き回らざるを得なかった。今では機械に乗って水田仕事を行っているため、スニーカーでも作業ができるという。また、「今のやり方は、すべて手作業でやっていた頃とは全く違うため、お年寄りからアドバイスをもらうということもない」という声も聞かれた。新しいやり方について、地元のお年寄りは口出ししてくることはないそうだ。

もう一つの変化として、女性の役割の減少も挙げられた。上述した機械化により、省力化が進み、女性の出番は無くなっていった。女性の力では大型の機械を扱えないということで女性の農業離れにつながってしまったという。現在、女性が農業に関わる機会は各家庭での畑仕事を中心になっている。

最近頭を悩ましている問題として、イノシシなどの獣害が挙げられた。以前から、イノシ

シヤハクビシンが出ることはあったが、それほど大きな被害ではなかった。しかし、5年ほど前から、特にイノシシがよく出るようになり、被害が拡大していったという。組合代表の吉田さんにお会いした日も、イノシシが罠にかかり、その対処に追われていた。積雪量が減ったことや、離農によって耕作放棄地が増加し、イノシシが好む環境が形成されていったことが原因と考えられる。イノシシによる被害は、土を掘り起こされ、作物を荒らされることが多いが、田んぼの場合は稲に臭いがつくことも挙げられた。イノシシは体に付着した汚れやダニなどの寄生虫を落とそうと、田んぼに入って転がり、体をこすりつける。それによって、稲が臭くなってしまい、出荷できなくなってしまう。

この獣害対策として、イノシシ用電気柵や檻、箱ワナなどを設置しているが、費用がかさむと共に、管理する人員体制の確保が必要なことから、設置が追い付いていないという。また、電気柵は周りの草が伸びて柵の電線に触れると放電してしまい、イノシシが感電しなくなるため、日頃の草刈り管理が必要だ。以前、捕獲したイノシシをジビエ料理に活用しようという話もあったが、捕獲数が少なくビジネスにならないことや、血抜きなどの処理をできる人がいないことから、実施には至らず、現地での埋設や焼却場での持ち込みで対応しているそうだ。イノシシは、身体能力や学習能力が高いだけでなく、繁殖力も高いことから、今後さらに被害が増える可能性がある。

今後の課題について聞くと、人材の育成が真っ先に挙げられた。若い人の農業離れを食い止めるためには、農業の素晴らしさや魅力を感じてもらうことが大事という。お話を伺った方が若い頃、農作業を手伝いに行った際、年配の方たちに口うるさく言われ、農業の魅力をあまり感じられなかったそうだ。そのため、若者に農業の魅力を感じてもらうには、若者がそれを発信していくことが必要だと考えているとのことだった。

4. 新たな女性の役割

末友営農組合では、加工部が設置される前、売上高に占める米の販売比率が99%以上を占めていた。そのため、毎年の米価の変動で、多大な影響を受け、経営発展への大きな障壁となっていた。また、機械化の進展で、人手がいらなくなり、大型の機械を扱える男性の力が重要になった。それにより、農業における女性の役割は縮小し、女性の拠り所がなくなってしまった。そこで、女性による地域づくりを目指すため、6次産業化に着手することとなり、同組合内に加工部が設置された。ここでは、加工部のこれまでの経緯や仕事内容、加工部員の語りなどを述べていく。

4-1. 末友営農組合加工部について

まず、6次産業化について説明する。農林水産省によると、6次産業化とは、「1次産業としての農林漁業と、2次産業としての製造業、3次産業としての小売業等の事業との総合的

かつ一体的な推進を図り、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組」とされている¹¹²。末友営農組合では、この6次産業化に着手すべく、加工部の設置に至ることになった。以下、加工部の詳細について記述する。

4-1-1. 設立の経緯、構成

平成7(1995)年に国の食糧管理制度¹¹³が廃止され、米の自由化が推し進められたことで、各地の農家は悲鳴を上げていた。末友営農組合も同様で、かつては60kgあたり20000円ほどで国が買い上げていたが、廃止後は、60kgあたり12000円にまで下落した。営農組合の売り上げ高に占める米の販売比率は99%を占めており、米価下落は大きな打撃となった。そこで、新たな事業を展開すべく、女性による6次産業化に着手することとなった。米作りで機械化が進展したことにより、米作りの効率が飛躍的にアップした。その反面、女性の仕事は苗箱を洗うぐらいで、ほとんどなくなってしまったと言う。その女性のパワーを農村の活性化に生かすため、平成23(2011)年に同組合内に加工部が設置された。結成当初は代表の野澤淳子さんを含めた3人だけだったが、声掛けにより、現在は40代~80代までの幅広い年齢層の約20人の女性組合員が加入している。

4-1-2. 活動の転機

設立当初は、真冬の雪の降る中、国道359号の末友交差点横にテントを張って、末友営農組合で秋・冬に収穫した白菜などの野菜や漬物などを販売していた。その後、白菜キムチなどの加工品も販売し、人気を得ていた。しかし、原料が越冬野菜であったため冬場に限りられており、年中活発に活動するまでには至らなかった。

そんな中、末友集落に隣接する北一集落の竹田菓子舗が廃業したことが、加工部に大きな転機をもたらした。店主の竹田丈夫さんは父の後を受け継ぎ、2代目として婦人と二人三脚で店を切り盛りしていた。付け届け¹¹⁴で贈られる餅加工品が店の主力商品だったそうで、地元では大変人気のある和菓子屋だったようだ。しかし、体が思うように動かなくなり、後継者もいなかったため、一度は閉店を考えたが、地元の方の説得により、農産物直売所「村の駅きたかんだの里」に限りもちを販売していた。しかし、2年ほどで限界を感じ、もち作りも止めることになった。

地元では「店が無くなってあいそんない(「寂しい」の意味)」という声をよく聞いたそうだ。野澤さん自身、以前からもち作りをしたいという特別な思いがあったと言う。野澤さん

¹¹² 農林水産省, “農林漁業の6次産業化,”

<http://www.maff.go.jp/j/shokusan/sanki/6jika.html>.

¹¹³ 日本における主食である米や麦などを安定して国民に供給するために制定された制度で、政府が生産者から高く米を買い上げ、消費者に安く販売するという仕組み。

¹¹⁴ 嫁の実家から婚家の家族・近所・親類に届ける贈り物。

は当時の組合長であった松本英俊さんの亡くなられたご婦人と親交があり、町内を楽しく元気にするために色々なことをしようと約束していた。彼女の思いを叶えたい熱い思いが竹田さんに伝わり、機械を無償で譲り受け、2年ほど技術指導をしてもらうことになった。技術指導では、鏡餅や伸し餅、とぼ餅¹¹⁵などの作り方を教わり、それに伴う機械の操作や成型の仕方を学んだ。加工場は農機が大型化したことで使われなくなった営農組合の格納庫を改修して整備した。当時は、この場所を利用して加工をすることに対し、集落のお年寄りから反対の声もあった。そのような中、6年前からもちの加工・販売が始まり、今では最も人気の商品となっている。地元の人からは「竹田さんの味を受け継いでいる」と大変好評と言う。このように、もちの加工が始まったことにより、加工部は年中活発に活動していくこととなり、退職後の女性の拠り所となっている。平成25(2013)年には、北陸農政局男女共同参画優良事例表彰を受けるなど、功績が評価されている。

4-2. 加工部の活動

加工部の主な活動は、毎週金・土・日曜日に行われる。国道359号末友交差点には、10年前に北蟹谷地区の6つの集落営農組織が協力して旧農協ガソリンスタンドを改修して開設した農産物直売所「村の駅きたかんだの郷」があり、主にそこに商品を配達する。営業開始の8時に間に合うよう、早朝から作業が始まる。加工部を立ち上げた当初からのメンバーで、野澤さんを含め3人で加工に当たっている。村の祭りや慶弔、法事など繁忙の際は、他のメンバーも手伝いにくる。この直売所は金・土・日のみが営業日であるため、何が店頭で並んでいるのか分かるように、その日ごとに販売する商品を決めて、貼り紙を張って事前に客に知らせている。直売所だけでなく、「Aコープおやべ」や道の駅でも販売している。また、リピーターの客もあり、直販も行っている。商品は人気ですぐに売り切れてしまうため、注文を受けた分の商品は別に確保しておき、サービスで配達も行っていると言う。

冬場には「かきもち」作りが始まる。「かきもち」を吊るすために一枚一枚を紐でくくる作業は、近所のお年寄りの手を借りている。紐で吊るした「かきもち」は、集落の空き家を借りて自然乾燥させている。このように、末友の「かきもち」は昔ながらの作り方で作っているため、それに長けているお年寄りはなくてはならない存在だ。また、正月の鏡餅の注文も受け付けており、集落到住む人から注文が殺到するため、冬場は一年のうちで最も忙しいと言う。

4-2-1. 独自のこだわりと工夫

加工部では、他の商品と差別化を図るため、独自のこだわりのある商品を作ることを重視している。加工品には添加物を使っておらず、自然の味を大事にしている。主力商品のもちは、もち米だけで作っている。そのため、翌日には固くなったり、味が変わったりしてしま

¹¹⁵ 棒状に成形したもち。北陸地方の家庭で冬に作られ、食されてきた。

う。こうした生ものについては、農産物直売所「村の駅きたかんだの郷」や地元のイベントのみで販売している。これまでの経験でどれくらい売れるかをだいたい把握しているようで、売れ残りが出ないように必要最低限しか作らないそうだ。半値での販売などはせず、作ったものをその日のうちに売り切ることを徹底している。

白菜キムチは、ピリ辛の「男キムチ」と辛さ控えめの「おふくろキムチ」の2種類の商品があり、辛さに差を付けて、消費者のニーズに合わせている。昔ながらのかめ漬けで一週間漬け込んでおり、手間暇かけて作られている。漬け物は全て手作業で作っており、健康に良い米ぬかで漬けるといったこだわりもある。また、夏場は塩分を多めにし、冬場は控えめにするなど、季節ごとに味に変化を加える工夫もしているそうだ。そのほか、冬に始まるかきもち作りでは、昔ながらの作り方を熟知している集落のお年寄りの手を借り、地元で親しまれてきた味を引き継いでいる。材料はほとんどが自分たちで生産した野菜や地元で収穫したものを使用しており、地産地消にこだわっている。

4-3. 作業の様子

加工部の作業の様子を伺った9月8日は、草もちと赤飯が作られていた。この日のメンバーは3人で朝6時から8時まで作業が行われた。もち作りでは、一晩水に浸け置きした米を蒸し器で蒸した後、竹田さんから譲り受けた機械を使い、自動でもちをついていた。もちの具合を見ながら、その都度水を差しており、これによって柔らかさを調節している。もちは用途によって柔らかさが異なるため、水の入れ加減には特に注意が必要という。この作業にはコツがいるらしく、加工部の中で野澤さんしかできない。もち米は営農組合が生産した新大正糯を加工部が買い上げたものである。また、草もちに使われるよもぎも、末友で採集したものを使っており、細かいところまで地産地消にこだわっている。



写真4 餅をつく作業

つきあがったもちに餡を入れて成型する作業では、メンバーの連携プレーによって次々に草もちが出来上がっていき、80個ほどになった。もちを成形する作業を機械ですると固くなってしまうため、全て手作業で作られている。赤飯は、小豆を茹でて汁を作り、もち米を浸して色づけした後、せいろで蒸す昔ながらの作り方で作られていた。作業をしながら、世間話をして楽しむ様子も見られ、コミュニケーションの場としても大きな意味を持っている。

出来上がったら、商品の一つずつ梱包し、ラベル貼りをして、直売所へ持って行く。一方、野澤さんは直販の注文があったお宅に商品を配達する。リピーターの客もおり、作業中にも何件も注文の電話が入っていた。配達が終わると、直売所に向かい、直売所に併設されているカフェでお茶を飲みながら談笑していた。客が来ると、「これおいしいよ」と商品を勧めるなど、積極的に会話を交わしている様子が見られ、直売所は客との密なつながりの形成に大きな役割を担っている。



写真5 餅を成形する作業



写真6 直売所での販売

4-4. 加工部メンバーの語り

ここでは、加工部の代表である野澤さんをはじめ、加工部のメンバーの語りをまとめていく。加工部での作業について聞いたところ、「ここでの仕事は習慣になっており、自分の生活の中で大きな比重を占めている」といい、生活の中の一つの楽しみになっている。女性だけの活動場所であることから、コミュニケーションの場としても大いに生かされている。また、「家族の理解や協力があるからこそ、加工部での仕事を続けることができる」という声も聞かれた。加工部のメンバーには、別の仕事をしている人もおり、出勤前に加工部の作業にくることもあると言う。「作業が早朝の時間帯に行われるため、時間を有効に活用できることもメリットの一つ」と語った。加工部の仕事から始まる一日は、生き生きとし、何事にもやる気が出てくるそうだ。代表の野澤さんについて聞くと、「加工部のリーダーとしてかじ取り役となり、とても頼れる存在」と語った。野澤さんが誰でもできるように作り方を教え、それをまねてやっていくうちに身についたそうだ。また、待遇面について聞くと、「毎月パートほどのお金を稼いでおり、それもモチベーションの一つ」と語った。「加工部で発揮される女性パワーに付随するかたちで女性の活躍の場がどんどん広がってほしい」という声も聞かれた。

4-4-1. リーダーの野澤さんのこれまで

野澤さんは孫育てが一段落したのを機に、20年ほど前から末友宮農組合の活動に携わる

ようになった。平成23年に加工部が設置され、部長となり、中心となって漬物の製造販売を行った。漬け物の作り方は母親から教わった作り方でやっており、今も野澤さん以外は作れないそうだ。白菜キムチの製造を始めた際は、作り方を習いに行っていたと言う。試行錯誤の末に独自の味を生み出し、完売するほど人気が出たことで、自信につながったと言う。「お客に『この前食べたけど美味しかったよ』とか『今度は何を作るのか』などと声を掛けてもらうのが嬉しく、意欲が湧いてくる」とやりがいを持って仕事に当たっている。

また、直売所について聞くと、「商品を出品することで、末友以外からも注文が入ってくるため、他の地域とのつながりもできる」と言う。わざわざ美味しかったと電話を掛けてくれる人もおり、それが励みになっているそうだ。今後やりたいことについて聞くと、「以前は惣菜もやろうという声もあったが、なかなかそこまで手が届かない。現状を維持することを一番に考えている」と語った。「定年退職した後の第2の人生を地域で仲良く和気あいあいと仕事を進めていきたい」と語り、老後も楽しみながら仕事ができる環境づくりを目指している。

野澤さんは加工部のリーダー以外にも、末友と北蟹谷それぞれの長寿会に携わり、地域の高齢者と様々な活動を行っている。以前は福祉推進委員も務めていた。生まれてからずっと北蟹谷に住んでおり、地区内のことに詳しいため何かと仕事が回ってくるそうだ。「1年中ほとんど休みがなく、多忙な日々を送っているが、この年になっても地域の人から頼られるのは嬉しいし、やりがいがある」と、地域に貢献できることに喜びを見出している。

5. まとめ・考察

これまで末友における農業の変遷と女性たちによる6次産業化について記述してきた。かつての農業において、女性は重労働や煩雑な作業を強いられながらも、重要な役割を担っていた。しかし、時代とともに若者の農業離れが深刻となり、営農組合が設立され、機械化が進む中で、地域で女性の仕事は無くなっていった。そこで、女性の余剰労働力を生かして6次産業化を目指そうと、営農組合に加工部が設置された。設立当初は、年中活動するまでにはいかなかったが、竹田菓子舗の廃業に伴い、もち加工が始まったことで、活発に活動していくこととなった。現在、もちを始めとする炊飯加工や漬物、かきもちなど様々な商品を作っており、地元では人気を集めている。また、退職後の女性のコミュニケーションの場としても重要な役割を担っており、地域の発展と女性の地位向上に貢献している。

加工部の活動に触れる中で、商品売る者と同時に買う者としても見る眼を持っており、女性にしかない主婦感覚やこれまで培ってきた技術が大いに生かされていると感じた。美味しく、健康的で、安全な、こだわりのある食品を求める消費者のニーズに応える、地域で重要な存在であると言えるだろう。

この活動は、地域の人々、家族など、周囲の理解や協力によって支えられている。特に、

竹田さんのエピソードが印象的で、加工部員の方は竹田さんへの感謝の気持ちを口々におっしゃっていた。また、客からの「美味しかった」という言葉が活動の原動力になっており、やりがいにつながっている。このように、周りの支えがあったからこそ、今の加工部があると思う。

しかし、加工部員のほとんどは中高年が中心であり、このままでは次世代に技術を受け継ぐことができず、加工部を存続していくことが困難になる。そこで、もちや漬物だけではなく、若者が関心のあるパンやケーキなどを商品に追加することも良いのかもしれない。昔ながらの味を守りつつ、新たな商品にもチャレンジすることで、より活動の幅が広がっていくのではないだろうか。今後、さらに若者の農業離れが進行する中で、いかにして中高年世代から若者世代にバトンタッチしていくのが大きなポイントとなってくるだろう。

謝辞

今回の調査にあたって、末友の皆様には大変お世話になりました。聞き取りにご協力いただいた野澤淳子様をはじめとする加工部員の皆様や野澤敏夫様、末友営農組合の方々にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。特に、野澤淳子様には活動の場に参加させていただいたり、様々な方をご紹介いただき、調査をスムーズに進めることができました。報告書を無事書き終えることができたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

参考文献

大谷昭三『小矢部市北蟹谷地区史抄』2015年

小矢部市商工観光課『ふるさとのこころ 第5集 おやべのかおり』1979年

参考ウェブサイト

農林水産省「集落営農について」

http://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/n_seido/seido_syuuraku.html(2019/1/21/閲覧)

農林水産省「農林漁業の6次産業化」

<http://www.maff.go.jp/j/shokusan/sanki/6jika.html>(2019/1/21 閲覧)

第3部
地域と社会に貢献する活動

北蟹谷地区^{きたかんだ}で活動する団体—伝承部会に焦点を当てて—

安達史弥

はじめに

この章では小矢部市末友で行われている伝承部会という団体の活動に関する調査の報告をする。調査地の決定には、初めて伝承部会の活動を見学した時に衝撃を受けたことが大きな決め手となった。初めて訪れたのは令和元(2019)年6月27日で竹ほうきづくりの作業初日だった。その時、男性4人が淡々と竹ほうきを製作している様子を見て、この団体についてもっと知りたいと感じた。少しの間だが、話を伺うと快活に答えて頂け、伝承部会のおおまかな活動内容や、北蟹谷地区の活発さについてなどを伺った。この地区について興味がわき、様々な活動や団体がある中で、伝承部会に集中して調査を始めた。

この章では主に地域住民や伝承部会の方達への聞き取り調査をもとに、北蟹谷で活動する団体について記述し考察する。

1. 調査地

調査地は小矢部市の南西部に位置する北蟹谷地区の末友である。末友交差点からほど近い旧いなば農協北蟹谷支店近くの倉庫が聞き取り調査のフィールドとなった。調査地の紹介をする。

1-1. 蟹谷^{かんだ}について

小矢部市の南部に位置する蟹谷地域は北蟹谷、東蟹谷、藪波の3つの地区からなる地域である。東は津沢、西は石川県に接している。交通の面では石川県へ向かう国道359号線や小矢部インターチェンジがあり、交通の要衝として知られる。

かつては小原道^{おはらどろ}と呼ばれる道があり、主に加賀藩との行き来のために使用されていた。小原道は小矢部市浅地から名畑、末友を経て、石川県との県境にある松根峠を越えて石川県金沢市吉原町に達する。北陸道の倶利伽羅峠を越える経路に比べて穏やかな道で利用者が多かったとされる。

蟹谷という名前は北蟹谷地区に残る伝説に由来しており、巨蟹伝説と称されることもある。伝説は以下である。

大昔、加賀と越中の境近くの谷間に大きな溜池があり、この溜池の近くには人家が多く、寺院もあったが、いつのころからか、この溜池から怪物が出て住民に危害を加えた。中でも寺々の住職が相次いで変死した。死因を調べたところ毎夜丑満時になると、住職の枕元に怪僧が現われ、「四足八足、大足二足、両眼天を睨んで横走るは何者ぞ。」と問いを発し、答えることができないと、つぎつぎに怪僧の餌食になったということだった。

ある晩、八講田の本叡寺にも現われ、同じ質問をしたところ、賢明な住職は、即座に答えて曰く、「それは蟹なり。汝は全く蟹の化生ならん。汝、かかる愚問を発して、多くの人々を悩まし、あまつさえ、貴重な人名を断ち、いままた我を喰わんとは、許し難き所業なり。いざ懲らし呉れん。」と、その場にあった錫杖を手にして、怪僧の面上に一撃を加えたところ、たちまちにして消え失せた。

翌朝、里人が田回りをしたところ、近くを流れる五郎丸川に、橋のようにまたがった、かつて見たこともない怪物の死骸を見つけた。付近の人々を呼び集めてよくよく見ると、幾百千年を経たかと思われる巨大な蟹の死骸であった。

その後、蟹の祟りが後の世に及ばないようにと、五郎丸地内に小さな堂を建てて、その霊を祀ったという。

(『ふるさとガイドおやべ』より引用)

現在でも北蟹谷ではこの伝説を記した看板の設置や当該地の整備などが地域の方達の手によって行われている。

1-2. 北蟹谷地区について

北蟹谷地区は末友、北一、白谷、内山、八講田^{はっこうでん}、五郎丸、松永、松尾、棚田の9つの集落からなる地区である(図1)。

地区ぐるみの活動が盛んに行われており、平成30(2018)年に北蟹谷の市指定文化財や天然記念物などの見所が掲載されたフットパスマップが北蟹谷地域活性化協議会(後述)によって製作された。

五郎丸集落周辺では自然を利用した景観保全活動が行われている。ニホンタンポポの生息地であることが判明した平成19(2007)年から保全活動が始まった。五郎丸集落資源保全隊という地域の方達からなる団体を中心に、住民の協力を呼び掛ける形で活動している。また、川沿いにヒガンバナを植える活動もしており、毎年秋に見頃をむかえる。

特産品づくりも盛んで、農産物や山菜、また、それらを加工した製品が市内のスーパーマーケット、道の駅、直売所などで販売されている。地区で採れるタケノコとそれを加工した商品は地区内外から評判が高い。

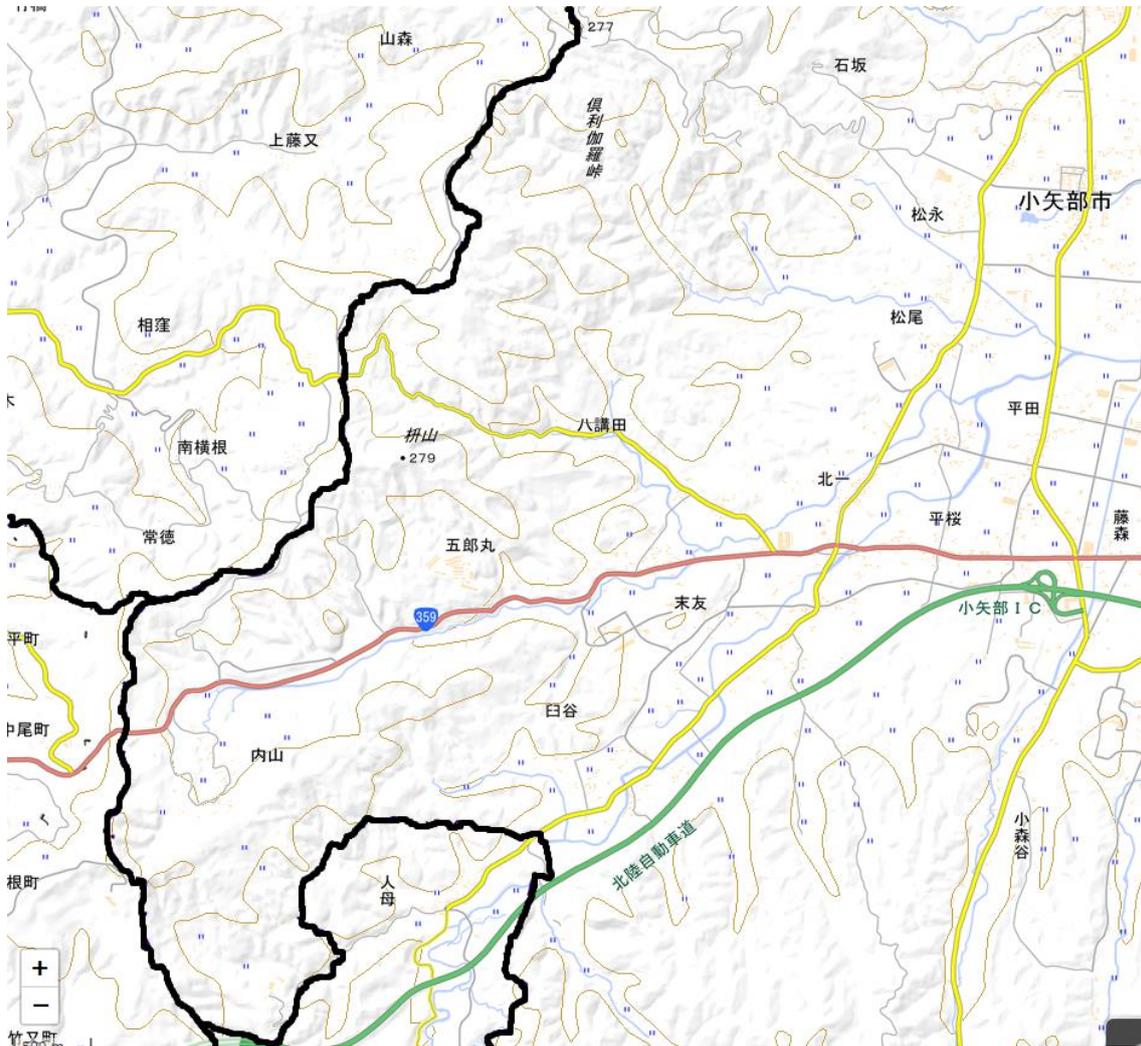


図 1 北蟹谷周辺の地図

1-3. 北蟹谷の施設

1-3-1. 村の駅きたかんだの郷



写真 1 村の駅きたかんだの郷の外観

村の駅きたかんだの郷は閉鎖したガソリンスタンドを借りる形で平成 21(2009)年に建設された。現在も建物の外観にその名残が残っている。

地域住民の交流の拠点になることを目的とするこの施設には、現在、農産物直売所、カフェ、居酒屋の 3 つが併設されている。直売所とカフェは金曜日、土曜日、日曜日の 8 時から 12 時(1 月~3

月は 9 時から 12 時)、居酒屋は金曜日と土曜日の 18 時から 21 時に営業日している。居酒

屋は予約があれば営業日以外でも営業することが可能だという。

平成 21(2009)年の開設当初は直売所のみ営業を行っていたが、平成 27(2015)年に改修が行われ、カフェコーナー、居酒屋、加工施設が新たに作られた。

直売所では、地区の方達が生産した野菜や果物といった農産物やその加工品が販売されている。加工施設(口述)ができたことで品数が増加した。

カフェコーナーには、カウンターとテーブル席が合わせて 8 席ほどあり、コーヒー、ジュース、トースト、アイスクリームなどが提供されている。年配の方達がカフェコーナーで団欒している様子を見ると、地域住民の交流の場として定着しているのが感じられる。

加工施設には急速冷凍機、真空パック用の機械、食品乾燥機が設置されており、村の駅の会員(1-3-2.参照)であれば自由に使用できる。加工施設の設置によって保存機能が強化され、冬場の課題であった品目の不足が改善された。

1-3-2. 村の駅きたかんだの郷の運営

運営は施設と同名である『村の駅「きたかんだの郷」』の会員によって行われる。会長 1 名、副会長 2 名、会計 1 名、監事 2 名、運営委員若干名、事務局 1 名によって構成される運営委員会が本会および村の駅きたかんだの郷の運営についての決議を行っている。

実際に施設で働いているのは、レジ係が 7 名、カフェ担当者が 2 名、居酒屋担当が 2 名、マネージャーが 6 名である。マネージャーの仕事内容は多岐にわたる。施設前の看板や旗の設置、村の駅や加工室の鍵の開け閉めと管理、商品のラベル貼りなどに始まり、直売所に商品を運ぶ要望があればトラックを出して店まで運ぶ手伝いもする。1 度に運ぶことが出来ない場合は何往復かしなくてはならない。加工機械の使い方がわからない方がいれば教えるのもマネージャーの仕事の 1 つだという。マネージャーは営業を裏から支える仕事であり必要不可欠なものだろう。

カフェ担当の A さんにお話を伺った。A さんは金曜日と日曜日にカフェを担当している。平成 27(2015)年にカフェが始まったときから働いているという。土曜日のみ別の方が担当しているが、本当はそれぞれの曜日で別の方が担当するようにしたいという。「お客さんと店員の間で、その人その人の人脈が広がる」とのことで、「そのほうが楽しくなる」とのことだった。しかし、金銭面や希望者の不足から実現していない。カフェだけでも 1 週間毎日営業したいという望みも同じ理由から叶っていない。後継者の不在という問題も抱えている。

かつて、地区外のお客さんが来たときに、「他の直売所よりもこの野菜が 1 番おいしい」と言われ、「頑張ろう」となったそうだ。自分が作った野菜ではないが嬉しくなったという。北蟹谷地区の中心部である末友に位置するこの施設は、平日の営業に加え、年に数回のイベントが開催されることから、住民の交流の場以上に大きな意味を持つ施設だと感じた。季節に合わせたイベントの開催は、北蟹谷という地域の活発さの象徴であるように思う。他地域との交流も盛んであり、地区の顔としての役割を担っているように感じられた。

2. 北蟹谷で活動する団体

以下の情報は平成 27(2015)年から平成 30(2018)年と、令和元(2019)年の運営体制が記された資料を基に記す。

2-1. 北蟹谷地域活性化協議会

北蟹谷地域活性化協議会(以下協議会)は平成 27(2015)年から活動している。地域内で活動していた自治振興会、営農組合、消防団、児童クラブ等がまとまり、1つの団体となった。令和元(2019)年は村の駅きたかんだの郷の営業が開始してから 10 年目となり、地区全体の活性化活動の節目であった。そして、その節目に合わせて活性化協議会全体の運営体制、事業計画が大きく変化した。

平成 27(2015)年から平成 30(2018)年の協議会は、総務委員会、産業振興委員会、地域コミュニティ再生委員会、交流・移住促進委員会の 4 つの委員会が各々担当する事業を運営する形で活動していた。

総務委員会は、委員会間の連絡調整、年 1 回の総会の開催、事業報告や計画案等をまとめた総会提出議案の調整、監査の実施を担当していた。

産業振興委員会は、村の駅でのイベントの開催、カフェ・居酒屋の営業や、ヤーコン、ブルーベリーといった特産品の栽培などの事業を主に担当し、地域産業の活性化や交流拠点づくりに関わる活動をしていた。

地域コミュニティ再生委員会は、『里山通信』という地区の行事などを掲載した情報誌の隔月発行、防犯パトロールを行っていた。また、1 人暮らしの高齢者の生活支援を行う「北かんだコミュニティ協力隊」が平成 28(2016)年に発足し、現在も買い物、除雪、通院などの支援を行っている。このように地域ぐるみの協力体制確立に関わっていた。

交流・移住促進委員会は、地区の空き家調査や、スポーツなどを通じた世代間交流イベントを開催し、地域内外の交流を活性化させる事業を担当していた。世代間交流イベントにより地域内の高齢者と子供の関わりが増えたことで、挨拶をする機会が増えていったという。

令和元(2019)年からの運営体制や事業計画案では 4 つあった委員会を 6 つに分け、事業の内容にも変更が加えられた。総務委員会、産業振興委員会、特産品委員会、情報・安心委員会、交流促進委員会、移住促進委員会によって運営を行う。もとの 4 つの委員会がそれぞれ担当していた事業を引き継いだものや、新たな事業も開始した。それぞれについての説明をする。

総務委員会の事業には、将来を見据えた計画設定事業が新たに追加された。その他の事業におおきな変更はない。新規事業の発展に力を入れている。

2018 年までの産業振興委員会が担当していた事業の一部が特産品委員会、情報・安心委員会、交流促進委員会によって運営されることとなった。イベント開催や直売所の出荷体制の

改善を行うことで村の駅の運営の充実化を目指し、地域産業の活性化に大きく関わる活動をしていることは変わらない。

特産品委員会は北蟹谷の特産品の栽培や加工食品の生産・販売の促進を目指して活動している。ヤーコンの葉を乾燥させたものを茶葉にしたヤーコン茶の生産など、新たな名産品づくりにも力を入れている。

情報・安心委員会は、地域コミュニティ再生委員会が担当していた『里山通信』の発行を担当する。ホームページの運用も担当しており、地域内外に向けた情報発信を担う委員会である。防犯・防災活動や「北かんだコミュニティ協力隊」による買い物支援なども行っており、地域をつなぐ役割を果たしている。



写真2 芋イモ祭りのちらし

交流促進委員会は、地域住民の交流の活性化のために活動する。農作業体験やスポーツ大会の開催、また、村の駅のカフェ・居酒屋の利用者を増加させるための新メニュー開発などの活動を行っている。

移住促進委員会は他地域の方達に向け、農業体験などの交流事業を行うなどしている。

これらの委員会が連携し、村の駅でのビアガーデンや芋イモ祭り¹¹⁶といった季節ごとのイベントの開催、10年ほど前から地域内で徐々に増加している耕作放棄地の活用に向けた活動、地区の景観向上のための事業などが行われている。耕作放棄地対策としてヤーコンやサトイモが植えられた畑には大きく実った野菜が見られた。

委員会の再編により多くの活動内容に対応できるようになっていることが感じられる。

2-2. かんだ・かんだプロジェクト

かんだ・かんだプロジェクトは、地域外の方達に向けてイベントを通じて北蟹谷地域の現状や特徴を紹介する活動している。外部の注目を取り込むことで、新たな刺激を取り入れ、地域の抱える問題の解決にもつながるといふ。

令和元（2019）年から活動を始めたところで、これまでに、タケノコ掘り、ヒマワリの種まき、ブルーベリー摘み体験や、夏野菜、米、大豆を植えてから収穫までを季節をまたいで通して体験することが出来るイベントなどが行われている。ヒマワリ畑の横にある高台からヒマワリを見渡せるようにする予定だったが、花の向きが逆になってしまい背を向ける形になってしまったことが残念だったという。

¹¹⁶ 芋イモ祭りではジャガイモ、サツマイモ、サトイモ、自然薯の詰め放題が行われる。

イベントには家族や親子での参加が多く、子供にも興味を持ってもらえる機会があることが重要だと思う。



写真3 耕作放棄地に植えられたサトイモ



写真4 ヒマワリ

3. 伝承部会



写真5 倉庫の入り口

北蟹谷長寿会に所属する伝承部会は、現在は末友交差点近くの倉庫を拠点に活動している。

北蟹谷長寿会は平成 29(2017)年までは北蟹谷老壮会と呼ばれていた。昭和 27(1952)年からの活動内容、当時の役員名などが記載された資料が残っており、これは北蟹谷老壮会が活動を開始した時期と一致する。

年間の活動は、6月から7月に竹ほうきの製作作業、10月から12月に正月用のしめなわの製作作業が行われている。

会員には年間の出席日数に応じて売り上げから手当てが出される仕組みになっている。日数に合わせて各人が報酬を得ることで公平であるとともに、やりがいを感じてもらえるようにということだ。売り上げは他にも長寿会での新年会、忘年会を行う費用に充てられる。

3-1. 伝承部会の由来

伝承部会は、もともと冬場の副業として行われていた竹細工や藁細工を地域の方達が教え合う活動が原型としてあったという。伝承という名前の由来もそこにある。農作業が出来ない期間に収入を得る手段として竹細工や藁細工の製作が行われていた。その方法を教え合い、習う場であった。

かつて藁を使って様々な道具が製作されていた。履物の一種である草鞋は自分たちで使うものと、商店と契約して買い取って貰うものがあったそうだ。草鞋を作っていたのは主に

女性で、男性は若い人から大人まで山へ向かい、建物の修理や建築に使われる材木を採っていたそうだ。この作業は材木出しと呼ばれる。海の漁に使われる定置網の縄を作ることもあったそうだ。北蟹谷の北一集落の業者に網を買い取って貰い、収入を得ていた。現在も定置網漁が行われている氷見市で使われていたろうという。他に、藁縄、敷物に使われるむしろ、米を包装する円柱型の俵、服の上に着る蓑なども作られていた。1年間に使う道具を冬にまとめて作って、準備をしていたという。



写真6 ブツタイ

竹細工では、ブツタイ、ソウケ、クマデなどの道具を作っていた。

ブツタイ(図7)と呼ばれる道具は棒状の竹に広がるように編まれた竹をつなげた道具で、魚を捕る仕掛けとして使っていたという話を伺った。田んぼの側溝にブツタイを沈めてから、側溝の中に足を入れて泥を踏みつけ、逃げる魚を追い込むことで捕らえてい

たという。この話をするとき、話される方達のなかで泥を足で踏むジェスチャーが一致していたのが興味深かった。遊びの一環として行われていたこの作業ではドジョウ、フナ、ナマズ、ウグイなどが捕れ、夕飯のおかずになったという。農薬が使われる前はよく捕れたという。

ソウケは平たく円形に編まれた容器で、収穫物を入れておいたり、穀物を干すときに使われた道具である。伝承部会の方からお聞きした話によると、容器の外側のしなりを作る工程が難しい作業だったという。手作業で作られたソウケを見せていただいて、綺麗に編まれていることがわかった。50年ほど前に作られたというそれは、現在使うことはないという話だが、状態の良いまま保存されていた。

クマデは畑の土から枯葉などのごみをかき集める用途で使われる。棒の先に竹でできた細長い鉤状の歯を複数付けた道具である。歯の先が引っかかるように曲がっており、その部分を作るための型を見せてもらった。型にはめた歯の部分をそのまま1週間ほど置いておくことで完成する。型も自ら手作りしたものであるという。

50年ほど前にこれらの道具の作り方を伝える活動が行われていた。それが現在の伝承部会の原型となっている。

昭和30年代頃がこの地域での藁細工、竹細工製作のピークであり、この時期を過ぎると徐々に新たな作り手が減少し、衰退していったという。

減少の理由の1つが出稼ぎの増加である。この時期以前は出稼ぎ先も少なく、少数の人々のみが行うものであったが、昭和40年代頃からは出稼ぎに行く人が増加した。当時の様子を伺うと、マイクロバスに乗って出稼ぎ先へ向かう人もいたらしい。20人から30人を乗せた

バスで金沢まで向かい、宿泊しながら仕事に携わった。宿泊先は食事をする場所という意味から飯場と呼ばれていた。河川の護岸工事など土木建築の仕事をしていたそうだ。

4. 伝承部会の年間活動

伝承部会は現在、6月から7月にかけて竹ほうきづくり、10月から12月にかけてしめ飾りづくりを行っている。竹ほうきは小矢部市内の直売所や道の駅などで1年を通して販売される。大・中・小の3種類があり、毎年計200本程売れるという。しめ飾りには玄関用と神棚用があり、北蟹谷地区内の人々から注文を取り製作される。注文と商品の受け渡しは班長が担当し、各家に個数や大きさを聞いて回り、完成したものを伝承部会から受け取り配達する。玄関用のしめ飾りには大・中・小の3種類があり、去年は合わせて665個を売り上げたという。神棚用しめ飾りはその形から一文字とも呼ばれ、30cmから1mまでの大きさがあり、平成30(2018)年は合わせて500個の売り上げを記録したという。また、地区内外の神社で使われるしめ縄の注文も受け付けている。

4-1. 活動の様子



写真7 冬季の活動の様子

伝承部会は末友交差点近くの旧いなば農協北蟹谷支店近くの倉庫で、主に木曜日と日曜日以外の午前8時30分から午後4時に活動している。倉庫で活動する以前は、現在北蟹谷公民館の駐車場に使われている場所にあった建物で活動していた。当時保育所として使われていた建物を借りていたようだ。

倉庫内の様子は、壁にしめ飾りや一文字の完成品が飾られているほか、壁際にはこれまでの活動で使用された道具がまとめて置かれている。畳にブルーシートが敷いてあり、作業はその上の座布団や椅子に座って行われる。夏場はシャッターや窓を開けて風通しを良くし、気温が下がる11月頃になるとストーブを焚くというように、年間を通して快適に作業できるように工夫がなされている。

作業に参加している方達はもれなく帽子や頭巾といった被り物をしている。これは頭が埃で汚れないようにするためだという。倉庫内は埃が多く作業中に竹や藁からも埃が出る。マスクをつけている人もいる。

作業中は静かなことが多く、たまに作業内容の確認や世間話が行われるくらいだ。常にラジオが流れており、会員の方達は聞きながら作業をしているようだ。

休憩も同じ場所で行われる。集まって輪になり、世間話をしたり、煙草を吸ったり、お菓子を食べたりしながら時間を過ごす。たまに会員の方の家で収穫された果物が持ち込まれ、休憩時間に食べられる日もある。知人の近況や昔の思い出話などがよく話題に上がる。休憩する時間は特に決まっていなくて、その日の作業の進行具合などによって決定されている。きりの良いところまで作業を続ける方もいる。

作業の特徴として挙げられるのは、時間がはっきりと守られていることだ。8時30分から作業が始まり、12時から13時30半に昼休憩がある。その後、16時まで作業が行われる。各々の家の遠さから始業には多少のばらつきが出るが、12時の昼休憩と16時の終業時間はおおむね順守されている。ラジオから正午の放送が流れるとすぐに車に乗って家に帰り、13時30分を目安に戻ってくる。終業時間の16時が近づくと片付けが始められ各々が帰宅していく。

4-2. 竹ほうきづくり

伝承部会の竹ほうきづくりは毎年6月から7月にかけて行われる。大・中・小の3種類があり、市内の直売所や道の駅で販売される。伝承部会から販売を依頼する場合と、「今年もよろしく」というように依頼される場合があるそうだ。竹ほうきを作る団体は希少であり店舗側の品揃えに変化が生じることから、人気のある商品なのだろう。

4-2-1. 竹の用意

竹ほうきの素材は地区内の竹林で収穫される。その集落の区長にお願いして伐採をさせて頂いているそうだ。毎年3月下旬に長寿会から助っ人を呼び、おおよそ30人が参加して竹の伐採作業が行われる。竹をチェーンソーで切り倒した後、枝を鉋で切る。切った枝はまとめて山に寝かされ葉が落ちるのを待ち、作業が始まる6月頃に切り倒された竹と枝が作業所に運ばれる。竹の種類は孟宗竹であり、枝が固いことから竹ほうきづくりに適しているそうだ。

4-2-2. 竹ほうきづくり

まずは枝と柄を整える作業が行われる。小枝を切り落とした後、長いものは80cm程の長さに揃えられる。切った小枝もほうきの掃く部分に使用される。

柄の部分は大と中で長さが違うため、それぞれの長さに切り揃えられる。次に節の部分にやすりをかけ出っ張りを滑らかにし、柄が完成する。



写真8 竹の枝

作業期間の前半にこれらの作業を行い、後半はほうきそのものを作る工程となる。まず柄の部分に短い小枝を巻き付け、その上から長い枝を重ねて巻き付ける。小サイズのほうきには柄がないため、小枝がほうきの芯となる。巻き付けには針金が使われるが、きつく縛るために力のいる作業となる。今年は大・中・小合わせておおよそ 200 本が製作され、市内で販売されたようだ。



写真9 柄



写真10 大(左)と小(右)

4-3. しめ飾りづくり

正月に向けて行われるしめ飾りづくりでは玄関用と神棚用と神社用の3種類が製作され、注文した方達に向けて販売される。

4-3-1. 藁の準備

伝承部会でのしめ縄づくりは素材となる藁の準備から始まる。今年は5月に田植えを開始した。田んぼは北蟹谷地区の松永集落内にある松永うの花農園から借りている。松永うの花農園はリンゴや米を育てながら、直売所でリンゴやその加工品などを販売している。リンゴは小矢部ブランドに認定されている。3年前からは毎年うの花農園で田んぼを借りているが、それまでは地区内で毎年場所を変更しながらの田んぼを借りて準備作業をしていたという。

今年は1反2畝¹¹⁷の田んぼで栽培を行った。長寿会の方達の手を借りて5月に田植えが行われた。稲の刈り取りは9月25日に行われた。刈り取りは平成30(2018)年まで鎌を使って手作業で行っていたそうだ。刈り取りと脱穀作業にコンバインを使用しない理由は、脱穀の際に稲が柔らかくなってしまいしめ縄づくりに支障が出るからだ。令和元(2019)年か

¹¹⁷ 1反は約990 m²、約1畝は99 m²。

らバインダーという農機具を用いて刈り取りが行われた。バインダーは脱穀を行わず刈り取った稲をそのまま束ねるため稲が柔らかくならず、手作業と同様の仕上がりになるそうだ。収穫した稲を田んぼに積み上げ乾燥させる。10月初めに脱穀が行われ、藁が伝承部会のもとへ届く。

令和元(2019)年の稲刈りから脱穀までの日程は全体的に晴れが続き、天候に恵まれていたようだ。雨が続くなどして乾燥が上手くいかなかった場合、藁の状態に影響が出る。良質な藁は青干しと呼ばれ、緑色を含む藁となる。しかし、水分を多く含む藁では乾燥が不十分になり、一部が茶色になってしまう。原因はカビや虫によるものだという。実際に近くで目にすると茶色と緑色の藁では色の違いが一目瞭然であり、完成品に影響を及ぼすことがわかる。

4-3-2. 作業の下準備

乾燥させた藁から、茎を包んでいる鞘^{きせ}と呼ばれる部分を取り除く作業がある。残った茎の部分がしめ飾りに使われる。手作業で行われ、鞘を取り除いたものを数百本程の束にして1か所に積み上げる。藁を締める方達はこの束を自分の作業場所に持って行って作業し、藁束が無くなるとまた持っていくという様子だ。

4-3-3. 神棚用しめ飾り

神棚用しめ飾りには 30 cm から 100 cm まで、10 cm 刻みで大きさが用意されており、注文に応じて製作される。

4-3-4. 神棚用しめ飾りの作業体験

11月30日に活動場所を訪れた。その日は男性6名、女性6名がしめ飾りづくりの作業に参加していた。しめ飾りの製作方法を伝承部会の岡本和男さんに教えて頂き、一文字¹¹⁸の



写真 11 神棚用しめ飾りの見本

作業体験をした。岡本さんは伝承部会の中でもベテランだという共通認識があり、教えて貰うならこの人だということだった。

作業はあぐらの姿勢で行われる。長時間座って作業をするため座布団が必須である。はじめに、10本の藁束を2つ手に取り、片方の端で上下に重ねビニールテープで縛る。この端で結んだ部分を左足の親指と人差し指の

¹¹⁸ その形から神棚用しめ飾りを一文字と呼ぶ。

間に挟んで固定する。足袋で作業をしている人が多いのはこのためだ。筆者は指先の分かれていない靴下を履いていたため、靴下を脱いで作業を行った。ちなみに、あぐらをかいた足の下に藁束を挟んで固定する方もいる。

次に藁を締める作業に入る。両手の指先を下に向け、手のひらで 2 つの藁束を挟み右手を下から上にずらすことで藁が締められる。この締め方は左巻きと呼ばれる。2 つの藁束を反時計回りにねじり、藁束を手で挟み締めた後、再び反時計回りにねじる。この作業を繰り返すことでしめ飾りが出来てゆく。しっかりと力を入れて締めることを意識することが大事という。この締める作業は、手の中で 2 つの束が混ざってしまう、力が足りず締まりが緩くなるなど、難しい点が多かった。束が混ざると太さが変わり、しめ飾りの形に歪みが出てしまう。締め方が緩い場合も同様である。うまく締まっていない部分があるとほどいてから再び締めるのだが、何度も締めると藁がぼろぼろになってしまうため一度でしっかり締めなければならない。岡本さんの作業を見せて頂くと、一連の動作の速さが際立っており、熟練された技術を感じた。

2 つの束を 1 本にした後、ビニールテープで結んでいた場所をほどいて新たに 10 本の束をつけて結び直す。同じ方法で藁を締め、上から反時計回りに巻き付けていく。このとき、段差の高さを合わせることを意識する。あらかじめ作ったものが緩いと、巻き付けたときに潰れてしまう。端から端まで巻き付けたらビニールテープで縛り、完成となる。はみ出た切れ端をハサミで切り取り、形を整えて完成となる。

このとき製作したものは 30 cm 程の長さで、自分の家の神棚に飾るということで伝承部会のおばあさんに受け取っていただいた。

作業体験の感想として、30 分程の作業だったが藁束を挟む足先と両手がひどく疲れた。藁束の締め具合やバランスにも気を配るため心身ともに消耗する作業である。教えて頂いた岡本さんや伝承部会の方達の作業の速さや正確さがどれほどのものかということが、体験を経ることで実感できた。

その日も時間がしっかりと守られており、終了が近づくと片付けが始められ、予定通り 16 時頃に終了した。片付けでは作業で出た藁の切れ端の掃除、座布団やストーブなどの道具の片付け、完成品の整理が慣れた様子でてきぱきと行われる。居残って作業を続けることもないようだ。会員の方達は皆、片付けが終わると各々自動車や徒歩ですぐに帰宅していった。

4-3-5. 玄関用しめ飾り

玄関用しめ飾りには大・中・小の 3 種類のサイズが用意されており、注文を受けて販売されている。

しめ飾りの形や使われている装飾にはそれぞれ由来がある。しめ飾りの形は大きな輪の中に小さな輪が 2 つある三ツ輪と呼ばれる形になっている。この形は亀の甲羅の形に似ていることからめでたいとされる。



写真12 玄関用しめ飾りの見本

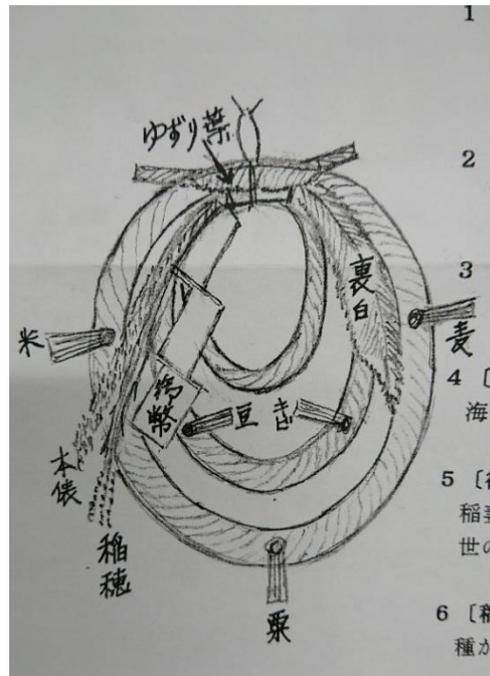


写真13 飾り付けの図

4-3-5-1. 装飾

玄関用しめ飾りの装飾には、裏白(写真14)、ほんだわら(写真15)、御幣(写真16)、ゆずり葉(写真17)、稲穂(写真18)、五穀の6種類があり、それぞれに願いが掛けられている。

裏白は名の通り葉の裏側が白くなっていることから清らかさの象徴とされ、家の中に福を呼び込むとされる。ほんだわらは海藻の1種であり、海の幸の豊漁を願う。御幣は紙から作られる装飾で、稲妻の形を表し世の中が明るくなるようにという願いが込められている。ゆずり葉は長寿や、譲り合うという語呂合わせから関係の円満さを願う。五穀は米、麦、粟、黍、豆の5種類の穀物を意味し、稲穂とともに豊作を願うものだそうだ。五穀の装飾はそのものを付けるのではなく、それぞれを模した房を付けるようになっている。また、これらとは別に橙を刺すための串がつけられている。乾燥させることのできないミカンのみ各家庭で付けてもらうためだ。



写真14 裏白



写真15 ほんだわら

かつてこれらについて説明したちらしを地区の方々に配布し、伝承部会の活動を知ってもらう試みがあったそうだ。現在はちらしの配布は行われておらず、地区内での知名度が上昇したことが窺

える。

装飾用の稲穂は伝承部会で育てたものが使われる。活動場所のスペースの一部で乾燥させたものを選別して使用する。御幣は伝承部会の方達によって作られる。細長い長方形の紙に片側に3つ、もう片側に2つの切込みを入れ、折りたたむことで御幣が完成する。神棚用のしめ飾りは白色の和紙でできたもの、玄関用のしめ飾りは赤色と白色の紙を重ね合わせ紅白柄にしたものを使用される。両方の御幣に大・中・小の3種類があり、しめ飾りの大きさに応じたものが付けられる。



写真16 ゆずり葉



写真17 御幣



写真18 稲穂

4-3-5-2. 飾り付け作業

飾りつけ作業は作業工程の最後に会員全員で行うようになっている。令和元(2019)年は12月16日からしめ飾りの飾り付けが行われた。

しめ飾りの頂点に裏白、ほんだわら、稲穂、御幣、ゆずり葉、串の順番に装飾を載せ、ビニールテープで固定し完成となる(写真20)。1つの装飾に2分ほどかかる。

それぞれの飾り付けごとに注意す



写真19 飾り付けの様子

る点がある。裏白、ほんだわら、稲穂は均等な長さで左右に垂れるようにしている。裏白は葉の裏側の白い方が正面から見えるように、ゆずり葉は裏白と違い表側が見えるようにして付けられる。こうして完成したしめ飾りは担当の方達によって袋詰めされ、人々の手に渡る。

商品の受け渡しは倉庫で行われ、料金もここで支払われる。班長(4 参照)が倉庫まで受け取りに来て、担当する地域に配達する。令和元(2019)年の受け渡しは12月22日から24日にかけて行われた。

4-3-6. どんど焼き

北蟹谷地区では毎年1月14日の夜に各町内でどんど焼きが行われる。田んぼや広い空き地などに住民が集まり竹を高く積んだ後、その中でしめ飾りや書初めなどを燃やす行事だそう。書初めを燃やした人は成績が上がるとされ、煙が高く上がるほど縁起が良い。この地区では会員の方が生まれる前からどんど焼きが行われていたようで、現在まで続く行事である。



写真 20 完成品

4-3-7. 神社用のしめ縄

市内の神社で使用されるしめ縄の注文も受け付けており、2019年は4件からの注文があったようだ。2mから5.5mの間で多様な大きさの注文があり、神木に巻き付けられるものもあるようだ。

玄関用や神棚用のものよりもはるかに大きなしめ縄はベテランの会員によって製作される。製作方法は他のしめ縄と同様である。

違いは装飾で付ける房の大きさである。房は玄関用のしめ飾りにもあるが、こちらのほうが太いものが付けられる。房の製作には、房の大きさを決める藁束、藁ひも、針金が



写真 21 神社で使用されるしめ飾り

用いられる。藁ひもを藁束の円の中心に来るように入れた後、藁束の中間を針金で縛る。次に、ひもを短く残した方に向けて藁束を強めの力で折り返す。最後にひもで縛り完成となる。

房を付ける方法は、初めにしめ縄の中間の位置にひもを差し込む。房どうしの間隔が決まっており、中心から端へ巻き尺で長さを測りながらひもを差し込んでいく。全て差し込んだ後に余ったひもの部分をしめ縄の内部に入れ込むことで固定される。

4-3-8. しめ飾りづくりにおける女性の役割

女性が担当する作業の 1 つは、製作されたしめ縄から飛び出ている藁をハサミで切るといものである。製作されたしめ縄は所々藁がはみ出していてそのままでは見栄えがあまり良くないため、この作業を経ることで見た目が整えられる。

作業は膝の上にしめ縄を乗せる姿勢で行う方が多い。7年ほど前から伝承部会に参加している山崎好子さんは、初めの年はハサミを使う腕が疲れることが多かったが、毎日続けているうちに疲れを感じなくなったという。また作業の速さを見ている、会話をしながらでも慣れた様子でてきばきと進められており、熟練した様子が見られた。

稲穂を木槌で叩いて柔らかくする作業を担当することもある。稲穂は飾り付けの際、茎の先端を結んで用いられる。しかし、乾燥した稲穂をそのまま結ぶと折れてしまうため、先端付近を叩いたものを使う。この作業は稲穂が不足しそうになると随時行われるようだ。

しかし、しめ縄を製作した男性が自ら切る場合や、木槌を男性が担当する場合があります、女性専用の仕事ではないことがわかった。



写真 22 木槌で藁をたたく女性

5. まとめと考察

5-1. 作業の意気込み

形を整えるためにいくつも気を配る工程があり、ちゃんとした製品を完成させるのは容易ではない。71歳の最も若い男性会員の方は「そんなに簡単なことではない」と語る。1日に7時間近い作業を1年間で2か月ずつ、何年も継続して上達していく。伝承部会に入会する前には試験のようなものがあるらしく、しめ飾りを作りベテランの会員からチェックを受けるとい。人によっては数十個作ることもあるという。

製作したもののチェックも厳重に行われており、ゆずり葉や串といった小さい装飾の付け忘れなどが発見されると修正される様子が見られた。

作業中の会話が少ない様子からは、伝承部会全体が集中している雰囲気が感じられ、全体を通して気を抜かずしっかりと製品をつくるという意気込みを感じた。

5-2. 男性と女性の役割

竹ほうきづくりでは女性が不在であり、しめ飾りづくりでも男性と違い女性専用の作業は見られなかった。作業場も男女で分断しており、性別分業がはっきりと行われている様子は近くで見学していて非常に興味深かった。竹ほうきの巻き付け作業や、藁を締める作業など、力のいる作業は製品の出来に大きく関わることがわかる。「男性がしめ飾りを製作することで、自分たちは作業ができる」という声もあり、しめ飾りを製作できる方達に対する尊敬が感じられた。会長の山田吉雄さんは、「女性のほうが手先が器用だ」ということで作業の分担がされているということを知っていた。女性の作業の比重の小ささを感じたが、伝承部会では男女で互いの得意な作業を分担し合った結果そうなったのだと感じられた。

5-3. 変わらない役割

現在の伝承部会は、主に竹ほうきづくりとしめ縄づくりを中心に活動している。教え合う場というよりも市内や地域の方へ販売用に製作するようになり、活動の形に変化が生じている。その変化の中でも伝承教室には変わらない役割があるという。会長の山田吉雄さんは地域の高齢者がコミュニケーションを行う場としての役割を重要視していた。近年の高齢者の閉じこもりや孤独死を防止するために、人々が集まりやすい場を提供している。主に木曜日と日曜日以外が活動日になっている伝承部会は、いつも誰かしらが来て作業をしているという。この地域ではかつて報恩講や村の会合が盛んに行われ、人々が集まり情報交換を行う場としての機能をもっていたが、これらの集まりは昭和が終わるとともに減少していった。訪問する中で、集まった方達が製作作業の合間に世間話や情報交換をする様子が見られ、交流の場としての意味合いが強いことが分かった。昔から続く交流拠点としての伝承部会があり、現在も続いている様子を感じられた。

5-4. 課題と現状

伝承部会が抱える課題として、会員の方からの聞き取りで人手不足と新しい会員が増えないことが挙げられていた。長寿会の役員会議では新しい会員の不足を頻繁に訴えているという。令和元(2019)年 11 月に発行された地域の情報誌「里山通信 11 月号」では、伝承部会の活動を紹介し地域の方の参加や見学を呼びかける内容の記事が掲載された。このように会への参加を働きかけているがあまり効果は見られていないという。会員の全員が 70 歳以上となっている伝承部会は今後、後継者の不足や会員の減少が考えられる。村の駅きたかんだの郷(前述)の店員に話を伺った時も人手不足が課題の 1 つであり、新しい事業を始めようとする際の障害になっているということで、北蟹谷地区で活動する団体には新規参入の課題が挙げられているようだ。

現在の会員の方達に会員になった経緯を尋ねると、先輩の会員に声を掛けられて参加した方や、長寿会の助っ人として稲刈りに参加してから流されて作業に参加するようになった方がいた。以前から伝承部会を知っていても自分から入会する方は少なく、声を掛けられ

ることで参加しやすくなったという。この話から、会員からの呼び掛けが効果的であることがわかる。声を掛け続け受け入れる姿勢を示すことで、入会のハードルが下がり会員の増加に効果的なのではないかと思う。

こうした課題が挙げられるなか、商品の売り上げは好調な様子だ。会員への報酬、新年会や忘年会の打ち上げ費用、次年度の活動費なども賄えているという。報酬や打ち上げを設けることで、ただの無償労働にならず会員へ還元される仕組みになっている。また、参加者にやりがいを感じてもらうためでもあるそうだ。伝承部会について調査をして、この還元の仕組みが活動の継続のために重要な要素の 1 つだと感じた。目に見える形で自分たちの活動の成果が返ってくる仕組みは確実に会員のやりがいにつながる。市内や地域の方達に長年受け入れられ続けている実感を得ることができるこの仕組みがあることで、会員の方のやりがいとなり、継続していく自信にもなるのだと思う。

「高齢者のやりがいづくり」は、高齢者の割合が高くなっている北蟹谷で、地域活性化協議会が設定した目標の 1 つとなっている。初めて伝承部会を訪れた日に仰っていた「小矢部のほかの地域と比べても北蟹谷ほど活発な地域は見当たらない」という言葉を思い出し、「やりがいづくり」が機能していることで本人達の自負に繋がり、盛んな地域活動が生まれるのだと考える。

謝辞

今回の調査にご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。北蟹谷公民館の松井清様、伝承部会の皆様には多くのお時間を割いて頂き、感謝を申し上げます。特に伝承部会の皆様には突然の訪問にも関わらず何度も調査に協力して頂きました。貴重なお話を提供して頂いたおかげでこの報告書を執筆することが出来ました。誠にありがとうございました。

参考文献

小矢部市 『ふるさとガイド小矢部』 株式会社アヤト 昭和 59 年

小矢部市史編纂委員会 『小矢部市史上巻』 北陸明治印刷株式会社 昭和 46 年

小矢部市編纂委員会 『小矢部市史下巻』 北陸明治印刷株式会社 昭和 46 年

おこ 小神集落における地域行事の移り変わり

高社 華

はじめに

私が初めて小神集落を訪れたのは、砂田康子さんに話を伺うためである。砂田康子さんは「ほうきんのよごし¹¹⁹」を報恩講¹²⁰で振舞っていた経験を持つ。この時は小神集落の地域行事についてではなく、寺院で行われる報恩講やそこで振舞われる食事を中心に調査しようと考えていた。

小神集落の地域行事をテーマにしたきっかけは康子さんとの会話の中で「尼御講^{あまおこう}」について知ったことである。私の生まれは高岡市の小さな寺院である。そのため、「報恩講」には多少親しみがあつた。しかし、寺院ではなく地域住民が主体の「講¹²¹」が存在することはこの時に初めて知った。そして「尼御講」の他にもいくつかの「講」が行われている小神集落に興味を抱き、この集落の地域行事をテーマとして調査することに決めた。

調査は、地域住民の方々からの聞き取りや地域住民の方からお借りした『小神の年譜¹²²』の読み取りを中心に行った。また、「尼御講」と「若い衆報恩講」では実際に活動の様子を見学、体験させていただいた。調査を進めていくうちに、時代の移り変わりとともに途絶えた行事やかつての役割を失った行事の存在を知った。本章ではこうした状況も踏まえて、小神集落における地域行事の移り変わりを記述していく。

¹¹⁹ ほうきんはコキアの和名。枯れた枝を箒に利用していたことが和名の由来。こんもりとまとまった樹形が特徴の一年草で、草丈は50～100 cmほどである。生長すると鮮やかな緑色の葉を茂らせるが、秋に紅葉して枯れる。

富山県内では、野菜を茹でて細かく切り、味噌で味付けしたものを「よごし」と呼ぶ。ほうきんのよごしの材料はほうきん（箒草）、ゴマ、味噌、砂糖。乾燥させたほうきんを熱湯にくぐらせ水にさらす。炒ってすりつぶしたゴマと味噌、砂糖を混ぜて、そこに絞ったほうきんを和えて作る。康子さんはお姑さんから教わった。ほうきんのよごしは主に村の行事の際に作る。

¹²⁰ 親鸞聖人の命日の前後につとめる法要。

¹²¹ 仏教の講義を聞いたり、神仏に参ったりするための団体。

¹²² 平成25（2013）年に小神歴史会の編集委員が作成した小神集落に関する事柄を記したもの。

1. 小神集落の概要

1-1. 調査地「小神」について

小神が含まれる小矢部市松沢地区は小矢部川の右岸(東岸)に位置する。かつては、庄川と小矢部川の流れが主流や支流に乱れて定まらない荒蕪地だった。そのため、わずかな住民が後背地周辺の微高地を求めて移住してきた土地である。

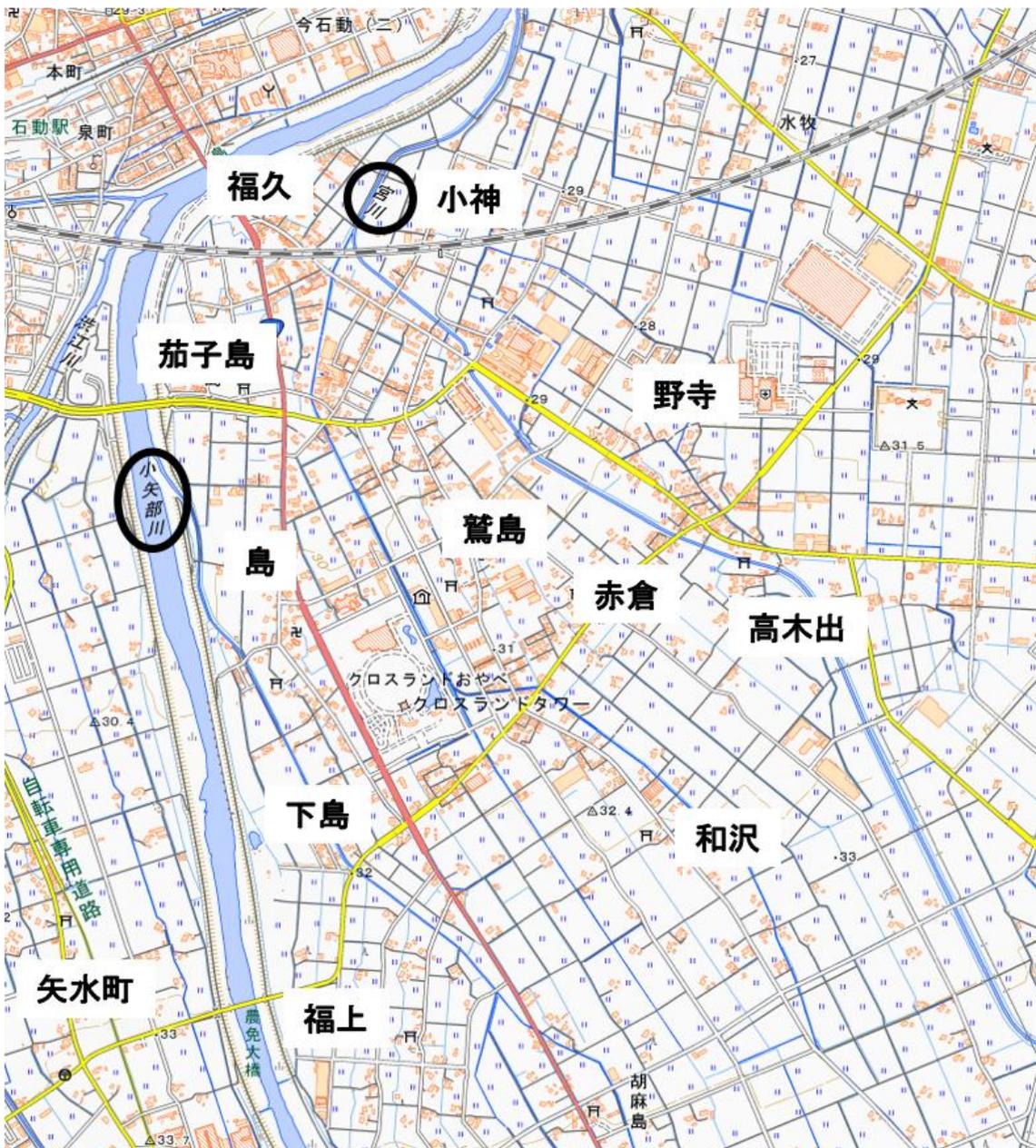


図1 松沢地区における小神の位置

松沢地区の開拓が進んだのは江戸時代の初めごろからである。加賀藩の指導の下、和沢、小神、赤倉、野寺、^{わしがしま}鷺島の開発が進む。また、小矢部川沿いの福住¹²³、上次郎島¹²⁴、島、^{なすじま}茄子島は江戸中期から後期にかけて開発が進められた¹²⁵。現在の松沢地区は、和沢、福上、^{しもじま}下島、島、茄子島、福久、小神、野寺、^{なかぎで}高木出、赤倉、鷺島で構成されている。

昭和 37 (1962) 年から昭和 48 (1973) 年にかけて、松沢地区は小矢部市内周辺地区の中で唯一企業立地の多い地区となる。これは、当時進められた圃場整備事業と産業都市建設を目指す市の政策の影響で松沢地区内に中小企業が誘致されたからである。また、平成 6 (1994) 年に新設された「クロスランドおやべ」をはじめとして、児童図書館「おとぎの館」や「農村環境改善センター」、「ヘルシーバルおやべ」、「総合保健福祉センター」などの公共施設や各種企業、住宅の立地が進められた。その結果、松沢地区は小矢部市の厚生施設、新興住宅地として変貌し、混住化が著しく進んだ地区となった¹²⁶。その一方で、当時の小神集落では先述したような大規模な開発は行われなかった。しかし、小神集落の 70 代男性の方は社会福祉の面で開発の影響を感じると述べられた。例えば、クロスランドおやべでは子供向けのイベントが多数開かれているため、交流のきっかけに繋がるという。他にも、松沢地区の知名度向上にも繋がったと述べられた。

前頁にあるように、小神集落は松沢地区に含まれる。小矢部市の中央部に位置しており、小矢部川の右岸（東岸）沿いの水田地帯にある。昔は水害に多く見舞われ、昭和 27 (1952) 年と昭和 28 (1953) 年には 2 年続いて大水害が起こったという。

小神集落の成立には宮家と深い関わりがあると住民の方は述べられた。宮家は、かつて正因寺という寺院を開いていた旧家である。宮家の代々の記録をまとめた縁起書や家系図、小神神社に残る資料によると、宮家は現在の新潟県から庄川へ、そして最終的に小矢部に土着する歴史を持つと伝えられている。宮家には約 800 年前、平家の武士で越後（現新潟県新井市）の国司だった^{じょうしろうながしげ}城四郎長茂がいた。四郎長茂は寿永 2 (1183) 年 5 月の倶利伽羅峠の源平合戦に参戦する。しかし、その戦で木曾義仲に敗れたため、現在の砺波市庄川地区に逃げて土地を開拓し百姓になった。そして、その土地を「^{おがみ}雄神」と名付ける。しかし、その後の 5 代目長右衛門の時代に庄川が氾濫し田畑も荒地になったため、土地を探し求めて最終的に現在の小矢部川近くの土地に移ったという。そして、そこを先住地であった「雄神」という

¹²³ 現在の福久。

¹²⁴ 現在の矢水町で、松沢地区には含まれていない。

¹²⁵ 『小神の年譜』『小神備忘録』 pp.1-2

¹²⁶ 社会福祉法人 小矢部市社会福祉協議会「松沢地区」2012 年 3 月 27 日投稿
2019 年 12 月 10 日時点 <https://www.oyabe.or.jp/?p=91>

地名を慕って「小神」と改名したと伝えられている。その際に姓も「城」から「宮北」へと改名したとされている。そこでは、地主と同じ役割である十村役¹²⁷として小神集落を束ねていた。現在の「宮」という姓は 36 代目宮長二の時代に「宮北」から改正したものである。現在の宮家の当主である宮英作さんは 39 代目だ¹²⁸。

「城」から「宮北」、「宮北」から「宮」に改名した理由は定かではない。しかし、「宮（小神神社）の北へ行け」というお告げから現在の宮家の所在が決められたという逸話がある。宮英作さんはこれと関連しているかもしれないと述べられた。

1-2. 小神集落の変遷

住民の方によると、昭和 38（1963）年頃の小神集落の世帯数は 30 ほどしかなかった。当時はほとんどの家が農業を営み、農業や畑仕事の傍で道端に座って近隣住民と世間話をしながら生活していた。

世帯数が増加し始めたのは昭和 41（1966）年頃で、圃場整備がきっかけである。前頁にあるように、圃場整備は小神集落だけではなく松沢地区の全ての集落で行われた。小神集落の圃場整備はその中でも早く、最初に行われた福上について 2 番目である。整備前の小神集落には小規模な水田や畦道が多かった。しかし、整備後は大規模な水田にまとめられた。その後、余った土地を売る農家が増加したことにより他の土地からの移住者が増え、世帯数は増加していった。データが得られた平成 2（1990）年には世帯数が 100 近くまで増加しており、これは令和 1（2019）年までほぼ変わらない¹²⁹。しかし、人口は徐々にであるが減少傾向にある¹³⁰（図 2）。

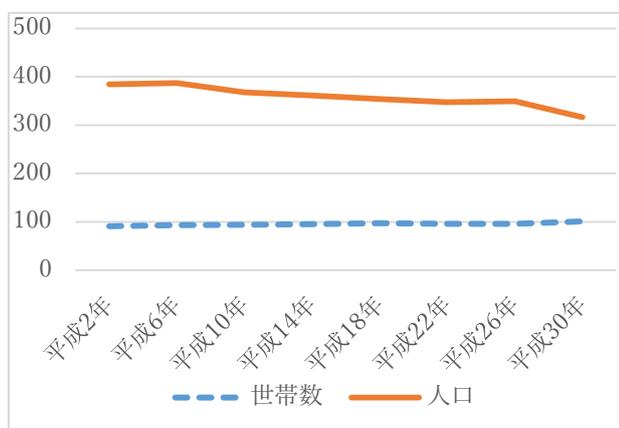


図 2 小神集落の人口推移

¹²⁷ 10ヶ村ほどを取り仕切る仕事。年貢の取り立てや藩のきまりの連絡などが主な仕事。加賀藩十村役「喜多家」穀探る身分差別 2020年1月8日時点 <http://www.ishikawa-c.ed.jp/content/m-media/rekishi/rekishiSOZAI/kitake/kitake.html>

¹²⁸ 資料「宮家の歴史について」、『小神の年譜』『小神備忘録』pp.5

¹²⁹ 令和 2（2020）年 1 月は 81 軒になった。

¹³⁰ 小矢部市役所から提供された小矢部市地域別人口集計を参照。

1-3. 地域住民の集いの場¹³¹

現在の地域行事の会場は小神コミュニティセンターの場合が多い。小神コミュニティセンターは平成 15（2003）年 3 月に新しく建設された建物である。それまでは旧小神公民館が会場であった。旧小神公民館は昭和 19（1944）年に宮家の敷地内に建設されたもので、協同作業所として利用されていた。また、旧小神公民館建設以前にも小神集落には住民の集いの場があった。それは宮家が営んでいた正因寺である。

正因寺は寺院である。明治 13（1880）年 1 月 8 日に設立された。設立時の 5 代目当主長右衛門は庄屋を生業としていた。そしてその傍らで、仏教の教えを広めることを目的として村に念仏道場を開き、村民に布教を行っていたという。この布教活動は宮家で代々受け継がれてきた。そのような中で小神には祖先の菩提を弔う寺院がなかったことから、36 代長二が 119 名の村人とともに寺院創立の願いを東本願寺に申し出した。これが正因寺発足の由来とされている。

長二は正因寺の初代住職として布教活動に努める傍ら、寺子屋を開いて学問を教えた。長二が明治 15（1882）年に 38 歳で病没した後は妻ののさ子はその意思を引き継いで神仏に帰依した。のさ子が亡くなった後は宮家の親族である乗永寺¹³²の住職が正因寺の住職を兼任していた。

正因寺は門徒がいない寺院である。住職・副住職以外に僧侶はいない。そのため、正因寺の維持費や修理費は他の稼ぎで得た収入で賄われていたという。正因寺は子どもに勉強を教えたり僧侶の説教を聞いたり茶会が開かれたりなど集会場的役割が大きかった。また、ほかの寺院から僧侶を招いて報恩講などの仏教行事も行っていた。住職・副住職と寺院の役員が主体となって開催していたという。前頁にあるように、現在小神コミュニティセンターで行われている行事もかつては正因寺で開いていた。当時も、現在と同様に地域住民が主体で行っていたという。小神住民が発案し協力して建てられたのが正因寺である。しかし、門徒がおらず収入がないなか老朽化した寺院を残しておくことは負担となり、平成 7（1995）年に廃止することになった。

1-4. 小神の^{ざんまい}三昧

三昧とは墓地のことである。小神集落の三昧は 3 カ所に分かれている。それぞれ「表三昧」、「裏三昧」、「宮新の三昧」と呼ばれている（図 3）。表三昧、裏三昧は明治にはすでに存在している。一方で、宮新の三昧は昭和 44（1969）年に出来た比較的新しいものである。宮

¹³¹ 『小神の年譜』『小神備忘録』pp.15-16

¹³² 松沢地区島集落にある寺院。

新の三味は宮家の分家の墓地である。分家となったのは宮新右衛門で、彼は 31 代目新次郎の 6 人兄弟の末の息子だった。宮新の三味はこの一族の墓地であると言われている。

表三味は乗永寺の門徒の家墓地で、裏三味はそれ以外の乗光寺¹³³、真光寺¹³⁴、仁真寺¹³⁵門徒の家の墓地であった。しかし、現在は墓地の拡張や集落内の新しい戸数の増加によって昔の区分は薄れている。

表三味、裏三味ともに敷地内に幾つかの小屋が建てられていて、お地蔵様が祀られている。これらのお地蔵様は地蔵守¹³⁶で使用されることがあり、手入れされている。



図 3 小神の三味の位置



写真 1 表三味

写真 2
表三味のお地蔵様



写真 3 裏三味



写真 4 裏三味にあるお地蔵様

¹³³ 小矢部市八和町にある寺院。

¹³⁴ 砺波市本町にある寺院。

¹³⁵ 小矢部市西福町にある寺院。

¹³⁶ 3.1.1.参照

1-5. 住民と地域行事 青年団

1-5-1. 構成

小神の青年団は 20 歳から 40 歳の男性で構成されている。令和元（2019）年現在、団員は 12 名である。小さな子どもを持つ 30 代の親世代が比較的多い。団員は地元出身者と移住者とで混在しているが、地元出身者が半数を占める。加入のきっかけは近隣住民からの声掛けが一般的である。

青年団は小神の地域行事の多くを担っている。主な活動は、2 月の報恩講（若い衆報恩講）¹³⁷と 8 月の地蔵祭り¹³⁸、9 月の秋祭り¹³⁹、12 月の夜警である。

1-5-2. メンバーの福岡毅さんからの聞き取り

福岡さんは現在 39 歳で、前青年団長を務められていた。福岡さんは移住者で、5 年前に小神に引っ越してきた。青年団に加入したきっかけは住民からの声掛けである。青年団長の就任の条件は「青年団内で最年長であること」であるため、小神での居住年数や青年団での活動期間は関係ない。青年団長の任期は 2 年で、新しく団長を決める際にたまたま自分が最年長だったからと福岡さんは述べられた。

小神集落は仏教要素のある行事が多い。そのため、団長就任直後は仏教知識の少なさから苦労したという。就任の際の前団長との引き継ぎは、青年団の活動について書かれた段取り用紙で行われた。しかし、段取り用紙だけでは対処できない問題が起こることがあるという。例えば、地蔵祭りで招かれる僧侶は「御詠歌」を歌うことができる人と決められている。そのため毎年曹洞宗の相伝寺¹⁴⁰の僧侶が行っていた。しかし、福岡さんが団長を務めていたある年に、その方が来られなくなったことがあった。僧侶の代理については段取り用紙に書かれていなかったため、福岡さんは曹洞宗の寺院を自分で調べて対処された。福岡さ



写真 5 仏具

¹³⁷ 2-2.参照

¹³⁸ 2-3.参照

¹³⁹ 2-4.参照

¹⁴⁰ 小矢部市七社にある寺院。

んは自身の経験を段取り用紙に付け加えて後世に引き継ぎを行ったという。

福岡さんは、「仏教知識がないまま団長になった。しかし、それらを通して行事のルーツや意味がわかるようになったのはいい経験だった。地域に伝わる行事であっても歴史を途絶えさせて欲しくない。日本文化は形式が変わっていくとしても、後世に伝えるべき」と述べられた。

2. 主な地域行事

2-1. 尼御講

尼御講はその年に亡くなった女性を偲ぶための仏教行事である。

現在は小神コミュニティセンターで行われている。しかし、開催場所の変更が2度あった。1度目は住民の家や正因寺（現在は廃寺）から小神公民館への変更である。明治や大正の時代の尼御講の開催場所は住民の家か正因寺だった。現在と比べて当時は尼御講の開催頻度も多かったため、順々と各家を使用していたという。2度目の変更は小神公民館から現在の開催場所である小神コミュニティセンターへの変更である。これは平成15（2003）年に旧公民館が解体され、小神コミュニティセンターが同年建て替え施設として建設されたためである。

現在は1年に1回、6月の下旬ごろに行われている。私が参加させていただいた令和1（2019）年の尼御講の開催日は6月30日（日）だった。開催日を決める指針は参加者と招く僧侶双方の都合が合うかどうかである。また、仮にその年に亡くなった女性がいなくても開催される。参加者の年齢層は60～80代の方が主で、全員小神の住民である。参加人数はだいたい30名だという。参加人数は昔と現在とであまり変化はないが、男女比は異なる。尼御講はもともと女性の参加者が主で、男性は自主参加が数名いただけであった。しかし、平成10（1998）年ごろに次世代の参入が見込めず人員不足に陥る懸念から、老人会「いきいきサロン」との合同開催が始まった。これによって女性と男性が半々の参加率になったという。

2-1-1. 尼御講体験の様子

当日は午前10時から始まり、お昼の休憩を挟んで午後3時に終了した。私は午前9時半に小神コミュニティセンターに到着したが、すでに法名や阿弥陀様の掛け軸、仏具が飾られており椅子も並べられていた。これらの仏具は住民が年々お金を出し合って少しずつ増や

していったものである。巡回講¹⁴¹や若い衆報恩講でも使用される。尼御講の前日に役員¹⁴²は仏具をひとつずつ磨いて翌日に備える。また、仏具は講で使用されるだけではない。20年以上前は、49日まで床の間で遺骨と一緒に飾るのに使用するために各家への貸し出しも行っていたという。三具足（香炉・燭台・花立）と阿弥陀様の掛け軸を持っている

表1 尼御講のスケジュール

9:00~10:00	準備（ごはん、会場設営）
10:00~10:20	正信偈、消息
10:20~10:30	休憩
10:30~12:00	説教
12:00~13:30	お昼休憩
13:30~14:00	物故者追悼法要（小休憩挟む）
14:00~15:00	説教（小休憩挟む）

家は少ないため、多くの家が利用したと思われる。しかし、現在は葬儀屋が貸し出しを行っている場合が多いため借りる人はいない。



写真6 参加者の様子

役員はお昼ご飯やお茶の準備をしていて、役員以外の参加者もほぼ集まっていた。役員は村の班ごとに毎年当番制で行う。帳面管理・会費集めは2人1組で行う。そのうち1人は来年度も係を継続して次の人に引き継ぐ。

悪天候の中、男性10名、女性15名ほどの参加者が集まった。60代後半から70代の方が多い印象で、最高齢は93歳の女性だった。参加するきっかけは「参加できなくなったお姑さんの代わりに」という理由が多い。住民は「久しぶりやね!」と言い合って世間話をしながら、仲がいいもの同士で固まっていた。

また、仏具に向かって左側に男性、右側に女性と分かれて座っていた。

尼御講で招かれる僧侶は決まっているわけではない。この日招かれたのは氷見の本願寺の宮木美弥子さんという尼さんだった。

正信偈¹⁴³では宮木さんと参加者が全員で一緒に唱えていた。そして、その後の宮木さんが

¹⁴¹ 3.2.1.参照

¹⁴² 尼御講で食事の手配や僧侶のお世話、帳簿の管理を行う人。集落内で数班に分かれている。

¹⁴³ 浄土真宗の勤行や葬儀で拝読される親鸞聖人が作った歌。

読む^{しゅうそく}消息¹⁴⁴を参加者は真剣に聞き入っていた。特に印象に残ったのは午前の説教¹⁴⁵である。説教中、参加者は宮木さんの話にツッコミを入れて笑ったり、宮木さんも「〇〇さんは今回いらっしやらないんですか？」と質問したりして、全員が始終にこやかだった。長年の行事だからこそその親密さが感じられ、尼御講が住民にとって少なからず伝統的なコミュニケーションの場であることが分かった。宮木さんは参加者のニーズに合わせているからか、親近感のある話題が多かった。宮木さんは「今日行くところがあるか、今日用があるか」が日々大事なことで、人の輪に入ることを勧められていた。他にも、「諸行無常」、「諸法無我」などの宗教用語を日々の経験やテレビ番組、事件から紹介されていたため、仏教の知識がなくても分かりやすかった。最後に宮木さんは、「このような減りつつある尼御講を含めた多くの伝統や知識を後世に伝えることがおじいちゃんおばあちゃんの役割」だと述べられた。スケジュールそれぞれの間には10分ほどの小休憩が必ず入る。休憩中はお菓子を回し合ったり世間話をしたり賽銭を集めたりして各々が楽しんでいた。



写真7 賽銭を集める際使用した籠

尼御講の役員は女性で構成されている。しかし、ご飯を食べる机や舞台セット、宮木さん用の椅子と机は男性参加者が率先して準備していた。ロウソクの火をつける、仏具の整頓をするなどの細やかなことも行っていた。休憩中に賽銭を集めていたのも男性参加者だった。これらの手伝いは男性の自主的なものだという。尼御講での男女の違いはなく、参加者全員が協力して運営していることが感じられた。

尼御講での食事は役員の持ち寄ったものだ。食事には、役員が調理する「そうめん」や「おにぎりと漬け物」から購入して用意する「ますずし」へ、さらに最近は各役員の「持ち寄り」へと時代ごとに変化した。これは会員の減少やそれによる負担の増大が原因である。

今回は「おこわ」、「酢の物」、「卵焼き」、「寒天（べっこう）」、「漬物」、「かまぼこ」



写真8 食事風景

¹⁴⁴ 浄土真宗では親鸞聖人が書かれたお手紙のこと。

¹⁴⁵ 仏の教え。

などが振舞われた。おこわ、酢の物、そうめんはひとりずつ配られ、そのほかの料理は大皿で出されて各自が好きだけ取る形式だった。食事中、女性は出された料理の作り方を教えあったり男性はお酒を飲んでいたり、女性も男性も楽しんでいた。



写真9 おこわ、酢の物、そうめん



写真10 寒天、卵焼き

2-1-2. 参加者への聞き取り調査

2-1-2-1. 砂田康子さんからの聞き取り

砂田康子さんは現在 70 代の女性で、昭和 38 (1963) 年に砺波市から小神に嫁いできた。今年の尼御講では帳簿の管理をされていた。

康子さんが尼御講に参加し始めたのは昭和 60 (1985) 年頃からである。当初はお姑さんと 2 人で参加していた。康子さんがひとりで参加したのはお姑さんがいけなくなってからだという。仏教に詳しい知り合いとの交流や嫁ぎ先の砂田家の仏縁の深さ(乗永寺の門徒総代を務めていた)から、尼御講という仏教行事への参加に対する抵抗はほとんど無かったと述べられた。

現在の尼御講は参加者の固定化や高齢化、移住してきた住民への周知の不徹底といった問題を抱えている。こうした次世代に伝える新規参加者が見込めない状況によって継承の危機に瀕している状況だ。尼御講の帳簿に記されている名前はかつては世帯主の男性が多かった。しかし、現在は各世帯の年長の女性であることが多い。そのため、その方が亡くなるとそのまま尼御講の会員から抜けてしまうことが多くなったという。これらの現状から、康子さんは若い方が積極的に参加し、次世代に尼御講を引き継いでいくことを望んでいた。康子さんが尼御講に参加できなくなった場合、砂田家では誰が参加するのか伺った。康子さんは島から小神に嫁いできたお嫁さん(現在 40 代)が参加してくれるかもしれないと答えられた。最後に康子さんは「お年寄りと比べて若い人は仕事などで忙しくなかなか参

加する時間が取れない状況を考慮すると、一般的に難しいかもしれない。しかし先祖から続いたこの尼御講はぜひとも残したい」と述べられた。

2-1-2-2. 宮英作さん、宮栄子さんからの聞き取り

宮英作さんは小神出身の現在 70 代の男性だ。その妻である宮栄子さんも現在 70 代で、庄川周辺から小神に嫁いできた。

英作さんが尼御講に参加し始めるきっかけは巡回講で僧侶のお世話をするようになったことである。10 年ほど前から尼御講には参加しているという。一方、栄子さんは 20 年ほど前から参加されていた。康子さんと同じく、亡くなったお姑さんの代わりに参加するようになったと述べられた。栄子さんは参加以前から尼御講に対して協力的で、料理を作って参加するお姑さんにもたせていた。栄子さんが嫁ぐ前に住んでいた地域で尼御講はおそらく行われていなかったという。それにも関わらず抵抗なく参加できたのは栄子さんが仏教系の短大に通っていたからだと思われる。

尼御講が消えていくかもしれないという危機感はふたりとも持たれていた。栄子さんが尼御講に参加できなくなった場合、宮家では誰が参加するのか伺った。栄子さんはお嫁さんが参加してくれると答えられた。お嫁さんも現在の参加者減少に対して少なからず危機感を覚えていることから、尼御講に対しての抵抗はないように思われる。

2-2. 若い衆報恩講（報恩講）

小神集落の地域住民は大半が「若い衆報恩講」ではなく「報恩講」と呼んでいる¹⁴⁶。ある住民の方は青年団という若い世代が主体なことから「若い衆報恩講」とも呼ばれているのではないかと述べられていた。後述する巡回講の意味合いは「説教を聞くこと」だが、この若い衆報恩講は「前年に亡くなられた方の供養」を目的とした仏教行事である。

これは、毎年 2 月に小神コミュニティセンターで行われる。かつては開催の期日と場所は決まっていなかった。家の都合に合わせて概ね 2 月下旬から 3 月中旬の農閑期に行っていたという。また、開催場所は宮家（正因寺）がほとんどだった。



写真 11 若い衆報恩講での様子
(福岡毅さんより写真提供)

¹⁴⁶ 『小神の年譜』には「若い衆報恩講」と記載されていた。

主体は青年団である。いつから青年団が行っているかは定かではない。しかし、現在 70 代の方によると、自分が青年団に入っていた 20～30 代の頃も青年団が行っていたという。そのため、少なくとも 50 年ほど前から青年団が主体であったと分かる。参加者は青年団に所属するメンバーと故人の遺族である。遺族は例年 5 名ほど参加しているが、多い年では 10 名参加したこともあるという。また、町内の方も自由に参加でき、高齢の方が多いという。

供養の際に用いる法名の掛け軸は現在 2 本ある。青年団箱の掛け軸を「法名軸」と呼んでいる。法名軸には命日と法名¹⁴⁷、俗名¹⁴⁸が記載されている。命日は元号も記載されていて、最初の 1 本目には明治以前の方の名前も記されているという。若い衆報恩講がいつ頃始まったことは定かではない。しかし、小神集落ではかなり昔から行われている伝承行事であることがこのことからわかる。

2-2-1. 若い衆報恩講体験の様子

若い衆報恩講は午前みの開催で、主に行うことは個人の供養と僧侶が法名軸に故人の名前を記すことだ。開始時刻は午前 10 時だが、青年団は午前 8 時半には小神コミュニティセンターに集合する。そこでは祭壇づくりといった会場設営を行う。

私が参加した令和 2（2020）年の若い衆報恩講は 2 月 2 日（日）に行われた。私は 9 時半に会場に着いたが、準備していた青年団員 5 名ほどに加え参加者も続々集まりつつあった。参加者は世間話をしながら開始時刻まで待っていた。参加者は青年団員合わせて 18 名で男性の参加者が多く、女性の参加者は 4 名だった。青年団員以外の参加者は 60～70 代のご年配の方が多かった。開始されると、まずは参加者で正信偈を読んでお勤めをする。お勤めの最中に遺族はお焼香をあげていた。その後、小休憩として賽銭集めをする。賽銭集めは尼御講と同じように参加者一人一人に籠を差し出して集めていた。そして、最後に僧侶の説教を聞く。行事は全体を通して短いもので、お昼前の午前 11 時には解散した。

表 2 若い衆報恩講のスケジュール

8:30	青年団員集合
9:30～	祭壇づくりの準備
9:45	遺族集合 「法名軸」への記入
10:00～ 11:00	お経（正信偈）→説教→賽銭集め→恩徳讃

行事では、ご年配の参加者が青年団員にアドバイスをしている姿が多々見られた。アドバイスの内容は行事のお知らせの方法や道具の置き場所、掛け軸の掛け方などだ。

¹⁴⁷ 仏教で仏門に帰依したものが授かる名前。

¹⁴⁸ 生前に名乗っていた名前。

今年招かれたのは島の乗永寺の僧侶だった。僧侶の方は「念仏を唱えたり唱えなかったり、自分の話に反応したりしなかったりと講の雰囲気は地域ごとに違う。しかし、小神地域はすごく反応してくれる地域でいいですね。」と話されていた。参加者はお経を大きな声で読み、説教は反応したり頷いたりして聞きいていた姿が印象的だった。この姿からも、小神住民にとってこの行事が重要であることが分かる。

2-3. 地蔵祭り

地蔵祭りは子供の供養のための行事である。供養の対象となる子供は現代で亡くなった子供だけではない。かつての医療が未発達だった時代や水害で亡くなった子どもたちも含まれている。そのため、かつては子どもを中心に村の人全員で行うものとされていた。現在の参加者は青年団と地域の子どもたち、高齢の方に絞られている。全員、数珠とお賽銭をもって参加する。

これは毎年8月最初の日曜日に行われる行事である。かつては、若い衆報恩講と同様に決まっておらず、宮家（正因寺）を使用するが多かった。正因寺が廃寺となった現在は小神コミュニティセンターで行われている。

今も昔も主体は青年団である。青年団員は地蔵祭りの朝にお地蔵様を会場まで運ぶ。現在は表三昧と裏三昧から合わせて20体ほどのお地蔵様を集めている。一方で、かつては村内や宮新の三昧からも集めていた。その当時は交通の便からお地蔵様を抱えて運ぶことも珍しくなかったという。また、現在は僧侶の「御詠歌¹⁴⁹」を聞くのみであるが、かつては朝時¹⁵⁰と逮夜¹⁵¹の法要も勤めていた。そして、夜に参拝者全員



写真12 地蔵祭りの祭殿
(福岡毅さんより写真提供)



写真13 地蔵祭りでの様子
(福岡毅さんより写真提供)

¹⁴⁹ 一般の信者が寺院や霊場巡礼の際に唱える歌。

¹⁵⁰ 朝にお勤めをすること。

¹⁵¹ 夜になる前にお勤めをすること。

で西国三十三カ所巡礼¹⁵²の御詠歌を唱和した。御詠歌の音頭をとるのは僧侶ではなく村内の古老に頼むことが多かったという。この御詠歌は珍しいもので、曹洞宗の中でも限られた寺院でしか行われていないと青年団の方は説明された。御詠歌を歌える住民がいなくなった現在は小矢部市七社の相伝寺から毎年僧侶を招いているという。

2-4. 秋祭り

小神の秋祭りは「秋祭り」と「本祭り」の2種類に分けられている。9月5日直前の日曜日に秋祭りを、9月5日に本祭りを毎年開いている。かつては9月5日に両方行われていた。しかし、働きに行ったり学校に通ったりしている住民も集まれるように日曜日に秋祭りが行われるようになったという。秋祭りは青年団が、本祭りは町内会が主体である。秋祭りでは余興やハナウチ、神輿が催される。本祭りでは小神神社で祝詞が挙げられる。

かつての余興は多くの場合、映画を上映していた。小神神社の境内の隅に銀幕を張り、観客席としてゴザを敷いていたという。境内に小屋掛けをして芝居をした年もあった。しかし、現在はマジシャン（手品師）など、芸人を呼ぶ場合が多い。小神集落では、秋祭りの神輿を担いだ日に夕方に「余興」という形で町内の住民を招いて宴会のような催しを行う。

ハナウチとは嫁いできたお嫁さんの実家から金一封とお酒、ハナガミを秋祭りに持ってくることである。秋祭りで集落の内外から集まるハナ（祝儀）は青年団が行事を運営する上で大事な財源である。ハナは前述の余興の宴会の際に頂くことが多い。住民の方は現在のハナはお祭りに対するご祝儀として、全世帯の中で気持ちのある人しか出していないのかもしれないと述べられていた。しかし、青年団によると、小神に嫁いできたお嫁さんの実家からのハナウチは現在も続いているとのことだった。結婚された家だけでなく、町内の各家からもいただいているという。結婚などめでたいことがあった家からのハナは、通常の町内の方よりも多く頂くことが一般的だ。その際、嫁ぎ先の親が「どれくらい持ってこればいいか」を青年団に聞いてくることもある。令和元（2019）年は嫁いできた方が1名いらっしゃったという。お嫁さんからのご祝儀はひとつかふたつあったり無かったりする。毎



写真 14 樽神輿
(福岡毅さんより写真提供)

¹⁵² 近畿などの西国にある観音信仰の霊場 33 箇所を巡礼すること。

年まちまちだと青年団の方は話されていた。

小神集落の秋祭りには獅子舞はなく、神輿のみ催される。経緯や時期は定かではないが、神輿は50年ほど前から行われているとのことだった。神輿は「樽神輿」（写真14）と「本神輿」（写真15）の2種類である。樽神輿と本神輿が練り歩くルートは同じだ。しかし、本神輿には神様が乗る本神輿である。そのため、本神輿の後ろに樽神輿が練り歩く。人間が神様の前を歩く事は御法度なので、樽神輿が本神輿よりも先に行くことはないという。



写真15 本神輿
(福岡毅さんより写真提供)

樽神輿は大人が担ぐ。神輿は重いため子供は担げない。そのため、本神輿は台車に乗せて練り歩いている。本神輿に乗せた台車を子どもたちが引くため「本神輿（通称：子供神輿）」と呼んでいるそうだ。「本当は本神輿も樽神輿も大人が担いで練り歩き出来ればいいが、人手が足りず叶わない」と福岡毅さんは述べられた。

かつて樽神輿は金銀の装飾が施された立派なものだった。しかし、その分盛り上がってしまい川に落ちたり転んだりして破損し、その修理費がかさんだため現在の樽神輿に変更されたという。ふたつの神輿は青年団、神輿の会、児童クラブが共同して催している。保存、管理は神輿の会が行っている。

3. 行事の変容

3-1. 途絶えた行事－地藏守、石割り

3-1-2. 地藏守

地藏守はお盆に行われていた子どもの行事である。参加する子どもの条件は裏三昧にお墓を持つ家の男子である。裏三昧に限られる理由は、表三昧はお墓も子どもの数も少なかったからである。

子どもたちはお盆の数日前から裏三昧に集まって準備をする。高学年の子どもたちは小屋を作り、低学年の子どもたちは賽銭を集めた。地藏守本番は14日の夕方から16日までの間だった。その期間はお地藏様へ野菜や果物、お菓子を供えたり、お墓にお参りにくる人たちから賽銭を集めたりして過ごす。子どもたちは期間中、小屋の中で遊びながら寝泊りす

る。子どもが入りきらない場合は小屋の横に簡便な小屋を作って補充していたという。実際に参加した経験を持つ住民は三昧内の小屋に寝泊りすることや、スイカを食べたり肝試ししたりすることは新鮮で楽しかったと話された。

地蔵守は現在行われておらず、おそらく40年前までのものである。消失した理由として、時代の流れや世間の風潮、子どもの減少が考えられる。

3-1-3. 石割り

石割りはお嫁さんをもたらした家に対して青年団が催す行事である。花嫁、花婿を迎えた家は青年団にお酒や金一封を贈り、家に入った人を披露していた。そして、青年団はその返礼を兼ねて、暗くなってからその家に対して石割りしにくる。石割りの際、代表者が祝言を挙げたり「石割祝いの歌」を歌ったりしてその家の繁栄を祈念したという。「石割祝いの歌」の歌詞は「招寿来福 鶴は千年亀は万年 あゝ目出度い 目出度い」である。

実際に体験した70代の住民にお話を伺った。その方は嫁入りで、石割りが行われたのは杯割り¹⁵³の数日後だという。青年団や婿の友人、地域の方など合わせて十数人が集まった。石割りで使用する石は嫁ぎ先の家が用意する。石は大人の男性が両手で持てるくらいの大ささだった。そして、青年団のひとりがその石を庭の砂利の上に落としたという。石は割れず、その方は石同士を単にぶつけ合っただけという印象を抱いていた。

この行事は、住民によると25年ほど前の息子の結婚の際には既に行われていなかったとのことだった。一方で、新婚夫婦が挨拶回りや近隣住民の訪問があったり、青年団がお酒を飲みに来たりして交流は続いていたという。しかし、現在ではお嫁さんが嫁いできたことすら知らない場合が多くなったと住民は話された。

3-2. 変化した行事－巡回講、夜高/行灯

3-2-2. 巡回講

巡回講は僧侶の説教を聞く行事だ。「巡回講」を古老は「ゴダイサマ（御代様、五代様）」

¹⁵³ 嫁いできたその日に行われた。北陸地方に伝わる慣習。嫁が婿家に入る際に、実家から持参した水と嫁ぎ先の水を盃に合わせて飲む儀式。飲んだ後はその盃を割る。その意味合いには、両家の水を合わせることによって同一家族という意識を高めることにある。また、早く嫁ぎ先の家にも慣れてほしいとの願いが込められている。

レファレンス共同データベース 2019年12月10日時点

https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000052061

と呼ぶ。

かつては年に4回開催されていた。現在は年2回に減り、それぞれ1月と2月に行われるようになった。年4回だったときは城端別院、井波別院のお東（真宗大谷派）、井波別院のお西（浄土真宗本願寺派）、福町の寺院がそれぞれ担当していた。年2回の現在は城端別院と井波別院のお西が担当しているという。

戦前の巡回講は家々に巡回してお勤めや説教を行う1泊の宿泊方式だった。僧侶は夕方から来て、活動自体は夜からである。ここでは「御初夜^{おしよや}¹⁵⁴」を行う。そして、翌朝に講を開きお勤めをしてから僧侶は帰ったという。僧侶の宿泊場所は住民の家である。戦後、村内に公民館が建設されたことで、住民の家から公民館に変更された。また、現在宿泊方式の巡回講は行われていない。1日だけ日中に開催されている。現在の巡回講の主体は説教を聞くことで、その後お昼ご飯を食べて解散する。

3-2-3. 夜高^{あんどん}/行灯

地域住民は「夜高」を「行灯」と呼ぶこともある。これは6月10日、11日に行われる男子の行事だった。70代男性の住民によると、幼少期の頃は30名以上が参加しており、全員男だったという。子どもたちは放課後に宮家（正因寺）に集まって準備をする。準備は行燈作りなどで、本番の数日前から取り掛かった。当日は太鼓を鳴らしたり歌を歌ったりしながら練り歩いた。10日は小神集落を、11日は集落外を回ったという。子どもたちは練り歩いている最中にご祝儀を集める。このご祝儀集めは現在も行われているという。

現在の参加人数は20名ほどに減少した。また、女子の参加も増えている。年によっては女子の参加人数のほうが多いこともあるという。他方で、親世代の参加は増加した。かつては児童クラブや青年団中心だったが、現在は子どもたちの親を中心として開かれているようだ。子ども同様に、大人も男女ともが参加しているという。しかし、子どもの減少によって規模は縮小しているらしい。かつては中に入って中で太鼓を叩けるような本格的な行灯を作っていた。しかし、規模が縮小した現在はリアカーを用いた簡便な行灯で行っているという。

4. お嫁さんと関わりを持つ行事—秋祭り、寺院での報恩講、若い衆報恩講

住民との会話の中でお嫁さんと関わりをもつ行事がいくつかあった。秋祭りと寺院での報恩講、そして若い衆報恩講だ。砂田康子さんによると、50年前はほとんどの世帯が3世

¹⁵⁴ 夜にお勤めをすること。

代同居だった。当時、お嫁さんはお姑さんの言うことを聞くのが絶対だったという。

4-1. 秋祭り

秋祭りとお嫁さんの関わりは前頁で述べたように、ハナウチである。康子さんが嫁いだ時代は9月5日に秋祭りと本祭りが一緒に行われていた。お嫁さんは夏の着物で小神神社にお参りをしに行く。その後、嫁ぎ先の家で両家の親せきを呼んで宴会を開いた。康子さんは嫁いだ後はなかなか実家と関わる機会がないお嫁さんにとって楽しいものだったと述べられた。

現在は夏の着物を着ての参加はない。しかし、ハナウチは続いており若い地域住民も多く参加しているという。

4-2. 寺院での報恩講

報恩講は門徒の寺院に各自参加していた。康子さんの嫁ぎ先は乗永寺の門徒なので、康子さんはその報恩講に参加した。後述の若い衆報恩講よりも豪華な服装で参加したという。頭を結って留袖^{とめそで}¹⁵⁵を着たが、これは康子さんだけではなく同じ年に参加していたお嫁さんも同様の格好をしていた。また、康子さんは饅頭の入った重箱を持っていったという。これは嫁ぎ先が乗永寺と特別な関係だったためである。こうしたお嫁さんに関連する慣習は平成7（1995）の時点で残っていない。

乗永寺によると、お嫁に来た年に黒留袖を着て報恩講にお参りする慣習は最近まで続いていた。昔は黒色と決まっていた、無理をしても黒留袖だけはお嫁に行くときに準備していた。近年になってからは色付きの留袖を着る方も出てきているという。



写真16 絵羽織 紋

4-3. 若い衆報恩講

嫁いだお嫁さんは若い衆報恩講に、訪問着と門の入った絵羽織^{えぼおり}¹⁵⁶を着て参加する（写真16、17）。康子さんが嫁いだ50年前はこの慣習が一

¹⁵⁵ 結婚式や寺院の法事などで着用する着物。主に既婚者が着る。

¹⁵⁶ 1枚の写実画のようになっている羽織。写真は黒色だが康子さんが若い頃はピンク色の羽織だった。今の色は後に染め直したものである。色はその時代の流行によって異なる。

般的なもので、当時のお嫁さんはみな参加していた。その一方、お姑さんは着物と黒い羽織を着て参加する。若い衆報恩講は2月の寒い雪の時期に開催されるため、雪下駄とモンペを履いて歩いて参加しに行ったという。

現在の若い衆報恩講の参加者は青年団に所属する男性がほとんどだ。しかし、かつては嫁いできたお嫁さんとそのお姑さんが参加するため女性の参加者も一定数いたとい



写真 17 絵羽織

う。当時、他の参加者は説教を聞かずに後ろに座るお嫁さんばかり気にしていた。

康子さんは平成7(1995)年頃に長男のお嫁さんが嫁いできた際も姑として一緒に参加した。しかし、この時、お嫁さんは絵羽織を着ず訪問着のみの着用だった。そして、現在の若い衆報恩講にこの慣習は残っていない。

5. まとめと考察

本章では小神集落で開かれる地域行事を8つ紹介してきた。その内6つは現在も続いている。1月の巡回講、2月の若い衆報恩講、6月の行灯と尼御講、8月の地藏祭り、9月の秋祭りだ。開催数が減った行事もあるが、総合的にみると小神では1年を通して多くの行事が行われていることがわかる。

多かれ少なかれほとんどの行事が変化した。ライフスタイルの変化や高齢化、参加者の不足など要因は様々である。講行事は参加者の負担軽減のため、1年における開催数を減らした。秋祭りは働き世代でも参加できるよう正規ではない日にちに開催日を変更した。このように、小神集落の住民は時代の変化に伴って自分たちが行いやすいよう工夫してきた。

一方で、残念ながら現在まで続かなかった行事もある。地藏守と石割りの2つだ。残った行事と残らない行事の違いを考えるうえで「地縁関係」と「行事を理解しているかどうか」が重要だと考える。地藏守は子どもたちだけでお盆の期間中に三昧で寝泊まりする行事だ。娯楽的要素が強く、参加した方も楽しい夏の思い出として語られていた。子どもに人気がありそうな行事にもかかわらず残らなかったのは「地縁関係」の変化が関係しているのではないか。小神は開発を機に移住者が増えた集落である。また、現代になるにつれて交通の便もよくなり閉鎖的な空間ではなくなっていった。これは発展を遂げたという点では良いことである。しかし、子どもたちだけで寝泊まりをする点から考えると不安がある。この不安感

によって残らなかったのではないか考える。一方、石割りは嫁いだ家に対して青年団や地域住民が祝いに訪ねる行事だ。この行事はかすかに覚えている程度で詳しくは知らないと話す住民が多かった。また、「どうしてあんな行事をしていたのか」と疑問視する声が多かったことも印象的だった。私は、単に形式が続いていけば行事の継承につながると考えていた。しかし石割りの事例から継承に必要なのはその行事に対する理解ではないかと思うようになった。昔の人のまねをしても、意味が分からなければ自分が継承する側になった際に自信をもって後世に伝えられないと思ったからである。また、意味を理解することで、変えてはいけないことと変えてもいいことの区別がつく。変革の際にも役立つものだと思う。

「最近は何だかいつこの家に嫁いだのかわからない」と砂田康子さんは述べられた。尼御講で「久しぶりやね！」と言葉を交わしていた姿から、近隣住民と接する機会は地域行事だと思われる。住民は畦道で農作業の傍ら世間話をしていたかつてほど頻繁には会わなくなった。高齢化の他にも、かつての濃密な交流や親戚同士の人間関係の希薄化が地域行事衰退の要因の一つとして問題視されている。

そのような中で、小神の行事は講行事や地蔵祭りなど若者離れが進む宗教色が強い行事が多い。そのため、若者世代の参入は皆無で高齢の住民が主体だとばかり思っていた。しかし、若者世代も若い衆報恩講や地蔵祭りで活躍している。これには青年団が関係する。前青年団長の福岡毅さんは小神出身ではない。小神集落の行事の多さや初めて聞いた行事、そして宗教色の強さに驚いたという。先述の石割りのように先人をなぞるだけの行事になる可能性もあった。しかし、福岡さんはインターネット等で自分のわかる範囲から調べられた。福岡さんに苦労したことについて伺うと、何も知らずに初めて経験する行事を運営することと答えられた。一方で楽しかったことについて伺うと、行事の意味をだんだん知っていくことだと話して下さった。青年団は20～30代の若者で構成されている。現代では若者の地元離れが取り上げられることも多い。しかし忙しさや知識の少なさ、小神に越して入った人もいるにもかかわらず青年団は多くの行事をこなしてきた。そして、これからも後世に仕事を担っていくであろうと思われる。青年団は小神の行事で欠かせない存在となっている。

もちろん若い世代だけが担っているわけではない。年配の住民は多くの行事に参加たり『小神の年譜』を作成したりしている。『小神の年譜』には小神の成り立ちや行われている行事、昔の遊びなどが事細かに書かれている。住民は後世に小神の歴史や伝統を残そうとした。子どもたちは行灯、地蔵祭り、秋祭りに参加している。地蔵祭りは二つよりも娯楽的要素がない宗教色が強い行事だ。幼い頃からの行事への親しみも地域への愛着の要因にあるのではないか。また住民同士だけではなく家族での参加も交流の醍醐味のように思う。尼御講で宮木さんが話された後世に伝えることの大切さを今一度思い返した。

謝辞

小神集落の方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。砂田康子様や宮英作様英子様、青年団の福岡毅様が多くの貴重なお話や写真、資料を提供して下さったおかげで執筆することが出来ました。また、尼御講に参加させてもらった際も参加者の皆様には親切にしてくださいました。本当にありがとうございました。

参考文献

『小神の年譜』 平成 25 年

参考ウェブサイト

社会福祉法人 小矢部市社会福祉協議会「松沢地区」2012年3月27日投稿

2019年12月10日時点 <https://www.oyabe.or.jp/?p=91>

加賀藩十村役「喜多家」殻探る身分差別 2020年1月8日時点 <http://www.ishikawa-c.ed.jp/content/m-media/rekishi/rekishiSOZAI/kitake/kitake.html>

変化する民間伝承の語り—宮島で語られた民間伝承と現在の語り—

飯井 清隆

はじめに

「おいおい、話をするぞ」一冬の夜、祖父に呼ばれ囲炉裏を囲む。小矢部市北西部に位置する宮島では、今も多くの民間伝承が残っている。昭和初期頃までは祖父母の代から孫の代へ語り継がれていたが、今ではそういう場面は滅多にない。宮島で生まれ育ち、その地で教鞭を執っていた向川^{むこがわ}一夫さん(88)は退職後に、自らの記憶を頼りに祖父母等から伝えられた昔話を文字におこした。現在は語られることのない昔話は、向川さんが本に著したおかげで現在まで伝わっている。

一方で現代には現代に即した形での語りが存在する。現代の語りの形の一つとして、小矢部市の生涯学習サークルで活動する「ひまわりグループ」がある。

この章では、かつて民間伝承が語られていた状況と現在の語りの状況を比較しながら民間伝承が今後どのように残されていくかを考察する。

1. 宮島という土地、伝わる伝承

この節では、向川一夫さんが平成 23 (2011) 年に自家で出版した『増補版 宮島 小矢部市宮島地区抄』をもとに宮島について概説する。

1-1. 宮島の地理

宮島は、小矢部市の北西部に位置し、高岡市福岡町・小矢部市南谷・子撫地区・石川県津幡町のそれぞれに接している山間地域である。小矢部市の最高地点である大嶺山(396.5m)・子撫集落の稲葉山(346.9m)・了輪集落の鍋山(198m)・矢波集落の平山(153m)などの山々が連なり、子撫川とその支流が小峡谷を作り出している。この地域は滝や淵、山をはじめとした豊かな自然の風景を観光資源として生かしており、夏には川遊びや涼みに川へ訪れる人々がいる。



写真1 一の滝

現在の宮島には宮中、矢波、屋波牧、岩崎、嶺、糠子島、別所滝、了輪、名ヶ滝、高坂、下屋敷、二の滝、北屋敷、森屋、管ヶ原、久利須の16集落が存在している。

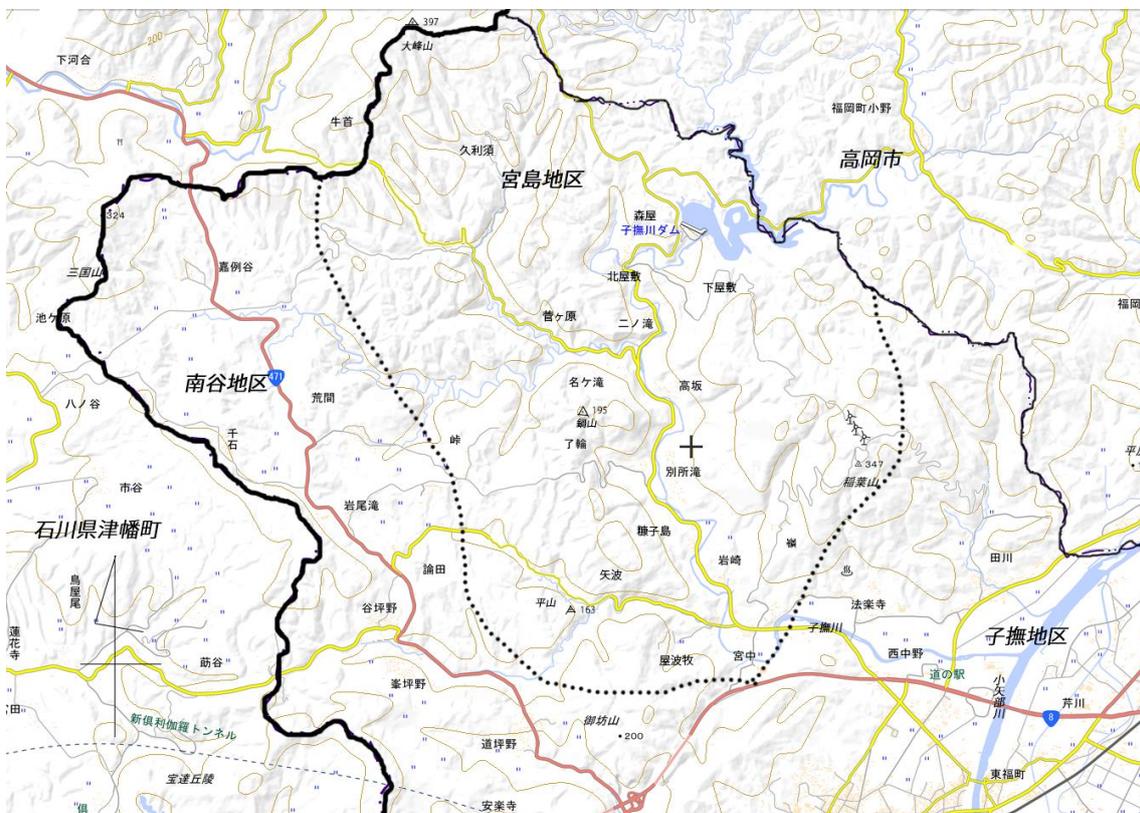


図1 宮島の地図

1-2. 宮島の暮らしとその変化

1-2-1. 農業

宮島の人々は農業、特に稲作を中心に生活しており、米作りの傍らほとんどの家庭が副業を行っていた。昭和13(1938)年で農業に従事していた人は373人おり、当時の人口1,016人の36.7%を占める。そのうち副業もしていた人は255人、農業従事者の内68%の人が副業にも従事していた。副業は農業ができない冬の間の収入源として、また農業だけではまかなえない家計を補うために行われていた。最も多かった副業は林業であり、次いでわらの加工、牛馬の飼育、鶏卵、養蚕の順で多かった。

昭和24(1949)年に農業機械が導入され始めたが、この時はまだ収穫後に使用する農機具だけだった。そこから50年以上の歳月を経た現在、耕作から収穫までの作業を機械に依存するほどに農業の近代化が進んでいる。

昭和50年代まで宮島の総戸数に対する農家の戸数は常に90%であったが、平成に入るとその数値は80%前後に減少する。そのうちの兼業農家の数は99%にも上った。農業だけで生計を立てることは現在難しくなっている。

1-2-2. 副業としての林業

林業は、昭和 55 (1980) 年の時点で地区の 83%が山林であった宮島において、稲作に次ぐ重要な産業だった。雑木類は木炭や薪などの燃料として使い、杉は植林され用材として利用された。了輪杉や別所杉など、様々な種類の杉が植林された中で特に一般的となったのがボカ杉である。宮島の土地と相性のよかったボカ杉は他の杉よりも成長が早く、30 年ほどで用材として市場に出せるようになる。ひと世代の内に二回、杉による収益を獲得できることが評価されたが、生育が早い分、他の杉に比べて材質が劣っている。30 年生のボカ杉は建築用材には不向きなため近年ではあまり使われなくなった。

材木を伐採し、それを縦挽き¹⁵⁷する人たちは「こびくさ」と呼ばれていた。「こびく」＝「木を挽く」つまりノコギリで材木を挽く人のことだ。「こびく」に敬意を表わす接尾語「さ」がついている。この地域の人々は、「こびく」人々を敬って「こびくさ」と呼んでいた。

製材については、道路が整備されていないところでも入れ、伐採したその場所で製材ができるように移動製材機が使われるようになった。これは昭和 40 年代頃から道路・林道が整備されて材木の運搬が容易になったのであまり行われなくなった。

材木の運搬は夏では馬車で、冬はトラックを使って運ばれた。これらはそれぞれ「馬引」「山だし」と呼ばれる職業で、山間地特有の職業だである。この仕事は宮島だけでなく、南谷や蟹谷地区などへも出向いていた。昭和 40 年代から、材木の運搬には発動機などの動力に変わり、これらの仕事は過去のものとなった。

材木の運搬には上記の 2 つの他に、「川流し」という方法があった。雨期に川の水が増えたとき、子撫川の上流で伐採した材木を下流まで流して運ぶのだ。福岡町五位山地区から材木を流し、二の滝上で道路に引き上げていた。数本の丸太を筏のようにまとめて川に流すのだが、急カーブしているところや流れが特に激しいところでは、丸太がつかえてしまったりはぐれてしまう。そうならないように丸太の筏には人が一人乗って、「とんびぐち¹⁵⁸」という棒状の道具を使って丸太を操る様にしていた。その人のことを「しんがり」と言い、熟練した技術が必要な仕事だった。川の増水具合を判断し、年に 3~4 回行っていたが、昭和 53 (1978) 年に子撫川ダムが完成すると自然に消えてしまった。

1-2-3. その他の副業

養蚕についてはいつから始まったのかは不明だが、昭和 10 年代まで副業の一つとして行われていた。昭和 20 年代になるとナイロンのような安価な化学製品が一般家庭に普及し始め、絹製品の売れ行きが落ち込んだ。繭づくりでは採算がとれなくなり養蚕は行われなくなり、姿を消していった。

¹⁵⁷ 縦挽き ノコギリで木材をその繊維方向に平行に挽くこと。

¹⁵⁸ とんびぐち ^{とんび} 鳶の嘴のような形の鉄製の穂先を、長い竹製の棒の先に取り付けた道具。

宮島を横断している子撫川は小河川でありながら川魚が多く生息している。田川地区に用水堤ができるまで川魚漁が行われていた。漁では魚が川を上る習性を利用する。川の中に小石を並べ、流れをスムーズにし、魚の好む魚道を作る。魚はそこを泳ぎ卵を産むために集まる。集まった魚を小さな網ですくうのだ。捕まえるのはサクラウグイが主流だったが、鯉、鮒、ヤツメウナギなども対象であった。捕まえたサクラウグイをいけすにいれ、生きたまま飲食店や魚屋に売っていた。

1-2-4. 宮島石の切り出し

宮島石は、産出する場所により嶺石、矢波石、了輪石と呼び方が変わるが、いずれも「緑色凝灰岩」と名付けられる石だ。子撫川の両岸や稲葉山山麓に広く分布している。

矢波石は、矢波川の両岸で石切を行う。石の材質は凍みに弱く、火に強い。切り出した石は、人が背負ったり荷車を使ったりして出荷場まで運んでいた。そこから馬車に乗せて、石動の石材業者へと運ぶ。早朝の7時から仕事が始まり日没と共に切り出しを終え、切り出した石を背負って帰宅する。大変労力のかかる仕事だった。矢波石は主に家屋の基礎材や、火に強い特性から西洋かまど、風呂（五右衛門風呂）の台石などに使われた。また宮島神社にある一対の狛犬には了輪石が使われており、その狛犬を彫った人物にまつわる伝説が残されている。

了輪に老人とその娘の二人暮らしをしている家があった。ある日その家に旅の若者が訪れて、どうか一晩泊めてくれと言う。その晩、若者と二人は世間話に花を咲かせ、若者は老人と同じく石の切り出しを生業にしていることを知る。急ぎの旅でもないのなら、石切の仕事を手伝ってくれと老人が頼むと、同業だった偶然に喜んだ若者はその申し出を引き受けた。若者の働きぶりに感心した老人は、娘とどうか結婚してくれないかと頼み、娘も若者もそれに異存はないと答えた。それからしばらくして宮島神社の春の祭礼が近づいてきた。若者はこの社に狛犬がないのを知ると、これまで世話になったお礼に狛犬を彫らせてくれといい、素晴らしい一対の狛犬を彫った。その狛犬が境内に飾られた後、若者は老人にしばらく町へ行ってないからちょっと行ってくると言い、家を後にした。老人と娘は若者の帰りを待ったが、再び若者が帰ってくることはなかった。その若者の消息はその後どこにも伝わっていない。

（話者 森田正雄）

この話は了輪に伝わる伝説の一つだ。

富山県西礪波郡役所が編集し明治42（1909）年に発行された『富山県西礪波郡紀要』には、宮島では少なくとも400年以上前から石の採掘が行われていたことがわかる。紀要に「宮島村大字嶺、矢波、了輪の三箇村より石材を出す品質は桑山石よりも悪しと称せられる。因にこの切石は今より約四百年以前は嶺村より採掘に着手せしものにして其の産出額は多

からざりき。然るに今より五十年以前に矢波及び了輪の二箇村より採掘するに及びて益々振興の氣運に向かひつつあり」とある様に、宮島石は嶺村が始めに採掘を始めており、次いで矢波、了輪で採掘が始まったということになる。嶺では室町時代辺りから、矢波・了輪では江戸時代末期から採掘が始まっており、その歴史は長い。

昭和 20 (1945) 年以前までは盛んだった切石は、昭和 22~23 (1947~1948) 年頃から注文がなくなってしまった。セメントが普及したことで、石製の製品や家の土台がコンクリートに取って代わられたからだ。石きり職人達は廃業を余儀なくされ、他の職業に就いた。

1-2-5. 生活の変化と絶える語りの場

昭和のはじめまでは夏に農業、冬にわらの加工といった家の中でできる仕事で暮らしていて収入は少ない家庭がほとんどだった。副業は宮島内でとれたものを宮島の外へ運び出すことはあったが町の会社に勤める人はほとんどいなかった。移動が不自由となる冬場は夏に比べて一家がそろう時間が長かった。収入が少ないながらも、その一方で長い冬の夜を一家で囲炉裏を囲んで過ごす時間に、地域に伝わる民間伝承は語り継がれていた。小矢部市内でも宮島が特に多くの伝承を残している理由はここにあったのかもしれない。

しかし現在の宮島では、既述のように農業を主として生計を立てることはない。さらに農業の傍らで行われていた副業はほとんど過去の生業となり、姿を消している。現在は会社勤めなど、かつて営まれた仕事ではない職業に就き、その傍らに農業を行うというスタイルが一般的である。宮島より外へ出るのが容易になり、冬場も仕事をしに行けるため、かつてのように一日のほとんどを家で家族と共に過ごすという機会は減っている。宮島の民間伝承の継承が絶えてしまったのは、この生活様式の変化が一因となっているものと考えられる。

2. かつての語り

この節では、向川一夫さんへの聞き取りや第 1 節でも参考にした同氏の著書、また宮島に現在住んでられる方への聞き取りで得られた情報を元に記述する。また、向川さんが幼少期に聴いていた語りをここでは「かつての語り」と称することとする。

2-1. 宮島の民間伝承

2-1-1. 伝説と昔話の違い

豊かな自然に囲まれた宮島には数多くの民間伝承が眠っており、それらは大きく二つに分類できる。「伝説」と「昔話」である。この章における「伝説」と「昔話」は、以下のよう

に区別することとする。伝説は“「これは村の歴史だよ。ほんとのことだよ。だから信じてくれよ」という姿勢で伝えられるので(小澤,2016,p.69)、昔話と比べるとより具体的にリアリティを持って語られ

る。どこが具体的なのかというと、例えば「場所」、「モノ」、「人」である。実在する「場所」を舞台とし、現存する「モノ」や実在する「人」を証拠に伝説の語りは現実味を帯びる。特に、語り手と聞き手のどちらにもゆかりある人物を語ることで、よりその地に根差す伝説となる。

昔話には、昔の人々の暮らしぶりや考え方などが反映されている。伝説のように具体的な何かを用いて聞き手に話を信じさせる事はせず、フィクションとして語られる。娯楽の少ない昔の暮らしの中で昔話は貴重な娯楽の一種であり、話が現実であることを求められなかったのかもしれない。また、昔話には特徴として一定の法則がある。これはマックス・リュティが『ヨーロッパの昔話—その形式と本質—』という本で発表したものだ。この章における昔話の法則は、リュティの本を小澤俊夫が翻訳したものから、筆者がまとめたものだ。

- ①一次元性…昔話では、人間と彼岸的世界の住人(彼岸者)との間に精神的断絶がないということ。例えば、日本の昔話「金太郎」では、人間である金太郎と動物が当たり前のように相撲を取っているし、昔話「桃太郎」で桃から人間が生まれることにおじいさんとおばあさんは深く追求しない。
- ②平面性…昔話に登場する人物や動物には、精神的にも肉体的にも奥行きがない。生き物が切絵細工のように描写される。例えば「どうもところも」という日本の笑い話では、名人が切った首は切り口がきれいだから首をもとの場所に乗せれば元に戻るという描写がある。
- ③一致…時間、条件・状況、場所が一致する。例えば昔話「はなさかじいさん」では、おじいさんが今まさに花を咲かせているとき、その場所に殿様が通りかかる。様々な要素を偶然にも一致させて話をテンポよくしている。
- ④描写しない…残酷な描写や人物の詳しい描写もされない。簡潔である。「どうもところも」で切り落とされた首からは血は流れてこない。
- ⑤繰り返し…同じ場面は同じ言葉で語る。
- ⑥本来持っている環境を捨てている…人物も小道具も、本来持つ機能や地位から離れた描写をされる。昔話「しりなりしゃもじ」では、しゃもじに関連するちゃぶ台やごはんという要素は一切出てこず、ご飯をよそうというしゃもじ本来の使われ方もされない。

以上の法則があることも昔話の特徴である。

2-1-2. 民間伝承の収集

向川一夫さんは教員を退職されてから宮島内に伝わっている民間伝承を収集し、『増補版 宮島 小矢部市宮島地区抄』という著書にまとめた。収集された話の多くは向川さん自身が幼少の頃、時代で言えば昭和初期の頃に、祖父母や従兄弟叔父から聞かせてもらっていた話を思い出しながら集めたもので、また教員時代、先輩である稗田董平氏、長田典正氏からも話を聞き、メモに取ったものを再話したものだ。それに加えて宮島に住んでいた二人の男性

から伝聞した話も収められている。

向川さんの採録した話は以下の通りである。

表1 向川一夫さんが収集した話（伝説）

区分	題名	話者	概要
俊寛伝説	俊寛塚	向川み志	鬼界ヶ島に流された俊寛が実は宮島の久利須に流されていたという伝説。
	出合橋		
	俊寛清水		
	俊寛杉		
	中村の宮と俊寛の守り本尊		
	塚と白蛇	村人の言い伝え	
	道場の火災と白蛇		
義経伝説	鼓ヶ滝	向川弥作	奥州へ逃れるため北陸路を通った際、宮島の矢波を通ったという伝説。
	弁慶岩		
	矢波		
竜宮淵伝説	淵の底には竜宮がある	向川弥作	森屋にある淵は古くから竜宮淵と呼ばれ、龍神が棲み、底には竜宮があるという伝説。
	竜宮には美しい姫が住んでいる		
	竜宮の龍よりお膳・お椀を借りる		
	涸れることがない竜宮淵の水		
大蛇が棲む池	西浦谷滝と蛇池	向川み志	竜宮淵伝説のように、大蛇が棲むという池の伝説。
	大池の大蛇	稲原亮二	
弘法伝説	石になった芋	向川み志	弘法大師の奇跡を記した伝説。
	テンボの跡隠しの雪		
富を得た話	機知で富を得る	向川弥作	様々な方法で村人が財を築いた伝説。
	賢い伍作		
	笹の実おやっさま	向川み志	
	角折れ坂		
	漆のはけ長者	稲原亮二	
その他の伝説	ぼんぼ石	不明	

	物言う地蔵	不明	
	宮島神社の狛犬	森田正雄	

(「増補版 宮島 小矢部市宮島地区抄」をもとに作成)

表2 向川一夫さんが収集した話(昔話)

区分	題名	話者	概要
笑い話	どけちなあんま	向川弥作	村人のおかしな言動が笑いを誘う。
	長い話		
	ぐわちやのまま炊き	向川み志	
	ぼた餅とよいとこしょ		
	間違えた嫁		
送り犬、妖怪、天狗	送り犬	向川弥作	非科学的な存在の怖さを語る。
	矢緋の女		
	うめは天狗にさらわれた		
	オワワン、アマメハギ	向川み志	
	ガカモー、やまんば		
	女郎滝		
	ねずみ松・きつね松の怪		
	天狗に懲らしめられた与左衛門		
	バケモン山		
とんち話	木鐘で鳴らん	岩田與三助	話者の創作した話

(「増補版 宮島 小矢部市宮島地区抄」をもとに作成)

向川さんは集めた話を伝説と昔話の大きく二つに分け、その中で関連する話同士でさらに分けている。上記の表は、向川さんが分類した話を筆者が表にまとめたものである。話者について、向川弥作氏と向川み志氏がそれぞれ向川さんの祖父母で、岩田與三助氏は親戚である。また、稲原亮二氏は岩崎に、森田正雄氏は了輪に住んでいた方で、民間伝承を収集していた向川さんに自分の知る話を聞かせてくれたという。この二人は筆者が調査を始めた時点ですでに故人であるため、聞き取りは行えなかった。

これらの民間伝承は、幼少期の記憶を思い出して記録したものだ。教員を退職されてから収集を始めたとなると、幼少期は、執筆時でも60年近くも昔のことということになる。普通ならばほとんど思い出せないようなものだが、向川さんはこれらを思い出すのに苦労はしなかったようだ。同じ話を何度も繰り返し聞いているうちに、話はすっかり氏のものにな

ったということだろう。このような、遠い昔のことが忘れさられずに記憶に継承されていたのは驚くべきことだ。

2-1-3. 民間伝承と人々の関わり

ここで、上記の民間伝承について少し詳しく説明する。

2-1-3-1. 俊寛伝説と義経伝説

初めに俊寛伝説から概説する。俊寛¹⁵⁹は自身の別荘鹿ヶ谷山荘で、藤原成経・平康頼・多田蔵人行綱らとともに当時権勢を振るっていた平清盛を打倒する謀議を謀っていた。しかし行綱の密告により俊寛・成経・康頼の三人は薩摩国鬼界ヶ島へ配流されてしまい、俊寛だけがその地で生涯を終えたというのが史実として一般的に知られている俊寛伝説である。しかし、俊寛らが流された場所は鬼界ヶ島ではなく宮島の久利須なのだ、というのが宮島に伝わる俊寛伝説だ。実際に久利須やその周辺には、俊寛が都に置いてきた妻子と再会した「出合橋」や彼のお墓である「俊寛塚」と呼ばれる場所がある。

次に義経伝説について概説する。源義経が兄源頼朝に追われ、京都から奥州へ逃れる際に北陸路を通り、宮島の矢波を通ったという言い伝えである。義経に関しても、家来の弁慶が投げて道を開けたという「弁慶岩」や義経の笛とともに幽玄な響きを奏でた「鼓ヶ滝」と呼ばれる場所が実際に存在する。

俊寛伝説も義経伝説も、どちらも現存する場所が舞台であり、モノが残っている。史実としてはどちらも宮島を訪れたことはないはずだが、どうして彼らの伝説が宮島に伝わっているのだろうか。これについて向川さんは以下のように考察している。



写真2 出合橋

○一般的には俊寛が死んだ後、有王^{ありおう}という俊寛の侍童^{さぶらいわらは}¹⁶⁰が彼の話の人々に伝えて回ったことで俊寛伝説が現在まで残っているとされているが、有王は一人ではなく複数の物語法師がそう名乗り広く伝播していったのではないか。

○俊寛の名を騙った何者かが久利須に住み込み、人々はその人物を俊寛だと信じていたのではないか。

○義経という悲運の人物に同情が集まり、義経に関する話が全国各地で伝説化した。宮島の義経伝説もそうしてできた話の一つではないか。

¹⁵⁹ 俊寛 平安時代末期に活躍した真言宗の僧。

¹⁶⁰ 侍童 貴人のそばに仕えて、雑務をする少年のこと

筆者もこの考察にはおおむね賛成である。俊寛らが配流された鬼界ヶ島は、鹿児島県の硫黄島・喜界島・長崎県の伊王島のいずれかではないかと考えられており、彼の墓も喜界島と伊王島で見つかっている。また話の伝播は九州で活動が盛んだった盲僧¹⁶¹を媒介に全国に広まったとされる。このことから俊寛にまつわる話の発祥は少なくとも宮島である可能性は低いだろう。俊寛は流罪になったけれども身分の高い人物である。俊寛の話聞いて、宮島の地で自分がそれに成り代わろうとした人物がいた可能性は捨てきれない。

義経は、八艘飛びで知られるように派手な活躍をした武士である。子どもからの人気は高かったのではないだろうか。宮島の大人達が子ども達を喜ばせるために、自然を都合よく利用して創作した伝説と考えることもできるだろう。

2-1-3-2. 竜宮淵、大蛇が棲む池

これは、子撫川が流れる森屋にいつも水を湛えている淵「竜宮淵」と、久利須の「西浦谷滝」と岩崎の大池にまつわる伝説だ。竜宮淵の底には竜宮があって、またそれぞれの水辺には竜・蛇・水神がいると信じられてきた。竜たちは人間を助けてくれる存在であり、反対に人々に畏れられる存在でもあった。助ける例として、「貸し椀伝説」がある。



写真3 竜宮淵

竜宮淵や西浦谷滝にある「蛇池」の淵で「お椀を貸してください」と頼むと、次の日岸に立派なお椀が置いておいてくれる。

普段は丁寧に洗ってお礼を言って返していたが、あるとき心ない村人が、借りたお椀を返さなかった。それっきりどれだけ頼み込んでもお椀を貸してくれることはなかった、という話だ。貸し椀伝説は全国で同じような話が伝わっている。

また、竜宮淵にはこういう話も伝わっている。大水で田畑が流され落胆した若者の前に竜が現れ、若者を飲み込んで竜宮へ連れていった。竜宮で厚いもてなしを受け、帰り際には一振りの斧をくれた。その斧はどれだけ使っても疲れず、その斧で人の何倍も働いた若者はすぐにそこらで一番の物持ちになったという。「浦島太郎」のはなしに似ている話だが、竜宮から帰る際にもらう土産は玉手箱ではなく実用的な斧だった点が異なっている。

これらの伝説に対する向川一夫さんの考察は以下の通りだ。

¹⁶¹ 盲僧 琵琶を弾きながら地神経じしんきょう（地神を祭る経文）を唱え、竜かまどぼら払いをして家々を回る盲目の僧

- 竜や蛇はどちらも水辺に棲んでいると考えられ、元は同一の存在であったと考えられる。
- 宮島の人々の生活基盤は稲作であり、水と切っても切り離せない密接な関係がある。そのため竜や蛇、水神といった存在は、村人にとって大切な神様だった。
- 宮島の竜宮は、一般的な浦島太郎と違い、手土産に実用的な道具を持ち帰る。これは、当時の農民の「意欲的に働き、物持ちになりたい」という願いが反映されているのではないか。

宮島は海に接していない地域だ。普通竜宮があるのは海だが、宮島ではその役割を淵が担っていたのだろう。涸れることなく水を湛える淵は、村人に底知れない何かの存在を感じさせたのかもしれない。そしてその底知れない存在に大きな力を感じた村人が、自分たちの願いを託していたのだろう。また、農業で暮らしている人々にとって水は欠かすことができないもので、神格化し畏れ敬うことによって毎年の豊穰を祈っていたものと考えられる。水辺の伝説はそうして語られてきたのだろう。

2-1-3-3. 弘法伝説

弘法伝説は表でも記述した通り、弘法大師の不思議な力の一端を垣間見ることのできる伝説だ。弘法大師は、自分の名を告げずに旅の人として家々を回る。そこで親切にしてくれた人は助けてやり、反対にだましたりする人は懲らしめたりする。向川さんはこれも伝説に分類しているが、筆者は伝説と言っていいのか、昔話とするべきか迷うところだと考えている。「弘法大師が〇〇の家に来たことがあるんだよ」というふうに物語は語られる。しかし具体的な人名は平安時代の人の名前であり、聞き手と語り手にゆかりのある人物ではないはずだ。さらに場所も普通の民家というほかに具体的な情報がない。伝説と呼ぶにはやや現実味にかけると感じる。

向川さんの祖母が得意だった話のようで、この伝説で弘法大師は芋を石に変えたり、雪を降らせたりと普通の人間には到底まねできないことをやってのける。弘法大師への信仰の篤さ故にこのような超能力者として語っていたのではないかと向川さんは推測している。

2-1-3-4. 富を得た話

昔の村人達にとって富を得ることには、最大と言ってもいいほどの関心があった。宮島でも「財産持ち」、「物持ち」、「山持ち」は貧乏人より尊敬され、幸せ者とされた。中でも「山持ち」は「おやっさま」と呼ばれ、村の権力者であった。炭焼きが唯一現金を得る手段だった村人だが、おやっさまの言い値で原木を買うしかなかった。しかし貧乏人はおやっさまに逆らうことができず、どれだけ働いても貧乏から抜け出すことはできなかった。こうした背景から、村人達は富を得て幸せ者になるために人一倍奮闘したのだ。ある者は身を粉にして働き、またある者は知恵を働かせて富を得ようとした。例えばこのような話がある。

I家の先祖の生蔵は、働き者で、毎日、田畑の仕事を終わるとすぐに馬を引いて、笹の実を採れるだけ集めて、家に持ち運んでいた。何日も、笹の実を採って運ぶことで、それが百俵以上にもなった。他の村人たちは、「あほらしい。」と言って、笹の実を採るものはいないばかりか、あざ笑う者までいた。しかし、喜蔵は笹の実をよく乾燥させ、ねずみに喰われないように俵を納屋に積んでいた。

さて、次の年、どうしたものか日照りが続いた上に、虫が多発し、加えて、稲熱病など、二重三重の災害があり、米の収穫はゼロに近い大凶作となった。これには村人達は困った。早速、喜蔵は、かねてからしまつてあった笹の実を、米の代わりに主食とし、飢えをしのいだ。そればかりではなく、困っている村人に、笹の実を高値で売ることができ、たちまちこの近在で一番の金持ちになった。

これは、「笹の実のおやっさま」という話の全文だ。すこしずつ蓄えを作っていた堅実な村人の姿が描かれている。この他にも多様な手段で富を得ようとする人々の姿が伝えられていることから、貧しい村人達の「富」に対する関心の高さをうかがい知ることができる。

富を得た話に分類される話は、一見昔話のように見えるかもしれないが実は伝説に分類できる。伝説で登場する家は、実際に存在する家の名前だ。聞き手と語り手が生きる時代に実在する家の祖先が登場する。「あその家は昔こうやって財を成したんだよ、だからあの家は立派な山を持っているんだよ。」という語りには、伝説と分類するのに十分なリアリティがある。

2-1-3-5. 笑い話

ここからは昔話の範疇に入る。笑い話は既述の富を得る話同様に、貧しいながらも笑いを忘れない村人達の生き方を見て取ることができる。「どけちなあんま」という話では、「嫁は欲しいが、ご飯をあまり食べず、よく働き、肥やしになる糞をたくさん出す嫁じゃなきゃいやだ。」と言うけちな男が主人公だ。結婚願望はあるが、何より暮らしを経済的によくすることが第一な価値観が読み取れる。また貧しい村人達は「食」についても関心が高かった。「ぐわちやのまま炊き」と「ぼた餅とよいとこしょ」はどちらも食べ物がキーワードとなる話だ。

笑い話は、聞く方にとっては他愛ないことだが、話の主人公達にとっては笑えないような話である。「長い話」と「間違えた花嫁」はまさにそういう話だ。先ず、以下に「長い話」の全文を掲載する。

むかし、ある時、天(天)から長い、長いふんどしが落ちてきた。それはそれは長いふんどしで、下から引っ張れば引っ張るほど、次から次と、切れることなく落ちてきた。もんだから、みんな「よいしょ、よいしょ。」と、掛け声よろしく引っ張っ

た。が、ふんどしはどんどん落ちてくるだけで、引っ張っても引っ張っても切れることがない。どれだけ引っ張っても、ふんどしは落ちてくる。また引っ張る。ふんどしは落ちてくる。何時までたっても切りがない。それでこの話じゃおしまい。

話で聞けば、なんだそんなことかと済ましてしまうような話だが、当事者達にとってみれば、いくら引っ張っても切りがなく、たまったものではない。「間違えた花嫁」は、「結婚したばかりで互いの顔をよく見ていなかった夫婦が二組いて、勘違いでそれぞれの花嫁が入れ替わって夫婦の契りを交わしてしまう。」という話だ。どちらも聞いているだけなら他人事で面白い話だが、当の本人達にとってはかなり深刻な話である。笑い話にはこういう話がよくみられる。

また「長い話」も「間違えた花嫁」も、性を連想させる話題が話に盛り込まれている。例えばふんどしや、夫婦の契りである。笑い話にはこういう性に関する話題もフランクに取り入れられている。また、笑い話における性的な出来事は、生殖・繁栄につながる。余りに長いふんどしはその有り余る生地を売ってお金に換えられるし、夫婦の契りはそのまま生殖→子宝に恵まれる、と解釈が出来る。と解釈が出来そうだ。

「長い話」は昔話の法則の①、⑤、⑥が見られる。天からふんどしが落ちてくるはずがないし、しかもあまりにも長い。ふんどしを引く人々はそれを一切気にする様子もなくふんどしを引っ張り続ける。いつまでも切れないので繰り返し引っ張り続け、しまいには引っ張りきることが出来なかった。ふんどしも、本来は着用するものがそういう描写はされない。「間違えた花嫁」には、③、④の法則が見られる。偶然にも同じ日に結婚したばかりの夫婦が、偶然にも同じ場所で食事をし、トイレに行くタイミングも一致している。登場する二組の夫婦は、彼らがどんな顔立ちをしているのかは描写されず、ただ夫婦になったばかりだとだけ紹介されている。

宮島の昔話にも昔話の法則はしっかり適応されていることがわかる。

2-1-3-6. 送り犬、妖怪、天狗

宮島には、送り犬(御犬)・ガカモー・やまんば(やまんばさ)・オワワン・アマメハギ・天狗などの数多くの妖怪的存在がいた。これらは子ども達のしつけや、脅しに使われることが多くあった。言うことを聞かなかつたりすると「おいんにやるぞ」や「ガカモーが来るぞ」、「やまんばさが連れに来るぞ」と言われ、子どもは怖がっていた。しかし今の子ども達にはこの脅しは当然通用しない、「おまわりさんと呼ぶぞ」と言った方がよっぽど効果がある。向川さんは、子どもが恐ろしいとイメージする対象がこれらの怪物から別の対象に変化したのだと語る。

子ども達にいうことを聞かせるため、怖いものがあるということを信じさせる必要がある。信じさせる姿勢が見られるので、昔話というよりは伝説に近い語りだと考えられる。

天狗は、山間地域でよく語られる。宮島では天狗を「鼻の高い人」や「魔の人」と呼んで

いた。柳田国男の『山の人生』では天狗が子どもをさらうこと、魚のサバが嫌いなこと、柴の葉を食べ物としてさらった人に与えることが紹介されている。宮島の天狗も人、特に幼い子どもをさらい、サバが嫌いである。しかし与える食べ物は異なっていて、宮島では馬の糞を食べさせるようだ。

2-1-3-7. とんち話

向川さんがとんち話に分類したのは「木鐘で鳴らん」という話だけだ。これは氏の親戚である岩田與三助氏が語った話らしく、おそらく宮島にだけ伝わる話ではないかと向川さんは推測しており、岩田與三助氏の創作した話の可能性もある。向川さんが聞いた語りの中で最も長い話がこの話で、一回の語りは10分を超えるという。

村一番の正直者の太郎平さんは、村のみんなから集めたお金を持って京までつり鐘を買いに行く。しかし京でたくさんの誘惑に負けてしまった彼はつり鐘を買うことができず、木で出来た鐘を買って帰り、ごまかそうとした。「木の鐘だから鳴らない」→「木鐘で鳴らん」と「気がねでならん」を掛けた太郎平さんのとんちはすぐにばれてしまうものだったが、それがこの話の滑稽さをよく引き出している。これは笑い話の範疇にも数えてよいだろう。

2-2. かつての語りの様子

2-1 では向川さんが記憶を頼りに収集してきた民間伝承について述べたが、ここからは向川さんが幼少期に聞いていたかつての語りについて記述する。

かつての語りは、一般の家庭の中で、祖父母の代から孫の代へ「口承」という形で伝えられていた。文字として記録はされていない。語り手は話をすっかり覚えていて、わざわざ記録する必要はなかった。語り手が何度も話を語り聞かせる事で、聞き手の記憶に話が定着していく。聞き手に孫が生まれると、今度は語り手として自分が聞いてきた話を語っていく。こうして民間伝承は受け継がれていった。

語りは、年中行われていた。しかし、仕事で家を空ける時間が多い春夏に比べて家の中にいる時間の多い秋冬の方が話をしてくれることが多かったようだ。語りはもっぱら家の中で行われるものだった。また、向川さんは祖父よりも祖母の方がうんとたくさん話を聞かせてくれたとおっしゃっていた。力仕事が必要な外の仕事に従事する祖父より、家内の仕事に従事する祖母の方が家にいる時間は当然長い。語りが家の中で行われるものなら、必然的に祖母から語られることが多くなる。また、語りは日中よりは暗くなってから語られることが多かったという。大人が仕事を終えて家に帰ってくる時間だからだ。向川さんは囲炉裏に座り、ランプの仄かな明かりの中、語りを聞いていた。

向川さんの祖父母である弥作さんとみ志さん、そして親戚の岩田與三助さんらの語り口調は穏やかで柔らかいものだったと、氏もまた優しい表情で当時の様子を語ってくれた。民間伝承の語りは、単に伝承を伝えるだけでなく、語り手の温かな愛情を聞き手に伝えるためのコミュニケーション手段としても機能していたのではないだろうか。

向川さんにお話を伺っている際、ほんの少しではあるが話を語っていただいたことがある。語りは突然始まった。例えば、筆者が竜宮淵の話を尋ねると、「あその淵(竜宮淵)に錆びた鎌なんかを投げ入れるとね、えー、龍神さまが、(脇腹辺りをさすりながら)この辺が痛い一言うて、ばあっと雨を降らせる。なんて話がありますね。」と短く語りが行われた。語っているときの向川さんの表情は、豊かに変化しつつも終始穏やかだった。口調も、普段の会話のものから優しく言い聞かせるようなものに変化した。語り手というもう一つの人格が宿ったかのように、その変わり身の早さはあまりに自然で見事な技だった。向川さんの穏やかな語りは、また優しく穏やかだったという氏の祖父母の語りを想起させた。伝承と共に、語り手の語り方や口調も一緒に受け継がれてきたのだろう。

3. 現在の語り

2 節では、かつて行われていた語りについて記述したが、この節では主に小矢部市各地の民話を集めて様々な表現方法を用いてそれらを伝える「ひまわりグループ」の活動を現在の語りの形態の一つとして捉える。グループの方への聞き取りと、実際の活動の様子の参与観察で得られた情報を元に記述する。

3-1. ひまわりグループの概要

このグループは昭和 54 (1979) 年に立ち上げられたボランティアグループである。当時、各地域の婦人会長が任期満了となるたびに、何かしらの活動を続けたい「紙芝居や人形劇を通して子供たちが喜ぶような、かつ戒めにもなるような作品を作り、子供たちに見てもらおう。」と思い立ち、その当時の婦人会長たちの中から代表を決め活動を始めた。講師には児童文学に造詣の深い H 氏 (市内の元住職)、絵画指導の H 氏を迎え指導を仰いだ。各地域に伝わる民話を集め、それらを題材に紙芝居やパネルシアターなどを制作し、清楽園デイサービスセンター、道の駅メルヘンおやべ、西部保育園など様々な場所で披露するという活動をしている。グループ発足当時は 20 人前後のメンバーが積極的に集まり活動は活発で、昭和 56 (1981) 年から平成 24 (2012) 年までは毎月の定例会で紙芝居等が制作され、また福祉センターの掲示板を使い、仕事の依頼を受けていたので様々な施設に訪問して発表を行っていたようだ。しかし平成 25 (2013) 年頃からメンバーの高齢化に伴いリタイヤする人が増え始め、ひまわりグループの活動は規模を縮小し始めている。発足当初は小学校など、子供たちを対象に行っていた読み聞かせは、年に一度だけおとぎの館図書室で行うようになった。

3-2. 現在のひまわりグループ

調査をした令和元 (2019) 年現在、ひまわりグループは月に一度ずつ清楽園と福祉センタ

一へ、年に一度おとぎの館図書館へ訪問し発表している。発足当時のように全ての依頼を受けることができないので、福祉センターの掲示板は使わず訪問先を絞っている。これはグループの深刻な人手不足が原因である。平成 25（2013）年から徐々に減り始めたメンバーは発足当時の半分を切る 9 人となり、年齢も 60 代後半～70 代前半の方ばかりであちこちの施設へ頻繁に訪問するわけにはいかないのだ。ここ 7 年新しいメンバーも入ってきておらず、今後いつまで活動を続けていられるかわからない現状をメンバー達は心配している。なお、現在事務局は小矢部市役所生涯学習文化課のサークル育成担当者が担っている。（この方はひまわりグループ以外のボランティアグループにも関与している。

3-3. ひまわりグループの作品と公園の様子

3-3-1. 習得している作品

ひまわりグループが現在習得している昔話は少なくとも 43 以上ある。それらの昔話は文献から収集してきたのだが、その多くは紙芝居とパネルシアターのどちらか（または両方）の題材にされている。43 以上ある昔話の内の約 31 は小矢部市内に伝わる昔話で、その他の昔話は小矢部市外、あるいは富山県外の昔話である。昔話の数について“約”をつけたのは紙芝居とパネルシアター以外にもペープサートや素話（これらについては後述する）といったやり方でも話をしていて、それらの手法で話されている物語の数については記録がされていないからである。

以下の表はひまわりグループの所持する昔話と、それが小矢部市内のどの地域に伝わっていた昔話なのかをまとめたものである。

表 3 ひまわりグループの所持している昔話

作品名（紙芝居）	地域	制作年	作品名（パネルシアター）	地域	制作年
廻向寺の梵鐘	石動	平成 19 年	廻向寺の梵鐘	石動	平成 22 年
			石動の花山車の言われ	石動	平成 7 年
			上くちばしのないからす(ミニ版)	福岡	平成 16 年
福町の昔	福町	平成 13～14 年			
			力神様のいわれ	嘉例谷	平成 13～14 年
天の鏡	蓮沼	平成 12 年			
			おさるの顔はなぜ赤い	倶利伽羅	平成 4 年
			子撫川のいわれ	子撫	平成 16 年

					年
			女郎滝	久利須	平成 19 年
			ねずみ松のふしぎ	宮島	平成 19 年
竜宮淵の伝説	宮島	昭和 56 年			
天狗の話	宮島	昭和 58 年			
きつねの投げた赤い餅	宮島	昭和 57 年			
			木鐘で鳴らん	宮島	昭和 60 年
天狗と与左衛門	宮島	平成 3 年			
			桐の木の御神体	鷲島	平成 17 年
			大ねずみ退治	杜五	平成 27 年
			まいこん淵に流れ着かれた御神体	石王丸	平成 22 ～23 年
			額から抜け出した獅子	西中	平成 22 ～23 年
			中村埜神社の起こり	下中	平成 22 ～23 年
かんざしわらし	津沢	平成 15 年			
			弘法さまの清水(ミニ版)	興法寺	平成 15 年
			蚊のいない寺(ミニ版)	水島	平成 16 年
酒とり祭り	下後亟	平成 27 年	酒とり祭り	下後亟	平成 16 年
			おらが村蟹谷	北蟹谷	平成 7 年
柳の精	白谷	平成 22 年			

			地藏様を助けた男	藪波	平成 23 年
			きつねの嫁入り	藪波	平成 17 ～28 年
			大杉と天狗	藪波	平成 10 年
			天池の不思議	藤森	平成 22 年
津沢御蔵物 語	津沢	平成 16 年			

(ひまわりグループの資料をもとに作成)

31 ある昔話の内、太線で書かれているものが宮島（久利須は宮島の中の集落の一つ）の物語である。宮島以外の地域ではそれぞれに1～3つ昔話が収集されているが、宮島の昔話は7つも集められている。宮島が他の地域に比べ昔話が多く残っているのが一目瞭然である。「廻向寺の梵鐘」と「酒とり祭り」は、紙芝居とパネルシアターの両方が作られた。ほかの作品はどちらか一つでしか作っていない。また、「ミニ版」とは、文章を短縮したパネルシアターのことである。

3-3-2. 公演の様子 I

それではこれらの物語をひまわりグループはどのように語っているのか、筆者が観察した実際の様子を以下に記述していこう。

これは、令和元（2019）年7月24日の福祉センターでの公演の様子である。この日は午後2時半から公演が始まった。午後2時を回った辺りからメンバーの方が福祉センターの控え室に集まってくる。しかし本番10分前になってもまだ一人到着していない方がいるようだ。公演がある日に誰が来れるか来れないかの確認は毎月の定例会で確認している。この日は5人のメンバーが集まる予定だったので、このまま来なければ誰かがその人の代わりに役を演じなければいけない。すぐに誰がその人の担当箇所を引き受けるかの話が始まった。私は急な変更が起きるかもしれない状況をハラハラしてみていたが、実はこういう事態は時々起こることのようで、メンバーの方はなれた様子で臨機応変に対応をしていると教えてくれた。幸いその後すぐに最後の一人が到着し、世間話もそこそこにこの日の演目や誰が何を演じるのかの確認が改めて始まった。

2時半になり、本番が始まる。大部屋には福祉センターの施設利用者の方が21人集まっており、毎度楽しみにしている方が何人もいた。ひまわりグループの方々は話のためのセットを組み立てていく。まず始めに行われるのはパネルシアターである。パネルシアターとは、



写真4 パネルシアターの様子

吸着力の高い「パネル布」を貼った舞台に、絵を描いた紙を貼り付けたりはがしたりして話や歌を展開する表現方法だ。

この日の演目は、宮島の中にある久利須集落の昔話である「木鐘で鳴らん」だった。一人がパネルを動かし、残りの4人で台本を読む。お互いにペースを気にしながらどちらかが先走ってしまわないように気をつけながら話しているようだった。カーテンが閉め

られて仄暗くなった部屋で、ブラックライトに照らされたパネルは淡く光って見えるのが特徴的であった。ぼうっと浮かび上がるように見えるのが、昔話らしさをうまく演出できているように思う。話を聞いていた利用者の方は、クスクスと笑ったりうなずいたり反応を見せながら聞いていて、楽しんでいる様子だった。

パネルシアターがおわり次の紙芝居の準備をしている間、施設利用者の方と軽い体操を行う。車椅子に座っている方でもできるように、リズムに合わせて肩や首を回したり、指を動かしたりする。みんなで一緒に声を出しながら動くので、会場が暖まっていくのを感じた。

紙芝居の準備が完了し、また話が始まる。紙芝居は二人が前に出て、一人が読み手、もう一人が紙を入れ替える役だ。この日の題材は「思い出の加越線」という話だ。これは昔話ではなく、他のボランティアグループ¹⁶²が制作した創作話である。少年と少女が、かつて加越線の線路が走っていた地を訪れて、聞き手に昔を懐かしませるような話だ。話を聞く施設利用者の方達の中には、うなずきながら「懐かしいなあ」と小さくつぶやく人もいた。『思い出の加越線』という話は昔から伝わっている物語ではなく、昔あった出来事を今の人の言葉で伝える話ではあるが、これもある意味昔話の一つといえるかもしれない。

¹⁶² 小矢部市にはひまわりグループの他に「さくらグループ」という団体があり、こちらは小矢部にゆかりのある偉人と風土についての紙芝居を制作している。文は創作していて、昔話を伝えているわけではないのでこの章ではくわしく触れないこととした。

紙芝居の次はこの日最後の話、素話が始まる。素話とは、絵本や紙芝居などの道具を使わず、声だけで話をする方法である。話されたのは山梨県に伝わる民話「若返りの水」だ。あるおじいさんが、偶然見つけたわき水を飲んで若返った。おじいさんはそのことをおばあさんに話すと、おばあさんは私も若返りたいとおばあさんはその泉へ出かけていく。その後なかなかおばあさんが帰ってこない事を心配したおじいさんがその泉を見に行くと、若返りの水を飲み過ぎて赤子まで若返ってしまったおばあさんを発見する。という、欲張る心を戒めるような昔話である。話し手は、マイクだけを手に持って一人が前に出てきて昔話を語り出す。台本はなく、話は暗記されているようだった。「若返りの水」という話、登場人物はおじいさんとおばあさんの二人だけなので、聞いている方も話を理解するのが簡単でわかりやすい。しかし語り手の方は、おじいさん、おばあさんに加えて地の文の三役を一人で演じなければならない。おじいさんとおばあさんの声色に違いをつけるのはもちろん、台詞同士の間、キャラクターの感情がこもった演技から落ち着いた地の文へすとんと切り替わるギャップなどは違和感を感じさせないものだった。道具を使わず声だけで空想の世界を作り出す語り



写真5 素話の様子

に感動してしまった。

45分ほどでこの日の話は全ておわり、最後に大部屋にいるみんなで3曲ほど歌を歌ってひまわりグループの公演は幕を閉じた。ひまわりグループの方はセットをかたづけて、控え室に戻っていった。

3-3-3. 公園の様子II

さらに公演の様子としてもう一つ、清楽園デイサービスセンターでの様子も記述しよう。令和元(2019)年11月1日、清楽園デイサービスセンターでの発表が行われた。福祉センターと清楽園への定期的な発表はこの日が令和元(2019)年の最後となる。利用者の方と会うのもこの年では最後ということもあり、普段よりも長い挨拶をしてからいつも通りの発表が始まる。

まず始めにパネルシアター、題材は「狐の嫁入り」だ。いつも通り公演の様子を観察するために部屋全体が見える後ろの方にいると、ひまわりグループの方が「今日は一緒に読んでみようよ」と手招きする。こうしてこの日は筆者も特別に読み手として語りに参加させて頂けることが発表の直前に決まった。セットを組み、その脇に四人の語り手が台本を囲んで客席側から見えないように隠れて座る。パネルを動かす人は、パネルが混雑してしまわないように一人だけだ。そして語り始める。

これまでは聞き手の側からしか語りの場面を見てこなかったが、語り手の側に立って始めて気づくことが幾つもある。一つは、これはおそらくひまわりグループのパネルシアターに限ったことかもしれないが、非常にやりにくいということだ。何がやりにくいかというと、語り手側からはパネルの様子が見えにくく、台本を読むスピードの調整が難しいのだ。特に筆者は始めて語り手側に参加したので、どの程度のスピードが適切なかわからない。しかしひまわりグループの方はやはりなれているのだろう、筆者が今まで観察してきた限り、読み手の語りがパネル移動の先を行ってしまって話と画がちぐはぐになってしまうことがなかったのだ。何度も同じメンバーで公演を繰り返して生まれた連携が、読み手がパネルを見られない状態での発表を成り立たせているのだろう。

もう一つは、登場人物の役の振り分けが流動的で、発表中でも変更が起きるということだ。この日の話「狐の嫁入り」は、狸と狐がそれぞれ3匹、村人が2人の合計8の登場人物が出てくる。対して読み手は筆者を含めて4人しかいないので、順当にいけば一人が二つの役を担当することになる。物語が始まり、その流れと座る位置でなんとなく配役が決まってくののだが、5人目以降の登場人物が出てきた辺りから配役が変化し出す。例えば筆者が“狸2”と“狐2”を演じていたのが、いつの間にか“狸3”と“村人1”を演じ、再び“狸2”と“狐2”に戻ってくるといった風に配役が流動的になってきたのだ。今回は筆者が急遽参加させてもらうこととなったので、役分けが変わってしまったのはその影響なのかもしれないと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。発表前に一応誰がどの役を演じるのか確認しているが、話しながら役が変わるのは普段からあることのように、そこも臨機応変に対応しているという。決められた形式に囚われず変化に対応しながら話ができるというのは、何度も公演を経験しているからこそできる芸当なのだろう。

この日は普段通りパネルシアターの次に紙芝居をし、その後は素話ではなくペープサートでの発表が行われた。ペープサートとは、つまり紙人形劇のことである。裏表に絵を描いた厚紙に割りばしほどの細い棒を貼り付ける。その作った人形を話の進行に合わせて操る表現方法だ。ひまわりグループのペープサートは、季節に合わせて演目を変える。筆者が観察した日は11月、季節は秋なので演目は「大きなおいも」という話だ。話の内容自体は有名な絵本「大きなかぶ」のかぶが「おいも」に置き換わっただけなのだが、「大きなおいも」はペープサートという表現が非常に面白かった。両端に割り箸くらいの長さの棒をつけた長い長方形の紙を端の方から折り重ねて、折って分けられた部分においもを引っ張る登場人物が一人ずつ描かれている。そして裏側にはついに引っ張り出されたおいもの絵が描かれており、このペープサート一つだけで物語が完成する。このペープサートは一人でも扱えるタイプのもので、いつも素話をする方が演じるようだ。この話の語りは、紙芝居と比べて、より興味を引きつけるようなものだったと思う。以下は発表の様子である。

「おじいさんが植えたおいもはとても大きなおいもになり、引っ張って抜こうとします。」
「うんとこしょ！どっこいしょ！」。語り手は体を左右に揺らしながら聞き手に一緒に声を出すように促す。聞き手の方も一緒に声を出しはじめる。「うんとこしょ！どっこいしょ！」

はじめは数人が小さな声で声を出していたが、話が進むにつれて声が大きくなっていく。
「おいもが抜けないので、おじいさんはおばあさん呼びました。お～いばあさんや～、おいもを抜くのをてつだっておくれ～」紙を一部めくると、隠れていたおばあさんの絵が現れる。聞き手はそれを見て、初めて見た方は「おお～」と驚きの声を漏らし、見たことがある方もこの仕掛けを面白がっている様子が見られた。「はいはい、りっぱなおいもですね～。それではせーのっ！」語り手と聞き手が一緒に声を出す。「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」おじいさん、おばあさん…と増えていき、ねずみまで一緒になって引っ張る。「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」ここで語り手が勢いをつけて一気に紙を裏返す。これまで隠れていたおおきなおいもがついに姿を見せた。「とうとうおいもが抜けました！」聞き手は最後の仕掛けにも感心したような様子で拍手をして話の締めくくりを飾った。聞き手を巻き込む話は、部屋全体が一体となったような感覚を覚える。少し距離をとって観察をしても楽しげな様子がよく伝わってきた。ペープサートの後は、普段通り皆さんで歌を歌ってこの年最後の公演は終わった。

3-4. ひまわりグループの語り

ひまわりグループの公演は、現在は清楽園と福祉センターでそれぞれ月1回ずつ、合計月2回のペースで行っていることはすでに記述した。メンバーが多くいて、活動が活発だった頃は活動の機会はやはり多く、先に表で示した紙芝居やパネルシアターの話はまんべんなく話されていたようだ。しかしかつてのような活動ができない現在では、1年の上半期と下半期に作品を紙芝居とパネルシアターからそれぞれ一つずつ選んでそれを繰り返して話ししているという。人数が多ければ複数の話を分担して練習する事ができるが、現在は一人の負担を軽くするために発表する作品を絞っているのだ。施設へ訪れる利用者はそれぞれの曜日で必ずしも全員ではないが変わるので、各施設へ訪問する曜日を各回でずらし、同じ利用者の方が同じ話を聞き続けるという状況になるのを避ける工夫もしている。ただ、長い期間語られなくなってしまう話が出てきてしまうことは避けられない。

3-4-1. パネルシアターの語り

パネルシアターの配役が流動的なのは、ひまわりグループならではの現象かもしれない。役に対して人数が十分であれば配役は変わりようがないし、素話やかつての語りのように語り手が一人しかいない場合には配役も何もないからだ。もともと複数の役を担当するので、声色はそれぞれの役によって使い分けている。しかし一度役がまぜこぜになってしまうと声色の方もぐちゃぐちゃになっていく。例えば“狸1”をしゃがれた声で演じていたのが、別の役に変動して高い声をだす、そしてまた“狸1”に戻ってきたときにしゃがれた声ではなく高い声で演じてしまうといった具合だ。こうなってくると聞き手は誰がしゃべっているのかわからず混乱してしまうのではないかという疑問が浮かぶかもしれない。これが複数人で語られる素話であれば確かに混乱してしまいそうだが、パネルシアターは場面を目で

見ることができるので意外と混乱することがない。

パネルシアターは、人物や小道具たちがまさに切絵で作られているので昔話の法則②の平面性を描写するのに非常に適している。

3-4-2. 紙芝居の語り

紙芝居はおそらくひまわりグループの中で最も安定した語りであるといえる。語り手側は、台本があるので話の流れがわかっているれば語るの難しくなく、絵の後ろで語るため身体表現の必要がない。極端に言えば文章の表現に集中すればよいのだ。聞き手側も、絵を見ればそれがどんな場面なのかが分かり、非常に聞くのが楽である。

またその語りやすさ聞きやすさから、集団に向けて語るのにかなり適した形態であるといえる。しかしそれは翻って語り手と聞き手に距離がある形態でもある。紙芝居は台本があり絵の順序が決まっている事で、話は定型化してあそびがない。

3-4-3. 素話の語り

素話という形態は、かつての語りとかなり近い語り方である。自分の声色と身体表現だけで話の起承転結を表わさなければいけないし、聞き手に物語の情景を思い起こさせなければいけない。話の丸暗記ではなく、話を自分の中に落とし込んで、自分の言葉として語らなければいけない。話は決して長くはないとはいえ、語れば5分以上かかる話を20人以上の前で話すのは精神的に疲労するし大変な集中力が必要になると推測できる。今となってはできる人が多くない貴重な技術である。実際にひまわりグループで素話ができる方は一人しかいない。

この方は、小さい頃に実際に祖父母から昔話を聞いていて、それを覚えていたというわけではないようだった。ひまわりグループ以外で読み聞かせボランティアの経験があり、また読み聞かせの講習会などを何度も受けており、素話はその積み重ねの結果できるようになったのだという。現在素話できる話の数は、10~15ほどあるそうだ。しかしそれぞれの物語の大まかな流れは覚えているが、詳細な台詞や間などの細かいところに関しては正確に全て覚え切れてはいないようで、発表の前には必ず何度か繰り返し練習して物語の細部までを思い出しているとおっしゃっていた。かつて語られていた昔話は、その語りを何度も繰り返すことで語り手の記憶に定着する、そしてその話は本当の意味で語り手のものとなる。一人で10を超える昔話を抱えていると、その全ての昔話を正確に記憶するには大変な時間をかけなければならないだろう。しかしこれから、公演を重ねるごとに話はこの方の記憶に定着するかもしれない。

3-4-4. ペープサートの語り

ひまわりグループで話されるペープサートは、形態が素話に近い。話し手は一人だけ。台本はなく、ペープサート一つだけを持って語りに入る。持って行ったペープサートを見なが

ら語ることができるが、台本がないので素話同様に話がある程度自分の物にしておかなければ自然な語りはできない。ペープサートは話に合わせて動かして話に抑揚をつける必要があり、素話とはまた違った部分に気を配らなければいけない。

聞き手側はパネルシアター同様に視覚で場面を把握することができるので、素話よりも分かりやすく、紙芝居よりも語り手との距離が近くに感じられるだろう。

3-4-5. 現在の語りのまとめ

現在の語りでは、道具を用いると言うことが大きな特徴だ。一对多の構図で語るには、言葉だけで語るより、絵や人形などを使い視覚でも場面を捉えられるようにする方が伝わりやすい。ただし、素話のように道具を使わない語りが全く通用しないかというところではなく、技術を持った方の語りは道具を用いずとも話の情景を想起させることは十分可能である。かつての語りでは何度も語りを繰り返すことで昔話は自分の言葉で語れるようになり、記憶として定着する。素話の技術もこれと同様に、語る経験を何度も繰り返すことで自然な語りができるようになる。

現在の語りで特徴的だったのは、もう一つ、台本があることだ。紙芝居とペープサートはすでに用意されている文章を読み上げる。この形態での語りは文章が固定化されているので語り継がれていく際に変化が起こりにくい。変化が起こりにくい語りは、聞き手側からのアプローチに柔軟に対応できないだろう。台本に話の正規の流れが記載されているので聞き手から話しかけられても、そこで変化は起こらず必ず本文に戻って仕切り直される。そういう意味で台本がある語りは柔軟性に欠けている。しかしこれは悪い意味ではない、台本のある話は保存に向いている。例えば話が本のように文章で残っていると、語り継がれない期間があってもいずれ誰かが見つけ出してくれるかもしれない。台本がある話は長期間の保存が可能である。

素話は保存という観点で見るとやや不安定かもしれない。ひまわりグループの素話は発表前に話を読み返して思い出すので、基本となる文章は確かに存在する。しかし実際に発表するときには台本は持たず、記憶の中の話語ることになる。そこで台詞や地の文で正確な文章を忘れてしまうこともあるだろう、その場合は自分の言葉でその部分を補う必要がある。ここで話は多少であるが変化する。ひまわりグループの素話は原文があるので、そこに立ち返れば変化した部分は修正される。しかし聞き手側が素話で話された昔話を継承することがある場合、原文ではなく一部変更された話が継承される可能性がある。

ペープサートについても同じ事がいえる。話を一度自分の物として飲み込む必要があり、語りの際に台本を用いない語りは一部語り手自身の言葉に変化する場合がある。

4. 過去と現在の語りについて

4-1. 口承か、文章か

かつての語りと現在の語りの違いを見比べると、まず、口承であるか、というのは重要な要素だ。かつての語りはその家の中で口承によって脈々と受け継がれることが向川さんへの聞き取りで分かっている。かつての語りは同じ話を何度も繰り返す。そうすることで、話が語り手と聞き手の記憶に蓄積されていく。語り手は語る度に語りの技術を磨いていき、聞き手は、語り手の姿や語り口調と共に話を覚えていく。聞き手が継承するのは、話そのものだけではないのだ。長期間かけて育まれた記憶はそう簡単に忘れ去られるものではなく、わざわざ文章として書き残す必要もない。対して現在の語りは、すでに文章で記録された誰かの話を語り手が読み返すことで行われる。かつての語りに近い形態として紹介した素話も、飲み込む話は文章化されたものなので現在の語りに分類される。文章で記録された話は、その定められた文章通りに読み返されるので、物語に変化が起こりにくいということは先に述べた。一方かつての語りには、現在の語りのような定型文がないため、語り手個人の特徴が出やすい。話の大筋自体は変わらないだろうが、口調や間などの細かい部分での変容が起こりうるのだ。かつての語りは、常に変化し揺れ動くあそびを持った「生きた語り」と呼べるだろう。そして現在の語りは、定型文が決まってい揺れない、生きた語りを文章と言う形で固定した「剥製の語り」と表現できるのではないだろうか。

音声というのはそもそも文字より以前から人間に備わっていたものだ。言葉を読むより、言葉を聞く方がより話は心にしみるのではないか。特に読み書きが出来るようになる前の子どもにとって、口承での語りは、想像力や心を豊かに育むのに大変有効な手段だったかもしれない。

4-2. 視覚化された語り

4-1の言説は、現在の語りがかつての語りに比べて劣っていると言いたいのではない。語りに要求される技術はかつての語りの方が高いが、現在の語りは文字通り、現在の生活に適した形態の語りなのだ。音声のみで伝える語りより優れた点が、文章に記録された語りには幾つもある。それは、①発信できる範囲が広いこと、②与えられる情報量が多いこと、③安定して長期間保存されることである。

これらは現在の語りが視覚から得られる情報に重点を置いている事から論じることが出来る。口承での語りが話を発信できる範囲は、語り手の声の届く範囲である。特に家の中で語られるのが普通だったかつての語りは、発信の範囲は語り手の家の中に限定される。話の伝承は基本的に家の中、語り手の家族の範囲で行われる。話が広まりにくいのだ。村の寄合いでも昔話が話されることがあるそうだが、それでも話が広まる範囲は広くても村の内に留まる。それに比べて文字や本は不特定多数に向けて発信することが出来る。いつでも昔の

話を読み返すことが出来るし、遠くまで持ち運ぶことが出来る。そして何より一瞬で消えてしまう音声と違って正確に伝えることができる。また、絵があれば聞き手が多人数でも同時に多くの情報を統一したイメージで共有することも可能だ。視覚化された話は読み返すことも容易なので、伝播の早さはかつての語りと比べものにならない。実際にひまわりグループで富山県外の話を読むことがあるように、私たちの身の回りには日本中はおろか、外国の話までも手の届くところに存在しているのだ。

ひまわりグループの方々や向川一夫さんは、子ども達は絵でもないと話を聞いてくれなくなった、とおっしゃっていた。漫画やテレビ、YouTubeなどに代表される視覚情報で楽しむ娯楽が生活の中にあふれている現代の子ども達は、自分で想像することよりも視覚イメージをただ受け取ることに慣れてしまった。音声のみで語られる話を楽しむには聞き手の想像力が必要不可欠である。現代の子ども達にとって、かつての語りのように普段より想像力を働かせないと楽しめない語りは、ハードな体験なのかもしれない。

4-3. 語りの技術

かつての語りと現在の語りは、求められる技術の水準も異なる。かつての語りと、それに近い素話には、現在の語りよりも高い語りの技術が要求されるのだ。本来かつての語りには技術は求められていなかったが、語りを繰り返している内に、結果として技術が向上していった。しかしかつての語りの形態を成立させるには結果として培われた技術が必要だった。かつての語りも素話も話を自分のものにしなければ出来ない語り方であり、それを習得するには長い時間をかけて何度も繰り返し語らなければならない。時間をかけて伸ばしていった特別な技術が語りには必要だったのだ。

それに比べて現在の語りは要求される技術の水準は低い。これは語りの質が劣化した、とすることではない。かつてよりも語りが語られやすくなったと捉えられる。現在の語りは、筆者がひまわりグループの語りに突然参加できたように、特別な技術を持たなくても語ることが出来る。人の前に立つ事にある程度慣れていなければいけないが、文字さえ読むことさえ出来れば誰でも語り手になることができる。そうはいっても話を面白く語るための工夫はしなければならぬが、語り手への敷居が下がったのは確かなのだ。語られることがなければ簡単に消えてしまう民間伝承にとって、語り手になるハードルが下がることは悪い話ではない。

4-4. 生活の変化と語りの変化

かつての語りが語られなくなり、語りの形態が現在の語りに移行していった理由の一つには、生活様式の変化がある。第二次世界大戦から10年ほど経過すると、人々の生活は大きく変化していった。例えば宮島では、第一節に記述したような変化がおきた。人々の仕事は農業主体から会社勤めが主体となり、移動もかなり自由になった。家の中に家族がそろう時間が短くなり、語りに費やすような時間もとれなくなっていった。かつての語りのような、

語り手と聞き手が親密な状況を作り出して行われる語りは姿を消していった。その代わりに登場したのが、公教育などで行われる一対多の語りだ。語り手に対して聞き手の人数が極端に多いのが現在の語りの特徴の一つである。より多くの聞き手に、同時に正確に話を聞かせるために絵や道具を駆使して語る事が必要になった。語りに道具が必要になったのは、昔話になじみのない生活を送る子ども達に話をイメージしやすくする為でもあるのだろう。現在、語りは実生活から離れてしまった行為なのだ。

かつての語りは、身近な場所や人を使って実生活に即した形で語られていたし、貧しく娯楽の少ない昔の暮らしの中で、生活に彩りを与える貴重な娯楽として生活の一部として自然に語られていたのだ。語りは、起きる時間に偏りはあっても、予定として組み込まれるのではなく、語り手(祖父母)と聞き手(孫)が一緒にいるときに自然に起こる行為だった。夜という、外の世界が人間ではなく獣や物の怪たちの時間に話される語りは、家を守る為に行われる大事な活動だったともいわれ、暮らしの中でなくてはならないものだったことがわかる。語られる話自体も、山間部に住み農業や炭焼きで生活している当時の生活からそんなに違いがない暮らしが描かれているので、聞き手が話と距離を感じる事がなかったのだろう。技術が発達し、夜の世界まで開発された現在からすれば、民間伝承は遠い昔の生活に過ぎないと感じられてしまっているかもしれない。その距離感を埋めて語るには、かつての語りよりも現在の語りの方が適している。

5. おわりに

人々の生活から影を潜めたからと言って、かつて語られていた民間伝承が存在意義を失ったわけではない。第2節で述べたように、民間伝承には昔の人々の生活様式や価値観が反映されている。庶民の生活の記録として、価値を持つ民間伝説は多いだろう。口承での語りほとんど行われなくなってしまった今、文章として民間伝承を記録することには大きな意義がある。ひまわりグループの様な活動を行う人々はこれからも必要だと感じる。しかしただ話を記録するだけではいけない。口承での語りには、語り手のクセやその土地特有の訛りが含まれている。口語体での語りを記録する際は「桃太郎」や「浦島太郎」、ドイツの「グリム童話」の日本語訳などのように、多くの人にとって読みやすい書き言葉や標準語に直してしまうのは非常にもったいないことだ。話者独特の表現をできるだけ変化させないように記録しなければ、「その土地の民間伝承」とは呼べないのだと筆者は考えている。ひまわりグループのように昔の言葉や訛りを大切に語り、生きた民間伝承が、現在の語りの中で残されていくことを切に願う。

民間伝承を始めとした地域に根ざす話は、その地域に住む人々を結びつける力があるはずだ。同じ伝承を共有する仲間としての意識を作り出してくれるだろう。地方から都市部への人口の流出が目立つ現在、伝承の持つ力が地方の活性につながることもあるかもしれない

い。そうでなくとも、先人達が大事に育んできた伝承達を簡単に消してしまわぬよう、現代に生きる私たちが大切にしていかなければならない。

主観だが、民間伝承に映し出される人々の素朴な営みの様子には、人間の根底にある温かみが反映されているように感じる。現代の生活に疲れた人々が、その疲れを癒やすために立ち返る場所としても民間伝承は語られ続けていって欲しい。

謝辞

今回の調査にあたって協力していただいた全ての方々に心よりお礼申し上げます。特にひまわりグループの皆様は何度も調査を受け入れてくださり、向川一夫さんは貴重な昔話やプライベートに踏みいるようなお話まで聞かせていただきました。宮島という自然豊かな地で育まれてきたお話達に出会えた事は私にとってかけがえのない貴重な出来事でした。これらの民間伝承が失われずに残っていくことを願っております。本当にありがとうございました。

参考文献

- 『増補版 宮島 小矢部市宮島地区抄』 向川一夫著 2011 初版
- 『昔ばなし大学ハンドブック』 小澤俊夫著 株式会社渋谷文泉閣 2016 初版
- 『語りの講座 昔話の声とことば』 花部秀夫,松本孝三編 三弥井書店 2012 初版
- 『昔話を語り継ぎたい人に』 石井正己編 三弥井書店 2016 初版
- 『「伝説」という言葉からーその可能性をめぐってー(口承文芸研究 第17号)』 斎藤純 日本口承文芸学会 1994

地域社会の文化人類学的調査 29
創造と継承が交わる地平—人々が紡ぐ小矢部—

発行日： 2020年2月28日
編集： 藤本 武・野澤豊一
発行： 富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555 富山市五福 3190
Tel. : 076-445-6185
E-mail : anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
印刷： (株) グラフ
〒931-8453 富山市中田 45-63